

日本女子大学大学院

# 紀 要

家政学研究科  
人間生活学研究科

30

2024年

日本女子大学

日本女子大学大学院

# 紀 要

家政学研究科  
人間生活学研究科

30

# 目 次

## 【原 著】

1. 熊本地震における相談支援の段階と支援体制の方策  
— 熊本地震に対応した5組織を対象として —  
..... 阿部一咲子・平田 京子・石川 孝重..... 1
2. 母殺しに代えて：『わたしがいんどんだ戦い 1940 年』に見る代理母－代理娘関係  
..... 梅野 愛子..... 11
3. 壁土の練り置きが圧縮強度に与える影響  
— 微生物の活動と壁土の関係 —  
..... 齊藤 美月・江尻 憲泰..... 21
4. 近代パリにおける都市景観概念の形成  
— パリの都市改造と印象派絵画の分析を通して —  
..... 櫻井 更紗・片山 伸也..... 31
5. 住宅関連事業者による中古戸建住宅の価値向上と活用に向けた取り組み  
— 一都三県内のリフォーム業者への調査 —  
..... 門永 麻椰・葉袋奈美子..... 39
6. 子どもの遊び声の大きさと騒音の認識に関する考察  
— 雑司ヶ谷研究 18 —  
..... 吉武 美智・葉袋奈美子..... 47
7. 個の多様性を尊重したニュージーランドの保育・教育  
— 短期視察研修からの学び —  
..... 山口 舞・大野 康子・小田 桜乃・齊藤 花奈・中里 啓子・請川 滋大..... 55
8. 共働き世帯の在宅ワーク環境について  
— 戸建住宅における住まい方実態に関する研究 その2 —  
..... 古賀 繭子・定行まり子..... 67
9. ごっこ遊びの萌芽期を支える保育者の援助  
— 2・3 歳児クラスの保育実践事例から —  
..... 加藤 直子・大野 康子・中里 啓子・永島さくら・深沢佐恵香・請川 滋大..... 75
10. ごっこ遊びの深まりを支える保育者の援助Ⅱ  
— ごっこ遊び事例を5つの視点から考える —  
..... 深沢佐恵香・織壁佐和子・加藤 直子・齊藤 花奈・松原乃理子・請川 滋大..... 87

11. 大規模避難所施設を対象とした住民主体による運営モデルの構築 — 近隣コミュニティ住民の第2回ワークショップでの学習効果 — .....	古川 洋子・平田 京子・石川 孝重 .....	99
12. 顔面三次元形状データを用いた顔面形状の類型化 .....	鯨岡 詩織・野口有理紗・武本 歩未・大塚美智子 .....	109
13. 相同モデルを用いた人体の形状変化の分析 — 肩関節外転に伴う人体の寸法, 形状の変化 — .....	武本 歩未・横尾 優美・横井 孝志・大塚美智子 .....	119
14. 創造的音楽活動に内在する対話の多層性 .....	根津知佳子・安藤 朗子・甲斐 聖子・和田 直人・吉澤 一弥 .....	127
15. ショーン・タンの物語絵本における「欠如の表現」に関する考察 .....	今田 由香 .....	139

## 【研究ノート】

16. 児童養護施設における「食」の現状と課題 — 現役職員へのインタビュー調査から — .....	古山さくら .....	149
17. 幼児の Grit（やり抜く力）と食生活との関連 .....	中岡加奈絵 .....	157



# CONTENTS

## [Original Paper]

1. *Isako ABE, Kyoko HIRATA, Takashige ISHIKAWA* : Measures for Consultation Support and Support Systems Following the Kumamoto Earthquake: Examining Five Organizations that Responded to the Kumamoto Earthquake ..... 1
2. *Aiko Umeno* : Instead of Matricide: The Surrogate Mother-Surrogate Daughter Relationship in *The War I Finally Won*..... 11
3. *Mizuki SAITO, Norihiro EJIRI* : Effects of “Nerioki” on the Compressive Strength Characteristics of Wall Mud: The Relationship between Microorganism Activity and Wall Mud ..... 21
4. *Sarasa SAKURAI, Shinya KATAYAMA* : Creation of the Concept of the Urban Landscape in Modern Paris: Through the Urban Remodeling of Paris and an Analysis of Impressionist Paintings ..... 31
5. *Maya KADONAGA, Namiko MINAI* : Initiatives by Housing-related Businesses to Increase the Value and Utilization of Existing Detached Houses: A Survey of Remodeling Contractors in Tokyo and Three Other Prefectures ..... 39
6. *Misato YOSHITAKE, Namiko MINAI* : Reflections on the Sound Volume of Children’s Play and Perceptions of Noise: Zoshigaya Research 18 ..... 47
7. *Mai YAMAGUCHI, Yasuko OHNO, Sakurano ODA, Kana SAITO, Hiroko NAKAZATO, Shigehiro UKEGAWA* : Childcare and Education in New Zealand that Respect Individual Diversity: Learning from a Short-term Study Tour..... 55
8. *Mayuko KOGA, Mariko SADAYUKI* : Living Conditions for Dual-income Households to Work from Home: A Study on Living Conditions in Detached Houses, Part 2..... 67
9. *Naoko KATO, Yasuko OHNO, Hiroko NAKAZATO, Sakura NAGASHIMA, Saeka FUKASAWA, Shigehiro UKEGAWA* : How Early Childhood Teachers are Involved in Supporting the Budding Phase of Pretend Play by Children: Based on a Case Study of Childcare Practices in a Class of 2- and 3-year-olds ..... 75
10. *Saeka FUKASAWA, Sawako ORIKABE, Naoko KATO, Kana SAITO, Noriko MATSUBARA, Shigehiro UKEGAWA* : How Early Childhood Teachers are Involved in Supporting the Development of Pretend Play by Children II: Examining Examples of Pretend Play from Five Perspectives ..... 87

11.	<i>Yoko FURUKAWA, Kyoko HIRATA, Takashige ISHIKAWA</i> : An Operational Model of a Large-scale Shelter Independently Run by Local Residents: Effectiveness of Learning by Local Community Residents in the Second Workshop.....	99
12.	<i>Shiori KUJIRAOKA, Arisa NOGUCHI, Ayumi TAKEMOTO, Michiko OTSUKA</i> : Shape Analysis and Shape of Face Using Three-dimensional Facial Shape Data .....	109
13.	<i>Ayumi TAKEMOTO, Yumi YOKOO, Takashi YOKOI, Michiko OHTSUKA</i> : Analysis of Changes in Human Body Shape Using Homologous Models: Changes in the Dimensions and Shape of the Human Body Associated with Shoulder Abduction.....	119
14.	<i>Chikako NEZU, Akiko ANDO, Seiko KAI, Naoto WADA, Kazuya YOSHIZAWA</i> : The Multilayeredness of Dialogue Intrinsic to Creative Musical Activities .....	127
15.	<i>Yuka IMADA</i> : A Study on the “Expression of a Deficiency” in Shaun Tan’s Story Picture Books .....	139

#### **【Research note】**

16.	<i>Sakura FURUYAMA</i> : Status of and Challenges with Meals at Children’s Homes: Based on Interviews with Current Employees.....	149
17.	<i>Kanae NAKAOKA</i> : The Relationship between Grit and Dietary Habits among Preschoolers .....	157

# 熊本地震における相談支援の段階と支援体制の方策

— 熊本地震に対応した5組織を対象として —

Measures for Consultation Support and Support Systems Following the Kumamoto Earthquake:  
Examining Five Organizations that Responded to the Kumamoto Earthquake

阿 部 一咲子\* 平 田 京 子\*\* 石 川 孝 重\*\*\*  
Isako ABE Kyoko HIRATA Takashige ISHIKAWA

**要 約** 地震災害の早期復興には被災者の生活基盤である住宅を早く再建する必要がある。再建住宅は今後ストックとなるため、緊急性が要求されるなかでも良質な住宅再建が望ましい。本研究では熊本地震で住宅再建・修繕に関する相談支援を行った5組織の状況を把握し、相談支援の段階を明らかにした。結果、4段階に表された。熊本地震では内閣府が想定する、被災者の意思決定に関わり条件の整理などを通じて決断に対しサポートをする支援まで至っていなかった。このような相談支援を迅速化・効率化するため、協力体制を構築する際の方策としては、平常時からの協力体制・関係性の転用、被災地外の人員の活用、相談支援の分業化、段階的な増員が関係することを明らかにした。

**キーワード**：熊本地震，地震災害，相談支援，自宅再建，住宅修繕

**Abstract** Early recovery from an earthquake requires the rapid reconstruction of housing, which is the foundation of the victims' lives. Reconstructed houses will become housing stock in the future, so houses should be of high quality even though urgency is required. This study clarifies the stages of consultation and support based on five organizations that provided consultation and support for housing reconstruction and repair following the Kumamoto Earthquake. Results revealed four stages. Following the Kumamoto Earthquake, the Cabinet Office did not provide the sort of "consultation for housing reconstruction" that it envisioned, i.e., support for decision-making by victims to help them determine their housing requirements. Measures to create a cooperative system to speed up and streamline consultation support were related to the switchover from cooperative systems and relationships under normal circumstances, utilization of personnel from outside of the stricken area, the division of labor in consultation support, and a gradual increase in the number of personnel.

**Key words** : Kumamoto Earthquake, Earthquake Disaster, Consultation support, Housing reconstruction, Housing repair

## 1. はじめに

地震災害の一日も早い復興のためには、なるべく早期に被災者の生活基盤である住宅を再建する必要がある。しかし被災という非日常的な状況下で早く元の生活に戻りたいがために焦った意思決定が行われること、住宅に対し専門的知識のない被災者が意思決定に迷いニーズに合致しない再建をしてしまう

---

\* 人間生活学研究科生活環境学専攻  
Graduate School of Human Life Science,  
Division of Living Environment  
\*\* 住居学科  
Department of Housing and Architecture  
\*\*\* 名誉教授  
Professor Emeritus

ことが懸念される。住宅がいったん再建されると今後の住宅ストックとなるため、緊急性が要求される住宅再建であってもより良質な住宅再建が望まれる。

これに対して住宅修繕・再建支援が様々な方法で行われている。ここで住宅修繕・再建支援とは、被災者生活再建支援制度による支援金の給付や、仮設住宅・災害公営住宅の建設、問い合わせに対する情報提供・各被災者の疑問や問題解決を図る相談や講演会などの「相談支援」を指す。なかでも現在の相談支援の体制や支援内容は十分とはいえず、再建相談が行われた既往災害でも再建住宅に対し後悔する意見が聞かれた<sup>1)</sup>。加えて再建相談には窓口対応する人員、コスト、時間と多くの負荷がかかる。阪神・淡路大震災に関する既往研究<sup>2)</sup>では、被災者個人では復興のためにどのような行動を取ればいいのか分からず情報取得のために相談窓口へ殺到し、相談スタッフの不足などから被災者への十分な対応が困難になったと指摘されている。

住宅再建は被災者の自己責任が原則であるため、良質な住宅再建実現のためには、住宅修繕・再建の支援が重要である。なかでも相談支援は住宅再建・修繕という専門的知識を要する行為に対し専門家から助言をもらい検討できること、被災者が抱える問題や疑問に対しピンポイントでアプローチできることから、特にニーズに合致した良質な自宅再建を実現するなかで重要性をもつ。そこで本研究では相談支援に着目する。

このことから今後よりよい住宅修繕・再建支援を効率的に過不足なく行うためにも、現在まで行われている相談支援の実態を、具体的な相談内容と相談支援組織・団体同士の協力関係の両面から確認する必要がある。

前報<sup>3)</sup>では熊本地震における住宅再建への支援状況をまとめると共に、住宅再建・修繕に関する相談支援を行った4組織の状況を把握し、相談支援の役割を明らかにした。相談支援の役割は再建・修繕を考える前段階では専門家が現地で被害を把握し、住宅の安全性に対し緊急的な判断を下し、専門的知識のない被災者の不安や疑問を解消することだった。検討・決定段階では現地相談にて修繕・再建に関する資金計画など現実的なイメージの構築、復興住宅プランなどの具体的な選択肢の提示であった。被災者の修繕・再建が進むにつれ支援方法が多層的になることを明らかにした。

これを踏まえ本研究では前報<sup>3)</sup>で対象とした4組織から調査対象を増やし熊本地震で行われた相談支援についてより詳細に明らかにする。その上で被災者の自宅再建を実現する住宅相談支援について、漠然とした目的での相談から再建へ向けた具体的な相談へ変化する相談支援の段階を明らかにする。それと共に相談支援を実施する基盤となった、相談支援を行った組織・団体同士の協力体制についてその過程から迅速かつ効率的に支援体制を構築するための方策を明らかにし、今後の相談支援対応の礎とする。

## 2. 研究方法と調査概要

### 2-1 調査概要

本研究では熊本地震における住宅再建支援のなかでも相談支援に着目し、実施した各組織および組織同士の協力体制について明らかにする。

前報<sup>3)</sup>および今回調査で実施した、熊本地震時に相談支援を行った計5組織に対する調査概要をTable1に示した。それぞれ相談窓口の職員数などの概要を聞く事前アンケートと、実際に被災者から寄せられた相談内容や支援体制を明らかにするヒアリング調査を行った。住宅リフォーム・紛争処理支援センター（以下、支援センター）のみ同様の項目に関して書面回答となった。

Table 1 An overview of the survey

調査 対象	① 一般財団法人 熊本県建築住宅センター	
	② NPO法人 くまもと住宅相談窓口	
	③ 公益財団法人 住宅リフォーム・紛争処理支援センター	
	④ 一般財団法人 熊本県建築士事務所協会	
	⑤ 公益社団法人 熊本県建築士会	
調査 日時	① 2022年8月20日	② 2022年9月5日
	③ 2022年9月16日	④ 2022年9月22日
	⑤ 2023年9月20日	
調査 方法	・相談業務の形態・窓口の運営概要を聞く事前アンケート zoomにてヒアリング調査（1時間半程度）	
	※ 住宅リフォーム・紛争処理支援センターのみ 同様の内容について書面回答	

### 2-2 窓口概要

各相談窓口の設立時期など概要をTable2に示す。設立時期はくまもと住宅相談窓口（以下、住宅相談窓口）が最も早く、NPO 法人代表が経営する建設会社の顧客や平常時の相談窓口に寄せられた相談に対し現地調査や相談を行った。次いで熊本県建築士事務所協会（以下、事務所協会）が平常時の電話相談窓口を転用し、現地調査や相談対応を開始した。

実施された住宅再建に対する相談支援のうち最も

Table 2 An overview of the organizations

組織名	NPO法人 くまもと住宅 相談窓口	一般社団法人 熊本県建築士事務所協会				公益財団法人 住宅リフォーム・紛 争処理支援センター	一般社団法人 熊本県 建築住宅センター	公益財団法人熊本県建築士会			
設立経緯	平常時転用	平常時転用	新たに設立	新たに設立	新たに設立	新たに設立	新たに設立	平常時転用	新たに設立	新たに設立	新たに設立
業務内容	独自の 相談窓口	独自の 相談窓口	住まいる ダイヤル	くまもと型 復興住宅相談	住まいる ダイヤル	住まいる ダイヤル	住まいる ダイヤル	独自の 相談窓口	住まいる ダイヤル	熊本市 住宅相談	くまもと型 復興住宅相談
相談業務 開始時期	2016年4月18日	2016年4月19日	2016年5月30日	2017年1月14日	2016年4月29日	2016年5月24日	不明 (被災後すぐ)	2016年5月16日	2016年5月10日	2017年1月14日	2017年1月14日
相談 方法	電話	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	対面 相談	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	その他	※非予約制	※非予約制	※予約制	※予約制・ 非予約制	※予約制	※予約制	※非予約制	※予約制	※非予約制	※予約制・ 非予約制
	講演会	—	—	相談会	—	—	—	—	—	—	相談会

大規模だったものは、支援センターが平常時の窓口と並行して熊本地震専用の新設した、「住宅補修専用・住まいるダイヤル」である。電話相談や現地での被災住宅の補修・再建の相談に応じる専門家の派遣、現地での相談窓口の設置を行った。事務所協会と熊本県建築住宅センター（以下、住宅センター）、および熊本県建築士会（以下、建築士会）に現地調査および相談の業務委託を行い対応にあたった。

### 3. 熊本地震における相談支援の需要

熊本地震では生活再建の一部として住宅再建が復興目標に掲げられ、相談支援が行われた。このように住宅再建を被災者の生活基盤として重視し支援をしようとする動きは阪神・淡路大震災を経て発展したものであり、東日本大震災では復興目標に掲げられ支援が行われた<sup>4)</sup>。

この背景を踏まえ、熊本地震での相談支援に対する需要の高まりを明らかにするために、初めて住宅再建が復興目標に掲げられ両災害に共通する相談支援が実施された東日本大震災と比較する。

被害規模や被害の特徴に関して、熊本地震は都市部に地震被害が集中した一方、東日本大震災では地震に加え津波被害が発生し、太平洋沿岸の地域で甚大な被害が発生するなど両者には相違があるため、考察のなかでも被害規模やその特徴を考慮する。

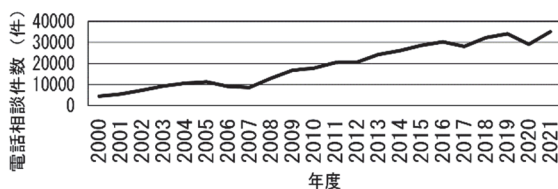
熊本地震と東日本大震災で活用された住まいるダイヤルに着目し、Table3 に相談件数を表した。電話・現地相談が最も多い宮城県に比べ、熊本地震での電話相談は約 9.5 倍、現地相談は約 2 倍と、熊本地震にかけて相談支援がより利用された。しかし前述の通り東日本大震災では津波で住宅が流されたケースが多い。また相談支援の実施期間が 3 月 31 日からの 5 ヶ月間と、実施期間に住宅再建を検討する被災者が少なかったことが懸念される。

そこで電話相談件数の推移に着目し、住まいるダ

Table 3 Number of consultations received by Sumairu Dial regarding the Great East Japan Earthquake and the Kumamoto Earthquake<sup>5,6)</sup>

		電話相談 (件)	窓口相談 (件)	現地診断・相談 (件)	合計 (件)
東日本 大震災	岩手県	132	—	105	237
	宮城県	1,495	138	3,173	4,806
	福島県	1,078	116	1,204	2,398
	茨城県	716	123	1,294	2,133
	栃木県	84	—	110	194
	千葉県	206	—	177	383
	その他	447	—	15	462
	合計	4,158	377	6,078	10,613
熊本地震	熊本県	—	—	6,291	—
	大分県	14,218	208	4	20,721
	合計	14,218	208	6,295	—

イヤルの活用状況を見る。相談件数は年々増加しており、熊本地震時の方が住まいるダイヤルの認知度が高いと考えられる (Fig.1)。また 2011 年・2016 年での電話相談件数に対して、Table3 に示した地震被害の相談が占めた割合をみる。2011 年には東日本大震災に関する相談は電話相談全体の 20.3%を占め、対して 2016 年での熊本地震に関する相談は 47.1%だった。ここから熊本地震時の方がより住まいるダイヤルが活用されたことが分かる。

Fig.1 Trends in the number of telephone consultations received by Sumairu Dial<sup>7)</sup>

以上、前提として被害状況の相違や被災規模の乖離による相談者規模の差はあるものの、それを踏まえても熊本地震では相談支援への認知や需要が高まる中、より活用されたことがわかった。



## 4. 熊本地震における相談支援の特徴

### 4-1 相談件数のピーク時期から見る活用された相談支援

前報<sup>3)</sup> および今回の調査対象で行われた相談支援について、その相談件数が最大であった時期に着目し、各支援が活用された時期を明らかにする。Table4に各団体・組織で実施された相談支援の名称と実施時期、そして寄せられた相談件数をもっとも多かった時期を示した。その際、時期区分には内閣府公表の「被災者の住まいに関する相談・情報提供マニュアル」<sup>8)</sup>で提示された発災直後（被災0日～1週間程度）、応急救助期（1週間～1ヶ月程度）、復旧・復興期（1ヶ月～2年程度）の区分を用いる。

Table 4 Period for the provision of consultation support and the peak period for the number of consults

団体・組織名	相談支援	相談件数のピーク時期		
		発災直後 (0日～ 1週間程度)	応急救助期 (1週間～ 1か月程度)	復旧・復興期 (1か月～ 2年程度)
住宅リフォーム・紛争処理支援センター	住まいのダイヤル		○	
熊本県建築士事務所協会	住まいのダイヤル		○	
熊本県建築住宅センター	くまもと型復興住宅相談			○
	住まいのダイヤル			○
くまもと住宅相談窓口	独自の相談窓口	○		
熊本県建築士会	熊本市住宅相談	○		
	住まいのダイヤル			○
	くまもと型復興住宅相談			○

【凡例】

相談支援	くまもと型復興住宅相談
	住まいのダイヤル
	市の住宅相談
	独自の相談窓口

注1) 各支援が実施された期間を凡例に基づいて該当の色で示し、実施していない時期は空白で示した。  
注2) 各支援において、相談件数が最も多かった時期を○で示した。

### (1) 発災直後（0日～1週間程度）

発災直後では建築士会が熊本市からの依頼で実施した熊本市住宅相談と、住宅相談窓口が平常時から設置している電話相談窓口が活用された。

熊本市での住宅相談は発災直後の短期間に実施された。市による罹災証明書相談に付随して簡易的に行われ、相談者に被災住宅の写真を持参してもらい在宅避難の可否などの被災住宅の緊急的な安全性についての相談を受け付けた。

一方で住宅相談窓口では発災直後から復旧・復興期まで、平常時から設置されている電話窓口へ寄せられた相談に対応した。発災直後は特に代表が経営する建設会社の顧客に対し被災住宅の調査を行ったほか、窓口へ寄せられた顧客以外からの相談にも対応したため、相談件数が最も多くなった。

### (2) 応急救助期（1週間～1ヶ月程度）

応急救助期には支援センター及び事務所協会で住まいのダイヤルが最も活用された。住まいのダイヤルは支援センターが平常時から開設している新築住宅やリフォームに関する相談窓口と並行し、熊本地震専用「住宅補修専用・住まいのダイヤル」を新設した。いずれの組織・団体でも応急救助期から復旧復興期（2016年9月20日）まで行われた。

電話相談を受け付けたほか、現地での被災住宅の被害調査や補修・再建の相談に応じる専門家の派遣、現地での相談窓口の設置を行った。事務所協会と住宅センターに業務委託を行い、対応にあたった。

### (3) 復旧・復興期（1ヶ月～2年程度）

復旧・復興期では住宅センター・建築士会で住まいのダイヤル、事務所協会・建築士会では「くまもと型復興住宅相談」<sup>9)</sup>が活用された。

くまもと型復興住宅相談は、復旧・復興期から始まった支援である。①熊本の気候・地域特性への配慮、②熊本県産の地域産材を使用、③耐震等級3または3相当の地震に強い住宅、④被災者の住宅再建を考慮した良質でコスト低減に配慮した住宅、⑤県内に本社を置く住宅事業者、大工・工務店が建設する住宅、以上の5つのルールを基にした「くまもと型復興住宅」<sup>9)</sup>を県内の住宅事業者や木材関係団体と連携し普及した。復興住宅の建設を行う工務店などのグループを募集する他、提案された住宅プランや支援制度の内容などの情報を冊子に集約し、対面相談や相談会などを実施した。

以上、被災直後には独自の相談窓口や市での簡易的な住宅相談が、応急救助期から復旧・復興期にかけては住まいのダイヤルを活用しての被災住宅の安全性の確認や今後の住まいの確保のおおまかな方向性を決める現地調査・相談が行われた。そして復旧・復興期にはくまもと型復興住宅相談を活用し具体的な自宅再建に関する相談が行われた。このように被災からの時期が経過するにつれて具体的な再建へ結びつく支援が活用されていた。

### 4-2 支援内容と相談支援の段階

このように活用された時期が異なる相談支援について、その支援内容の特徴を明らかにする。前報<sup>3)</sup> および今回のヒアリング結果と、内閣府が公表した「被災者の住まいに関する相談・情報提供マニュアル」<sup>8)</sup>から明らかになった具体的な支援内容とそ

の名称をそれぞれ Table5 にまとめた。このマニュアルは災害時に被災者の住まいの確保に関する情報提供に従事する可能性がある自治体職員や関係機関の担当者に向けて、想定される相談や情報提供の方法、相談対応の留意点を整理したものである。

相談支援の内容から目的性が不明瞭な漠然とした相談への対応から、再建へ向けた具体的な相談へ変化するように段階的に分類した。結果、「一般相談」、「現地調査に基づく相談」、「パッケージでの情報提供・相談」、「住宅再建を目的とした相談」の4段階

Table 5 Stages of consultation support identified from the results of interviews and the “Housing Consultation and Information Manual for Disaster Victims”<sup>8)</sup>

相談支援の段階	実施した相談支援	ヒアリング結果からみる相談支援の内容	「被災者の住まいに関する相談・情報提供マニュアル」からみる相談支援の内容
住宅再建を目的とした相談	該当なし	該当なし	被災者の決断の強いサポート ・自立した生活再建への決断に対する支援（後押し） 希望する住まいの条件（広さ・間取り・居住範囲）の抽出・整理 被災状況と住まいの権利関係および住まいの被災程度の把握 被災者が抱えている問題や要望の確認 <ul style="list-style-type: none"> <li>・就労や収入の状況</li> <li>・ローンの状況</li> <li>・家族構成、被災状況（健康状況）</li> </ul> 従前の住まいの情報の把握 <ul style="list-style-type: none"> <li>・従前の住まいの種類（持家/借家 戸建/集合）</li> <li>・従前の住まいの間取り</li> <li>・従前の住まいの被害程度（全壊/大規模半壊/半壊/半壊に至らない）</li> <li>・従前の住まいからの交通手段</li> </ul> 専門的な組織への相談事項の引き継ぎ
パッケージで	くまもと型復興住宅相談	住宅再建に関する公的助成・制度に関する情報提供 具体的な再建方法・住宅プランの提示 具体的な再建費用の提示 工務店と被災者の意思疎通の補助	住宅や生活の再建のための支援制度・施策の情報提供
現地調査に基づく相談	住まいるダイヤル	補修業者の情報提供 具体的な再建方法の提示 具体的な修繕方法の提示 修繕・再建費用を概算し提示 建て替えが必要か・補修が可能か提示 被災住宅の安全性に関する判断	該当なし
一般相談	独自の相談窓口（事務所協会・住宅相談窓口） 市住宅相談 独自の相談窓口（事務所協会・建築士会）	被災住宅の安全性に対する緊急的な判断（在宅避難が可能か） 漠然とした相談への対応 罹災証明書や住家被害認定調査に関する情報提供 問合せ先の交通整理	該当なし 住家被害認定調査や災害救助法に基づく応急修理の情報提供・相談 該当なし

【凡例】

相談支援の段階	相談支援
住宅再建を目的とした相談	くまもと型復興住宅相談
パッケージでの情報提供・相談	住まいるダイヤル
現地調査に基づく相談	市の住宅相談
一般相談	独自の相談窓口
該当なし	該当なし

注) ヒアリング結果および「被災者の住まいに関する相談・情報提供マニュアル」<sup>8)</sup> からみる相談支援の内容について、該当する相談支援の段階の色で示した。

に表された。ここでは各相談支援の段階で行われた支援内容とそれを担った相談支援に着目する。

### (1) 一般相談

情報を求める問い合わせへの対応や、現地調査を伴わない被災住宅の安全性に対する簡易的な判断を一般相談とする。具体的には平常時から開設されている電話窓口に対して寄せられた目的性が明瞭ではない漠然とした相談や、それに対する問い合わせ先の紹介などの交通整理、罹災証明書や住家被害認定調査などに関する情報提供などである。事務所協会や建築士会の独自の相談窓口のほか、市の住宅相談にて対応を行った。

また「被災住宅での在宅避難が可能か否か」という被災住宅の安全性に対する緊急的な判断は、大々的な被災住宅の調査に先駆けた独自の対応である。「被災住宅をみてほしい」という問い合わせに対して現地調査を行った事務所協会と、NPO 法人代表の経営する建設会社での顧客に向けて被災住宅の調査を行った住宅相談窓口が存在した。市の住宅相談では相談者に被災住宅の写真を持参してもらうことで現地に直接見に行くことはしないものの、簡易的な相談を行った。

### (2) 現地調査に基づく相談

現地で被災住宅の現物を見ての建築士による専門的な相談対応を、現地調査に基づく相談とする。一般相談より明確な被災住宅の安全性に対する判断や、建て替えが必要か・修繕が可能かという住宅再建の方向性に関する対応が、住まいるダイヤル及び事務所協会・住宅相談窓口の独自の相談窓口で行われた。

また現地調査を実施する相談員に対し、相談シートを配布した。構造物の損傷・建物の傾き・浸水による断熱材の汚損などの損傷内容について、それぞれ建て替え・一部補修・その他に分け具体的な補修方法とその概算費用が掲載されていた。これを用いて具体的な修繕・再建方法とそれにかかる費用の概算金額を算出し相談者へ伝えたほか、補修業者に対しても対応可能な業者について情報提供された。

この段階で住宅再建や補修が必要な被災者は、その方法や概算金額が提示され、特に住宅補修に関しては具体的な業者の情報が入手できる。このように被災住宅の被害や今後の対応に関する疑問・問題の解消が行われる。結果、被災後の住宅に関して今後住宅再建をするか補修をするかという大まかな方向性が提示され、現地調査に基づく相談の段階で、被

災者自身の今後の住まいについてある程度の計画を立てることができることがわかった。

### (3) パッケージでの情報提供・相談

くまもと型復興住宅相談のように具体的な復興住宅のプランの提示と実際に施工を行う工務店の紹介、そして支援情報の提供および相談を一括で行うものをパッケージでの情報提供・相談とする。

住宅再建に関する公的助成・制度に関する情報と、具体的な再建費用と復興住宅の仕様及び住宅性能が明確になった再建方法・住宅プランを冊子にまとめ提示した。またこの住宅プランを実際に施工する工務店と連携し、被災者が早期に安価で、一定の住宅品質を保った再建ができるように相談対応を通じて工務店と被災者の意思疎通の補助を行った。

このように再建へ向けた具体的な相談対応を行い、相談会やモデル住宅の展示場での建築士への相談を通して、事前に用意された住宅プランから被災者が要求や本人の状況に合致したものを選択できるように情報提供から疑問の解消までを行った。

### (4) 住宅再建を目的とした相談

被災者の住宅再建に関して状況や要望を聞き出し整理を行い、その最終的な意思決定に対するサポートまでを行うものを、住宅再建を目的とした相談とする。ヒアリング調査では意思決定に関わる支援は聞かれず、熊本地震では行われなかった。一方で内閣府が公表した「被災者の住まいに関する相談・情報提供マニュアル」<sup>8)</sup>では想定されていた。

相談支援を通じて住宅再建の前提条件を整理する。具体的には従前の住まいの種類や間取り、被害程度といった従前の住まいの情報や、被災状況と住まいの権利関係および住まいの被災程度の把握、そして被災者の就労や収入、ローンの状況や家族構成などの被災者が抱えている問題や要望の確認をする。

その上で広さや間取りといった希望する住まいの条件も整理し、被災者の置かれている経済状況・健康状況・就労状況などに合致した再建が行われるように意思決定のサポートを行う。それと共に自宅再建への最終的な決断が困難な被災者に対し、適切なタイミングでの情報提供や意思決定の後押しを行う。

## 4-3 熊本地震で実施された相談支援の段階

熊本地震では内閣府が想定した住宅再建を目的とした相談は実施されていなかった状況を踏まえ、熊本地震で実施された支援内容と内閣府の想定を相談



支援の段階ごとに比較し、実際にはどの段階まで行われたのかを明らかにする。

まず熊本地震で行われた一般相談や現地調査に基づく相談でみられた、建築士などの専門家が知見や専門的知識を伝える相談支援は内閣府では想定されていなかったことが分かる。マニュアル<sup>8)</sup>では専門的な組織へ相談事項の引き継ぎを行うとしており、外部委託に集約されており明確な方法は提示していなかった。その一方で、一般相談で実施した住家被害認定調査や災害救助法に基づく応急修理の情報提供・相談は、内閣府でも想定されていた。

また内閣府が示した、被災者の意思決定に関わり条件の整理などを通じて最終決断の前までをサポートするような支援は熊本地震では行われておらず、その段階まで至っていないことがわかった。可能性の一つとして、工務店や住宅メーカーなどの施工業者がその役割を担っていたことが考えられる。

結果、内閣府の想定する相談支援と実際に行われた相談支援の内容に乖離があった。熊本地震では住宅再建を目的とした相談である。被災者の意思決定

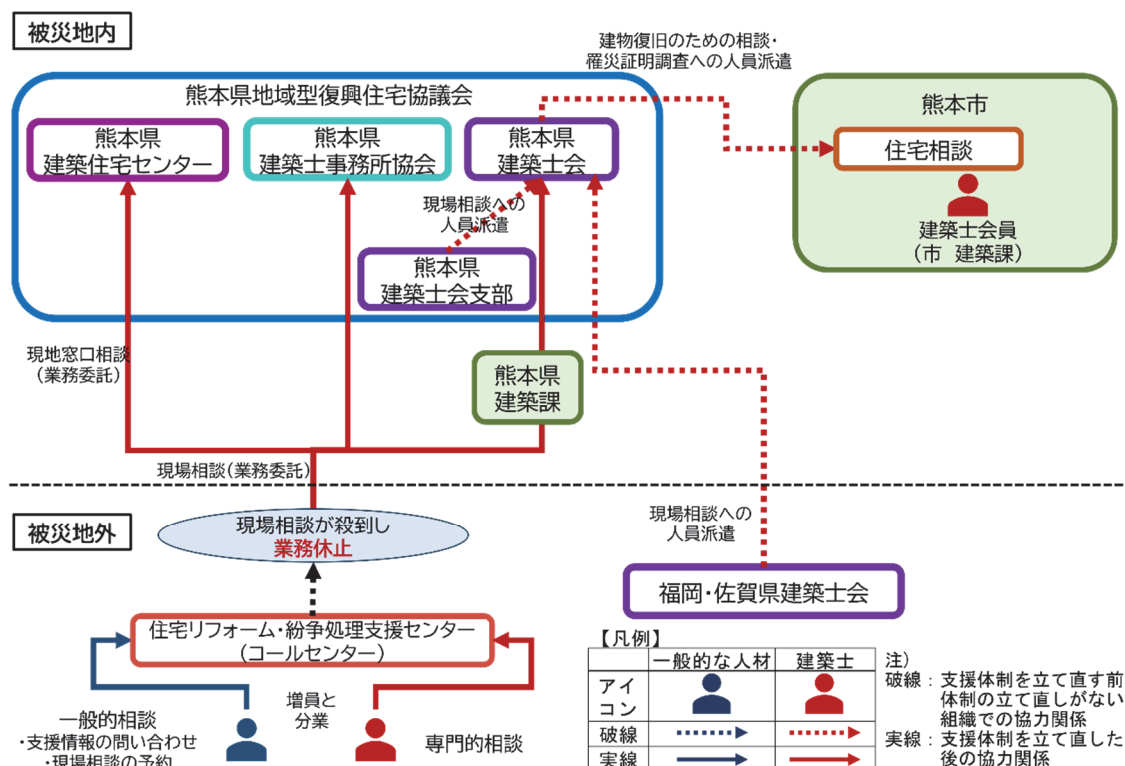
に関わり条件の整理などを通じて意思決定をサポートする段階まで至らず、パッケージでの情報提供・相談までを実施していた。

## 5. 熊本地震での相談支援の協力体制とその方策

### 5-1 相談支援の協力体制の状況

前報<sup>3)</sup> および今回の調査結果から、組織・団体同士が協力体制を構築し、相談支援を実施している状況があった。また熊本市と建築士会が協力した市での住宅相談のように組織・団体同士が1対1で協力し合うだけでなく、住まいるダイヤルやくまもと型復興住宅相談のように、多数の組織・団体が協力し合っていた。前述した4段階の相談支援はこの協力体制の上で成立している可能性がある。

そこで熊本地震での相談支援にあたって構築された各組織・団体同士の協力体制についてまとめ、Fig.2 に示した。このときヒアリング結果から熊本県内だけに留まらず県外の組織・団体との協力がみられたため、ここでは被災地内を熊本県内とし、それ以外を被災地外として区別し示した。また行われ



**Fig.2** The cooperative system of consultation support provided by the organizations surveyed

た人材の派遣についても、住まいるダイヤルにおいて人材の特徴を加味し増員を考えていたことがわかった。そのため住宅に関する専門的な知識を有さない一般的な人材と、専門的な知識を有する建築士を区別し表現する。そして一度構築した支援体制を何らかの事由で増員などして立て直した場合は、立て直す前を点線で、後を実線で示した。

調査対象では、4つの協力体制がみられた。①建築士会と熊本市が協力して実施した住宅相談、②住宅センター、事務所協会、建築士会などが協力した熊本県地域型復興住宅協議会、③支援センターおよび住宅センター、事務所協会、建築士会などが協力した住まいるダイヤル、④住まいるダイヤルの現場相談対応における建築士会と熊本県建築士会支部、福岡・佐賀県建築士との協力である。

## 5-2 相談支援の協力体制構築において迅速化・効率化を図るための方策

結果、熊本地震における相談支援の協力体制構築には、以下の4点の方策が見出される。

### (1) 平常時からの協力体制・関係性の転用

平常時からの協力体制や関係性を転用したものとしては、くまもと型復興住宅の普及のために設立された熊本県地域型復興住宅協議会がある。調査対象の中では住宅センター、事務所協会、建築士会が関係している。どの組織も熊本県内の建築関係団体であるため、平常時から日常業務などで組織同士のつながりがあった。そのため、連携が取りやすかった。

また建築士会が熊本市に人員派遣を行った熊本市での住宅相談では、市から依頼があった際に主導していた市の建築課に建築士会会員がいた。顔が見える関係性がある人物が相手先にいることで意思疎通が容易であり、連携にあたり話が通りやすかったことがあった。

### (2) 被災地外の人員の活用

被災地内に留まらず被災地外に協力を求めることによって協力体制を築いたものとしては、まず支援センターが主導となった住まいるダイヤルがあった。住まいるダイヤルでは本部を支援センターが存在する東京に置き相談業務を開始したが、相談窓口開設直後に問い合わせや相談が殺到し、被災者からの電話が繋がらなくなるなど窓口の機能がパンクした。そのため支援体制を再構築し、支援情報の問い合わせなどを受ける東京のコールセンターの人員を増員

して対応にあたった。この人員は建築士ではない一般的な人材である。

また住まいるダイヤルでは体制を立て直した後に、住宅センター、事務所協会、建築士会へ現地相談の業務委託を行った。このとき建築士会ではまず県内の建築士会支部に声をかけ対応を行ったが、近隣県である福岡県、佐賀県の建築士会にも協力を依頼し、専門的な人材を増員して対応を行った。近隣県であることから普段より九州部会などで平常時より顔を合わせているため関係性ができあがっているほか、距離も近く支援に駆けつけやすかったことがあった。

### (3) 相談支援の分業化

寄せられる相談を分類し、支援を分業化することによって効率的に対応にあたったものとしては、住まいるダイヤルが該当する。まず体制の再構築にあたって支援センター本部に設置されたコールセンターにて、寄せられる相談を支援情報の問い合わせや現地相談の予約といった建築士ではない人材でも回答が可能な一般的な相談と、住宅の専門的な知識を有する専門家である建築士でないと回答が難しい専門的な相談に分類した。被災者から寄せられた相談は一旦一般的な相談として受付け、建築士による対応が必要なもののみ専門的な相談に取り次ぐようにし、数少ない建築士を有効活用するように対応した。

また被災住宅を現地で確認し調査および相談を行う現地相談に関しては、熊本県内の建築関係団体である住宅センター、事務所協会、建築士会に業務委託を行った。現地相談には被災直後から被災地である熊本県に赴くことができ、かつ住宅の専門的な知識をもつ建築士であることが求められる。現地の建築関係団体と協力することで、この条件を満たすことができ、効率的な支援が行われたと考えられる。

### (4) 段階的な増員

相談支援にあたる人員が不足する事態に陥らないようにするために増員を段階的に行なったものとしては、建築士会が行った住まいるダイヤルにおける対応がある。建築士会は現地相談対応にあたって、まずは建築士会内の支部を活用し被災していない、または被害が小規模だった支部に声をかけ協力依頼をした。支部内で所属する建築士への連絡および人員を集約してもらうことによって、本部である建築士会が協力依頼にかかりきりになることがなく、効率的に人員を集めることができた。

また徐々に増加する相談件数に対しても支部と近

隣県の建築士会と、並列的に人員を集めることができた。一つに頼りきるのではなく、保険として手段をいくつか持っておくことで相談対応に関して人員不足という事態に陥ることはなく、対応ができたと考えられる。

### 5-3 まとめ

以上、熊本地震での相談支援の協力体制構築における特徴から、協力体制を構築し、相談支援の迅速化・効率化を図るための方策が明らかとなった。

平常時からの協力体制・関係性の転用によって被災後に混乱した状況下でも迅速な支援を行う基盤をすぐに築くことができるほか、相談支援の分業化では限られた人材をその職能や特徴によって分業することで有効に活用することができる。

また徐々に増加する相談ニーズに応えるためには人員の募集が必要であり、被災地内だけでなく被災地外の人員の活用までも視野に入れ、それに加えて段階的な増員によって保険として協力先をいくつか持っておくことで人員不足で対応ができないという状況を未然に防ぐことが出来る可能性が高まる。

熊本県以外の地域でもこれらの方策に着目することで、相談支援の協力体制構築において迅速化・効率化を図ることができると示唆される。

## 6. おわりに

本研究では熊本地震で実施された住宅相談支援について、再建へ向けた具体的な相談へ変化する相談支援の段階を明らかにした。結果、被災住宅の被害調査や情報収集を行う一般相談・現地調査に基づく相談、そして具体的な再建の意思決定を支援するパッケージでの情報提供・相談、住宅再建を目的とした相談の4段階に表された。熊本地震では住宅再建を目的とした相談である、被災者の意思決定に関わり条件の整理などを通じて意思決定までをサポートする支援まで至っていなかった。

この相談支援を実施する基盤である組織・団体同士の協力体制の構築過程に着目すると、迅速かつ効率的に支援体制を構築するためには平常時からの協力体制・関係性の転用・被災地外の人員の活用・相談支援の分業化・段階的な増員といった方策が関係することが明らかになった。

今後は今回の調査で得られた知見を基にし、今後発生する首都直下地震に対して、良質な住宅再建と

はどのようなものかを考えると共に、それを実現するための相談支援に関して現時点で想定される対応を検討したい。

## 謝辞

本研究の調査にあたり、熊本県建築士事務所協会、熊本県建築士会、住宅リフォーム・紛争処理支援センター、熊本県建築審査センター・熊本県建築住宅センター、くまもと住宅相談窓口の担当者の方々にご協力頂いた。貴重なご意見を賜り、深く御礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 近藤民代，柄谷友香：東日本大震災5年までの自主住宅移転再建者の意思決定と満足度の関連要因 岩手県および宮城県沿岸9市町の新規着工戸建住宅を対象とした質問紙調査を通して，日本建築学会計画系論文集，第83巻，第747号，pp.917～927，2018年5月。
- 2) 日本建築学会 東日本大震災における実効的復興支援の構築に関する特別調査委員会：東日本大震災における実効的復興支援の構築に関する特別調査委員会最終報告書，2016年度日本建築学会大会（九州）総合研究協議会資料 福島の実状と復興の課題，pp.121～128，2016年8月。
- 3) 阿部一咲子，平田京子，石川孝重：地震災害後における住宅再建・修繕の支援に関して相談機関が果たした役割-熊本地震に対応した4団体を事例として-，日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科 29号，pp.29～38，2023年3月20日。
- 4) 阿部一咲子，平田京子，石川孝重：地震災害時の復興目標における生活再建とその支援策の変遷—市民の防災力向上に向けて—その92—，日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）（都市計画），7285，pp.625～626，2022年9月。
- 5) 住宅リフォーム・紛争処理支援センター：住宅相談統計年報2012 2011年度の住宅相談と紛争処理の集計・分析，[https://www.chord.or.jp/documents/tokei/pdf/soudan\\_web2012.pdf](https://www.chord.or.jp/documents/tokei/pdf/soudan_web2012.pdf)，2012年10月。
- 6) 住宅リフォーム・紛争処理支援センター：住宅相談統計年報2017 2016年度の住宅相談と紛争処理の集計・分析，<https://www.chord.or.jp/docu>

- ments/tokei/pdf/soudan\_web2017.pdf, 2017 年 8 月.
- 7) 住宅リフォーム・紛争処理支援センター：住宅相談統計年報 2022 2021 年度の住宅相談と紛争処理の集計・分析, [https://www.chord.or.jp/documents/tokei/pdf/soudan\\_web2022.pdf](https://www.chord.or.jp/documents/tokei/pdf/soudan_web2022.pdf), 2022 年 8 月.
- 8) 内閣府：被災者の住まいに関する相談・情報提供マニュアル, <https://www.bousai.go.jp/taisaku/hisaisyagyousei/sumai.html>, 2016 年 3 月.
- 9) 熊本県地域型復興住宅推進協議会：くまもと型復興住宅, <https://k-fukkoujuutaku.sakura.ne.jp/>, 2023 年 10 月 26 日（閲覧）.
- 指導教員：住居学科 平田京子教授

# 母殺しに代えて：『わたしがいどんだ戦い 1940 年』に見る 代理母－代理娘関係

Instead of Matricide: The Surrogate Mother-Surrogate Daughter Relationship  
in *The War I Finally Won*

梅 野 愛 子\*

Aiko Umeno

**要 約** 本稿は、キンバリー・ブルベーカー・ブラッドリー作『わたしがいどんだ戦い 1940 年』に見られる「代理母」－「代理娘」の関係性について考察するものである。同作は、『わたしがいどんだ戦い 1939 年』の続編として書かれたものだが、作者は作品冒頭で主人公の母を戦死させ、前編で代理母役を果たしていたスーザンとの母娘関係を結ぶために、新たな代理母、ソールトン夫人に焦点を当てている。本稿では、いかに夫人が主人公にとっての代理母と化していき、代理母娘関係を構築するかを検証した上で、主人公が母性的影響力と娘になることを体験していく過程を分析する。最終的に、代理母がプレティーンの主人公にとっていかなる役割を果たしているか考察する。

**キーワード**：代理母－代理娘関係、わたしがいどんだ戦い 1940 年、  
キンバリー・ブルベーカー・ブラッドリー、母娘関係、児童文学

**Abstract** This article explores the relationship between the “surrogate mother” and “surrogate daughter” in *The War I Finally Won*, which was written by Kimberly Brubaker Bradley as a sequel to *The War that Saved My Life*. In the beginning of the book, Bradley has the protagonist’s mother die in the war and focuses more on Lady Salton, a new surrogate mother, to form a bond with the protagonist and the former surrogate mother, Suzan, in the prequel. This article examines how Lady Salton forges a relationship with and becomes a surrogate mother for the protagonist, Ada. It then analyzes the process by which Ada experiences maternal power and how she takes on the role of a daughter through her relationship with her surrogate mother. Finally, this article discusses the significance of a surrogate mother for a preteen protagonist.

**Key words**：Surrogate mother-surrogate daughter relationship, *The War I Finally Won*,  
Kimberly Brubaker Bradley, Mother-daughter relationship, Children’s literature

## はじめに

児童文学では、物語の数だけ親子関係が描かれてきた。それは当然、児童文学の中心に子どもがいるからだ。なかでも母－娘関係は母親像と合わせて父－息子関係以上に論点となってきたと言えるだろ

う<sup>1)</sup>。本稿は、児童文学のなかで、葛藤を抱える母娘関係を調停するべく登場する代理母という機能に焦点をあて、キンバリー・ブルベーカー・ブラッドリー作『わたしがいどんだ戦い 1940 年』<sup>2)</sup> (2017, 原題 *The War I Finally Won* (2015)<sup>3)</sup> 以下『1940 年』) における代理母－代理娘関係を検証するものである。

同作は、『わたしがいどんだ戦い 1939 年』<sup>4)</sup> (2019, 以下『1939 年』) の続編として書かれた作品である。前作『1939 年』はニューベリー賞オ

\* 人間生活学科人間発達学専攻  
Graduate School of Human Life Science,  
Division of Human Development



ナーブックにもなっており、第二次大戦下のイギリスを舞台として、右足が先天性内反足で産まれたばかりに母親から虐待を受けてきた10歳の少女エイダが、それまで家に閉じ込められ、広い社会と人間関係を経験しないままに育った環境から、弟が集団疎開に出ることをきっかけに<sup>注1</sup>、弟とともに家を出ることで物語が展開していく。この作品は、障害を扱った児童書に贈られるシュナイダー・ファミリーブック賞も受賞したとおり、エイダの内反足と虐待という設定と、大戦という背景のなかで集団疎開を機に動き出す展開が、物語の強力な軸であった。しかし、続く『1940年』では、主人公の人生の文字通りの足枷であった内反足を手術で整形し、同時に足枷の元凶であった実の母親が空襲で死亡したところから物語を始めている。つまり、続編は「母殺し」から始まるのである。

子どもに向けて書かれる児童文学では、基本的に周囲との関係性や問題を修復して主人公が成長することを目指すため、時に物語は一種の箱庭的な空間となって主人公を救うための導きやファンタジーが出現する。とりわけ、母娘関係の修復の際に出現するのが、「代理母」である。本稿では、この代理母の出現に加えて、『1940年』が主人公エイダに「代理娘」としての役目も課していることに注目し、その代理母-代理娘関係を検証してみたい。なお、考察の参考に、エイダと同じプレティーンの主人公と母親との間にイデオロギ的対立が生じ代理母役が出現する好例として、ジャクリン・ウィルソンの『リジーとひみつのティーパーティー』<sup>5)</sup> (原題 *Lizzy Zipmouth*)<sup>6)</sup> からも例を引きつつ論証していくこととする。

## 1. 母殺しの難しさと「代理母」

精神分析においても、母娘関係に関する書籍は枚挙にいとまがなく、それらは母娘関係が世代を下ってもなお社会の変化と関連しながら困難な関係性を再生産し続けている証左だろう。そしてその多くが、密着しすぎた母娘関係に当てられている<sup>7)</sup>。母親の過干渉や強力な力に飲み込まれたまま、成長期をとうに過ぎてその力に苦しむ女性たちの訴えが、定期的に言説にのぼってくるのがうかがえる。多くの実例が示すように、母親の力の除去が難しいのは、母親の願望や執着、あるいは単純に過剰な愛情といったものが、娘側に内在化してしまい、娘本来の

性質を侵食してしまうからである。しかし、母からのこうした浸食や抑圧は内在化が故に取り除こうとすると大変な困難を伴う。なぜなら、「母殺し」を試みれば、それはそのまま、娘にとっても自傷行為になってしまう<sup>8)</sup> からだ。内在化した母、インナーマザーの除去は、娘にとって自らの一部を切り取る行為ともなるのだ。

そうした言説のなかで、本稿の「代理母」に焦点を当てるなら、例えば斎藤環が例として挙げている、ドイツ留学中の下宿先の老夫婦を両親のように慕っていた女性の話<sup>9)</sup>、実の娘のいない姑との嫁姑関係の方が良好な傾向にある<sup>10)</sup>、といった話は、以下に説明する「代理母」に似たものと思われる。斎藤も「確かに血縁は無条件に母性を保証してはくれません。むしろ母性とは、人生のおりおり自ら求め、探し当てていくべきもの」<sup>11)</sup> なのかもしれない、と語っているが、こうした事例に関して実例から分析を試みている資料を見つけることはできなかった。代わりにカウンセリングの現場では、やはり父親の不在が母娘の密着を招く一因として、父親の積極的な介入を薦めているようである。

また、さまざまな一般向けフィクションから母娘関係を扱ったものを分析した『だから母と娘はむずかしい』<sup>12)</sup> では、均衡を失った母娘の物語が数々出てくるが、そのなかにも有力な解決策を見出しているわけではないようだ。こうした一般向けフィクションに対し、児童文学は子どもに向けて書かれるという点で、主人公に解決策を与えないわけにはいかない。同書のなかの「母親の〈支配〉を逃れる応報がもうひとつ残されている。それは母親の下位性を幻想のレベルで極限まで押し進め、無意識にはあるが母の死を強く願うことだが、これは荒療治」<sup>13)</sup> であるとか、「母親はどうしても取り替えられないが、最初に娘が母親に対して無条件に認めた絶大な力をなんとか抑制しようと努力するのは当然だ」<sup>14)</sup> といった指摘に対して、児童文学の場合、「代理母」を立てようと企てると言えるだろう。それは、母殺しの代わりに、自分の周囲で別の高位の女性を見出す方法である。

## 児童文学における「代理母」

トライツは *Waking Sleeping Beauty: Feminist Voices in Children's Novels*<sup>15)</sup> の第7章のなかで、その構造自体が妊娠した母体を示す物語内物語をもった入れ

子構造のテキストに言及している<sup>注 2</sup>。その際、こうしたテキストの例としてあげている『クローディアの秘密』<sup>16)</sup>と『わたしはアリラ』<sup>17)</sup>において、それぞれフランクワイラー夫人とスザンヌを「surrogate mother 代理母」<sup>18)</sup>としている。そして、「母性に満ちあふれた物語行為をつうじて、母親との葛藤を乗り越えると、母性をいくらか受け入れられる」<sup>19)</sup>のだと指摘するが、主人公が実の母を受け入れられるようになることに寄与するのは、テキストの母性的構造とともに、代理母との関係性を通過することも大きいように思われる。つまり、「代理母」とは、母親に代わって主人公と密な関係性を結んだ上で、主人公の心理的な問題を解消し、結果的に母親との間に生じた対立や不仲を調停するような役目を果たす女性登場人物のことである、と定義づけてよいだろう。

これはおそらく、多くの実際の精神分析事例でも理解できるように、母親の影響力の強大さから一時的に主人公を保護しなければ、主人公がどこかで潰されてしまう可能性があるからだ。「If the “shadow” of a mother’s power is represented as looming tall over her daughter in Freudian psychodynamic narratives, the dissolution of this power is represented through an imagery that describes the maternal body as “fading” and “crumbling” away. フロイト精神力学的な物語において、母親の力の「影」が娘の上にのしかかるように表現されるとすれば、この力の消滅は、母体の「霧散」や「崩壊」といったイメージによって表現される」<sup>20)</sup>という Crew の指摘は、母の影を退けるために何らかの方法で母殺しに相当するものを母体に対して果たさなければならないことを物語っている。しかし、成長過程の主人公、とりわけ今回の『1940 年』のようにプレティーンの場合<sup>注 3</sup>、母親の影響力を避けつつも同時に、どうしても母たる存在も必要としているというアンビバレントな状態にある。その両方の役目を果たすのが代理母である。「〈母のない娘〉とは逆に、〈母のありすぎる娘〉とでも呼ぶべき女性の方が、実際は母性を拒否する傾向がはるかに強い」<sup>21)</sup>のであれば、母性を拒否する姿勢がすでに母娘の系譜の歪んだサバイブのかたち<sup>22)</sup>であることになる。代理母は、母性を否定しないまま子どものアイデンティティを守る手段として、児童文学という心理学的実践の場に生じた知恵だと言えるかもしれない。

またここには、母親の力の強さに対抗できるものは同じ母親に相当する人間でなければならない、という確固たる力関係も見えてとることができる。例えば、Joosen の祖父母に関する研究<sup>23)</sup>からも世代間におけるパワーバランスがよく理解できるだろう。Joosen によれば、祖父母かそれと同等の世代の登場人物と主人公の関係が密になると、両親かそれに相当する世代は降格させられる。祖母が代理母の役割を果たすものとして、本稿で参照する *Lizzie Zipmouth* も同様の構造が見られる<sup>注 4</sup>。実際に祖父母世代が両親に代わって子育てをすることは、現実の三世代関係にも言えることだろう<sup>24)</sup>。こうした三世代関係性からすれば、母の力の強さは、別の母をもってするか、母より強い母、つまり文字通りの grandmother 祖母をもってしか退けられない性質があるのだろう。密着しすぎた母や強大な母の影は、同等の力によってこそ崩すことができるのである。そして、そこには残念ながら父やそれに相当する男性登場人物の力も一少なくとも児童文学では、母の力と同等の質量は体现できないようである。結果的に、児童文学のなかでは母娘関係の問題がテーマとなった際、女系の登場人物が密な関係性を構築する傾向にあると言える。

『わたしの挑んだ戦い 1940 年』はこの典型例でありつつ、さらに「代理娘」という役目を主人公に課し、綿密な母娘関係と女系登場人物の連なりを張り巡らせた作品である。以下、その代理母娘関係について検証してみる。

## 2. 『わたしの挑んだ戦い 1940 年』の場合

物語はエイダの内反足の手術から始まる。手術は無事に終わるが、術後にエイダと弟のジェイミーの母がロンドンの空襲で死亡したことが知らされる。1 章目冒頭、エイダの一人称の語りは、「You can know things all you like, but that doesn’t mean you believe them (物事は好きなだけ知ることができるけど、知ることと信じることは違う)」<sup>25)</sup>と語っているが、この know と believe の間の差について、以下のような言葉も語っている。母の死を知った彼女は、「I don’t know whether Mam and I could have had a happy ending. [...] but it was another thing I didn’t fully believe」<sup>26)</sup>と語る。続編は、エイダが頭でわかることと心で信じることの隔たりを行き来しながら、スーザンが自分の母になる成り行きを頭で理解

し、なおかつ母とは信じられなかった「幸せな結末」<sup>27)</sup> に向かって、スーザンとジェイミーと三人で歩み出せるかどうかを、術後の新しい足で確かめていく物語である、と言える。

ブラッドリーは、前編の内反足と母親からの虐待を創作的外科手術と言わんばかりにあっさり除去し、そうしておいてスーザンとの母娘関係が「後見人」という名の下に接ぎ木されるのだが、エイダはスーザンを「ママ」と呼ぶことを繰り返して拒む。親友のマギーが、スーザンは母親なのか、と訊くと、法的な後見人にすぎず、それの方がいいのだ、と答え<sup>28)</sup>、ジェイミーが腕を折ってスーザンを求める場面では、スーザンをママと呼ぶジェイミーに、「スーザンはママじゃないよ」<sup>29)</sup>、「その呼び方、やめなよ!」<sup>30)</sup>と都度、訂正をしている。続編からエイダの代理ではない本当の母親役に昇格したスーザンだが、エイダのこの拒絶が、スーザンとの母娘の接ぎ木にずれが生じていることを示し、結果、第二の代理母が要請されることになるのである。

#### ソールトン夫人の代理母化

その代理母役を務めるのがソールトン夫人なのだが、興味深いのは、冒頭の内反足の手術代はソールトン夫妻が負担していることである。母からの虐待とエイダの心の傷の象徴のようだった内反足の整形手術の裏に、ソールトン夫妻による援助がすでにあるのだ。しかし、エイダは手術代を払ってくれたソールトン夫人を好きになれない。夫人が治った右足を見せるよう頼んだ際—この時点で、夫人にも多少の不躰さがあることは否めないが—、エイダは夫人の印象をこのように語っている：「Lady Thorton wasn't nice. She was fierce. She was nosy. She always got her way. [...] She had paid for my surgery [...] but I didn't have to like it」<sup>31)</sup>。しかし、夫人の干渉にエイダが感じているこのうっとうしさこそ、思春期の子どもが母親に対して感じて当然の感情だと言える。

スーザンとソールトン夫人の母役の決定的な分岐点を表れ出ているのが、それぞれからもらったクリスマスプレゼントへのエイダの反応だ。実の母の虐待によって家に閉じ込められていたエイダには一般社会への知識が欠落しており、さまざまな言葉が新鮮に響く。エイダの親友でソールトン夫妻の娘マギーの薦めで、クリスマスプレゼントとしてエイダは辞書をもらう。長く監禁状態にあった子ども時代

を補填するべく、エイダは言葉のひとつひとつから、世界の成り立ちや人間の感情の機微に至るまでを知ろうとする。そして、辞書の最初の頁に載っていた言葉「ツチブタ／*Aardvark*」<sup>32)</sup>を読んで笑い、「顔をあげて（略）「ありがとうございます!」」<sup>33)</sup>とお礼を言う。このとき、夫人がエイダの代理母にノミネートされたと言ってよいだろう。エイダが辞書で見知らぬ言葉をひき、ひとつひとつの意味とともに世界を理解する、という意味で、そこにはコーツ<sup>34)</sup>が『シャーロットのおくりもの』について言及しているウィルバーへの言葉の与え手としてのシャーロットの役割と同様のものがうかがえる。

一方、スーザンからは手製の布人形をもらっているのだが、エイダは、自分は赤ちゃんではないと言ってこの人形を拒む。夫人からもらった辞書への反応とは対照的である。欲しければ仕方ないと折れるスーザンに対し、エイダは「I needed a doll a long time ago. [...] It's too late for me to have one now」<sup>35)</sup>と答えている。『第二の性』のなかでボーヴォワールも述べているとおり<sup>36)</sup>、人形遊びは、娘側が母親側の役割を迫体験するという間主観的体験を提供する遊具だ。エイダの言葉の「昔」という意味は、人形遊びに適した年齢ではないという意味以上に、人形が本来であれば、母親との関係性の構築を補助する役割をもって存在すべきものであったことを意味している。

ジャクリーン・ウィルソン著 *Lizzie Zipmouth* は、「ガーリー」なものと人形の大好きな主人公リジーが母親側のフェミニズムと対立する様を描いている。伝統的女性らしさを崩そうとつづけて来た欧米の児童文学にあっては、大変珍しい作品だと言えるだろう。同作では、リジーと母親の対立に人形コレクターの義理の曾祖母が代理母役を果たしている。リジーは義曾祖母のもとで思う存分人形遊びを楽しみ、最終的に、曾祖母が発作を起こして入院した際、人形遊びでしてきたのと同じように、曾祖母をベッドに座らせてやり、髪をとかしてやる。このとき曾祖母はほぼ人形と化している。母娘にとっての人形的重要性を象徴的に理解しやすい物語であり、人形がいかに「入れ子構造」をもった遊びであるかを端的によく示している。母は殺せないが、母親を象徴する誰かの世話という行為を人形を通して行うことで、娘は母の力を疑似体験できるのだ。「女の子は人形を叱ったり、罰を与えたり、慰めたりするとき、同



時に、母親に対して自分を守り、彼女自身も母親の威厳を身につけるのである」<sup>37)</sup> というボーヴォワールの言葉のなかでも、母から自分を守るものであるとの指摘は、母娘の力関係を的確に捉えている。

こうした娘にとっての人形遊びの体験を考えれば、エイダはその手段を得るべきときに得られなかった、ということである。即ち、人形の拒否は、実の母親との母娘関係の破綻と修復不可能な過去を象徴していると考えられる。「I needed a doll a long time ago」と言うエイダの言葉は、実の母がいたときに遡るものであり、「母親を持つのは遅すぎます」と言っているようにも思われる。だからこそ、頑なにスーザンが母親になることを否定するのだろう。エイダは、もらった辞書で後見人という言葉をはき、さらに被後見人を意味する ward が昔は保護する側に使われていたことを知る。そして、「わたしはウォードのほうがいいです。スーザンを助けたいです」<sup>38)</sup> というが、これは、純粋な人形遊びがもはや不可能なエイダでも、スーザンを母として受け容れるために、人形を世話するようにスーザンの世話をし、助けたいという欲求があることを示していると言える。拒否の裏に受容したいという母性に対する矛盾を抱えているのだ。

残念ながら、エイダが人形遊びに代わる体験をするためには、スーザンからももらった馬のバターもさほどの役割を担っていないように見受けられる。その代わり、エイダが名乗りを上げるのが夜間の火災監視なのだが、このことが逆に、エイダにソールトン夫人との接点を受けることになる。これについては次頁の「母娘関係的排他性」の項目で詳述する。

#### 対立の場としての寝室と母体としての家屋

戦争の影響でソールトン家の屋敷が政府によって接収されたことを受け、ソールトン夫人はエイダたちの家へ引っ越してくることになる。エイダたちが住まわせてもらっている家がもともとソールトン夫人の持ち家だからだ。嫌がるエイダをスーザンは論すが、エイダはマギーと一緒に部屋を使うことは了承しても、夫人が自分の部屋をマギーの部屋のようにつくりかえてしまったことに不平をいう。エイダの部屋には、ベッドがもう一つ持ち込まれ、洋服たんす、本棚、ベッドカバー、カーテン、じゅうたん、次々とマギーの部屋のものに変わってしまい、エイダの持ち物はマギーのたんすや本棚に吸収され

てしまう。

前述の *Lizzie Zipmouth* でも、リジーの寝室に対する母親のフェミニズムの浸食が描かれている。母の再婚によって引っ越した先の新しいリジーの部屋のベッドカバーとカーテンを選ぶ際、リジーはピンク色がいいと言うのに対し、母は「ピンクはちょっと女の子っぽい girly」<sup>39)</sup> と反対するのだ。そして、何も言葉を発しなくなったリジー（題名の *Zipmouth* の由来）をよそに、母はリジーの部屋を赤と紫のチェックのカーテンとベッドカバーにしてしまう。実際に、寝室がティーンエイジャーの女の子にとってガール文化を担う重要なプライベート空間であるとの分析もあるとおり<sup>40)</sup>、プレティーンとはいえ、リジーとエイダにとっても自分自身のアイデンティティと部屋が等価の空間になっていることを示している。

エイダの場合、リジーとの相違点は、母の価値観ではなく夫人の娘の部屋に変えられてしまったことである。ここに、エイダの「代理娘」化の布石が見てとれるだろう。夫人はエイダのアイデンティティである部屋をマギーのアイデンティティで塗り替えてしまったのである。「代理母－代理娘」関係のための整備として、ブラッドリーは、正確なパズルをはめこむように着実にエイダの環境を代理母娘関係に向かって変えていくのがわかる。

しかし、エイダはマギーのようにはなれないと言い、「わたしがどうしたいのかはだれもきいてくれなかった。家全体が、わたしたちのものではなくなっちゃったみたい。ソールトン夫人のものみたいに見えます」<sup>41)</sup> というが、まさに家は夫人のものなのである。この家が夫人の持ち物だとする構造自体、家屋を一種の母体的空間と捉えることは可能だろう。アルストンが「家は擬人化され、母になるのだ」<sup>42)</sup> と述べるとおり、母親と家は主人公の状況次第でイコールで結びうる。「In a text devoid of key female characters it is noteworthy that the need for the maternal is still apparent and moreover that this need is articulated in the depiction of the home as it becomes the substitute mother. 主要な女性登場人物がいないテキストでも母性への必要性は明らかで、この必要性が、家が代理母になることで家の描写のなかに表現されることは注目し値する」<sup>43)</sup>。家も代理母になりうるなら、エイダの住む家が、代理母に変貌する夫人の持ち家であるのは当然かもしれない。エイダ

のこの状況は、先述の右足を見せろといった夫人へのエイダの印象同様、本来の母親とは事程左様にうっとうしく覆いかぶさってくるものであるということをよく表しているだろう。もっとも、実母の虐待下にあったかつての生活では個人としての空間が尊重されたことはなかったことを思えば、自分らしい空間が確保されるべきだと主張することは、エイダには重要な成長の印でもある。

### 母娘関係の排他性

『母親業の再生産』<sup>44)</sup>の賛否は数あるだろうが、チョドロウが描き出した母子関係の間主観の関係性の排他的性質は、成長に応じて人間がひとりの他者との関係を構築する際の重要な基盤であると言える。児童文学でもその排他的な母と娘の一对一の密な関係性が描かれることがあるが、エイダとソールトン夫人の代理母娘関係も、夫人がエイダの家に引っ越して来て以降、排他性を帯び始める。エイダの最初の火災監視当番が夫人と組まれていることは、この排他性の契機だと言っていいだろう。特に、この当番の最初と最後を夫人と組ませているところなど、プロットの精確さが現れている。夜の暗闇のなか、教会の塔をともに登って、二人きりで監視をする時空間は実際、排他的である。この時空間が、戦争という危機や不安に取り囲まれていることによって、関係性の深化に繋がっていることは言うまでもないだろう。さらには、エイダにとって、塔を登ることが実の母に閉じ込められていた恐怖を思い出させる空間でもある点で、母への恐怖の克服の場でもある。

夫人は、最初の当番の際、役に立ちたいというエイダに、自分も役に立つとを感じるのがうれしいことに気がついたという。料理がうまく、オックスフォードで数学を修めたようなスーザンと比較して、夫人は、自分がそのような女性ではないことを吐露する。「わたくしは料理やお裁縫を習ったことがないのよ。スーザンとちがって、かんたんな計算はできて数学はわかりません」<sup>45)</sup>。このあたりから、夫人とエイダの精神的な繋がりがや共感が含まれ始める。

このあとスーザンとも一緒に火災監視をすることになるのだが、エイダはその心境を、夫人と組むよりはましだが「dreaded」<sup>46)</sup>だと語る。これはやはり、母親の存在にあたるスーザンとの一对一の状況が、まだエイダには恐怖と圧迫を感じさせるような

ものであることをよく物語っているだろう。スーザンという母の力に負けてしまわないためにも、エイダは自分が役に立つと感じたいのである。

一方、ソールトン夫人は、自分でも告白しているとおり、戦争以前は広い屋敷の夫人として雇い人を取りまとめる役割だけをこなしていればよかったのだろう、「家事はあまりやらない」<sup>47)</sup>。後々の蓄えに配慮もせずに高いラム肉を買って来てしまったりと、買い物もろくにできない。代理母としての夫人が、典型的な主婦像を体現した人物ではないという点で興味深い。その点では、夫人と過ごす時間の方がエイダは自分の長所を感じやすいのかもしれない。ここに、夫人がエイダから学ぶ余地がうまれる。

ある日、夫人はスーザンにエイダと二人で夜の食事をつくると言い、エイダを買い物に誘う。そして二人で夕飯をつくろうとするのだが、これが火災監視の次の彼らの二人だけの作業になる。台所に立つエイダから夫人は、エイダが住んでいたスラム街の状況を聞き、母親から部屋に閉じ込められていた話を聞く。それに対して「スーザンから聞いたことがありますよ。でも、信じていなかったわ」<sup>48)</sup>と夫人は答える。物語の冒頭でエイダが知ることは信じることに繋がない、と語ったとおりに、夫人も、実際に知ったことと、それが本当にあると信じられることとの隔たりを埋めるような作業をエイダの言葉からしているのである。夫人は、料理の礼を言うスーザンに対し、「自分がどれだけものを知らないかを学びはじめたところですから」<sup>49)</sup>と答えるが、これは新しく様々なものごとを知っていく必要のあるエイダの状況と重なり合う。火災監視に続き、台所という母親らしい空間において、エイダだけでなく夫人もエイダから学びを得ていることが興味深い。

### 代理母娘化

以上のように、火災監視の当番制をきっかけに、エイダにソールトン夫人との接点ができ、ここから物語は代理母としてのソールトン夫人を躍如として描くだけでなく、エイダも寄宿学校へやらされているマギーの代わりとして、夫人にとっての娘代わりを務めるという「代理母娘」の二重構造を見せる。そしてこの二人の代理母娘の様相は、スーザンの入院で極となって現れる。物語の背景である戦争というもう一つのプロットを引っ張っていた夫人の息子ジョナサンの戦死と、家で預かっていたユダヤ人の

少女ルースがオックスフォードに合格し、イギリス政府のために働くことになって家を出ると、このタイミングでスーザンは肺炎にかかり、ロンドンの病院に搬送されることになる。プロットは物語の佳境として、スーザンとエイダの母娘関係の接ぎ木をいよいよしっかりとした幹として繋ごうとし始めるのだ。

スーザンの具合が悪くなったとき、人生の経験値が極度に少なかったエイダは、スーザンの病状が悪化していることに気づかないまま、適切な処置ができない。自分はむしろスーザンの ward になるのだ、と世話をしたがった彼女だが、それができないのである。そして、スーザンがロンドンの病院に搬送されることで、見舞いに訪れたロンドンでの日々が、エイダをソールトン夫人の代理娘にさせる。

特筆すべきは、ロンドンに着いてからの夫人のエイダへの言葉が命令調であることだろう。「じろじろ見てはいけません」<sup>50)</sup>「教会用のワンピースに着がえなさい。顔を洗ってね」<sup>51)</sup>そして、要らないというエイダに新しいコートを買おうとデパートへ連れ出す。家事の出来なかった夫人が、エイダの挙動や服装に注意をし、ロンドンで今やまさに「母親」をやっているのである。どの色のコートがいいか、夫人はエイダ自身に選ばせる。エイダは、スーザンが以前言っていた赤は疲れて見えるという感想を頼りに、自分に似合う色を選び取る。これこそ、夫人が引越してきた当初、自分の部屋がマギーの物で溢れてしまったこととは対照的に、これから思春期に入るだろうエイダにとって「娘」としての自分で選ぶ権利を授かった瞬間でもある。

こうして二人はデパートで買い物をしたり、昔マギーと訪れたという動物園にも行く。ここでの夫人とエイダは、最も「代理母娘」の様相を呈している。そして、夫人がかつて自分の住んでいた建物の窓を示して、自分の子ども時代がいかに孤独だったかを語る。夫人はエイダのように閉じ込められていたわけではないが、子守と家庭教師に育てられ、本当の友だちを持たない孤独な子ども時代だった、と語っている。エイダは、「わたしと同じ三階だ。／ソールトン夫人とわたしにも、共通のものがあつたのだ」<sup>52)</sup>と思う。重要なのは、ここで共有されているものが孤独であるということだ。なぜなら、それはエイダが今まで誰とも共有できなかったものだからだ。

最後に行う火災監視は、まさに夫人が全快してい

ないスーザンの「かわりにやる」<sup>53)</sup>と申し出ることによって「代理母」をこれまでのどの場面にも増して象徴している。その際、夫人は、ドイツの墜落した爆撃機のなかに若いドイツ兵の焼死体を見てしまう。ショックで何も話せなくなってしまった夫人のことを、エイダは「ソールトン夫人が、こわれそうになっています」<sup>54)</sup>という。スーザンの悪化する肺炎の病状がわからなかったのとは反対に、エイダは、夫人の様子から夫人には今こそマギーが必要であるとすぐに識るのだ。代理娘であるエイダだからこそ、この必要性がわかるのである。

同時に、マギーを寄宿学校から連れ戻すことは、互いの「代理母娘」の任を解くことも意味している。マギーを必要とするソールトン夫人のもとに連れ帰った際に、駅でスーザンがエイダを抱擁する場面では、スーザンとの母娘関係の接ぎ木は見事に成就すると言える。同章の最後に、エイダはこう語る：

わたしの足は、完全に正常にはならないけれど、歩けるし、階段ものぼれるし、走ることもできる。気持ちも同じで、完全とはいえないけれど、じゅうぶんいやされている。(略) マギーのいびきをききながら、これまで戦ってきたもののことを考えていた。負けたことも、勝ったことも、全部。<sup>55)</sup>

エイダがようやく、癒されたと考えることができたのは、夫人を通して母親というものを知り、夫人のなかにある娘への要請に応じて娘役を疑似体験したからだろう。エイダはこのあと、寝室を出てスーザンの部屋へ行き、スーザンのベッドと一緒に眠る。

#### 代理母娘を支える不在者

こうした「代理母娘」の状態を、デリダなら「代補」の一種だと言うかもしれない。そう考えれば、同書においてエイダの代理娘化が可能である理由は、ソールトン夫人側の要請以上に、マギーがいるからこそである。ふりかえれば、マギーこそ、エイダに辞書をプレゼントすることを提案する張本人だ。寄宿学校へ行くときには、エイダに「お母さまのこと、よろしくね」<sup>56)</sup>と頼んでいる。エイダがあれほどやりたがっていたスーザンの世話と対照的に、夫人をよろしくと言われていたのだ。マギーは夫人とエイダの代理母娘の橋渡し役をしているのである。寄宿学校の生活をいやがり、最後にはやつれたようになるマギー<sup>57)</sup>は、不在という犠牲を払う点で、物



語中最もエイダのために存在していると言える。

もうひとつの不在として、祖母の不在がある点も興味深い。マギーのスコットランドにいる祖母も、収容所で亡くなるルースの祖母も、*Lizzie Zipmouth*の義曾祖母のように代理母となって出現してはくれない。この不在は、代理母であるソールトン夫人との力の均衡を保つ関係上、登場しないと見ることは可能だ。しかし、唯一最後に登場するベッキーの母こそ、スーザンが母親となった今、エイダの仮の祖母として登場すると言える。二重化された母娘関係のおさまるべき帰結を見届ける高位の存在として、最終的にやはり「grandmother 祖母」が出現していると考えれば、これも非常に興味深い帰着点だ。

スーザンとベッキーがレズビアンカップルであったことをうかがわせている点からも、物語のなかに一人として典型的な母親像は登場しない。スーザンは数学の才能を活かして政府の仕事を請け負う知的な人物に描かれており、ソールトン夫人もおせっかいで押しの強い母親臭さはあるが、家事や家計の維持には疎い一方、エイダとともに戦争下で新しいことを学んでいく。こうした女性像は、「母親であることを、絶対善とも、絶対悪ともしない」<sup>58)</sup>と言える。ブラッドリーが同書において描き出した母娘関係と女系登場人物のつらなりは、非常に多様でありながら、その関係性には母娘関係／代理母娘関係とそれを成立させる不在者の間に、明晰な整合性がとれていると言えるだろう。

## おわりに

同作の最後にエイダは、「知りたいと思えば、ものごとは好きなだけ知ることができる。そして、知ったことを信じられる日が、いつか来るかもしれない」<sup>59)</sup>と語る。これについて、ニューヨークタイムズ紙の書評では、「この「かもしれない」が本のなかの私のお気に入りの言葉だ。この言葉でエイダを信じられるし、彼女の旅を信じられる。この本の美しさは、このかすかな変化にある」<sup>60)</sup>と評している。作者のブラッドリーは子どもの頃の性的虐待のトラウマを抱えていることが知られているが、彼女は『1939年』を書いたこととエイダにとっての癒しについて、「It's a slow process. There's never a magic turning point in the book in which Ada is suddenly healed. Trauma survivors don't heal like that」<sup>61)</sup>と語っている。また、訳者の大作道子氏が後編

あとがきで、「苦しみを乗り越えるには時間がかかることを伝えるために、長い道のりを丁寧に追って書きあげた、作者ブラッドリーの誠実さも感じます」<sup>62)</sup>と述べているとおり、物語の魅力では前編には敵わないが、ブラッドリーのキャラクターへの真摯な姿勢はむしろ続編の方で発揮されているように思われる。

実の母を退け、前編の代理母役のスーザンを退け、続編の第二の代理母役のソールトン夫人を経て成り立つ母娘／代理母娘の関係性は、トライツが言及したように、それ自体が入れ子構造のような二重の母娘関係である。おそらく、エイダの受けた虐待の傷を癒すには、ブラッドリーが語るとおり時間のかかるプロセスが必要だったのであり、単純な母殺しでは成就できないのだろう。児童文学はそのとき、殺せない母に代わって、なお母たる存在を立てることで母性的力との折衝を学ばせ、娘のアイデンティティの形成を促してから、その関係性を本来の母へと引き継ぐのである。

## <注>

1. なお、ブラッドリーはアメリカ人であるが、イギリス児童文学と第二次大戦時の集団疎開の描かれ方については、川端有子：第二次世界大戦中のイギリスの集団学童疎開と児童文学への展開、日本女子大学大学院紀要、28、243-249（2022）を参照。
2. 入れ子構造に関しては、斎藤環も『母は娘の人生を支配する なぜ「母殺し」は難しいのか』（2008）の中で、川上未映子著『乳と卵』（2008）について言及しており、「言葉はまるで卵子のよう」であり、言葉は自分の身体から出てくるにもかかわらず、「当の身体には、つねにすでに言葉が棲みついて」（193）いると述べている。後に考察するように、夫人がエイダに辞書をプレゼントすることを考えても、言葉との関連が出現するのは非常に興味深い。
3. トライツの挙げている二作、『クローディアの秘密』と『わたしはアリラ』の主人公も12歳前後であることをトライツは指摘しているが、これを「受胎可能な身体になりかけたところ、物語の力を学ぶため、作品のなかで芸術性と母性が結びつく」（203）のだと述べている。だが、エイダやリジーが彼らのさらに年下であることも考えあわせ

れば、母を自ら退けようとする反抗心の生まれる思春期以前の主人公こそ、母との葛藤を別のかたちの母性（代理母）とともに調整したいという意識下の欲求があるのではないかと考える。

4. また、祖母－母－娘の三世代の関係性を扱った作品については、Crew H. S. : *Is It Really Mommie Dearest?: Daughter-Mother Narratives in Young Adult Fiction*, Maryland: Scarecrow Press (2000) の第 8 章でも参照。

#### <引用文献>

- 1) 主に、Trite, R. S. : *Waking Sleeping Beauty: Feminist Voices in Children's Novels*, Iowa: University of Iowa Press (1997) / トライツ, ロバータ・シーリンガー：ねむり姫がめざめるとき：フェミニズム理論で児童文学を読む, 織田まゆみほか訳, 阿吽社, 東京 (2002) ; Crew, H. S. : *Is It Really Mommie Dearest?: Daughter-Mother Narratives in Young Adult Fiction*, Maryland: Scarecrow Press, Inc., (2000) ; 母親像については, Farustino, L. R. & Coats, K. (ed.) : *Mothers in Children's and Young Adult Literature: From Eighteenth Century to Postfeminism*, Jackson: University Press of Mississippi (2016) の Introduction に先行研究がまとめられている。
- 2) キンバリー・ブルベイカー・ブラッドリー：わたしがいどんだ戦い 1940 年, 大作道子訳, 評論社, 東京 (2019)
- 3) Kimberly Brubaker Bradley : *The War I Finally Won*, New York: Dial Books (2017)
- 4) キンバリー・ブルベイカー・ブラッドリー：わたしがいどんだ戦い 1939 年, 大作道子訳, 評論社, 東京 (2017) / Kimberly Brubaker Bradley : *The War That Saved My Life*, New York: Dial Books (2015)
- 5) ウィルソン, ジャクリーン：リジーとひみつのティーパーティー, 尾高薫訳, 理論社, 東京 (2008)
- 6) Wilson, J. : *Lizzie Zipmouth*, London: Young Corgi Books (2000)
- 7) オリヴィエ, クリスティアース：母と娘の精神分析 イヴの娘たち, 大谷尚文・柏昌明訳, 法政大学出版局, 東京 (2003/1990) ; 斎藤環：母は娘の人生を支配する なぜ「母殺し」は難しいのか, NHK 出版, 東京 (2008) ; 斎藤環：母と娘はなぜこじれるのか, NHK 出版, 東京 (2014) ; 斎藤学：インナーマザーは支配する, 新講社, 東京 (1998) ; 信田さよ子：母が重くてたまらない－墓守娘の嘆き, 春秋社, 東京 (2008) ; 信田さよ子：母・娘・祖母が共存するために, 朝日新聞出版, 東京 (2017)
- 8) 前掲 7, 斎藤 (2008) 16
- 9) 同上, 33
- 10) 同上, 161
- 11) 前掲 9
- 12) エリアシェフ, キャロリーヌ／エニック, ナタリー：だから母と娘はむずかしい, 夏目幸子訳, 白水社, 東京 (2005)
- 13) 同上, 153
- 14) 同上, 175
- 15) 前掲 1, Trites (1997/2002)
- 16) カニグスバーク, E. L. : クローディアの秘密, 松永ふみ子訳, 岩波書店, 東京 (1969)
- 17) ハミルトン, ヴァージニア：わたしはアリラ, 掛川恭子訳, 岩波書店, 東京 (1985)
- 18) 前掲 15, Trites (1997) 119
- 19) 前掲 15, トライツ (2002) 205
- 20) 前掲 1, Crew (2000) 133
- 21) 前掲 12, 263
- 22) 前掲 7, 斎藤 (2014) 174-180
- 23) Joosen, V. : Second Childhoods and Intergenerational Dialogues: How Children's Literature Studies and Age Studies Can Supplement Each Other, *Children's Literature Association Quarterly*, 40, 2, 126-140, (2015) ; Joosen, V. : Age Studies and Children's Literature, Beauvais, C. & Nikolajeva, M. (ed.) *The Edinburgh Companion to Children's Literature*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 79-89 (2017) ; Joosen, V. : *Connecting Childhood and Old Age in Popular Media*, Mississippi: The University Press of Mississippi, (2018)
- 24) Harper, S. & Ruicheva, I. : Grandmothers as Replacement Parents and Partners: The Role of Grandmotherhood in Single Parent Families, *Journal of Intergenerational Relationships*, 8, 219-233, DOI: [10.1080/15350770.2010.498779](https://doi.org/10.1080/15350770.2010.498779) (2010)
- 25) 前掲 3, 1

- 26) 前掲 3, 11, 下線筆者(邦訳:「母さんとわたしに幸せな結末がありえたかどうか分からない。(略)でも, そうなると信じ抜くことはできなかった」15)
- 27) 同上
- 28) 前掲 3, 62/前掲 2, 73
- 29) 前掲 2, 78
- 30) 前掲 2, 79
- 31) 前掲 3, 69, 原文強調(邦訳:「ソールトン夫人はいい人じゃない。強烈な人だ。おせっかいだし, いつだって自分の思いどおりにする。(略)わたしの手術代をはらってくれた(略)でも, 喜べないものはしょうがない。」前掲 2, 82)
- 32) 前掲 2, 107/前掲 3, 90 原文イタリック
- 33) 前掲 2, 108
- 34) Coats, K. : *Looking Glasses and Neverlands: Lacan, Desire, and Subjectivity in Children's Literature*, Iowa City : University of Iowa Press (2004)
- 35) 前掲 3, 93 (邦訳:「ずっと昔にあればよかったです。今じゃもう, おそすぎます, 人形をもつのは」前掲 2, 110)
- 36) ド・ボーヴォワール, シモーム: 決定版 第二の性Ⅱ 体験, 中嶋公子・加藤康子監訳, 新潮社, 東京, 27-31 (1997/1949)
- 37) 同上, 27
- 38) 前掲 2, 126
- 39) 前掲 6, 20
- 40) Nayak, A. and Kehily, M. J. : *Gender, Youth & Culture: Global Masculinities & Femininities*, 2nd edition, Houndmills, Basingstoke, and Hampshire: Palgrave Macmillan, (2013)
- 41) 前掲 2, 142
- 42) Alston, A. : *The Family in English Children's Literature*, Abingdon and New York: Routledge, 79, (2008) 下線筆者
- 43) 同上
- 44) チョドロウ, ナンシー: 母親業の再生産: 性差別の心理・社会的基盤, 太塚光子・大内菅子訳, 新曜社, 東京 (1981/1978)
- 45) 前掲 2, 174
- 46) 前掲 3, 196
- 47) 前掲 2, 175
- 48) 同上, 214
- 49) 同上, 215
- 50) 同上, 392
- 51) 同上, 393
- 52) 同上, 406
- 53) 同上, 418
- 54) 同上, 422
- 55) 同上, 432
- 56) 同上, 201 (原文: "Take care of her for me.", 前掲 3, 171)
- 57) 同上, 344
- 58) 前掲 1, トライツ (2002), 205
- 59) 前掲 2, 445
- 60) Snyder, L. : 'The War I Finally Won' Tells One English Girl's Survival Story, Jan. 12, *The New York Times* <https://www.nytimes.com/2018/01/12/books/review/kimberly-brubaker-bradley-war-i-finally-won.html> (Accessed: 28 Oct., 2023) (2018)
- 61) Bradley, K. B. : Chronic PTSD, Ada, and Me, *One Blog Now*, Friday Jan. 8, <https://kimberly-brubaker-bradley.blogspot.com/2016/01/chronic-ptsd-ada-and-me.html> (Accessed: 28 Oct., 2023) (2016)
- 62) 前掲 2, 449

(指導教員: 川端有子教授)

# 壁土の練り置きが圧縮強度に与える影響

— 微生物の活動と壁土の関係 —

Effects of “Nerioki” on the Compressive Strength Characteristics of Wall Mud:  
The Relationship between Microorganism Activity and Wall Mud

齊 藤 美 月\* 江 尻 憲 泰\*\*

Mizuki SAITO

Norihiro EJIRI

**要 約** 本研究では土壁の製造工程である練り置きが強度に与える影響を明らかにすることを目的とし、練り置き長さ、その過程で行われる代謝が強度に与える影響を微生物の観点から分析した。荒壁用壁土を対象に、練り置きをしない試験体、4ヶ月間ひと月ごとに練り置いた試験体、藁無混入で練り混ぜ時と4ヶ月後の試験体計7条件用意し圧縮試験を行った。また、藁、土をそれぞれ滅菌処理し練り置きに影響が出るか検証した。練り置き期間の長さで比較すると、練り置くほど藁が分解され繊維状になり、乾燥収縮によるひび割れが減少した。また、1ヶ月練り置きと4ヶ月練り置きを比較すると圧縮応力度が2倍近く上昇するというデータが得られた。無菌操作を行った試験体では、藁を滅菌した試験体では代謝が行われず土壌を滅菌した試験体で代謝がみられた。これにより土壌中の微生物などが代謝を行っていることが判明し、土壁の強度に影響を与えていると推測される。

**キーワード**：土壁、圧縮強度、練り置き、代謝、無菌試験

**Abstract** The purpose of this study was to ascertain the effects of kneading in water and straw (means “Nerioki”) on the strength of mud walls and to analyze the effects of intervals when water and straw were kneaded in and the effects of microorganism metabolism during “Nerioki” on strength. Compression tests were conducted under the following conditions: no kneading in of water and straw, kneading in water and straw every month for 4 months, kneading in water but not straw, and kneading in of water but not straw after 4 months. Straw and soil were sterilized to see if they affected the “Nerioki”. The longer the interval of “Nerioki”, the more the straw decomposed and became fibrous and the less cracking that occurred due to drying shrinkage. When “Nerioki” was compared at 1 and 4 months, compressive stress increased nearly two-fold. Metabolism was observed in the sterile specimens but not in the specimens with sterilized straw. This indicates metabolism by the microorganisms in the soil, and this presumably affected the strength of the mud wall.

**Key words** : Mud wall, Compressive strength, Kneading and Placing, Metabolic, Asepsis test

## 1. はじめに

土壁は日本の伝統的な工法であり寺院建築から茶室建築、一般住宅にまで普及した。近年ではサステナブルな建材として再注目され平成15年の国土交通省告示第1543号の改正によって壁倍率が見直されるなど建築法規上の評価も徐々に向上している。

---

\* 家政学研究科住居学専攻  
Graduate School of Home Economics,  
Division of Housing and Architecture  
\*\* 住居学科  
Department of Housing and Architecture

壁土の強度を増加させる工程として土壁の材料である、土・藁・水を混ぜ合わせ定期的に繰り返す「練り置き」が広く知られており、職人は練り置きで起こる材料変化を「発酵」と呼ぶ。ただ、ここでの発酵は微生物が藁を分解することを意味し、生化学でいう発酵とは意味合いが異なるため本論文では「代謝」と呼ぶことにする。土壁は構造特性や材料特性、機能に関して様々な観点から研究がなされているが、練り置きによる代謝の原理がどのように強度に影響を与えているかを明らかにしている論文は無い。

本論文では荒壁土において練り置きが材料変化と壁強度に与える力学的特性を明らかにするとともに、練り置きの過程による材料変化を微生物の観点から分析することを目的とする。

## 2. 既往研究

平野ら<sup>1)</sup>は壁土の練り置き期間に生じる変化が材料特性に与える影響について実験的研究を行い、練り置くほど土が変色し、また、藁は分解され繊維状に変化したと報告している。また圧縮強度は練り置き3～11週に比べ34週練り置くと約3倍に強度が増加したと報告している。含水率と強度の関係について、含水率は圧縮強度に影響し含水率が低いほど強度は増加するが、その程度は藁さの有無、練り置き期間によって異なると報告している。

宇都宮ら<sup>2)</sup>は藁スサを混合した壁土の力学的性質に関する実験研究を行い、土質力学に基づいて、一軸圧縮試験結果により粘着力、せん断抵抗角を求め、壁土のせん断強度を求めることが可能であると報告している。また、藁スサの混合は、藁スサが空洞状になっていることから壁土内部の隙間が増加し、藁スサ混合量を一定量以上とすると、粘着力、せん断抵抗角および強度特性の各性能は低下し、変形性能は藁スサの繊維補強効果によって向上すると報告している。

濱崎ら<sup>3)</sup>は土壁の強度に関する研究として各条件で圧縮試験を行い、土の産地によって性能に大きな差が見られること、藁スサの量と長さは壁土の強度や靱性に影響する、練り置きを行うと強度は増すがより脆性的に破壊する、砂の量が多くなるほど強度や剛性が上昇するとは限らない、古土を混ぜることで強度は多少増加するが、含まれる砂の影響などさらに実験を重ねる必要があると報告している。

既往研究には、練り置きに関する研究論文はあるが代謝の原理による壁土の性能を微生物の観点から明確に検証しているものは無い。

## 3. 実験概要

本研究では藁の役割と練り置きにおける強度特性を明らかにするために練り置き・無菌実験・菌の培養といった3つの実験を行った。

### 3.1 壁土の練り置き期間が強度に与える影響

#### 3.1.1 目的

練り置きの長さが土壁の強度に与える影響を明らかにすることを目的とし、練り置き長さを変化させ圧縮実験を行った。また、藁がどのような役割を果たしているかを明らかにするために藁の有無による練り置きの実験も行った。

#### 3.1.2 使用材料

荒壁用壁土には土塗壁技術解説書<sup>4)</sup>(以下技術解説書)に記載されている粘性の高い川越産の荒木田土を園芸店で購入し使用した。荒木田土は10mmふるいに通し枝や草などの不純物のある程度取り除いてから、残留分の大きな粘土塊を潰しふるい通過分を荒壁用壁土とした。

静岡県三島市産の藁を5cm～6cm程度にカットし用いた。また、壁土に混ぜ合わせる際に茎と稲穂の部位に偏りが出ないように混ぜ合わせてから用いた。

練り混ぜ用の水は水道水を用いた。

#### 3.1.3 配合

試験体の各条件をTable 1に示す。荒木田土と藁の配合率は技術解説書に則り、土100Lに対し藁材0.6kgの割合で配合した。練り置き無し、練り置き1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月、4ヶ月の試験体を用意し、

Table 1 Conditions for the composition of each specimen

	練り置き 条件	試験 体数(個)	土(L)	藁(g)
N1	1ヶ月	3	12	72
N2	2ヶ月	3	12	72
N3	3ヶ月	3	12	72
N4	4ヶ月	3	18	108
N5	毎月藁追加	3	18	432
N6	0ヶ月	2	12	72
N7	藁無4ヶ月	2	5	



さらに藁材を混合せず原土のみを4ヶ月練り置いたものと、1ヶ月ごとに藁材を投入した試験体を用意しN1～N7とした。試験体はプラ舟で作成し、土壌表面にうすく水が張る程度として湿潤状態を保つようにした。

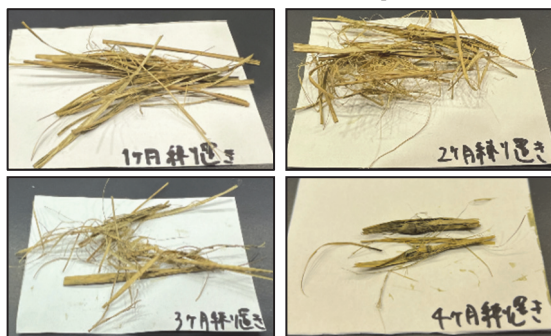
### 3.1.4 土の養生

強度試験を行う時期を合わせるために逆算して練り置きを開始し、週に一度程度練り返しを行い経過観察を行った。土（試験体）の養生として初めの1か月間は室外の屋根のない場所でプラ舟（建設現場で使われる大きな容器）にブルーシートをかけて保管していたが、ブルーシートをかけていても雨水が入り込んだため2か月目から半屋内に移動させ、乾燥しないようにブルーシートをかけて保管した。そのためN4とN5の試験体には雨水が混入した。

### 3.1.5 練り置き

藁を混合した試験体は1ヶ月を過ぎるとかき混ぜた際に中の土が灰色に変色し代謝がおこなわれる様子がみられ泥臭いにおいを発した。練り置き期間が長くなるにつれて藁が細かく分解され繊維質になり、N4の試験体では藁がほぼ分解され、節の部分のみが残っているものがほとんどであった（Fig.1）。一方で藁を混合していないN7試験体は4ヶ月後も灰色に変色する様子は見られなかった。

Fig.1 Straw being decomposed

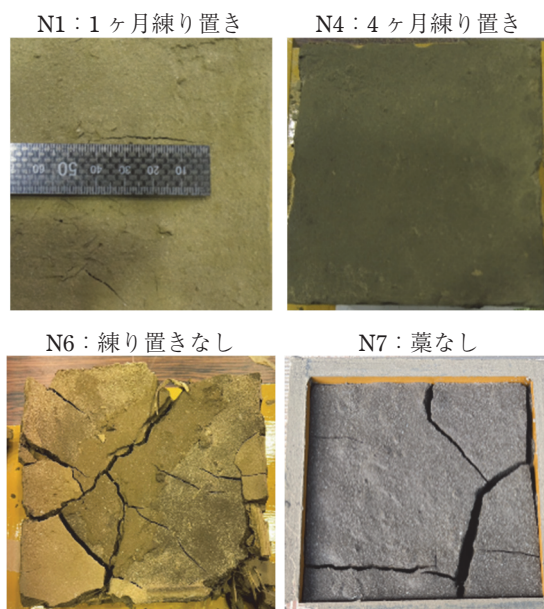


### 3.1.6 乾燥状態

1ヶ月練り置きから4ヶ月練り置きの試験体の乾燥状態を比較すると、乾燥収縮によるひび割れが最も多かったのがN1の1ヶ月練り置き試験体であり、細かいひび割れが全体的に生じていた。また、練り置き期間が長くなるにつれてひび割れは減少し、N4の4ヶ月練り置き試験体では全くひび割れが生じていなかった。一方で毎月藁を追加したN5試験

体ではN1よりも多くひび割れが生じていた。またN6の練り置きを行わなかった試験体、N7の藁無し試験体では試験体が大きく割れた。Fig.2に乾燥後の様子を示す。

Fig.2 Desiccation



### 3.1.7 実験方法

コンパネ合板で150 mm×150 mm×70 mmの木枠容器を作成し（Fig.3）そこに壁土を流し入れ試験体を乾燥させた。圧縮部分に凹凸が目立ち傾きも見られたため圧縮両端をモルタルで固めて圧縮させることとした。

加力は1000 kN 万能試験機（島津製作所）を用いて3 mm/分の加力速度で単調加力し変位が30 mmになったところで加力をストップした（Fig.4）。N6、

Fig.3 Formwork drawing

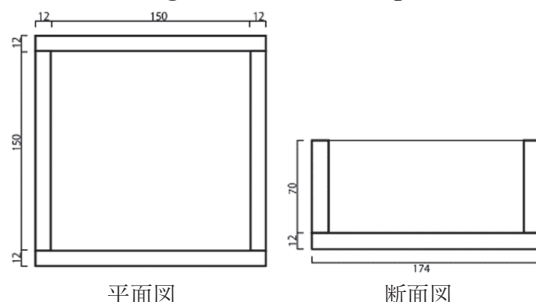


Fig.4 Testing method

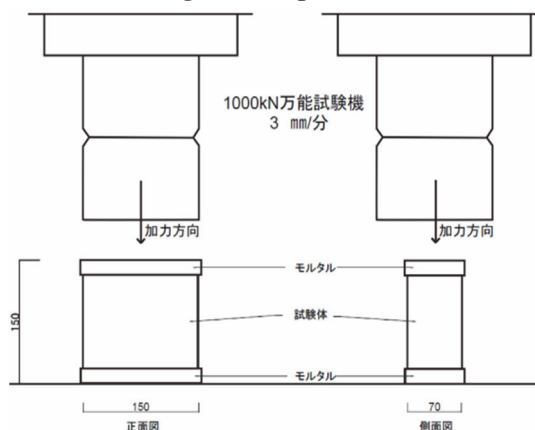


Table 2 Mean maximum compressive stress

N1	1.14
N2	1.30
N3	1.84
N4	2.12
N5	0.66

N7 に関してはひび割れが著しく加力時に試験体としての形を保つことができなかったため強度の参考にはしない。

### 3.1.8 実験結果

圧縮試験結果を Table 2, Fig.5 に示す。

圧縮応力度は以下の式より算出した。

$$\text{圧縮応力度(N/mm}^2\text{)} = \text{圧縮荷重(N)} / \text{断面積(mm}^2\text{)}$$

実験で得られた荷重—変位曲線には多くの場合初期のガタが含まれているため、Fig.5 のグラフは、技術解説書<sup>4)</sup>に則り圧縮応力度が 0.025 N/mm<sup>2</sup>、ひずみ 0.005 を通るように曲線を平行移動させている。

3 ヶ月練り置きを境に強度が増加し、練り置きが進むにつれて最大圧縮応力度が増加していることが分かる。N1 と N4 を比較すると 2 倍近く強度が増加した。また、N5 が最も靱性的な破壊となっているが強度は著しく低下している。

N1, N2, N3, N5 は加力するにつれて表面の土がバラバラと細かく剥がれ落ちる様子がみられた。また、ひび割れしている部分やワラ材が突出している部分から破壊がおこなわれていた。さらに N1, N2, N5 は土が小さな塊で崩れるのに対し、N3 や N4 では脆性破壊で比較的大きな塊で崩れていた。

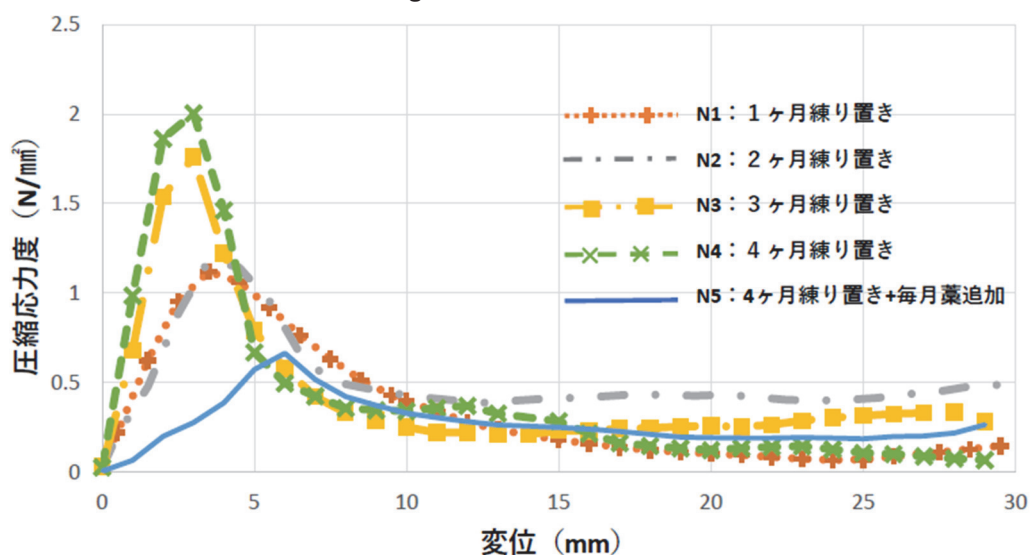
### 3.1.9 まとめ

異なる練り置き期間の長さや藁の有無を比較し以下のことが得られた。

- ・練り置き期間が長くなるほどひび割れが減少し強度が増加する
- ・藁はひび割れの抑制、つなぎの役割を果たし靱性を高める

以上により練り置くほど強度が増加することから練り置き過程で材料に何かしらの変化が起きていることが分かる。

Fig. 5 Stress-strain curve



## 3.2 無菌操作が材料変化に及ぼす影響

### 3.2.1 目的

菌が土壁に与える影響を明らかにすることを目的に各材料を滅菌したのちに練り置き、材料変化を観察する。

納豆を作る際の伝統的な手法として煮沸した稲わらに煮た大豆を包んで粉状の枯草菌をまぶし発酵させる手法があるが、土に藁を入れて製作する土壁でも同様の原理が適用されていると予想する。納豆は芽胞の、乾燥状態や真空状態、 $-100^{\circ}\text{C}\sim+100^{\circ}\text{C}$ の環境にも耐えることができるという性質を利用した作り方である。煮沸することで枯草菌以外の雑菌が死滅し納豆が作られる。一方で枯草菌全てが納豆に適している訳ではなく、枯草菌の種類によって「粘り具合」や「味」、「におい」に違いが現れ、納豆の風味に大きな影響を与える<sup>5)</sup>。そこで枯草菌によって納豆の美味しさを左右するように、土壁でも同様に菌によって強度や粘りに影響するのではないかと考えた。

### 3.2.2 実験方法

土、藁それぞれを滅菌し3週間ほど練り置き菌の働きを観察した。滅菌条件を Table 3 に示す。

使用材料は練り置き実験時と同様の産地の材料を使用した。

予めコンパネ合板で作成した  $150\text{mm}\times 150\text{mm}\times 100\text{mm}$  の木枠容器に滅菌する材料を入れ練り置き前と同様の状態にした後、アルミホイルで蓋をしてから滅菌操作を行った。滅菌操作には高圧蒸気滅菌（平山製作所製 HL-42）を用いて  $121^{\circ}\text{C}$  で 20 分間滅菌を行った (Fig.6)。なお本研究では傾向を確認する目的のため、完全な密閉状態とはしていない。

Table 3 Sterile conditions for each specimen

滅菌操作の有無	藁	土	水	木枠容器
N1：完全滅菌	○	○	○	○
N2：土滅菌	×	○	○	○
N3：藁滅菌	○	×	×	×
N4：滅菌無し	×	×	×	×

○：滅菌操作あり    ×：滅菌操作なし

### 3.2.3 かき混ぜ

週に一度、菌が侵入しないよう安全キャビネット内でかき混ぜをおこなった (Fig.7)。安全キャビネットは排気を滅菌するだけでなく、吸気も滅菌

フィルター（HEPA フィルター）を通してている。

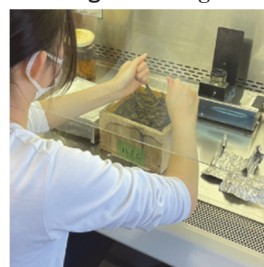
まず安全キャビネット内と安全キャビネット内に入れるもの全てをアルコール消毒し試験体を安全キャビネット内に入れた。試験体は空気中の菌が入らないよう、必ず安全キャビネット内でアルミホイルの蓋を外すようにした。かき混ぜにはオートクレーブ（高圧蒸気滅菌のこと）をした葉さじを用いて慎重にかき混ぜた。かき混ぜ後はもう一度アルミホイルの蓋を被せかき混ぜ作業を終了した。これを週に一度繰り返し3週間ほど練り置いた。

試験体は室内で保管しその後乾燥させた。

Fig.6 Autoclave



Fig.7 Mixing



### 3.2.4 練り置き結果

3 週間の練り置きを通して、代謝が行われた試験体と代謝が行われなかった試験体とで差が現れた。土壌を滅菌した試験体では代謝が行われず、藁を滅菌した試験体で代謝が行われた。納豆の製造原理により、当初は藁に付着している枯草菌が優位に働くことで N2 の試験体で代謝が行われると考えていたが、今回の練り置きでは代謝というのは土壌中の微生物などが働き藁を分解し代謝が行われていることが分かった。さらに練り置き2週間目から土が灰色に変色する様子がみられ、2週間以上は練り置くべきだと考える。一方でこの土の変色が枯草菌によるものかあるいは土壌中の微生物によるものなのか、どの過程で変色が起こるのかは特定できていない。よって今後の研究では菌の同定試験や厳密な無菌状態での実験を行う必要がある。

また、練り置き過程で糸状菌という糸状のカビが発生した (Fig.8)。発酵と糸状菌の有無を Table 4 に表す。全ての試験体で糸状菌の繁殖はみられたが、特に N3 と N4 の試験体で顕著にみられた。糸状菌というのは土壌中に多く存在するとされていることから、土壌を滅菌しなかった試験体で糸状菌の繁殖が多く見られたのは外部から侵入する糸状菌よりも



土壌中に存在する糸状菌の方が圧倒的に多いからだと考えられる。藁材の断面から繁殖した糸状菌 (Fig.9) は栄養分である有機物 (藁) が豊富にあったため太くしっかりとした糸状菌が繁殖したのだと考える。

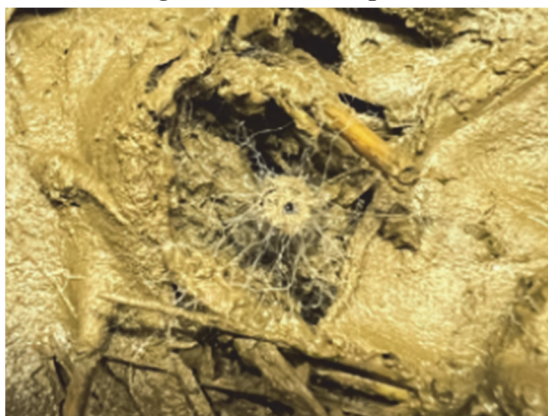
**Table 4** Presence of filamentous fungi and fermentation

	N1	N2	N3	N4
発酵	×	×	○	○
糸状菌	○	○	○	○

**Fig.8** Filamentous fungus 1



**Fig.9** Filamentous fungus 2



### 3.2.5 練り置き考察

これまで行った実験より現時点での考察を以下にまとめる。練り置きの実験で藁材の変化について考察したが、練り置くにつれて藁材の繊維がほぐれて練り置き4ヶ月の時点で藁材の節の部分しか残っていなかったことから藁材が分解されていることは明白である。藁材が何によって分解されているのだが、

枯草菌や土壌中の微生物によって分解されていると考察した。

藁はセルロース (植物の細胞壁および繊維の主成分) やリグニンで構成されており、枯草菌が付着している。枯草菌はセルラーゼ (セルロース分解酵素) を持っている。また、土壌中にはリグニン分解酵素を持つ白色腐朽菌とセルロースを分解する褐色腐朽菌が存在する。藁を土と水に混ぜた時、枯草菌の繁殖条件を満たすことから枯草菌が繁殖し、さらに土壌中に存在する白色腐朽菌によって藁材が分解されているのではないかと<sup>6)7)8)</sup>。一方で発酵による土の色の変化は見られたものの、それが直接強度に影響を与えるかはまだ判明していないため研究を進める必要がある。

さらに納豆菌の既往研究によると<sup>9)</sup> 納豆の粘質物の主成分である $\gamma$ -ポリグルタミン酸は納豆の発酵後期の枯草菌の増殖が止まった定常期に合成が開始されることを報告している。よって練り置きの実験で4ヶ月練り置いた試験体で藁がほとんど分解されていたことから、枯草菌の増殖が止まり $\gamma$ -ポリグルタミン酸の合成が開始され粘りが出ているのではないかと予想する。

### 3.2.6 まとめ

土壌を滅菌した試験体では代謝が行われず藁を滅菌した試験体で代謝が行われたことから、主に土壌中の微生物が代謝を行っていることが分かった。また、練り置きの過程で働く微生物が変化し強度に影響を与えている微生物が存在していると推測する。

## 3.3 各地域の土壌中の菌の培養実験

### 3.3.1 目的

既往研究によると土の種類によって粒度分布が異なることから土によって強度が変化することが指摘されている。地域によって土壌中の菌が変化している可能性があることから、本研究では埼玉・新潟 (長岡)・愛知 (小牧) の土壌を採取し、寒天培地 (以下培地) に菌を培養させることで地域の菌の違いを分析する。

### 3.3.2 使用材料

使用材料を Table 5 に示す。荒木田土は練り置き実験の土と同様の土を使用した。小牧の土はヒアリングを行った京都の左官職人が使用している土として愛知県小牧市の土を用いた。長岡の土に関しては土壌を採取してから実験をおこなうまで時間があつ

たため冷凍保存をし、使用する際に解凍をして土壌サンプルとした。

**Table 5** Soil quantity at each site

地域	重量 (g)
A: 埼玉 (荒木田土)	0.024
B: 長岡	0.034
C: 小牧	0.021

### 3.3.3 実験方法

細菌を優先的に生やす LB 培地と真菌用の Czapek-Dox 培地 (以下 CD 培地) を用意した。

(1) サンプルのプレート塗布

各材料の実験条件を Table 6 に示す。

土壌サンプルを 0.01 g-0.03 g 程度秤量し、これを 5 mL のイオン交換水を入れて滅菌した試験管に加え、激しくボルテックスした。安全キャビネット内でこれをろ過したのちにろ液 100  $\mu$ L をマイクロチューブにとり、滅菌イオン交換水 900  $\mu$ L 加え転倒混和した。これを 2 回繰り返し、等倍・10 倍希釈・100 倍希釈サンプルを作成した。寒天培地に作成した希釈サンプルをそれぞれ塗布し、数日間観察した。LB 培地・CD 培地それぞれ 3 種類の希釈サンプルを 2 枚ずつ、計 36 試験体を作成した。

**Table 6** Test conditions

地域	培地/希釈	試験体数
A: 埼玉	LB, CD	各 2
	等倍, 10 倍, 100 倍	
B: 長岡	LB, CD	各 2
	等倍, 10 倍, 100 倍	
C: 小牧	LB, CD	各 2
	等倍, 10 倍, 100 倍	

### 3.3.4 結果

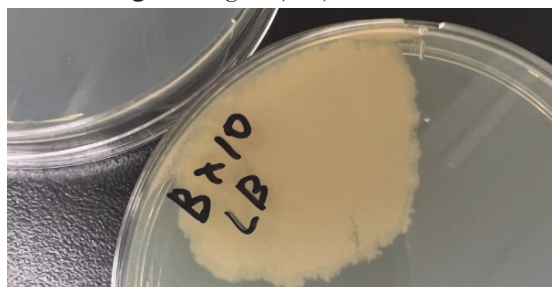
サンプル塗布から 95 時間後の培地の様子を Fig.10 に示す。地域によって大きく異なる結果が得られた。顕著にコロニー (同一種の生物が形成する集団) が見られたのは A: 荒木田土であり、次いで B: 長岡の土、C: 小牧の土壌に至ってはほとんどコロニーは見られなかった。サンプル塗布から 95 時間後のコロニー様子を Fig.11~Fig.13 に示す。培地には色や形状の異なるコロニーが存在しているこ

とから土壌中には様々な微生物が存在していることが分かった。なお、土壌中全ての微生物が培地に現れるわけではなく繁殖力の強い微生物やたまたまそこに存在していた微生物もコロニーとして現れている可能性があり、培地に現れなかった微生物も土壌中に存在していると考えられる。また、見た目だけでは微生物を同定することは不可能である。

**Fig.11** Tokyo, LB



**Fig.12** Nagaoka, LB, 1:10 dilution

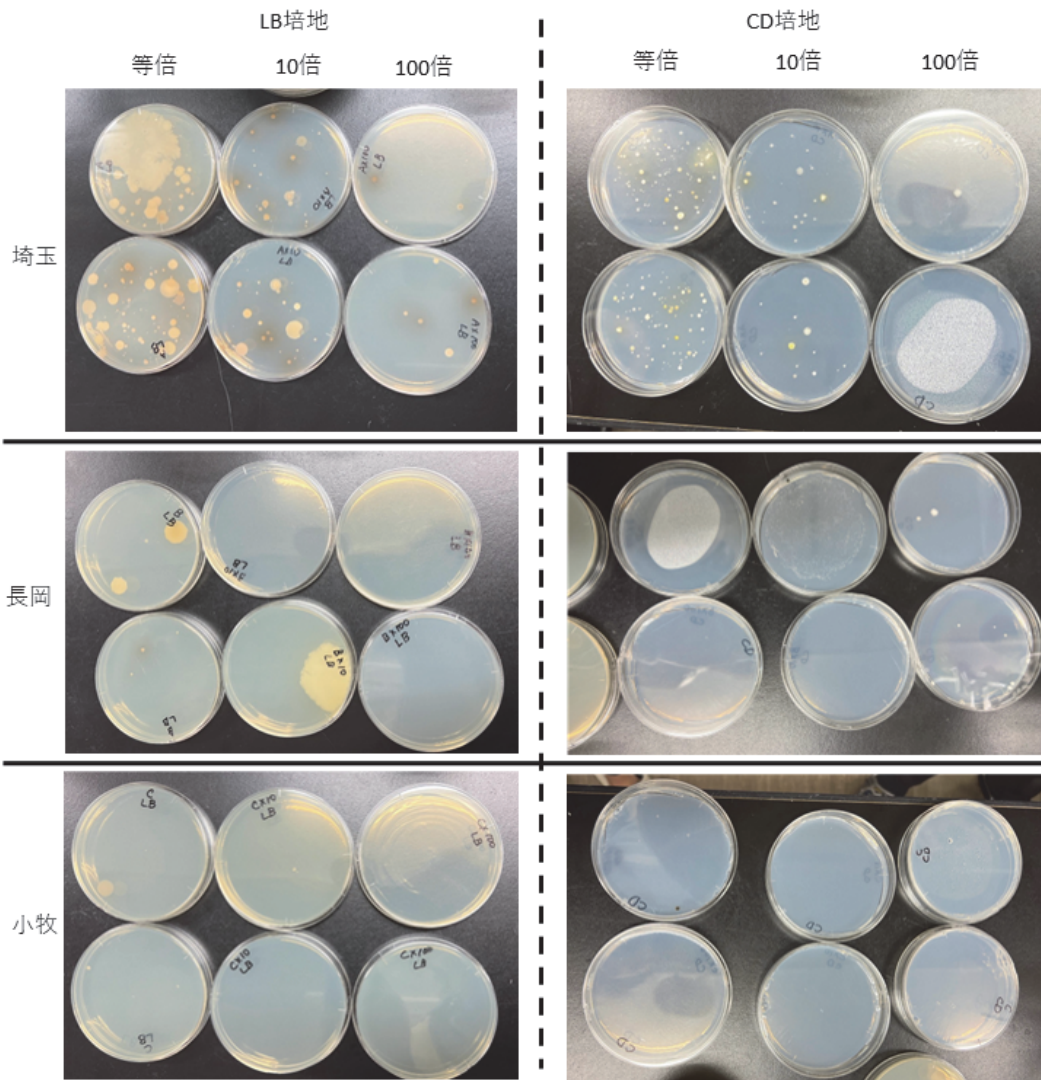


**Fig.13** Komaki, CD





Fig.10 Comparison of colonies



### 3.3.5 考察

長岡と小牧ではほとんどコロニーが見られなかったことから、貧栄養の土壌であると考えられる。練り置きに関して微生物が関わっていることから、地域別の練り置きによる強度を検証した場合、最もコロニーが出現した荒木田土が高い強度になるのではないかと予想する。一方で既往研究<sup>3)</sup>より京都の土で最も高い強度が得られたことから、微生物だけではなく土そのものが強度に影響を与えている可能性もある。

### 4. まとめ

土を無菌にして3週間練り置くと代謝が行われず、菌を無菌にすると代謝が進んだことから、微生物が練り置き土の変化（代謝）に携わっていることが分かった。また、練り置き実験結果より、文献<sup>10)</sup>に記載されていた、寝かす（養生期間が長い）ほど強い壁ができるという職人の経験は理にかなっていることが分かった。

代謝では枯草菌の働きによって納豆の粘質物の主成分である $\gamma$ -ポリグルタミン酸が合成され粘りが

出たと推測し練り置きの時期によって異なる微生物が働いていると考えられる。さらに土の産地によって微生物の数が増えることから微生物だけでなく土によっても強度が増えると推測する。

## 5. おわりに

今回の研究により種類の特定にまでは至らなかったが、微生物の影響が大きいことが明らかになった。

発酵は日本独自の発達を遂げ、味噌や酒、納豆など馴染み深いものに利用されているが、似た文化が建築にも活用されていたことが分かった。サステナブルな建材として再注目されている土壁を微生物の観点から解析し、十分な強度が得られることと昔の職人達の勘と経験を数値化したことで地球環境に優しいだけでなく、構造物としての活用の可能性を再認識した。今後より詳細な研究を重ねることで微生物の特性を明らかにし、微生物を建築で利用する可能性が広がることを期待する。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、実験において多大なご協力賜りました本学理学部の菅野靖史教授、長岡技術科学大学の小笠原渉教授・中村彰宏助教授、左官職人の浅原一郎氏、また参考論文の提供をしていただいた文化庁の西岡聡氏に心より感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 平野陽子, 有馬孝禮, 信田聡: 壁土の練り置き期間に生じる変化が材料特性に与える影響, 日

本建築仕上学会論文報告集・第 10 巻, 第 1 号 (2003)

- 2) 宇都宮直樹, 松島学: 藁スサを混合した壁土の力学的性質に関する実験的研究, 日本建築学会構造計系論文集第 75 巻第 649 号, pp593-599, (2010.3)
- 3) 濱崎信子, 三芳紀美子, 大橋好光: 土壁の強度試験に関する研究その 3 壁土圧縮試験, 日本建築学会大会学術講演梗概集, (2004.8)
- 4) 土塗壁等告示に係る技術解説書作成編集委員会: 土塗壁・面格子壁・落とし込み板壁の壁倍率に係る技術解説書, (財) 日本住宅・木材技術センター発行, p20, (2004.2)
- 5) 小泉武夫: 納豆菌とは, みんなの発酵 BLEND, [https://www.hakko-blend.com/study/b\\_05.html](https://www.hakko-blend.com/study/b_05.html) (2023.10.24 閲覧)
- 6) 農芸化学に学ぶ ーくらしにいきるバイオサイエンス・バイオテクノロジー: フェニルプロパノイドの機能(1), 日本農芸化学会, (2006)
- 7) 研究.net: 研究用語辞典セルロース, <http://www.kenq.net/dic/56.html> (2023.10.24 閲覧)
- 8) ULTRABEM-MADE BY DOCTORS: フェノール性高分子化合物 リグニン: 構造と特徴, [http://ultrabem.com/other\\_metabolites/aromatic/lignin](http://ultrabem.com/other_metabolites/aromatic/lignin) (2023.10.24 閲覧)
- 9) 木村啓太郎: 納豆菌の粘質物生産機構, 微生物利用研究領域 発酵細菌ユニット, 食糧その科学と技術 No.45, p61 (2007)
- 10) 西岡常一, 高田好胤・青山茂: 蘇る薬師寺西塔, 株式会社草思社, pp.139-141 (1981)





# 近代パリにおける都市景観概念の形成

— パリの都市改造と印象派絵画の分析を通して —

Creation of the Concept of the Urban Landscape in Modern Paris:  
Through the Urban Remodeling of Paris and an Analysis of Impressionist Paintings

櫻井 更紗\* 片山 伸也\*\*  
Sarasa SAKURAI Shinya KATAYAMA

**要約** 19世紀の第二帝政期にオスマンが行ったパリ大改造はその後の近代都市計画のモデルとなった一方、歴史的既存市街地の破壊行為でもあったことからその功罪が指摘されている。同時代のパリ市民による新しい都市空間に対する評価も未だ定まっていなかった。本稿ではパリの都市風景を描いた印象派以降の画家（ピサロ、カイユボット、ユトリロ）に着目し、作品に現れるパリの都市風景の視点と当時のパリの人々がどのように作品を受け止めたのかについて考察した。都市整備事業により成立した近代的な都市風景は、それまで自然風景を描いていた画家らにとっても作品の題材となり、印象派画家によって広く描かれるようになっていった。パリの都市風景が絵画作品として描かれたことは、パリの近代的都市空間が人々に日常的な生活環境として感受され、人々の中で都市景観という概念が形成されていく過程に貢献したと考えられる。

**キーワード**：パリ、近代化、都市景観、風景画、印象派

**Abstract** Haussmann's major renovation of Paris during the Second Empire in the 19<sup>th</sup> century became a model for subsequent modern urban planning, but it also destroyed historic existing city blocks. Therefore, the renovation had merits and demerits. This study focuses on the Impressionists and later painters (Pissarro, Caillebotte, and Utrillo) who depicted Urban Landscape of Paris. This work examines how Urban Landscape of Paris appear in their works and how the Parisians of the era perceived their works. Modern Urban Landscape created by urban development projects became the subject matter for painters who had previously painted natural landscapes and were widely depicted by Impressionist painters. The modern urban area of Paris was considered to be an ordinary living environment by people, and the concept of the Urban Landscape was created in their minds. The pictorial depiction of the Parisian Urban Landscape must have contributed to this process.

**Key words** : Paris, Modernization, Urban Landscape, Landscape painting, Impressionist

## 1. はじめに

フランスでは古くから都市整備が行われており、首都パリは中世以降度重なる勅令や都市条例により形成されてきた、統一的な街並みが印象的な都市である。特に19世紀第二帝政期のナポレオン3世治下、セヌ県知事ジョルジュ・オスマンが行ったパリ大改造は代表的な都市整備事業で、近代都市計画

のモデルとなり、他国へも多大な影響を与えることとなった。劣悪な生活環境であったパリの街を生まれ変わらせることとなった整備事業であったが、その一方で既存路地の取り壊しをはじめとした大規模な都市改造を行い、中世来の都市組織が破壊されたといった批判も少なくない。

近代パリの都市整備については、功罪が指摘されている一方で、同時代のパリ市民からどのように評

価されていたのか、あるいは近代の都市空間がどのように認識されていたのかは定かではない。

19世紀中頃の近代化が進むパリでは、様々な画家によって都市の風景画が描かれていた。風景画は描かれた当時の都市の様子を後世に伝え、市民の景観認識の理解に有効な手段の一つであると考え、風景画の題材が自然風景から都市の街並みへと広がったことを念頭に、絵画作品の傾向やその評価から推測できる当時のパリの人々の都市景観への認識について考察した。また考察に際して、当時の風景画家の作品や近代以降のパリに関連する絵画の文献資料、及び19世紀後半に台頭する印象派画家らの作品の分析を行った。

## 2. オスマンによるパリの都市改造と評価

ナポレオン3世が即位した19世紀半ばの第二帝政期には、パリの人口は100万人を超えており、当時100万人を超えている都市はロンドンとパリの2都市のみであった。公共衛生は、人口増加の著しいパリにおいて緊急性が最も高い問題となっており、ナポレオン3世統治開始時は道路の中央部を生活排水が流れ、街角には汚物の山が作られていたという。また中世以来の城塞都市となっていたパリの街の街路空間は狭く、建物が密集し採光・通風は望めず、犯罪も多数発生していた<sup>1)</sup>。

ナポレオン3世は1853年、当時ジロンド県知事であったオスマンをセーヌ県知事に任命し、以後「パリ大改造」と呼ばれる都市整備事業に着手する。その主要事業は(1)大通りの新設を軸とする道路網の整備、(2)公園・広場の造成と整備、(3)建造物の修復・建設、(4)上・下水道の整備と拡張、(5)街灯の新設に大きく分類される<sup>2)</sup>。これらは先述した人口増加による公共衛生問題をはじめ、スラム化した都市空間の一掃等を目的として行われたといえる。

オスマンの都市整備事業後のパリについて、文筆家らは、作品の中で様々な描写を行っている。詩人であるシャルル・ボードレールは『悪の華』の中で、パリの都市が近代的に変貌していく速さに心が追いついていかない様を嘆いている。また作家マクシム・デュ・カン『文学的回想』の中で、都市改造の進む1865年頃にボン・ヌフからの都市の光景を観察した際のことを記述しており、パリが精密に制御された特別な器官によって動いている巨大な生命

体のように感じられたと告白している<sup>3)</sup>。オスマンの都市整備事業によって旧来の街路空間の破壊をはじめとした大規模な改造が行われ、パリの都市の姿が大きく近代化していくことに対し戸惑いを覚えながらも、その様子や感情を文章として記述している。

## 3. 19世紀のフランスの風景画

### (1) 当時の風景画の位置づけ

19世紀のフランスでは、王立美術アカデミーが権威を持っており、国家主催の大規模公募展(以下サロン)もアカデミズムに沿って行われていた。王立美術アカデミーは絵画・彫刻の振興を目的として1648年に設立された組織であり、当初は歴史画を頂点として肖像画・静物画・風俗画を下位に置く絵画の序列化も進められていた。1816年、アカデミーはローマ大賞の新部門として歴史的風景画を制定し<sup>4)</sup>、1817年の第1回ローマ大賞に輝いたのは風景画家アシル＝エトナ・ミシャロンの作品であった。

1821年頃にはフランスで風景画の人気の高まっており、主に理想化された現実風景を描く新古典主義派による風景画、そして北欧を中心とした現実の自然や建築物、農民の姿を描く風景画の2つの流派に分かれていた。しかし、イギリス人画家のジョン・コンスタブルとJ.M.W.ターナーによる作品は、19世紀初頭にフランスの風景画家たちに大きな影響を与え、その影響で1850年頃から写実主義が流行し始め、新古典主義の人気の失われていくこととなった<sup>5)</sup>。

### (2) 写実主義、外光派の台頭

19世紀のフランスではアトリエに籠らず、日光や外気によって変化する自然の風景を描こうと試みた外光派と呼ばれる流派が登場する。彼らは理想化された風景を描く歴史的風景画ではなく、特定の場所を写實的に描く風景画を目指した。その中でもフォンテーヌブローの森に隣接するバルビゾン村で活動を始めた画家たちを総称してバルビゾン派と呼び、ルソーやカミーユ・コロー、ジャン＝フランソワ・ミレーなどがこの流派にあたる。彼らの作品はアカデミーの定めるアカデミズムの規範から逸脱していたため当初は売れなかったが、新興の中小ブルジョワジーを中心として徐々に顧客を増やした。それまで美術品を購入する客層は主に貴族などの富裕

層であったが、新たな客層に合わせニュートラルな画題が着目され始めた<sup>4)</sup>。

この頃のフランスでは、それまで理想化された風景を描く風潮であったものから現実の風景を題材として描く風潮へと変化していったことがわかる。また、絵画の題材が理想化された非現実の風景から現実にある風景、身近にある風景といった身近な層に向けたものへと変化したことで、外光派のような流派の作品が支持を集めることにつながったことも推測できる。

#### 4. 印象派絵画作品の分析

##### (1) 印象派と分析内容の概要

印象派は、サロンの審査基準や制度に疑問を持った画家たちが集まり、独自の展覧会を開いたことから始まった。印象派展は1874年から1886年まで計8回開催され、印象派の先駆となったエドゥアール・マネは1860年代にいち早くアカデミズムに対抗する作品《草上の昼食》を発表した。この作品は当時風紀に反すると糾弾されたが、主題への禁忌を無くし自由なテーマを描く姿勢は印象派の画家達に衝撃を与えた<sup>4)</sup>。

印象派による風景画から19世紀当時のパリの人々の景観に対する認識について調査するために、印象派展全8回全てに参加したカミーユ・ピサロ、第二帝政期にパリ市内で生活しながら人々の暮らしに焦点を当て風景画を描いたギュスターヴ・カイユボット、1920年代のエコール・ド・パリ期と呼ばれる時代に活躍した風景画家モーリス・ユトリロの3名に着目して分析を行った。

##### (2) ピサロの描いた風景画

クリストファー・ロイド著『ピサロ』<sup>6)</sup>に掲載されているピサロの作品について分析を行った。

1860～1880年代にかけてパリを描いた作品は分析対象とした48作品中1879年に描かれた《外環状道路、雪》の1作品のみで、他は主にパリ郊外、及び自然風景が題材となっていた。ピサロは1855年にフランスへ来訪し、1863年にパリ郊外のヴァランヌ・サン・イレールへ移住している。1866年にはポントワーズへ移住しており、1883年までの間に周辺の田園風景を300点近く描いている。ピサロ自身が当時居住地として都心部よりも地方部を好んだ<sup>6)</sup>ということからも、主に生活の中の自然風景

を題材として描いていたと考えられる。

《外環状道路、雪》の制作に至っては、印象派画家クロード・モネによって1873年に描かれた《パリのキャブシース大通り》に影響を受けたとされている<sup>6)</sup>。モネの作品では大通りを鳥瞰し、建物や人物を含む作品全体を抽象的に描いているのに対し、ピサロはよりアイレベルに近い位置に視点を置いて人々や馬車といった乗り物の姿を描いている。

また、1890年代以降に制作された風景画の題材は、パリ郊外の自然風景のみならず、パリの橋や広場、大通りといった近代化の進む都市の姿も対象とされていたことがわかった。これに関して、パリの大通りをテーマにした作品をピサロが多数制作したのは1890年代になってからであり、同時に1890年代に入るとピサロの作品における視点の高さは高くなる傾向が見られることが指摘されている<sup>6)</sup>。

実際、1860年代から1870年代に描かれた作品と1890年代以降に描かれた作品の視点を比較すると、1890年以降、鳥瞰して描かれている作品が増加していく傾向が確認された。鳥瞰して描かれた作品が増加したことの要因として、ピサロがパリ滞在中、ホテルの一室から連作を描いたことも挙げられる。ピサロは目の病気を患っており、医師からも外出しないよう忠告され、屋外での描画活動が難しかったことからこのような手法がとられたとされている<sup>6)</sup>。

またピサロは、パリの都市を題材とした作品の画面の中に通りを行き交う馬車や様々な行為を行う人々を登場させ、静的な風景画と対照的に人々の動きを描くことで変化をもたらしている。ピサロは数年にわたって、活動する人々を風景画の中に描写することで情景を画面に写し変える方法を模索していたという<sup>6)</sup>。今回分析対象とした作品においても、人物画、あるいは作品中に複数の人々が描かれた作品は48作品中30作品と多いことがわかった。街を行き交う多くのパリ市民を描くことにより、近代化による街の騒々しさといったものも表現されていると考えられる。

1898年に描かれた《テアトル・フランセ広場、雨の効果》もその一つで(Fig.1)、1890年代を代表する都市風景画の一つとなっている。描かれたのはパレ・ロワイヤル広場に面したグラン・オテル・デュ・ルーヴルの一室からの風景であり、絵画には窓から見えるオペラ座通りやテアトル・フランセ広場が見下ろされる形で描かれ、オペラ座通りには多



くの馬車が印象的に描かれている。



Fig.1 Camille Pissarro, Place du Théâtre Français, Paris: Rain

オペラ座通りはリヴォリ通り建設計画の一環としてつくられ、1854年から1864年にかけて工事が行われた<sup>1)</sup>。ピサロはオペラ座通りの完成から約30年後にこの作品を手がけたことになる。ピサロはこの眺望に対し、息子リシュアンに宛てた手紙で、「描くのはとても美しい！美的ではないかもしれないが、こうしたパリの街頭が描けるのを喜んで。これらの通りを人々は醜いと言いだすようになったが、とても銀色に輝き、光と活気にあふれている。プールヴァールとはまったく違って、こちらは完全にモダンだ」<sup>6)</sup>と述べている。この手紙の内容からピサロ自身はオペラ座通りの近代的な風景を好んで描いたものの、当時のパリ市民の中にはその風景を「醜い」と感じる者がいたこともわかる。オペラ座通りの開通に際しては既存街区の破壊を伴う大規模な強制収用が行われ、多くの非難を招いた<sup>1)</sup>。これによって住居を追われた住民もいたことから、彼らからの不満の声があったことも推測できる。

1890年以降、ピサロの描く対象は田園風景から主にパリの都市風景へと推移し、田園風景や自然の姿をアイレベルで描いていたそれまでの作風とは異なる、建物や橋、大通り、人々といった多くの要素が創り出した都市の姿全体を一つの風景として捉えて描いたことがわかる。

### (3) カユボットの描いた風景画

2013年に石橋財団ブリジストン美術館で開催された「カユボット展－都市の印象派」の作品集<sup>7)</sup>に掲載された作品について分析を行った。

1870年代から1880年代前半までのカユボットの作品はパリ郊外の作品よりもパリ市内で描かれた作品が多い一方で、それ以降はパリ郊外で描かれた作品が格段に多くなっている。

1880年代までパリ市内の作品が多いのは、カユボットが1866年から1878年までの間、第二帝政期にパリ8区に新たにつくられた上流階級の住宅地ミロメニル通りにあった自邸に、その後1879年から1888年まではパリ9区のオスマン大通りのアパルトマンに住んでいた<sup>7)</sup>ことが影響しているといえる。その時期にもパリ郊外で描かれた作品が複数点みられるが、カユボットの父親が当時のパリの都市改造の喧騒から離れて夏季休暇を過ごすためにパリ郊外イエールに別邸を購入しており、カユボットも夏季の間その別邸で過ごしたためと考えられる<sup>7)</sup>。

1880年代中頃から晩年にかけてはパリ郊外の自然風景を描いた作品が多くなっている。この傾向に関しては、1879年に弟マルシャルと共にイエールの土地を売却し、1881年にパリ郊外のジュヌヴィリエという地に土地を購入、翌年自邸を設けた<sup>7)</sup>ことが関係しているといえる。

カユボットによる風景画の題材、視点の高さについては、人物に着目して描かれた作品が多いこと、またアイレベルで描かれた作品が多い傾向にあったことが指摘できる。近代化の進むパリの風景を描いた作品も、生活の中の1コマを切り取り、人々の動向に焦点が当てられているものが多くなっている。

カユボットの代表作とも言われる《ヨーロッパ橋》(Fig.2)は1876年に描かれた作品で、ヨーロッパ広場とサン＝ラザール駅の上に架かるヨーロッパ橋がモチーフとなっている。またサン＝ラザール駅は題材として1873年にマネが《鉄道》、1876年から1877年にかけてクロード・モネが連作の《サン＝ラザール駅》を描くなど<sup>7)</sup>、当時の印象派画家らにとって近代的なパリを象徴する場所となっていた。

この場所はカユボットのミロメニル通りの自邸から近く、周辺一帯はサン＝ラザール駅の建設と共に区画整理の行われた地区であった。



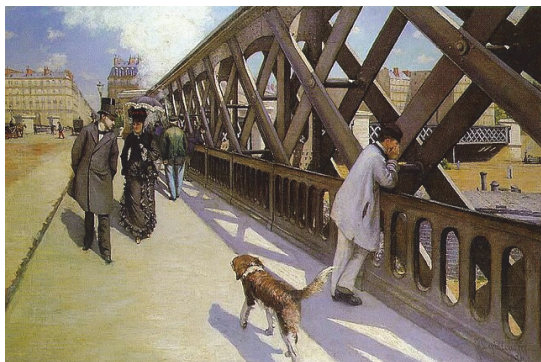


Fig.2 Gustave Caillebotte, The Europe Bridge

画面上でこちらに歩いてくる着飾った男女の後ろでは、帽子を被った労働者を思わせる男性が反対方向へと向かっている。男性が向かう画面奥の方向には下町の労働者街があったとされ<sup>8)</sup>、当時進行していた身分階級の格差を感じさせられる作品である。

《建物のペンキ塗り》は 1877 年に描かれた作品で、第 3 回印象派展に出品された。第 3 回印象派展にはこの他《ヨーロッパ橋》、《パリの通り、雨》といった、後に彼の代表作となる作品も共に出品され、評判を呼んだとされている。それぞれ《ヨーロッパ橋》では橋という鉄の構造物を描いたこと、《パリの通り、雨》では大通りを描いたことにより、近代化の進むパリの姿を示している<sup>7)</sup>。

カイユボットがパリで描いた作品には彼の自邸周辺で描かれたものが多数存在している。パリ 8 区に住んでいた際に描かれた《パリの通り、雨》のデュブラン広場、《ペピニエールの兵舎》のサン＝トーグスタン広場の場所は共にパリ 8 区である。また 9 区のオスマン大通りに転居後に描かれた《イタリアン大通り》、《オスマン大通り、雪景色》といった作品の大通りも同様に徒歩圏内に位置していた。当時パリ 8 区、9 区はパリの中でも近代化を象徴する地区であったとされていることから<sup>7)</sup>、カイユボットは自分の置かれた環境を活用し、自らが暮らす中で刻々と近代化の進むパリの景観及び人々の暮らしに焦点を当て、実見の都市景観を描き続けたのだと考えられる。

カイユボットの作品には、普段は近代化の進むパリの中心地で暮らし、休暇は郊外の別邸で過ごすという、等身大の上流階級パリ市民としての暮らしが描かれたといえる。

#### (4) ユトリロの描いた風景画

モーリス・ユトリロは、1920 年代を中心にパリのモンマルトルやモンパルナスに集まり活動したエコール・ド・パリの画家の一人である。エコール・ド・パリの代表的な画家としてはパブロ・ピカソやマルク・シャガール、藤田嗣治などが挙げられ、非フランス人が多数を占める中、ユトリロは数少ないパリの出身者であった。

ユトリロは 1883 年にパリ・モンマルトルで生まれ、母親のシュザンヌ・ヴァラドンが画家であった。10 代後半から飲酒に溺れ、その後アルコール中毒による幻覚などの症状に悩まれ、18 歳の時に病院に監禁されることとなった。その際医師の忠告により対症療法の一環として描画を勧められ、描画活動を開始している<sup>9)</sup>。独学で描画を始めたユトリロの作品は、当初画商からは興味を示されなかった。

ユトリロの作品制作については 3 つの時期に分けられている。1905 年から 1907 年は「モンマニー時代」と呼ばれ、代表作品としては《モンマニー風景》が挙げられる。この時期のユトリロは、医師や母親による助言で筆を取り、写実的な風景を描いている。

1908 年から 1914 年頃は「白の時代」と呼ばれ、白を基調とした作品が描かれ、《モンマルトル、ノルヴァン通り》(Fig.3) や《サン・セヴラン教会》のようなパリの家々の壁や古い聖堂などに注目し、表現主義的な傾向が発揮された作品が描かれた時期であるとされている。

「白の時代」後の 1925 年までの時期は「多色の時代」と呼ばれ、それまでの白を基調とした作品とは異なり風景画の画面が多彩となり、ユトリロが民衆画家として人々に親しまれるようになっていった時代である<sup>9)</sup>。

1918 年に開かれた彼の展覧会は大成功を収め、翌年には数々の著名な印象派やバルビゾン派画家らの展示も行われたベルネーム・ジューヌ画廊と年間 100 万フランの契約を結んでいる<sup>10)</sup>。1929 年にはフランス政府からのレジオンドヌール勲章を贈呈される<sup>9)</sup> など、ユトリロの作品は高い評価を得たことがわかる。

ユトリロの描く風景画では人物はあくまで点景として描かれており、静かな風景の中に人々の動きを表現して作品に動きを加えたピサロや、人々の暮らしに焦点を当てその姿を詳細に描いたカイユボット



Fig.3 Maurice Utrillo, Norvins Street, Montmartre

とは、風景の中の人物に対する捉え方が異なっているといえる。

また彼の作品にはコタン小路をはじめ、ラパン・アジル、マルカデ通り、ノルヴァン通り、サンヴァルサン通りといったモンマルトルの街の同じ場所を題材にした作品が複数点見られる。その背景には彼の度重なる入院生活の中で療法として描画活動を勧められていたことをはじめとした、特殊ともいえる生活環境も関係していたと考えられる。一方でユト

リロが生涯描き続けたモンマルトルの街並みを題材とした作品は、生前から評価され、人気画家として国内外共に名声を得たことから、カイユボットやピサロといった印象派画家らが題材に選んだ近代化の進んだパリ中心部だけではなく、モンマルトルのような庶民的な街並みの風景までもが、パリの人々にとっての鑑賞の対象となったといえる。

## 5. まとめ

19世紀半ばから行われたオスマンによるパリの都市改造は、都市の拡張と人口の増大に対応する機能性及び美観を兼ね備えた都市づくりを名目として行われ、都市整備後の近代的な風景は画家たちによって様々な作品に描写された。

フランスにおける風景画の題材は、アカデミズムに沿った理想化された風景が優遇されていた時代があったものの、19世紀以降、自然風景を題材とした写実的な風景画が登場することとなった。その後都市空間に主題を見出した印象派をはじめとする画家らは、自然風景を描く外光派などの系統を引き継ぎながらも、パリの都市部の近代的な風景に着目して描画活動を行ったといえる。

主にパリ郊外の自然風景を題材としたピサロは、1890年代以降オペラ座通りの近代的な風景を好んで描いたが、その都市風景は必ずしも当時のパリ市民から受け入れられてはいなかった。対照的にカイユボットは、オスマンによって近代化されたパリ中心部の人々の生き生きとした生活の様子を描き、好評を博した。20世紀に入りユトリロが描いたモン

Table 1 List of landscape paintings by three artists

	風景画作品の傾向 (分析対象の作品より)	作品例
ピサロ (1830~1903)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1860~1880年代はパリ郊外の自然風景の作品が多い</li> <li>・1890年以降パリの都市風景の作品を多く描く</li> <li>・大通りの都市風景などを鳥瞰的に描く傾向</li> <li>・人々の動きを描くことで近代化の進むパリの騒々しさを表現</li> </ul>	《外環状道路、雪》 《テアトル・フランス 広場、雨の効果》
カイユボット (1848~1894)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パリに住んでいた1870~1880年代前半はパリ市内で描かれた作品が多い</li> <li>・近代化の進むパリの中で生活する人々の暮らしにアイレベルで焦点を当てた</li> </ul>	《ヨーロッパ橋》 《建物のペンキ塗り》 《パリの通り、雨》
ユトリロ (1883~1955)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生涯にわたり故郷モンマルトルの風景を描いた</li> <li>・庶民的な街並みの風景を描いた</li> <li>・民衆画家として人気を集めた</li> </ul>	《モンマニー風景》 《サン・セヴラン教会》 《モンマルトル、 ノルヴァン通り》

マルトルの素朴な路地裏を題材とした作品は、早い段階から民衆の人気を獲得した。画家たちの作風とそれに対する評価からは、リアルタイムで近代化が進行していた都市部で、近代的なハレの風景が受け入れられていくと共に、モンマルトルのようなケの風景にも注目が及んだことがわかる (Table 1)。

オスマンによる都市改造によって出来上がった近代的な都市風景は、印象派をはじめとした画家たちにより絵画作品の題材とされ、ある種の風景画のジャンルとして拡大していった。このようにパリの都市風景を描いた絵画作品は、当初忌避されていた近代的都市空間を鑑賞の対象に昇華させ、人々の間に都市景観という概念が成立する過程において重要な役割を担ったといえるだろう。

## 引用・参考文献

- 1) 松井道昭：フランス第二帝政下のパリ都市改造，日本経済評論社（1997）
- 2) 饗庭孝男：パリ 歴史の風景，山川出版社（1997）
- 3) Leonardo Benevolo： *The European City*, John Wiley & Sons（1995）
- 4) 池上英洋，川口清香，荒井咲紀：いちばん親切的な西洋美術史，新星出版社（2016）
- 5) Artpedia アートペディア/近現代美術の百科事典， <https://www.artpedia.asia/camille-corot/>

(2023/10/30 最終閲覧)

- 6) クリストファー・ロイド（著），島田紀夫・松島潔（訳）：ピサロ，西村書店（1994）
- 7) 新畑泰秀（編集）：カイユボット展－都市の印象派，公益財団法人石橋財団ブリヂストン美術館（2013）
- 8) アルベルト・マルチニ，富永惣一：ファブリ世界名画集，平凡社，（1970）
- 9) 坂崎乙郎（解説）：世界の美術 27 モディリアーニ ユトリロ，河出書房（1965）
- 10) Artpedia アートペディア/近現代美術の百科事典， <https://www.artpedia.asia/maurice-uttrillo/>（2023/10/30 最終閲覧）

## 図版出典

**Fig.1** Camille Pissarro, Public domain, via Wikimedia Commons, [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Camille\\_Pissarro\\_003.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Camille_Pissarro_003.jpg)（2023/10/30 最終閲覧）

**Fig.2** Gustave Caillebotte, Public domain, via Wikimedia Commons, <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Caillebotte-PontdeL%27Europe-Geneva.jpg>（2023/10/30 最終閲覧）

**Fig.3** 東京富士美術館， [https://www.fujibi.or.jp/our-collection/profile-of-works.html?work\\_id=1252](https://www.fujibi.or.jp/our-collection/profile-of-works.html?work_id=1252)（2023/10/30 最終閲覧）





# 住宅関連事業者による中古戸建住宅の価値向上と 活用に向けた取り組み

— 一都三県内のリフォーム業者への調査 —

Initiatives by Housing-related Businesses to Increase the Value and Utilization  
of Existing Detached Houses:  
A Survey of Remodeling Contractors in Tokyo and Three Other Prefectures

門 永 麻 椰\* 薬 袋 奈美子\*\*  
Maya KADONAGA Namiko MINAI

**要 約** 日本の中古住宅流通量の低迷や空き家問題を受け、本稿では一都三県のリフォーム業者を対象に、戸建て住宅の価値向上と活用に関する取り組みの実態を明らかにする。調査結果から中古住宅流通を事業として捉えているリフォーム業者は、高品質な住宅や長期的に快適な居住環境の提案、居住者と継続的な関係をもって、良質な住宅ストック形成に貢献していることが明らかとなった。また、住み替えまで関与している傾向が見られ、効率的な中古住宅流通の仕組みをもつことが明らかになった。ただし、維持管理と活用を別々に考える傾向が見受けられた。リフォーム業者が中古住宅の流通・活用を事業とするためには不動産業をはじめとする様々な業種との連携が必要であることが明らかになった。

**キーワード**：戸建住宅，空き家再生，リフォーム業者，住居管理，中古住宅の流通

**Abstract** This study focuses on reform companies in Tokyo and three Japanese prefectures, aiming to assess their efforts in enhancing the value and utilization of detached houses in response to the challenges of sluggish second-hand housing distribution and empty houses in Japan. Renovation firms that treat second-hand house distribution as a business tend to contribute to forming a high-quality housing stock, providing quality homes and long-term comfort. They also engage in post-renovation resident relationships and resettlement involvement, facilitating smooth second-hand housing distribution. However, maintenance and utilization are often viewed separately. It became clear that renovation companies need to collaborate with various industries, including the real estate industry, in order to make the distribution and utilization of existing homes their business.

**Key words** : Detached Houses, Vacant Houses Rehabilitation, Remodeling Contractors, Housing Management, Distribution of Used Houses

## 1. 研究背景と目的

住生活基本計画<sup>1)</sup>では明示されてはいても日本の中古住宅のニーズはかなり低い水準にある。日本の中古住宅市場は全住宅流通量の約14.5%<sup>2)</sup>にしか至らず、欧米諸国<sup>3)</sup>と比較してもかなり低いことが明らかになっている。加えて国内の住宅総数に占め

---

\* 家政学研究科住居学専攻  
Graduate School of Home Economics,  
Division of Housing and Architecture  
\*\* 住居学科  
Department of Housing and Architecture

る空き家率は過去最高の 13.6%<sup>1)</sup> であり、空き家問題は深刻化する一方だ。特に都市部において中古マンションの需要は増える傾向がある一方で、個別性の高い中古戸建住宅の流通は進んでいない現状がある。

内閣府は「未来投資戦略 2017」<sup>4)</sup> にて、質の高い住宅ストック形成のために、既存住宅流通・リフォーム市場を中心とした住宅市場活性化に向けた施策を発表した。中古住宅の有効活用を実現するためには、リフォームを通じて住宅性能を向上させ、その後の利用に適した状態に移行することが不可欠である。さらに、所有者に流通を促す必要性がある。

徳田らの研究<sup>5)</sup>によると、空き家の現所有者と元所有者の間には、空き家の利活用等に関する明確な情報格差が存在し、空き家所有者に対して老朽化していく空き家の金銭的負担を含めた管理に関することや、空き家を含む土地建物の相続に関する情報などを提供することで、空き家の利活用が進むことが明らかになった。適正な情報を有する所有者は空き家を利活用している傾向が明らかになった。さらに、空き家の市場流通化にあたっては、空き家所有者が相談できる窓口、空き家所有者の状況に応じて必要な知識や手段の適切なアドバイス、利活用への不安を軽減できる専門家の存在が求められていることが指摘されていた。また、浅見の研究<sup>6)</sup>によると、居住者にとって公的な相談窓口より、住宅の困りごとの解決に直結するリフォーム業者等との継続的な関係が求められていることが明らかとなっていた。そして戸建て住宅にも各々の居住者に対応する住宅の管理の専門家の質や在り方が問われていることが指摘されていた。中古住宅の維持管理・流通促進において消費者側は専門的な知識を有する事業者の存在を求めていることが明らかになった。しかし、居住者・消費者に対する調査は多いものの、事業者に対する調査は進んでいない。

そこで本研究では流通が進んでいない中古戸建住宅に着目し、中古住宅流通促進のために良質な住宅ストック形成・中古住宅活用において専門的な知識を有し、居住者をサポートする専門家として「リフォーム業者」を対象に調査を行う。中でも中古戸建流通事業に対する意識をもつリフォーム業者に焦点を当て、住宅価値向上と中古戸建住宅活用に関する取り組みの実態を明らかにする。そして既存住宅を個人資産又は社会の資産として住宅の好循環に貢

献するシステムを考察する。

## 2. 調査方法

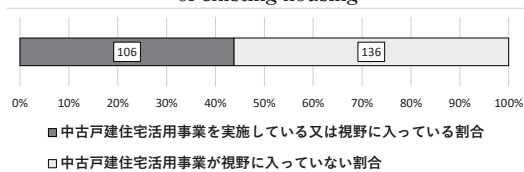
一都三県の都市部で営業している住宅リフォームに関係する事業者を対象に、質問紙法によるアンケート調査<sup>1)</sup>を行った。アンケート用紙は郵送によって配布し、郵送により回収を行った。アンケート調査の対象者は公開されているリフォーム業者情報検索サイト「リフォーム評価ナビ」「既存住宅状況調査技術者の登録サイト」「リフォーム・リノベカフェ」から一都三県の都市部に営業所を持つ戸建ての住宅リフォームに携わる事業者を選定した。以下リフォーム業者と称す。各事業所のホームページを閲覧し、住宅リフォームの実績や代表者・有資格者の氏名を確認し対象者を絞り込んだ。以上の作業により 1040 名の対象者を選定した。回答数は 242 名であり、回収率は 23%であった。アンケート回答者の属性を (Table 1) に示す。調査期間は 2022 年 8 月 22～2022 年 9 月 10 日である。さらに、アンケート調査から住宅の流通を促進する事例を持ち、調査協力に同意を得られた 4 名の回答者にヒアリング調査を行った。

さらにアンケート回答者において、空き家の利活用と古民家再生事業（以下流通促進事業）を行っている又は視野に入っていると回答した 106 名（以下流通促進事業者）に焦点をあて、その他の 136 名の事業者 (Fig.1) との比較によって、リフォーム業者の中古戸建住宅の価値向上と活用の取り組みについて考察する。

Table 1 Attributes of survey respondents

(n=242)

性別		年齢	
男性	80.2%	20歳代	1.7%
女性	19.4%	30歳代	6.2%
		40歳代	18.6%
		50歳代	36.8%
		60歳代	26.9%
		70歳以上	9.9%
勤務先の所在地			
東京都内	41.3%		
神奈川県内	24.4%		
埼玉県内	19.0%		
千葉県内	15.3%		

**Fig.1** Percentage of entities promoting the distribution of existing housing

### 3. 中古戸建住宅の価値向上に向けた取り組み

#### 3-1 回答者概要

回答者の勤務先の情報を含む属性を（Table 2）に示す。担当業務では、設計・監理の担当者の流通促進事業への関与が見られた。一方で営業や事務・経理などは流通促進事業にあまり関与していないことがわかった。創業年では、若い企業の方がやや流通促進事業に取り組む傾向が見られた。若い企業は新しいアイデアやアプローチの実践に積極的であることが考えられる。従業員数では1～4人の項目において、流通促進事業者の割合が有意に高く、個人事務所又は小規模な企業が事業に取り組む傾向がみられた。小規模事業者は個人の意識が反映されやすく、会社全体の利益だけでなく、流通促進事業の社会的な側面に重点を置く傾向があると考えられる。業種では、全体の回答者と比較すると、設計事務所が流通促進事業に取り組む傾向が見られた。設計事務所が比較的小規模な体制であることも理由の1つであると考えられるが、個別性の高い既存の住宅の改装や再設計において、クリエイティブな解決策を提供しやすいことが推察できる。一方で専門工事業者やリフォーム専門店の回答率は低い。また、住宅リフォーム率においてはリフォーム率が低いほど、流通促進事業者の割合が高くなっている。多様な事業を展開している事業者は、中古住宅の流通促進事業への意識や事業の実践に取り組むことができていると考えられる。様々な分野の経験やノウハウを活かし、中古住宅市場に新しいアプローチやアイデアを導入することができると考えられる。一方、専門的な工事に特化している事業者は、流通促進事業を展開するつもりもない又は知識が不足してきていないことが考えられる。地元受注率では大きな相関は見られず、日常業務や個人の環境や思考等、他の要素による影響が大きいと考えられる。個人の意識が反映されやすい環境や様々な事業に取り組んでいる事業者が流通促進事業に対する意識が高いことが考えられる。

**Table 2** Comparison of demographics of survey respondents (Multiple responses allowed for work performed and industry sector; otherwise, only one response allowed)

		流通促進 事業者 n=106	その他 n=136	全体 n=242
担当 業務	経営	53.8%	58.1%	56.2%
	営業・積算	39.6%	50.7%	45.9%
	施工管理	34.9%	46.3%	41.3%
	施工	28.3%	30.1%	29.3%
	設計・監理	67.9%	53.7%	59.9%
	事務・経理	28.3%	36.8%	33.1%
	不動産 その他	4.7% 0.9%	2.2% 0.7%	3.3% 1.2%
創業 年	9年以下	17.0%	5.1%	10.3%
	10～19年	14.2%	12.5%	13.2%
	20～49年	39.6%	50.7%	45.9%
	50～99年	25.5%	30.1%	28.1%
	100年以上前	3.8%	1.5%	2.5%
従業員 数	1～4人	52.8%	33.8%	42.1%
	5～9人	21.7%	23.5%	22.7%
	10～19人	9.4%	19.1%	14.9%
	20～49人	4.7%	9.6%	7.4%
	50～99人	1.9%	3.7%	2.9%
	100人以上	9.4%	10.3%	9.9%
業種	工務店	39.6%	48.5%	40.1%
	ハウスメーカー	4.7%	0.7%	7.0%
	リフォーム専門店	13.2%	27.2%	21.1%
	専門工事業者	3.8%	6.6%	5.4%
	設計事務所	33.0%	11.8%	21.1%
	不動産他	3.8%	4.4%	5.4%
	その他	1.9%	0.7%	1.0%
リ フ ォ ー ム 率	100%	7.5%	11.8%	9.9%
	80%以上100%未満	23.6%	30.9%	27.7%
	40%以上60%未満	22.6%	22.1%	22.3%
	20%以上40%未満	16.0%	11.0%	13.2%
	20%未満	30.2%	22.8%	26.0%
地 元 受 注 率	100%	8.5%	4.4%	6.20%
	80%以上100%未満	29.2%	31.6%	30.60%
	40%以上60%未満	20.8%	27.2%	24.40%
	20%以上40%未満	12.3%	15.4%	14%
	20%未満	28.3%	19.9%	23.60%

(Responsible work and industry sector is more than one answer Other single answer)

#### 3-2 検査や建物診断に関する取り組み

建物の検査や診断への対応について尋ねた結果を（Table 3）に示す。まず、中古住宅の活用に必要な性の高い項目である建物状況調査・耐震診断は全体を

通して自社で対応している傾向が見られた。特に流通促進事業者の方がその他に比べ、自社で対応しているとの回答率が高い。一方でその他は社外の人と連携しながら、対応している傾向がみられた。自社で調査等を行うことで、流通促進事業までのスムーズなサービスの提供やコスト効率の向上に繋がっていることが考えられる。また流通促進事業者は長期優良住宅の建設や、長期住宅化リフォームの回答率も高い。さらに定期検査を行っている顧客の割合も高いことから、流通促進事業者は建物の品質向上をもって、持続可能な住環境を提供することが意識できていると考察できる。

Table 3 Response to inspections and diagnosis

(multiple response)

	流通促進 事業者 n=106	その他 n=136	全体 n=242
建物状況調査に対応している	78.3%	61.8%	69.0%
建物状況調査に社外の人と提携している	17.0%	18.4%	17.8%
耐震診断に対応している	66.0%	51.5%	57.9%
耐震診断は社外の人と提携している	17.0%	23.5%	20.7%
長期優良住宅の建設に対応している	41.5%	31.6%	36.0%
長期住宅化リフォーム (補助金に対応している)	32.1%	25.0%	28.1%
定期検査を行っている顧客がいる	34.0%	28.7%	31.0%
検査や診断には対応していない	6.6%	4.4%	5.4%
未回答	0.0%	4.4%	40.0%

### 3-3 リフォーム内容

リフォーム内容に関する回答を（Table 4）に示す。流通促進事業者はその他に比べ、すべての項目において回答率が高い。まず、全体を通して、耐震・断熱・バリアフリー改修など性能向上に関するリフォーム提案は約半数が実施している。中でも流通促進事業者はその他に比べ、回答率が高く、建物自体の長寿命化や、将来の住宅価値を向上させる意識が高いことが考えられる。次に全体を通してライフスタイルに合わせた提案では3割程度が実施している。中でも流通促進事業者はその他に比べ、回答率が高く、特に住み替えまでの提案を実施している傾向が顕著に見られる。長期的な視野をもって、顧客の居住環境を向上させる提案を行っていると考えられる。流通促進事業者は建物自体の品質向上や居住者の暮らし方に合わせた提案をもって、居住者が住み続けられる良質な住宅ストックの形成を促進していることが考えられる。

Table 4 Proposals to customers

(multiple response)

	流通促進 事業者 n=106	その他 n=136	全体 n=242
耐震改修の提案	51.9%	44.9%	47.9%
断熱改修の提案	53.8%	41.2%	46.7%
省エネ製品や構法の提案	39.6%	23.5%	30.6%
バリアフリー改修の提案	59.4%	44.1%	50.8%
新しいライフスタイルの提案	34.9%	22.8%	28.1%
ライフステージに応じた暮らし方の提案	39.6%	25.0%	31.4%
新築から住み替えまでの総合的な提案	34.9%	17.6%	25.2%
その他	2.8%	2.2%	3.5%
特になし	0.0%	1.5%	0.8%
未回答	2.8%	5.9%	4.5%

### 3-4 リフォーム後の取り組み

リフォーム後の取り組みを（Table 5）に示す。流通促進事業者は修繕履歴の保存やアフターサービス保証を除く、項目において回答率が高くなっている。特に買取再販や住み替え売上の提案、相続や税金対策の相談において回答率に大きな差がみられる。また、定期点検やまめに連絡を取るといった回答にも差が見られ、リフォーム後も顧客と継続的な関係をもって建物を適切に保守・管理、さらには活用提案をしていることが考えられる。しかし所有者情報を活用した空き家の利活用が求められている<sup>4)</sup>中で、修繕履歴の保存はその他と変わらない結果となった。また全体を通して、リフォーム後に住み替えや売上の提案の回答率はわずか14%弱であり、流通促進事業者はやや高いものの、20%弱となっている。維持管理と活用は別で考えられていることが考察できる。

Table 5 Post-renovation initiative

(multiple response)

	流通促進 事業者 n=106	その他 n=136	全体 n=242
修繕履歴の保存	50.0%	52.9%	51.7%
維持管理契約を結ぶ	2.8%	0.0%	1.2%
維持管理計画の提案	14.2%	5.1%	9.1%
修繕積立計画の提案	8.5%	5.1%	6.6%
買取再販・買取運営	14.2%	5.9%	9.5%
相続や税金対策の相談	14.2%	6.6%	9.9%
住み替えや売上の提案	18.9%	9.6%	13.6%
1年,5年,10年等の定期点検	39.6%	26.5%	32.2%
アフターサービス保証	22.6%	30.9%	27.3%
まめに連絡を取る	32.1%	26.5%	28.9%
特になし	12.3%	6.6%	9.1%
その他	13.2%	13.2%	13.2%
未回答	2.8%	4.4%	3.7%



#### 4. 異業種連携体制

現在関わっている又は関わる可能性のある業種の回答を（Table 6）に示す。全体を通して、不動産の回答率が高くなっている。流通促進事業者においては保険・保険代行を除く全ての業種において、割合が高くなっている。中でも行政や金融機関、医療、不動産、教育・学校の回答率が高い。流通促進事業者には行政機関との連携が不可欠であり、連携を強化することで、効果的な事業の実行に繋がると考えられる。また金融も同様に、ローンや財務面の支援の必要性も高いことが考えられる。不動産においては「資産を所有から利用に変化させるには不動産業の視点がいる」との声もみられ、中古住宅活用において、利用者への仲介や空き家の物件探し等で必要性が高いことが挙げられる。医療が高いのは、医療的なニーズに合う設備やサポートに合わせた改装や設計が必要であるからだと考える。教育等が高いのは流通促進事業者が地域社会の発展や維持に貢献したい意識が高く、教育を通して地域の活力を高めるために協力していることが推察できる。

Table 6 Contractors that are currently involved or likely to be involved (multiple responses allowed)

	流通促進 事業者 n=106	その他 n=136	全体 n=242
行政	30.2%	22.1%	25.6%
金融機関	30.2%	22.1%	25.6%
福祉・介護	32.1%	27.9%	29.0%
医療	14.2%	5.1%	9.1%
不動産	52.8%	44.9%	48.3%
教育・学校	17.9%	5.9%	11.2%
町内会・管理組合	19.8%	14.7%	16.9%
観光	2.8%	2.2%	2.4%
飲食	10.4%	7.4%	8.7%
エネルギー	7.5%	5.1%	6.2%
保険・保険代行	17.9%	22.8%	20.7%
特になし	13.2%	12.5%	12.8%
その他	1.9%	2.9%	5.0%

また業務連携をしている・する可能性が高い業種の事業者割合を個数別に表したものを（Fig.2）に示す。その他は1〜3個の割合が高く、偏りがみられる一方で、流通促進事業者は分散していることがわかる。流通促進事業者は、複数の業種と連携する傾向がみられた。様々な業種と連携することで、流通促進事業に必要な多岐にわたるスキルと知識を獲得

していることが考えられる。

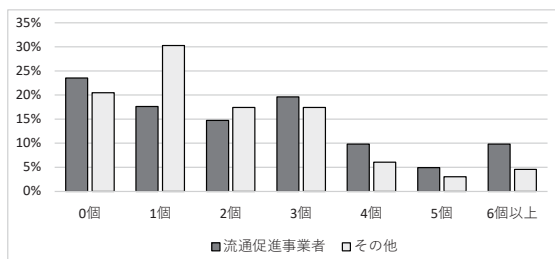


Fig.2 Percentage of businesses by number of units in the sector

#### 5. 中古戸建住宅活用の仕組みや取り組み

##### 5-1 中古戸建住宅活用の取り組み一覧

空き家の利活用と古民家再生事業を行っている又は視野に入っていると回答したうち実際に取り組んでいる事例として空き家の利活用は30事例（Fig.3）、古民家再生事業は18事例（Fig.4）の回答が得られた。

空き家の利活用の事例から空き家に対する取り組みを過程別に空き家対策、調査、相談受付、買取・販売、改修・提案、運営・管理、連携の7つの項目に分類することができた。古民家再生事業では解体・移築、買取・販売、改修・提案の3つの項目に分類することができた。

リフォーム業者による空き家問題へのアプローチは多岐にわたっていることが明らかとなった。双方において買取販売や改修提案は回答数が多く、取り



Fig.3 Examples of the utilization of vacant houses

解体・移築	・解体 ・移築(2)
買取・販売	・買取(3) ・販売 例)売却から再生の実施
改修・提案	・改修(10) 例) 築190年の古民家再生の実施 江戸時代築の蔵を地域のコミュニティホールへ再生 ・提案(3) ・古材の使用

Fig.4 Examples of rehabilitated old private houses

組みやすいことが考えられる。空き家の利活用では、空き家対策の情報収集や情報発信、調査、相談場所の提供等の取り組みが見られ、地域の実態や住民のニーズを把握することが空き家の利活用において重要であると示唆している。また、地域の団体との連携体制を整えることで、空き家の利活用を促進していることがわかった。さらに、運営・管理に携わり、持続的な空き家活用に取り組んでいることがわかった。

## 5-2 事例1-K リフォーム専門店

リフォーム専門店の事例を取り上げる。K リフォーム専門店は従業員数が1名の個人体制の住宅リフォームを専業とする企業であり、リフォームをはじめとする相続や終活、空き家相談などの暮らしに関する地域の相談窓口として機能するために、様々な業種の専門家と連携体制を構築している。同じ地域内の若手士業の団体には弁護士、宅建士、建築士、税理士、司法書士、行政書士、社会保険労務士、ファイナンシャルプランナー等多岐にわたる専門家が所属しており、土地相続の相談があれば、相続に詳しい弁護士を、終活などの人生設計に関する相談があればフィナンシャルプランナーを紹介し、顧客の要望に合わせて最適な専門家を紹介している。空き家利活用も同様に、士業の関わりの中で不動産業者と連携し推進している。空き家について顧客から相談を受けた場合、連携している不動産業者を紹介する。不動産の中でも顧客の要望に合う不動産業者を選定、紹介している。次に運営・管理するための収支計算を行い、収支計画を提示し空き家活用の提案を行う。その後、そのために必要かつ最適なリフォーム提案を行い実行する。リフォーム後は顧客と不動産業者の仲介により賃貸借契約を結ぶといった流れになっている。

連携体制を持つことで、個人事業者でも空き家活

用事業に取り組むことができることや個別に事業者と相談者をつなげる仕組みを持つことで、空き家問題解決に直結することができていることがわかった。

## 5-3 事例2-O ハウスメーカー

ハウスメーカーのリフォーム事業部の取り組み事例を取り上げる。O ハウスメーカーは会社全体を通して、従業員数が100名以上の大規模な企業である。リフォーム事業部の住宅リフォーム業務の占める割合は70%程度であり、リフォーム事業はマンションと戸建て両方を行っている。以前までは分譲住宅事業が主要であったが、現在は建てた住宅のメンテナンスをするリフォーム事業に力を入れている。自社の分譲住宅の居住者であるOB顧客からの受注が70～80%で大半を占めており、OB顧客や不動産仲介を行っているグループ会社との連携をもって、住み替えのタイミングで顧客を紹介してもらうこともあるそうだ。またグループ会社が空き家を買取り、Oハウスメーカーリフォーム事業部によりリフォームを施して販売する提案が挙げられている。ただし、事業コストが販売利益に見合っていないと想定されており、計画段階となっているそうだ。

OB顧客と継続的な関係を構築することで、良質な住宅ストック形成や不動産の機能を持つグループ会社と連携をもって、住み替えまでの提案を実施できていることが考えられる。ただし、空き家利活用事業を実施できる体制をもっていなくても大手企業では会社の利益が尊重され、リスクのある空き家利活用等の新規事業を取り入れにくい実態があると考察できる。

## 5-4 事例3-E 不動産

不動産業者の事例を取り上げる。E 不動産は従業員数が80名程度の企業で、不動産業を主軸に新築事業、建物の運営・維持管理事業、まちづくり事業、クラウドファンディングによるリノベーション事業、人材育成事業等を行っている。その中で、リノベーション事業（住宅リフォーム業）の割合は20%程度を占めている。リノベーション事業の内容は、資金を投資型クラウドファンディングで集め、空き家や遊休不動産にリノベーションを施し再活用する取り組みである。事例としてや伝統建築、住宅、蔵、倉庫など様々であり、地域のコミュニティ空間や宿泊施設、飲食店、シェアハウス等に改修している。設

計やその後の運営管理は外部に委託している事例もあるが自社で対応している。リノベーション事業は神奈川県を基盤に、日本全国に展開している。

不動産業者が空き家の利活用に関わることで、不動産評価や適切な資産の選定など不動産の専門知識をもって、空き家再生事業に最適な物件を選出し、設計提案や再活用計画の策定までスムーズに事業を実行できていると考える。また、空き家相談から事業提案、運営・管理まで自社で一貫して行うことで、効率の良い空き家利活用の仕組みを創出している。特に自社で運営・管理を行うことで、長期的な運用を可能にし、事業者による持続的な取り組みが実現していると考える。さらにはクラウドファンディングを活用することで、自社の費用負担を減らし、事業のリスクを緩和していることが考えられる。

#### 5-5 事例 4-K 設計事務所

K 設計事務所は従業員数が 10～19 人程度の、少数体制の設計事務所である。住宅リフォーム業務の割合は 30%で、新築事業、店舗・各種施設設計、リノベーション、福祉施設建築事業、建築技術教育、飲食事業等の様々な事業を展開している。中古住宅の活用においては、戦後まもなく建てられた店舗兼住宅を、事務所兼飲食店、一部を所有者の住宅として再生している。第二次世界大戦後に建てられた住宅の多くは耐震性が不十分であり、保存が難しいからこそ、文化的な保存価値を見出し、活用を決めたという。所有者からの相談を受け、不動産業者を介して、賃貸借契約を結び、改修を施した。費用は K 設計事務所が負担した。現在は自社でリノベーションを施し事務所兼カフェのとしての利用・運営も行っている。また地域の活性化事業として市からの認定を受け、魅力づくり支援補助金交付事業として助成を受けている。

設計事務所が古民家再生に関与することで、柔軟なアプローチを提案できることや小規模体制であることから、個人の社会貢献意識が再生事業が実施の根幹にあることがわかった。

### 6. まとめ

中古住宅の流通促進事業に取り組むリフォーム業者の特性や事業の特徴を以下にまとめる。

#### ①良質な住宅ストック形成への意識と実践

リフォーム業者が中古住宅流通を事業として意識

を持つことで、高品質な建物、長期的な暮らしやすい空間の提案を行う傾向がある。また、定期点検等を通して顧客と継続的な関係を構築し、質の高い住宅ストック形成に寄与していると考える。また建物診断や状況調査を自社で行い、中古住宅再生事業までのスムーズなサービスの提供やコスト効率向上に繋がっていることが考えられる。ただし、維持管理と活用は別の側面として考えられている傾向があり、活用事業の意識があっても、住み替えまでの提案が実施できている事業者の存在は限られている。維持管理から一貫して活用を考えるアプローチが必要である。

#### ②異業種との連携

リフォーム業者が流通促進事業を実施するためには、異業種との連携が重要であることがわかった。様々な要素や知識が必要な空き家活用において、連携することで自社にない機能を補い合いながら、流通促進事業を行っていることが考察できる。また様々な視点からのアプローチをもって事業を進めることができる。その後の運営・管理にあたっても連携体制を持つことで、持続的な運営に繋がることも考えられる。

#### ③不動産業者の関与

流通促進事業を行うためには不動産の関与は不可欠であることが明らかになった。事業者自体に不動産のノウハウを持つことや連携することにより、不動産の機能を持つことで、流通促進事業を促進することができる。

#### ④個人の意識の反映

若い企業や少数体制の企業など個人の社会貢献意識が反映されやすい環境では流通促進事業が実行しやすいことが考えられる。また新しいアプローチやアイデアを導入しやすい環境が整っていることも要因であると考えられる。一方で大規模な企業では事業リスクからか、意識があっても実行に発展しにくいことが考えられる。中古住宅流通促進事業においては、企業の規模や特性が関係し、特性に応じた戦略の選択が重要であることが考えられる。

#### ⑤運営提案や運営への関与

流通促進事業を実施している事業者は運営提案と運営への関与している傾向を持つことが明らかとなった。運営の仕組みをもつことで、建物の持続的な運用が期待できる。

リフォーム業者が中古住宅流通を事業として意識

することで良質な住宅ストック形成に寄与している。さらなる流通の促進や維持と活用の一体性をもたすためには、不動産業をはじめとする様々な業種との連携体制をと整える必要があると考える。

## 謝辞

本稿の調査においては調査対象者の皆様に多大なご協力を承りました。また同学の浅見美穂教授にも調査のご協力と温かい助言を承りました。心より謝意を申し上げます。

## 参考文献

- 1) 国土交通省：日本住宅基本計画（令和3年3月19日）閣議決定新たな住生活基本計画の概要 [https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/jutakukentiku\\_house\\_tk2\\_000032.html](https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/jutakukentiku_house_tk2_000032.html)（参照 2023.10.10）
- 2) 総務省：平成30年住宅・土地統計調査（2019年9月30日）<https://www.mlit.go.jp/common/001314574.pdf>（参照 2023.10.10）
- 3) 国土交通省：既存住宅市場の活性化について（2020年5月7日）[https://www5.cao.go.jp/keizai-](https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/wg6/20200507/pdf/shiryou3.pdf)

[shimon/kaigi/special/reform/wg6/20200507/pdf/shiryou3.pdf](https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/wg6/20200507/pdf/shiryou3.pdf)

- 4) 内閣府：未来投資戦略 2017，既存住宅流通・リフォーム市場を中心とした住宅市場の活性化（2022年10月）[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/miraitousi2017\\_t.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/miraitousi2017_t.pdf)（参照 2023.10.10）
- 5) 徳田光弘，石塚直登：空き家所有者の利活用に対する意識構造，日本建築学会技術報告集，第28巻，第70号，pp1518-1523，（2022年10月）
- 6) 浅見美穂：戸建て住宅の維持管理における居住者側が持つ課題に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第87巻，第798号，1539-1548，（2022年8月）

## <注>

- 1 科学研究費助成事業基盤研究（C）（一般）（代表浅見美穂，令和3～5年度 課題番号：21K02098）による助成を受けて，浅見美穂によるリフォーム業者アンケート調査に協力して実施したもの



# 子どもの遊び声の大きさと騒音の認識に関する考察

— 雑司ヶ谷研究 18 —

Reflections on the Sound Volume of Children's Play and Perceptions of Noise:  
Zoshigaya Research 18

吉 武 美 智      薬 袋 奈美子\*  
Misato YOSHITAKE      Namiko MINAI

**要 約** 外遊びは子どもの成長発達の過程において重要な役割を担っている。しかしながら社会の変容に伴い遊び空間は減少した。子どもの声は近隣住民から騒音と捉えられ、遊び方に制約が設けられることもある。本研究では、日本女子大学から徒歩約5分の場所にある雑司ヶ谷公園にて騒音計を用いて音の大きさの測定を行い、子どもの遊び声の大きさの実態と騒音の認識について考察を行った。子どもの声が騒がしく感じられる背景には、子どもの声と音の聴こえ方の特徴、まちの構造と住宅の配置の関係など、複数の要因が影響していることが考えられた。

**キーワード**：あそび環境、子どもの声、騒音、苦情、地域住民

**Abstract** Playing outside is necessary for children's growth and development. Due to social changes, however, outdoor play spaces have decreased. In addition, residents perceive the sounds of children playing as noise and there is a lack of space for children to play freely outside. This study used a sound meter at Zoshigaya Park, located approximately a 5-minute walk from Japan Women's University, to measure the sound volume of children's play. The aim was to reveal the actual loudness of children's play and to explore the perception of these sounds as noise. Results highlighted the fact that several factors, including the characteristics of how children's voices and sounds are heard and the relationship between urban design and housing layouts, contribute to the perception that children's voices are loud.

**Key words** : Play environment, The sounds of children playing, Noise, Complaint, Local resident

## 1. はじめに

遊びは子どもの成長発達の過程において重要な役割を担っている。なかでも外での多様な遊びは心身の発達をもたらすだけでなく、社会性や創造性の獲得を可能にする。しかしながら、社会の変容に伴い子どもの外遊びの環境は大きく変化している。高度

経済成長期からの開発により空き地が姿を消したこと、道路整備が進んだことにより道路や街路は遊べない場所となったことから、遊びの空間量は減少している。少子高齢化に伴い公園に健康遊具が多く設置されるようになったことやボール遊び禁止などルールが厳格化されたことから、公園という遊び空間そのものの魅力が失われている。さらに、外遊びによって生じる音や子どもの声が近隣住民から騒音と捉えられ、遊び方に制約が設けられることもある。渡辺<sup>1)</sup>は子どもの声への認識が社会の変容に伴い変化したとする一方で、子どもの声は表現の自由に関わり保障されるべきものと論じた。橋本<sup>2)</sup>は騒

---

\* 家政学研究科住居学専攻  
Graduate School of Home Economics,  
Division of Housing and Architecture  
\*\* 住居学科  
Department of Housing and Architecture

音問題に関する意識調査より、音の問題は心理的要素も大きな要因であることを示した。しかしながら近年では、近隣住民の訴えにより公園が閉鎖されたり、保育施設において園庭で遊ぶ時間に制限が設けられるケースが後を立たず、外遊びの推進と環境整備のための検討委員会の設置や条例の制定が自治体で行われている。また、国では子どもの声は騒音でないとする法律の制定が検討された。日本女子大学から徒歩約5分の場所にある雑司ヶ谷公園では、公園の開園後から近隣住民より子どもの声に対して苦情が寄せられ、公園が令和2年に近隣住民に対して行ったアンケートでも、子どもの声について意見が寄せられ外遊びをする子どもと近隣住民の共生が課題となっている。

そこで、屋外での音の種類と大きさを調査するため、昨年雑司ヶ谷公園にて騒音計を用いて音の測定を行った。これをもとに、子どもの声や音の聴こえ方の特徴を整理し、子どもの声が騒がしく感じられてしまう要因と法整備による外遊び環境の改善の可能性を検証する。子どもの外遊びが騒音の観点から問題視されているという現状を踏まえ、屋外での音の響きに注目することにより子どもの外遊びに適した環境の整備・改善の実現につなげることを目的に本研究を行う。

## 2. 屋外での音の種類と大きさ

### 2-2-1. 測定概要

雑司ヶ谷公園で開催された防災訓練にて、騒音計を用いて音の測定を行った。防災訓練当日は、消防士と消防団員の指導の元参加者が消火器の使い方を学ぶ初期消化訓練、災害時の炊き出し時に火を使用するため公園の各所に設置されている「かまどベンチ」の使い方体験、消防車の展示などが行われた。

測定は、2022年6月26日（日）の防災訓練に加え、事後調査として2022年9月17日（土）の2日間行った。

2日間の測定概要をTable 1に示す。防災訓練では10時から12時30分に、雑司ヶ谷公園南側、多目的室や集会室等を備えた丘の上テラスの横、北側敷地境界線の3箇所で測定した。9月17日の事後調査では、11時15分から11時45分に北側敷地境界線で測定した。これらの測定場所は、Fig.1で地図に示している。騒音計の設定は防災訓練と事後調査どちらも、騒音計高さを人間の耳の高さと同程度の1.2m～1.5m、動向性を変動騒音に対して用いる「Fast」、測定レンジを「Auto」、周波数重み特性を人間の聴覚を考慮し周波数を補正した「A特性」とした。記録は、音の大きさと音の発生要因を確認するため、騒音計画面と公園内の様子をビデオカメラで同じ画角で撮影する方法により行った。

### 2-2-2. 防災訓練で発せられた音の種類と大きさ

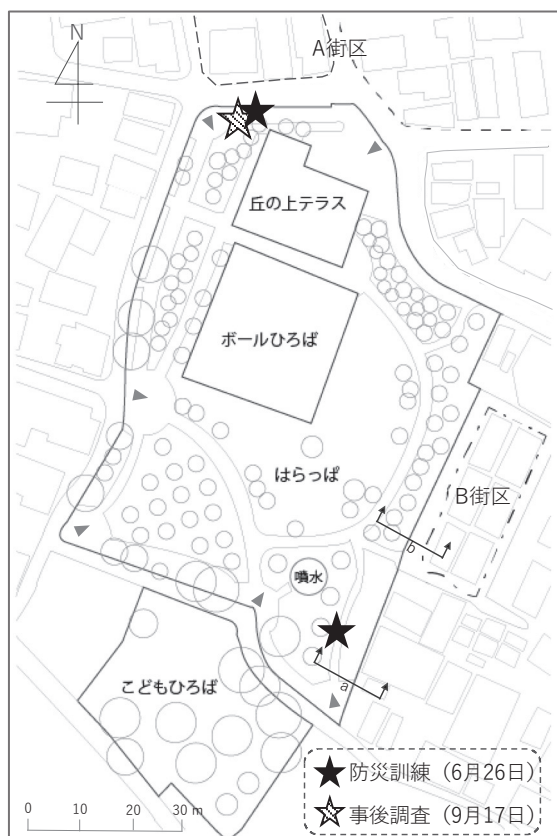
#### (1) 公園南側

公園南側では、噴水付近で消火器を使った初期消化訓練が行われた。消防士・消防団員の説明に続いて参加者が「火事だー」と叫びながら火に見立てた的の近くに消火器を持って行き放水し、他の参加者から拍手をもらって次の人に交代するという流れで行われた。測定は30分間行い、結果は初期消化訓練から発生した音の大きさが目立つものを抽出してまとめた。その結果を示したのがTable 2である。

音圧の最大値は、子どもが「火事だ」と声を上げた際の70.1dB、最小値は43.4dBであった。最小値は特に目立つ音以外から確認されたものであるため、Table 2には記載されていない。この掛け声を上げた際の大人と子どもの声の大きさには、最大で約8dB

Table 1 An overview of sound measurement

		防災訓練 (6月26日)	事後調査 (9月17日)
測定時間		10時～12時30分	11時15分～11時45分
測定場所 (※ Fig.1 参照)		公園南側・丘の上テラス横・北側敷地境界線	北側敷地境界線
騒音計の設置方法	騒音計高さ	1.2m～1.5m	
	動向性	Fast	
	測定レンジ	Auto	
	周波数重み特性	A特性	
記録方法		騒音計画面と公園内の様子をビデオカメラで同じ画角で撮影	



(雑司ヶ谷公園ホームページより筆者作成 <https://zoshigaya.org/zoshigaya-park.html>)

Fig.1 Measurement sites

Table 2 Measurements on the south side of the park

音の種類		音圧 (dB)
消防士・消防団 による説明	騒音計に背を向けて 話す時	44.0~44.9
	騒音計に向かって 話す時	50.0
「火事だ」の 掛け声	子ども	51.3~70.1
	大人	51.1~62.0
放水時		48.0~54.5
拍手		55.4~63.8
風		53.6~56.2
飛行機の通過音		50.0~63.1
子どもの声	遠くからの叫び声	65.3
	赤ちゃんの泣き声	50.0~54.0
最大値：70.1 最小値：43.4		

の差が見られた。拍手の大きさは最大 63.8dB, 飛行機の通過音は最大 63.1dB, 子どもが遠くで叫んだ際の大きさは 65.3dB でこれらは同程度の大きさであった。しかしながら, 子どもの叫び声や赤ちゃんの泣き声が特に大きな音として聞こえるように感じられた。

## (2) 丘の上テラス横

丘の上テラス付近では, 子どもたちが水鉄砲や水風船などで遊んでいた。初めはボールひろば入口にある水道を使っていたが, 途中から災害時の利用のために整備され日常的にも使用可能である, 井戸の水も使い水遊びをしていた。騒音計設置場所のすぐ横にある倉庫では, 消防士・消防団員が防災訓練で使った道具を片付けたり, ボールひろば利用者が倉庫からテニス用具を出したりしていた。騒音計の設置場所と井戸・水道, ボールひろば等の配置を Fig.2 に示す。測定結果は南側と同様, 録画した動画で騒音計画面の数値の動きを確認し, 音の大きさが目立つものを抽出して Table 3 にまとめた。

音圧の最大値は 96.1dB, 最小値 51.5dB であった。最小値の 51.5dB は表中にはない数値であるが, これは抽出した特に目立った音以外の音から測定されたものである。最大値の 96.1dB は子どもが水遊びをしている時に測定された音の大きさであるが, 動画からはそれほど大きい音は確認できず, 音の発生源は不明である。騒音計を井戸のすぐそばに設置したこと, ボールひろば入口付近の水道から騒音計までの距離が 6.7m と, 子どもの遊んでいる場所と騒



(雑司ヶ谷公園ホームページより筆者作成 <https://zoshigaya.org/zoshigaya-park.html>)

Fig.2 Placement of a noise meter and the layout of the surroundings

Table 3 Measurements around the Okanoue terrace

音の種類		音圧 (dB)
子どもの声	叫び声	78.0,78.4,81.1
	高い声	76.1,81.5
	赤ちゃんの泣き声	泣き始め前後で 数値変化なし
ボール広場での大人の声		63.9
テニス道具を出し入れする音		70.0~71.0
スピーカーによる 防災訓練終了の放送		75.0~77.0
風		68.7
最大値：96.1dB 最小値 51.5dB		

音計の距離が近かったことから、子どもが声を発すると簡単に 70dB 超えることを動画確認時に感じた。子どもの叫び声は高い音であるせいか特に耳に響くように感じた。一方で、赤ちゃんが泣き始める前と後で騒音計の数値が変化せず、耳にははっきり聞こえても騒音計の数値には表れていないものがあった。

### (3) 北側敷地境界線

測定結果を公園南側、丘の上テラス横の測定同様、録画した動画で騒音計画面の数値の動きを確認し、音の大きさが目立つものを抽出して Table 4 にまとめた。音圧の最大値は 78.6dB、最小値は 44.7dB であった。最大値、最小値ともに表中にはない数値であり、これらの音は抽出した特に目立った音以外の音から測定された。防災訓練が予定よりも早く終了したこと、お昼時であったことから公園内にあまり人がいなかった。他の時間帯に測定すれば、音はより大きな数値として表れたと考えられる。特に大きさが目立った音として、騒音計近くで発生した音が多く挙げられた。子どもの声や交通音、風の音など、音の種類に関わらず 70dB 前後の音が多く確認された。公園の敷地境界線上で測定し住宅がすぐそばに建っていることから、生活する中で大きな音として感じられる場面が多いことが考えられる。

#### 2-2-3. 事後調査で発せられた音の種類と大きさ

6月26日(日)の防災訓練の際に北側敷地境界線上で音の計測をしたが、公園内に人があまりいなかった。活動量の多い時の音を測定すべく、9月17日(土)に再び測定をおこなった。6月26日(日)の測定は正午過ぎに行い公園を訪れる人が少なかつ

Table 4 Measurements at the northern property line (June 26th)

音の種類		音圧 (dB)
子どもの声	遊ぶ声	50.0~57.5
	叫び声	50.3~54.9
	声を上げて走りながら 騒音計前を通過	52.2~78.6
	話しながら騒音計前を通過	67.3
	遠くにいる友達を呼ぶ声	67.9
騒音計近くを人が話しながら通過		54.1~65.9
騒音計の近くをスケボーが通る		57.2
交通音	騒音計近くを自転車を通る	49.9~52.1
	車がエンジンをかけて発車し 騒音計近くを通過	56.8~68.3
	消防車が公園に入ってくる・ 出て行く	60.0~70.0
	騒音計近くを車が通過	64.2
風		48.0~67.2
鳥のさえずり		50.5
最大値：78.6 最小値 44.7		

たため、今回は午前中に測定した。

測定時は、ボールひろばで大人がテニスをしていた。ボールひろば近くではテニスボールが地面に跳ね返る音やラケットに当たる音が聞こえたが、北側敷地境界線上ではそれほど聞こえなかった。芝生広場には3歳くらいまでの子どもとその親が5,6組いた。子どもの叫び声などは聞こえず、静かに散歩をしているようだった。丘の上テラス内の集会室では、親子デーという小さな子どもとその親が一緒になって楽しむ催し物が行われていた。

防災訓練での測定と同様に、録画した動画で騒音計画面の数値の動きを確認し、音の大きさが目立つものを抽出して Table 5 にまとめた。最大値は 69.8dB、最小値は 44.0dB で、最小値は表中には示されていないが、これは抽出した特に目立った音以外の音から測定された。6月26日(日)の北側敷地境界線での測定結果は、最大値 78.6dB、最小値 44.7dB であり、6月26日(日)の方が数値の大きい結果となった。この背景は、公園内にいる人の数自体は9月17日(土)の方が多かったものの、騒音計の近くを通った人は6月26日(日)の方が多く、騒音計と音の発生源との距離に差が見られたことだと考えられる。



騒音計の数値としては表れなかったが、親子デーが行われていた集会室から子どもの声はかなり大きく聞こえるように感じた。親子デーは、可動間仕切りを開けて2室ある集会室を1室にして使い行われており、コロナの換気あるいは気温による暑さのためか、窓を開け網戸のみが閉められた状態で行われていた。子どもの声が大きく聞こえたことから、子どもの遊びへの苦情は屋外のみならず屋内での活動も対象となっている可能性が考えられる。

**Table 5** Measurements at the northern property line  
(September 17<sup>th</sup>)

音の種類	音圧 (dB)
車が騒音計近くを通過	61.3, 54.6
バイクが騒音計近くを通過	69.8
人が通過	54.0
セミの鳴き声	48.0~52.0 45.0~63.6
最大値: 69.8 最小値: 44.0	

### 3. 公園での測定結果の考察

雑司ヶ谷公園での測定において、子どもの声が特に響くように感じられ、騒音計の数値としても70dBを超え大きな音であることが示された。しかしながら、風や交通音など子どもの声以外でも70dB近くに達した音は多く、その中で特に子どもの声が騒がしく感じられるのには何らかの要因があると考えられる。文献調査により子どもの声や音の聴こえ方の特徴を整理し、子どもの声が騒がしく感じられる要因を考察する。

#### 3-1. 子どもの声の大きさの程度と身体への影響

雑司ヶ谷公園での測定では、防災訓練・事後調査のどちらの測定においても、子どもの声が高頻度で70dBに達していた。橋本<sup>3)</sup>は保育園にて世界で初めて子どもの遊び声の騒音測定調査を行い、騒音計から10mの距離で50人の子どもが園庭遊びをする際の音の大きさは約70dB、20人の場合には約65dBであることを示した。雑司ヶ谷公園の測定では公園を訪れた人の数は数えなかったが、子ども20人が遊ぶことのできる広さは十分にあり測定でも70dBの数値が示されたことから、65~70dB程度大きさが日常的に出ている可能性は大いにある。

この65~70dBという大きさであるが、著しく大

きな音を発生させる特定工場の一般住居地域における騒音規制基準は最大60dBである<sup>4)</sup>。子どもの声は特定工場の規制数値よりも高く、また一般的に静かだと感じられる基準は30dB~40dBとされることから<sup>5)</sup>かなり大きな音であることがわかる。音の大きさによる身体への影響としては、67~85dBで気分がイライラする、休息や睡眠障害、思考力低下などの心理的影響や交感神経の緊張など生理機能への影響を及ぼすとされており<sup>6)</sup>、70dBの子どもの声によりこれらの身体的影響が及ぼされる可能性は十分にあると考えられる。一方で、長期的に騒音に晒されることで起こる騒音性難聴の基準は80dBであり、子どもの声は単発的なものであるから、子どもの声により騒音性難聴に至る可能性は低いと考えられる。

#### 3-2. 子どもの声が騒がしく感じられる要因の検討

##### (1) 子どもの声の周波数と音の聴こえ方の特徴

人間の耳で聞くことのできる音の周波数範囲は、およそ20~20,000Hzであり、周波数が高くなるにつれて感度は上昇し3,000~4,000Hz付近の音が最もよく聞こえるとされている<sup>7)</sup>。橋本は前述の保育園での騒音測定により、子どもの遊び声の周波数は1,000Hz~2,000Hzにピークがあることを明らかにした。成人男性が会話する際の音の高さは125Hz~250Hz、成人女性の場合は250Hz~500Hzで、子どもの声の高さは成人と比べ2倍~8倍である。子どもの声は非常に高く人間の耳によく聞こえやすい周波数であることが、子どもの声が騒がしく感じられる要因の1つといえる。そして高齢者においては、「補充現象」により特に子どもの声が響いて聴こえるように感じられると考えられる。「補充現象」とは老人性難聴の一つで、小さな音は聴こえづらいが大きな音は敏感で不快に感じてしまうという現象である<sup>6)</sup>。子どもの声は特に響いて感じられる音に当てはまるとされており、高齢者は特に子どもの声を不快に感じやすいことが考えられる。現在問題となっている外遊びをする子どもの声への苦情は、声の高さは12歳ごろまでは男女で大きな差はなく、15歳までに成人と変わらない音響特性をもつ音声が生産されることから<sup>8) 9)</sup>、12歳までの子どもが対象となっている可能性がある。

## (2) 雑音・残響環境下における会話の特徴

荒井ら<sup>10)</sup>によると、静かな環境に比べ雑音や騒音、残響のある環境では音声の生成の仕方に特徴があるという。その一つがLombard効果である。これは、特に雑音環境下で音声を生じるときに、静かな環境下よりも大きな声になり、周波数も高くなる現象である。静かな環境下では、それほど大きな声を出さなくても会話は成立する。しかし同じ空間で複数の会話が行われる場合、周囲が騒がしくなると背景の音に負けないようにするため個々の会話が大きくなり室内全体の音圧は上昇し、その結果さらに会話が大きくなるというのがLombard効果である。複数の会話がされる喫茶店において話し声が大きくなることから“cafe効果”ともいわれ、残響環境下でも同様の現象が起こるとされる。

荒井らは文献[10]の中で、マスキング雑音の騒音レベルを変化させることにより会話の大きさの変化の程度を検証する実験の結果、Lombard効果は大人より子どもの方が大きくなることを報告している。周囲が騒がしい環境であるほど子どもは自分の声を大きくする傾向が強いことから、遊びが盛り上がり1人の子どもの声が大きくなると周りの子どもの声も大きくなり、子どもたち全体の声が大きくなる結果、近隣住民から騒がしいと感じられるのだと考えられる。

## (3) 家の作りとまちの作りの関係

雑司ヶ谷公園の作りには2つの特徴がある。1つは公園施設の配置 (Fig.3) である。Fig.1のA街区と雑司ヶ谷公園の関係を示している。雑司ヶ谷公園での事後調査の際、室内で親子が参加する催し物(「親子デー」)が丘の上テラス内の集会室で窓を開放した状態で行われていた。音が外に漏れ出ており、音への苦情は屋外で発生する音だけでなく屋内への音に対しても発生する可能性が見受けられた。Fig.3に示すように、丘の上テラスは道路に面した場所であり、道路側の窓を開放すれば住宅内に音が伝わりやすい。よって窓の開放はボールひろばなどがある公園内側のみとし住宅が立ち並ぶ方角の窓は開放しないなど、換気や気温調節の方法にも対策の余地があると考えられる。加えて、丘の上テラス近くの住宅の窓は南の方角である公園に向かって設けられている。南向きの住宅を好む人が多い中で外遊びをする子どもと近隣住民が共生していくためには、南に

面しないように公園の設置場所を選ぶことや住宅内に音が入り込みづらい配置にするなど、公園自体の設計方法を工夫する必要があると考える。

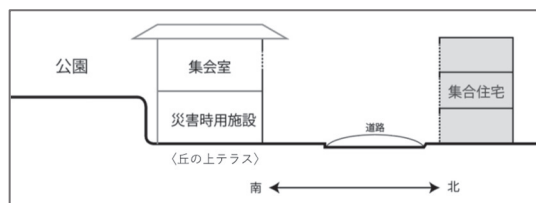


Fig.3 The spatial relationship between Zoshigaya Park and residential areas (Block A)

雑司ヶ谷公園のもう1つの特徴は、公園と周辺住宅に高低差があることだ。Fig.1のB街区について、(a), (b)の断面図をそれぞれFig.4に示しており、公園のレベルと住宅の1階部分のレベルに約2mの高低差がある地点がある。Fig.4(a)のように公園のレベルと1階部分の高さが変わらなければ、1階にはテレビを見るなど娯楽を楽しむリビングがある住宅が多くあるから、あまり公園での音は気にならないかもしれない。しかしながら、雑司ヶ谷公園のレベルはFig.4(b)に示すように寝室や勉強部屋が設けられることの多い住宅の2階とほぼ同じ高さであり、静かな環境が求められる部屋に遊ぶ子どもの声が直接的に入り込みやすい。高低差があるというまちの作りと部屋の配置という住宅の作りの関係が、子どもの声の騒音感に影響を及ぼしている可能性がある。

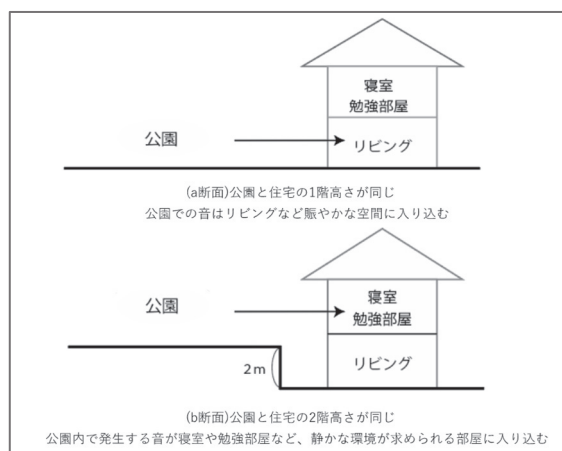


Fig.4 Difference in elevation between Zoshigaya Park and residential areas (Block B)

### 3.3. 法整備による展望

今年 4 月、子どもの声は騒音ではないとする法律の必要性が国会で話題となった。国会で例として取り上げられたドイツでは、児童保育施設の騒音を巡って住民が損害賠償などを求める訴訟がたびたび起こっていたが、2011 年の連邦法改正により子どもの味方をした判決が次々と出されるようになったという。日本では子どもの声に対する法からのアプローチとして、2015 年に東京都が「子どもの声」を都の騒音条例の騒音規制から外す見直しを行った事例がある<sup>11)</sup>。

角田は、西洋人と東洋人での音の捉え方の違いを指摘している<sup>12)</sup>。私たち人間は、言葉や計算などの知的作業を左脳、音楽や雑音など非言語音を右脳で処理しているが、東洋人は子どもの泣き声やハミング、動物の鳴き声などの非言語音を言語能で処理する一方で、西洋人はこれらの音を音楽脳で処理するという。つまり、日本人は一つ一つの音を言語として受け止め意味を理解すべくしっかりと聞いてしまうが、西洋人は BGM のように聞き流すことができるのである。これを踏まえると、ドイツで子どもの声を保護する法の整備により騒音問題が改善されたことは、脳の音の捉え方の特徴が背景にあると考えられるのではないか。日本で法整備を行うには、西洋とは音の捉え方が異なることを踏まえた実現の可能性を検討する必要があると考える。

### 4. まとめ

本研究では、外遊びにおける子どもの声が騒音と捉えられている現状を踏まえ、騒音計を用いて屋外で音の測定を行い、測定結果から子どもの声の騒音感について考察を行った。

雑司ヶ谷公園での測定では子どもの声が特によく響くように感じられ、騒音計の数値としても大きな音であることが示された。一方で、風や交通音なども子どもの声と同程度に達する大きさであることが確認された。この結果について、文献調査により子どもの声と人間の音の聴こえ方の特徴、家の作りとまちの作り方の関係から要因を考察し、国ごとの音の受容の仕方から、子どもの声を保護する法の整備による外遊び環境の改善の可能性を検討した。

音の感じ方は人によって異なるものであり、音への苦情は近隣住民との関係性など、本稿で明らかにした物理的側面以外の要因もあることが大いに考え

られる。人々の生活と音は密接に結びついており、物理的環境以外の側面からも検討する余地がある。

### 〈参考文献〉

- 1) 渡辺暁彦：学校と騒音をめぐる法的問題 ―子どもらの発する声や物音は「騒音」か？―，滋賀大学環境総合研究センター研究年報 Vol.15 No.1 p.52-70, (2018)
- 2) 橋本典久・安部信行：保育園での子どもの声の騒音問題に関する市民意識調査結果，日本建築学会技術報告集 第 24 巻第 56 号 p.237-242, (2018)
- 3) 橋本典久：保育園での子供の遊び声に関する騒音測定調査 ―子どもの遊び声の大きさとその特性について―，日本建築学会環境系論文集 第 81 巻 第 729 号 909-917, 2016 年 11 月
- 4) 総務省公害等調整委員会事務局：騒音：低周波音について 第 3 回：騒音規制法の規制基準，([https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000716146.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000716146.pdf)) (最終閲覧日：2023 年 10 月 28 日)
- 5) 旭川市：音の大きさ及び振動のめやすについて，(<https://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/kurashi/271/299/306/d053190.html>) (最終閲覧日：2023 年 10 月 28 日)
- 6) 厚生労働省，和田哲郎：騒音性難聴による生活の質と労働生産性の低下を防ぐ予防から発症後まで俯瞰したデータ収集と現場の支援に関する研究，令和 2 (2020) 年 3 月
- 7) 伊藤謙治・桑野園子・小松原明哲：人間工学ハンドブック，朝倉書店，2003 年 6 月 20 日
- 8) 鈴木誠史：音声と話者の相関関係について，日本音響学会誌 41 巻 12 号 (1985)
- 9) 麦谷綾子・廣谷定男：子どもの声道発達と音声の特性変化，日本音響学会誌 68 巻 5 号 (2012)，pp.234-240
- 10) 荒井隆行・麦谷綾子：子どもを取り巻く音環境と音声言語に関わる発達について，日本音響学会誌 72 巻 3 号 (2016)，pp.129-136
- 11) 村頭秀人：子供の声等に関する東京都の環境確保条例の見直し案について，騒音防御：Vol.39, No.3 (2015)，pp.66-69
- 12) 角田忠信：言語脳と音楽脳，1984 年 6 月，機関誌 36 号





# 個の多様性を尊重したニュージーランドの保育・教育

— 短期視察研修からの学び —

Childcare and Education in New Zealand that Respect Individual Diversity:  
Learning from a Short-term Study Tour

山口 舞*	大野 康子*	小田 桜乃*
Mai YAMAGUCHI	Yasuko OHNO	Sakurano ODA
齊藤 花奈*	中里 啓子*	請川 滋大**
Kana SAITO	Hiroko NAKAZATO	Shigehiro UKEGAWA

**要約** 2023年3月11日から17日までの7日間、本学が実施した「ニュージーランド幼児教育視察研修」に参加した。Waikato 大学ではウェンディー・リー先生のお話を伺う機会に恵まれ、その後、主にオークランドとハミルトンの保育園、プレイセンター、小学校、特別学校を見学した。ニュージーランドの教育カリキュラムは、子どもを「有能で自信に満ちた学び手」とするテ・ファリキが用いられている。訪問先の各施設ではテ・ファリキに則った保育・教育が行われていた。本稿では、筆者らが目の当たりにしたそれらの保育・教育を報告するとともに、日本との違いが感じられた点にも触れている。ニュージーランドの個の多様性を尊重する保育・教育内容、親主導型施設、保育者の働き方、幼小接続、特別な支援を必要とする子どもへのサポートなどから、日本に取り入れられることがあるとすれば、それはどのようなことを考え、視察研修にて学んだことをまとめた。

**キーワード**：テ・ファリキ、ラーニング・ストーリー、ウェルビーイング、プレイセンター、幼小接続

**Abstract** The “New Zealand Early Childhood Education Study Tour” took place for 7days from March 11 to 17, 2023. At the University of Waikato, we had the opportunity to hear from Wendy Lee, Director of the Educational Leadership Project. We then toured three nursery schools, playcentre, primary school, and special needs school in Auckland and Hamilton. New Zealand’s educational curriculum uses Te Whāriki, which describes children as “competent and confident learners.” At each of the facilities visited, childcare and education were provided in accordance with Te Whāriki. Here, we report on the childcare and education we witnessed at the facilities we visited. We also discuss some of the differences between New Zealand and Japan in terms of childcare and education. We summarize what we learned during our study tour, considering what, if anything, Japan can adopt from New Zealand’s childcare and education, respect for individual diversity, parent-led facilities, working patterns of childcare workers, the connection between preschool and primary school, support for children with special needs, and other aspects.

**Key words** : Te Whāriki, Learning story, Well-being, Playcentre, Connection between preschool and primary school

## 1. はじめに

本学では、2023年3月11日から17日までの7日間、学生を対象とした「ニュージーランド（以下、NZ）幼児教育視察研修」が実施され、ハミルトンとオークランドを主に訪問した。本稿では、各施設

---

\* 家政学研究科児童学専攻  
Graduate School of Home Economics,  
Division of Child Studies

\*\* 家政学部児童学科  
Faculty of Home Economics, Department of Child Studies

の見学や現地教員の話などから見てきた NZ における幼児教育の特色や日本との比較などについて考察を行う。

### (1) NZ の概要 (山口)

NZ は、南西太平洋のオセアニアに位置し、首都はウェリントン、最大都市はオークランドである。国土面積は約 27 万 km<sup>2</sup>、人口は約 520 万人<sup>1)</sup>。民族比は欧州系 70.2%、マオリ系 16.5%、太平洋島嶼国系 8.1%、アジア系 15.1%、その他 2.7%<sup>2)</sup> 注1) の多民族国家である。公用語は、英語・マオリ語・NZ 手話である。

先住民族であるマオリ族には、かつて欧州系移民と対立した歴史がある。1980 年代以降はマオリ文化への尊重に対する世論が高まり、就学前から大学に至る高等教育まで積極的にマオリ文化を学ぶ機会が取り入れられていく。

NZ において、日本の保育所保育指針や幼稚園教育要領にあたるものがテ・ファリキ (Te Whāriki) である。内容は、4 つの原理「エンパワメント」「ホリスティックな発達」「家族とコミュニティ」「関係性」と、5 つの要素「ウェルビーイング」「帰属感」「貢献」「コミュニケーション」「探究」から構成されている<sup>3)</sup>。マオリ文化の神話に基づいた精神が取り入れられており、「子どもは宝」として、子ども中心に考えることを第一としている。「子どもたちは、有能で自信に満ちた学び手」として成長することが示され、「何かができる有能な子ども」ではなく「有能だと思える自信」を育てていくことに重きを置いている<sup>4)</sup>。

また、テ・ファリキの作成時には、幼児教育の専門家だけでなく親の意見も広く取り入れられたことが特徴の一つである。そのため、1996 年に作成されて以降、親主導型を含む幼児教育 (Early Childhood Education 以下、ECE) 施設や家庭でも取り入れられている。具体的な実践の方法はそれぞれの機関に委ねられているが、2008 年には国内のすべての ECE 施設で、テ・ファリキに沿ったカリキュラムが導入されている。

### (2) NZ の教育制度について (大野)

NZ の教育制度は基本的に幼児教育、初等教育 (year0 から year6)、中等教育 (year7 から year13) の後、高等教育 (国立総合大学 8 校、教育大学 4 校、

ポリテクニク専門学校 21 校、マオリ大学 3 校) に進学することが出来る。幼児教育を行う施設としては、保育者主導型の公立、私立の幼稚園や保育園、親主導型のプレイセンター、コハンガレオ他、特別な支援が必要な子どもの教育施設などが存在する<sup>5)</sup>。

NZ は 2007 年、教育省によって旧カリキュラムを改定し、ナショナル・カリキュラムであるニュージーランド・カリキュラム (The New Zealand Curriculum 以下、NZC) を教育課程の基準とした。21 世紀に対応した学習観としてのキー・コンピテンシー<sup>注2)</sup>を中心としたカリキュラムを適応し、目指すべき人間像を「自信を持ち、他者と繋がり、能動的に活躍する生涯にわたる学習者」として掲げた<sup>6)</sup>。

NZC のアセスメントにおいて、乳幼児は「何が出来たようになったのか」という従来の目標達成型ではなく「何を学んでいるか」という視点でラーニング・ストーリーを用いて評価している。ラーニング・ストーリーは保育者がテ・ファリキの理念を意識しながら子どもの学びの過程を可視化し、文章だけでなく写真も用いて、エピソードや語りを中心に記録する方法である。それを親と共有し、保育者だけでなく親も子どもの成長を支え、共に評価することを特徴としている。

また、各教育段階間の円滑な接続は、我が国と同様に NZ においても課題となっておりテ・ファリキから NZC への移行に関して、能力観の継続性・一貫性が保たれるよう配慮されている<sup>7)</sup>。

## 2. 遊びを保障し親も共に成長する親主導型 ECE 施設 [Tamahere Playcentre] (齊藤)

プレイセンターは 1941 年、NZ にて「母親の自由な時間と未就学児の社会的発達の機会」を提供することを目的として、親たちが共同で設立したのが始まりとされている<sup>8)</sup>。現在は 0~6 歳の子ども連れの家族を対象とし、「親は子どもたちの最初の教育者である」との考えの基<sup>9)</sup>、利用する親は必修の学習コース<sup>10)</sup>があるなど子どもと共に親の成長も促す ECE 施設である。2022 年時点で NZ 内にある認可されたプレイセンターは、ECE 施設の 8.4%である 389 ヶ所となっている<sup>11)</sup>。

筆者らはその中の一つ、Tamahere Playcentreを訪れ、有資格者の方のお話を伺った後、施設内を自由に見学した。この施設の利用時間は平日の 9 時~13 時で、料金は利用頻度にかかわらず 1 学期 (10 週)

ごとに \$50 となっている。2 歳半以降は子どもを預けて買い物に行くことも可能とのことで、親が子育てから一時離れるという設立当初の目的も引き継がれていた。運営は非営利で行っているため有資格者への給料はなく、ボランティアだという。室内には、粘土や木製のままごと道具、絵本、ビーズが入った筒などの手製の玩具、松ぼっくりや貝、布や造花といったさまざまな製作の材料 (Fig.1) とノコギリのような工具 (Fig.2) などが、コーナーごとに子どもが好きな時に使えるよう置かれており、充実した環境が整えられていた。プレイセンターには他の ECE 施設と同等の、利用する子どもの人数と時間に応じた補助金が政府から出されており、製作の材料などの購入にあてられているという。室内からはテラスを通して屋外に出ることができ、下にウッドチップが敷かれた複合遊具や砂場、ブランコなどがあ

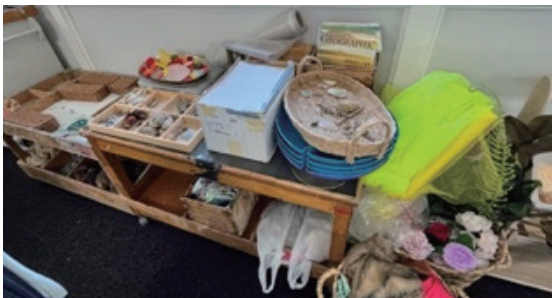


Fig.1 Production materials corner



Fig.2 Shelf with tools

今回の訪問を通して得られた、プレイセンターに関する知見として、特に以下の 3 点を挙げたい。

1 点目は、プレイセンターを制度として整備して

いる点である。認可制度や補助金の導入時は、政府が関与することでプレイセンターの独自性が失われることを懸念する声もあったという<sup>12)</sup>。しかし視察において、有資格者対子どもの人数比 (最大 1:5) やテ・ファリキに則った、他の ECE 施設と同等の活動内容の充実が基準として定められ、政府からの補助金で設備を充実させているなど、保育の質が確保されていると感じた。

2 点目は、親の保育への参加だ。プレイセンターを利用することで親が子どもと共に遊び、学習コースもあることから関わり方を学ぶことができ、それを期待してプレイセンターを選ぶ親もいるという。Tamahere Playcentre では、ラーニング・ストーリーを 1 学期に 2 枚程度、各子どもの親が書くことになっている。初めは書き方などに戸惑うが、子どもの様子を写真に撮り、有資格者のサポートを受けたり、他の親のラーニング・ストーリーを参考にしたりしながら書き上げ、振り返ることを繰り返して慣れていくとのことだった。

3 点目は、子どもを尊重する姿勢である。前述したように物的環境が充実しており、子どもの「やりたい」という気持ちが保障されていると感じた。また、遊びの内容に関しては事前の細かなルールはなく、あるとすれば「周りの人や物、場所を大事にする」、「工具は靴を履いて大人と一緒に使う」といった最低限の内容や、「ポジティブに関わる」という価値観に近いものなどであり、火や工具を使った遊びも可能なのだという。これは、テ・ファリキの 5 つの要素にもなっている「探究」の機会を保障しているといえるだろう。例えば、剣の玩具の扱い方が問題になれば、親全員で集まり話し合って決めていくとのことだった。「小学校では、他の ECE 施設よりプレイセンターの子どもは大人に自分のニーズを伝える力がよく育っていると言われる」との話も聞かれた。親が近くにいる安心感の中、少人数で過ごし、ニーズを伝えやすい環境にいたからこそその評価であろう。また、プレイセンターに入って正面の壁には、利用する子どもたち各々のルーツである国を示した世界地図が掲示されていた。テ・ファリキの 5 つの要素の一つ「コミュニケーション」の項では、初めに「子どもたち自身の文化およびその他の文化のことはや象徴的表現は推進され、守られる」と明記され、手話、美術、音楽、動作も含む各々の文化の「ことば」に関する能力と理解の発達が重要とさ



れている<sup>13)</sup>。また「帰属感」では、「子どもたちは、乳幼児教育の場が、彼らの広い世界の一部であり、保護者やファナウ（子育て応援隊）も含まれることを理解する必要がある。子どもたちは、自分の文化やことば、世界観などが、乳幼児教育の場で大切にされていることを頻繁に感じるできると、環境に馴染みやすい」<sup>14)</sup>とされている。この世界地図は、子どもたちが自分や他の子どものルーツである国を目にすることで、多様な文化の言葉などに興味をもつきっかけとなったり、家族のルーツを含めたありのままの自分が認められている安心感から、このプレイセンターの一員なのだと感じられたりすると考えられ、5つの要素「コミュニケーション」や「帰属感」に繋がるのではないだろうか。

最後に、日本プレイセンター協会加入のプレイセンターを確認すると現在19ヶ所のみであり<sup>15)</sup>、加入はしていないが似た運営形態の施設があるにしても、未だ普及段階にあるといえるだろう。日本のプレイセンター普及の足枷として、活動場所の確保の難しさや開催日数の少なさ、プレイセンターの理念に対する参加者の無理解などが挙げられている<sup>16)</sup>。今後、国をあげて経済的な支援と保育の質を確保する基準を設けることは必要なことではないだろうか。またNZのプレイセンターでは、親の成長も目的とされているが、日本においても、親として成長していく過程への支援の必要性が認められている<sup>17)</sup>。日本に合ったプレイセンターの制度整備や、池本（1999）が述べているように休日や平日の夕方に開設する<sup>18)</sup>など親の保育への参加方法を今後検討していく必要があるだろう。また、子ども一人ひとりの興味関心やルーツを尊重することは日本でも共通して求められることであり、NZのプレイセンターから学ぶ点は多くあると考える。

### 3. 保育園（中里・大野）

#### （1）一人ひとりの生活リズムが保障されている 【Campus Creche Trust】（中里）

筆者らは、1973年に親協同組合として設立され、自然をベースとして幼児教育が行われている、University of Waikato（以下、Waikato大学）の敷地内にあるCampus Creche Trust（以下、Creche）を訪問した。クラス分けの月齢と保育者と子どもの人数比はTable 1に示す。

Table 1 Adult to child ratio at the Campus Creche Trust<sup>19)</sup>

クラス	月齢	人数比（人）
WHEIKI	3ヶ月～1歳6ヵ月	1:4
KOWHWI	1歳3ヵ月～2歳6ヵ月	1:5
MAIRE	2歳～3歳9ヶ月	1:8
KAURI	3歳～6歳	1:9

NZの教育省は、ECEサービスにおける出席する子どもの数と大人の人数比を示している。例えば、1日利用のECE施設の場合、2歳未満は子ども1～5人につき1人、2歳以上では、1～6人につき1人である。また、ここでの大人として適用される者とは、「食事の準備と配膳、管理業務、メンテナンス以外の業務に従事する人は17歳以上である」と明記されている<sup>20)</sup>。日本の保育所では以下の表の通り、保育士の配置基準が児童福祉法により規定されている（Table 2）。

Table 2 Staffing standards for Japanese nursery schools<sup>21)</sup>

月齢	人数比（人）
乳児	1:3
満1歳以上3歳未満	1:6
満3歳以上4歳未満	1:20
満4歳以上5歳未満	1:30

Crecheのクラスごとの人数比及び、NZの基準は、日本と比べ3歳以降の大人の数が手厚いことがわかる。さらに、人手不足となる時間帯について、NZの教育省は、「昼食中、休憩中、またはノンコンタクトタイム中は大人としてカウントされない」と考慮するよう規定している<sup>22)</sup>。このような基準や規定の違いと、保育の現状や労働環境の違いに関連があるか、今後の検討事項としたい。

Creche園内の環境としては、クラスごとに平家型の園舎に分かれており、それぞれの園庭には裸足で遊ぶことが可能なウッドチップが敷き詰められていた。午後の訪問であったが、午睡中の子ども、室内と園庭で遊ぶ子どもがおり、それぞれのペースで過ごしている様子であった。午睡や食事の時間に関して保育者に尋ねたところ、特に時間は定めておらず、どの年齢でも全員が一斉に午睡する必要はなく、一人ひとりの様子に合わせて食事や睡眠をとっているということであった。NZの基準よりも上回る職員配置をし、午睡の部屋と遊びの場所が分けられていることから、無理のない人的配置と空間的保証が



なされているといえるのではないか。

3歳半以降のクラスにて、保育者に保育をする中で重要なこととは何かと尋ねたところ、「子どものことをよく知り、信頼関係を築くこと」と語っていた。日本の保育においても、保育所保育指針や幼稚園教育要領にて子どもと保育者・教師の信頼関係の重要性について記載されていることから、重視している点は共通しているといえよう。しかし、Crecheでは、信頼関係を個別に築くために、余裕のある人員配置をし、それぞれの子どもに合った生活ができるようにしている点においては、日本の現状とは異なると筆者は考える。さらに、毎週の会議では一人ひとりのカリキュラムを話し合うことと、ラーニング・ストーリーを書くことが日々の業務のほとんどであるということからも、個を重視していることが感じられる。

以上より、Crecheでは、日本と異なる配置基準の下、一人ひとりを大切にしたいカリキュラムの話し合いやラーニング・ストーリーの作成による子どもとの信頼関係を重視する保育が行われていた。

## (2) 子どものルーツや思いを尊重する

### 【Campbells Bay Early Learning Centre】(中里)

筆者らは、オークランドからさらに南方のキャンベルズベイにある Campbells Bay Early Learning Centre (以下、Campbells Bay) を訪問し、保育補助として働く日本人の方にお話を伺った。

Campbells Bayでは、保育業務としての、年間カリキュラム、週案・月案ではなく、子どもたちの日々の声を拾い、子どもがどんなことをしているか、どのようなことに興味があるのかをメモし、明日、来週、来月というように興味が続くまで遊びを繋げていく保育を行っている。さらに、その内容をクラスの職員で共有し、正規雇用の保育者がストーリーパークというシステムを用いてドキュメント化・文字化し、個人別やグループ別のラーニング・ストーリーを作成している。

このようなラーニング・ストーリーを書く時間として、ノンコンタクトタイムが1人につき週に2時間は保障されているようだ。他にも、休暇については、1日8時間、週5日、トータル週40時間働く職員は年間での有給が4週間保障されており、休憩についても法律で定められているとのことであった。保育者のウェルビーイングが意識されており、園全

体の雰囲気としても休暇や休憩をとりやすいというお話から、労働環境が整備されていることが窺える。

保育室内の環境では、NZの特徴として、マオリ文化を活かした活動の様子が掲示されていた。また、壁には、ファナウウォールとして、テ・ファリキの5つの要素の一つである「帰属感」を意識できるような、ファーナウ(子育て応援隊)の紹介がマオリ語でされていたことから、多文化を大切にする意識があることは明らかであった。

また、子どもと保育者との関わりの中で、“not”や“don't”を使わないようにし、“Can I~?”と聞き、相手の思いを尊重しているというお話もあった。子ども同士の物のやりとりでは、貸してあげることを促すのではなく、先に使っている子の主張として“My turn. Wait please.”と伝えられるよう促し、それぞれの意見を大切にしたい上で、時間を区切ることが意識できるような物的環境として砂時計を用意するなどの援助を行うという話があった。

このように、子ども一人ひとりを大切にすることが意識されている中でも、個別にそれぞれの時間を過ごすだけではなく、4・5歳のクラスでは、クラス全体で集まる様子を実際に目の当たりにした。数名の子どもが率先して、Fig.3のようにマットの上にクッションを並べ、保育者がベルを鳴らすと、子どもたちが集まってくる。しかし、全員で集まることを強制するのではなく、参加しなくても良いというお話もあった。この時間では、週末体験したことや、家族についての紹介など、自分の意見を言う場としても活用されているとのことで、テ・ファリキの5つの要素である「帰属感」や「コミュニケーション」が強く関わる場所であると考えられる。一見すると、集団での活動のように捉えることもできるが、これも、一人ひとりが自己発揮できる場となり、個の意見を尊重する機会になるといえよう。



Fig.3 After preparing for mat time

以上のように、Campbells Bay においては、職員同士が日々の子どもの姿を共有し、共通認識をもった上で、一人ひとりのルーツや文化、思いを尊重した保育が行われていることが窺い知れた。保育者の働き方や業務内容についても整備がなされ保育者のウェルビーイングが意識された職場環境であった。

### (3) キリスト教信仰を軸にした私立保育園

#### 【Small Fries Christian Childcare Centre】(大野)

オークランド・ノースショアのマイランギ湾に位置した Small Fries を訪問した。Small Fries は2010年、地元のマクドナルドがウィンザーパークバプテスト教会に売却され、コミュニティの家族や子どもたちにサービスを提供するチャイルドケアセンターとして運営を始めた。キリスト教の教えとテ・ファリキを融合させたカリキュラムを行う私立保育園であり、0歳3ヶ月から6歳が通園している。保育者と子どもの人数比を Table 3 に示す。

**Table 3** Teacher to child ratios at Small Fries Christian Childcare Centre<sup>23)</sup>

クラス	月齢	人数比 (人)
babies	3ヶ月～12ヶ月	1:3
toddlers	1歳～2歳	1:4
2-3½-year-olds	2歳～3歳6ヶ月	1:6
pre-schoolers.	3歳7ヶ月～6歳	1:8

NZ 政府は保育を利用する親に対して週20時間は無料になるシステムを導入している。保育利用のパターンや料金について Table 4 に記した。

**Table 4** The 20 ECE Hours rate is charged for those hours outside of the 20 hour ECE scheme only<sup>24)</sup>

	Under 3 Years	
	Full Day 7:30am – 5:30pm	Short Day 8:30am – 3:30pm (Minimum 6.5hrs)
5 Days	330.00	300.00
4 Days	295.00	247.00
3 Days	235.00	194.00
	3 Years & Over with 20 ECE Hours	
	Full Day 7:30am – 5:30pm	Short Day 8:30am – 3:30pm (Minimum 6.5hrs)
5 Days	240.00	210.00
4 Days	205.00	157.00
3 Days	154.00	113.00

Small Fries は単なる保育園というだけではなく、地域社会に奉仕するための社会的企業であると園長は述べている。慈善団体として利益をセンターやコミュニティに投資し、雇用機会を創出すること、また、支援の必要な家族にカウンセリングを行ったり、シングルマザーに対してはサポートプログラムやフードボックスなどを提供したりしている。

園の保育者は子どもたち同様にさまざまな国の出身である。子どもに対する視点や対応にばらつきが生じないかを質問したところ、保育の一貫性を保つ為、園ではポジティブガイダンスポリシー<sup>25)</sup>を取り入れているとのことであった。幼児期の子どもたちは自分のニーズや衝動を非言語的な行動で伝えることがあるとし、そのような場面においては個々のニーズを考慮しながらも保育者が介入することが記されていた。具体的には噛む、打つ、押す、怒鳴る、言葉で他人を傷つける、などが容認できない行動として挙げられ、これらについて行動のフィードバック、子ども自身のネガティブな感情の理解、ポジティブな代替手段の提供など賞賛や励ましを用いてサポート、指導することが保育者の役割なのだと明記されていた。これは「保育者が子どもの行動をコントロールするのではなく、子ども自身が自尊心と尊厳を守りながら感情を理解し、表現するようになる戦略的なサポートである」と語る園長の言葉が印象的であった。

### 4. 個の発達に応じたなだらかな幼小接続

#### 【Belmont Primary School】(山口)

NZ では、5歳の誕生日を迎えた子どもから初等教育課程（日本の小学校にあたる）に随時入学していく。初等教育課程は year0 から year6（5歳～11歳）までで、5歳の誕生日を迎えた子どもは year0 となる。year0 に5月31日以前に誕生日を迎えた子どもたちが集まり、2月から year1 の新年度が始まる。

筆者らは、オークランドに位置する Belmont Primary School を訪れた。この学校には、400名から430名程度の児童が在学していて、その国籍は44ヶ国にわたり、多国籍の児童が共に学んでいる。

授業の時間割はなく、決められた休み時間もない。担任教員が全科目を担当し、子どもたちの様子を見ながら適宜休み時間を設けている。1日の授業は、午前が“study”，午後は“relax”を意識して構成さ

れている。学習はそれぞれのペースに合わせて進めていけるよう教科書はなく、教員がペーパーを用意する。そのため一人ひとりの教員の力量が問われる教育方法であるともいえる。子どもによっては、算数が得意なら算数の時間だけ上の学年の授業を受けることもできる。

### (1) 訪問時の授業風景

筆者らの訪問時、1年生は“P”の学習をするにあたり、子どもたちは“P”で始まるもの（princess, pirates など）に変身して登校していた。2年生は“FL”の学習をするにあたり、各自がボートを作ってプールに浮かべる活動“flow”をしていた。そして、友だちが作ったボートを見ながらよかったところを付箋に書いて共有する時間も設けられていた。6年生は、プリントの課題を各々が好きな場所を選んで取り組んでいた。教室中でも校庭でも、自由に場所を選んで取り組んでよいということだった。

### (2) 幼小接続

ECE 施設では、4歳から5歳は初等教育課程に入るまでの準備期間として読み書きに親しむ時間が設けられている。そして、5歳の誕生日会には、これまでのラーニング・ストーリーを振り返りながら個人にフォーカスし、一人ひとりの卒園児を送り出していく。ECE 施設から初等教育課程には、ラーニング・ストーリーとは別に作成した卒園児に関する文書で申し送りをする。これがいわゆる日本の指導要録にあたる。ラーニング・ストーリーはポジティブな記述のみであるが、申し送りのための文書には、子どもの課題についても記述されており、親と初等教育課程の両方に渡している。

year0 は、幼児教育から初等教育に慣れていくための移行期間である。初等教育課程には必ずしも5歳の誕生日の翌日から行く必要はなく、6歳になるまでに入学すればよい。そのため、親と相談しながら個人の発達に合わせたタイミングで入学することができる。初等教育課程の教室には、6歳頃まで、ままごと、レゴブロック、ぬいぐるみなどが置いてあるプレイコーナーが設置されている。

Belmont Primary School の見学を通して、伸び伸びとした校風、ゆったりとした時間の流れを感じた。次に筆者の思う NZ の幼小教育の特徴を述べる。

まず、幼小の接続に関しては、それぞれの発達に合わせた無理のないなだらかな移行が行われていた。また、初めて ECE 施設に入る子どもたちにも無理のない移行が行われていた。筆者らがお話を伺った ECE 施設の体験保育は、日本のプレ保育のように決められた曜日や時間ではなく、親と一緒にであれば、ECE 施設に好きな時間に来て好きな時間に帰ってよい。年齢や回数の制限もない。そのため、子どもの様子に応じて、安心できたタイミングで入園を決めることができる。未就園児から初等教育課程まで、親子ともに不安感が強くなるとされる各接続期において、親と子どもの気持ちを大いに尊重した仕組みができていていると感じられた。

初等教育課程では、低学年のうちは教科で区切りすぎない幼児教育に近い学習内容が展開されていた。中学年以降も教員によるコントロールを緩めて、子どもの自立を促している。それぞれの発達に合わせた無理のない学習内容となっている。緩やかな学習を行う NZ の子どもと日本の子どもの学習到達度を比較してみる。OECD 加盟国（37ヶ国）による2018年学習到達度調査平均得点の国際比較は以下のようにになっている（Table 5）。

Table 5 Programme for International Student Assessment<sup>26)</sup>

順位	読書リテラシー	平均得点
8	ニュージーランド	506
11	日本	504
順位	数学リテラシー	平均得点
1	日本	527
22	ニュージーランド	494
順位	科学リテラシー	平均得点
2	日本	529
7	ニュージーランド	508

学習到達度の国際的な位置づけは、総合的に見て日本の方が高いといえる。このような結果から、NZ 国内ではテ・ファリキの子どもの主体性を重んじる理念と学力低下の間の繋がりを懸念する声も聞こえている。そこで教育省は、これらの声に応える形でテ・ファリキの2017年版を作成した。改訂版は、これまでのカリキュラム・フレームワークは堅持したまま現代的かつ実用的にリフレッシュされ、「就学後カリキュラムと接続の重視」などに関する記述が加えられた<sup>27)</sup>。NZ の教員から聞いた話によると、



「ボトムアップではなく個性を伸ばす教育を行っているため、学習を疎かにする子どもの学習能力は低下傾向があり、伸びる子どもはどんどん伸びる。しかしながら、子どもたちの自己肯定感や自己解決力、回復力は高い」とのことだった。国として子どもたちの全体的な学力の向上を視野に入れながらも、そればかりに捉われることなく、一人ひとりの発達や個性を尊重する教育が行われている。そのような環境の下で育つ NZ の子どもたちからは、これからの社会を生き抜くために必要な非認知能力や心の強さが感じられるといえるだろう。

## 5. すべての子どもは有能な学び手

### 【Wairau valley special school】(小田)

筆者らは国立の特別学校へも見学に行った。学校の名前には「水が溢れている場所」という意味があり、かつての生徒が命名したと教えていただいた。一般に「障害」という日本語を英訳すると“disability”となるが、校長が真っ先におっしゃったのは「not disability, 私たちは ability という前向きな言葉を用いる」ということだった。日本においても「障害」の表記についてさまざまな見解が見られるが<sup>28)</sup>、NZ のこの学校において、その呼び方からも「すべての子どもは有能な学び手」と捉えるテ・ファリキからいえるように、前向きで積極的な指導が見てとれる。この学校に在籍する生徒は5歳から21歳までであり、日本と比べて特別なニーズをもつ子どもに対する支援期間が長いことがわかる。21歳以降は社会の一員として過ごす時間となるため、1人での自立した生活を送るための活動(料理やゲームなど)を取り入れたり、最終学年になると地域に関わるプログラムを受けたりする。卒業後は、国や、契約したヘルパーからの援助を受けながら働く。これより、NZ では障害をもつ方に対し、国が労働環境を保障していることがわかる。特別なニーズに対する支援が学校に通っている間だけにとどまらず、継続的に社会と繋がりながら支援を受けられる体制が整っていることは重要である。

筆者らが見学に行った特別学校に就学するまでの過程をお聞きしたところ、まず ECE 施設から評価され、親が申請し、国の審査を経て決定されるという。ここでは、特にニーズが高い生徒が通う学校としてスキルを身につけ、その後は普通学校へ通えるようにしていくようである。池本(2020)によれ

ば、2022年時点のNZにおいて障害のある子どものみを対象とする特別学校に通う割合が0.5%と諸外国の中でも顕著に低く、通常の保育施設や学校で何らかの支援を受けている子どもが10人に1人と高い割合になっている<sup>29)</sup>。これは、障害の有無にかかわらず子どもたちが同じ場で学ぶインクルーシブ教育を推進するNZでは、障害をもつ子どもだけが在籍する学校を減らしているためである。日本の特別支援教育においては、文部科学省を筆頭に、インクルーシブ教育システムの構築が推進されているが、その流れからは逆行するかのようになり、また少子化が進行しているにもかかわらず、特別支援学校・特別支援学級の在籍数や、通級による指導を受ける生徒数は増加している。2022年に行われた国連の審査において、日本がインクルーシブ教育の遅れを厳しく避難された理由の一つでもある。さまざまな背景が推測されるため、一概に比較することは難しいが、日本の特別支援教育とは明らかに方向性の異なるNZの制度から学ぶ点はあるだろう。

さて、この学校では80%が自閉症の生徒ということもあり、視覚的なツールが至る所に見られた。絵のボードや小さなカードでコミュニケーションを取ったり、行動の流れを示したりする。絵の内容は屋外にあるものと室内にあるものでは上段に記載する内容を少しずつ変えるという工夫がされていた(Fig.4, Fig.5)。

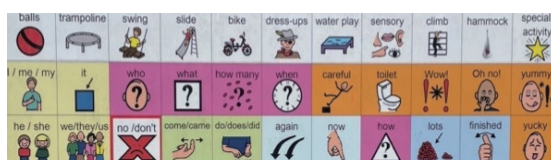


Fig.4 Outdoor picture board



Fig.5 Indoor picture card

上記の写真からわかるように、色や絵、言葉などの複合的な視覚的要素を使ってニーズを満たし、コミュニケーションを図ったり生活したりしていた。他には、感情(anger/happy など)が色によって分けられ、各感情に沿う表情の絵が描かれた表も見ら



れた。これは、まず自分の抱く感情の名前を知り、理解し、“manage”する方法を考えていくために用いられていた。またこの“manage”は“not control”であると校長が強調していた。

ところで NZ といえば、2006 年に手話を世界で初めて公用語にした国として知られている。この学校でも多くの生徒がビジュアルコミュニケーションとして使っており、室内の壁面にはアルファベットの手話版である指文字の絵が貼られていた。前述したように、絵カードや手話など、自閉症に優位といわれる視覚的なツールを個人のニーズに合わせて用いていることがわかった。また、多動傾向にあり動いた方が集中できる生徒に対して回る椅子を用意したり、刺激を好む生徒に対して凸凹の座席シートを用意したりするなどが見られた。

以上のことから、この学校において、個人それぞれで異なるニーズを満たすための配慮がところどころに見られ、ある程度の枠組みはあるものの、柔軟に対応していることがわかった。一方、「国立ゆえに国からの支援が手厚い」というお話もあったため、NZ 国内のすべての特別学校において、この学校と同じように対応できているかどうかは議論の余地があるだろう。とはいえ、インクルーシブ教育への関心が高まり、日本でも喫緊の課題として挙げられる近年、NZ の取り組みから学ぶこともあると筆者は考える。

## 6. おわりに（請川）

日本女子大学の公認で NZ 幼児教育研修を行ったのは 2018 年夏が初回であった。それまで本学では保育・幼児教育を学ぶための海外研修はスウェーデンで行うものしかなく、念願であった NZ 研修を公認研修として実施できたのだが、当時の参加者は児童学科の学部生 9 名のみであった。その後も継続的に行う予定であったもののコロナ禍の影響で海外研修はすべて取りやめとなり、約 5 年ぶりに実施できたのが今回報告にまとめたこちらの研修である。この度の研修には 33 名の学生が参加したのだが、文学部英文学科の学生 2 名と家政学研究科児童学専攻の大学院生 5 名が参加してくれたことは喜ばしいことであった。今回の報告はその大学院生たちが中心となってまとめたものである。

研修の内容については屋上屋を架すようなことはせず、ここまでに触れられていないことをこちらに

書いてまとめるの代わりとしたい。NZ に到着して 2 日目から本格的な研修が始まったのだが、午後、Waikato 大学にてウェンディー・リー（Wendy Lee）先生のレクチャーを受けられたことが大変良い機会となった。ウェンディー先生から講義を受けられるかもしれないということが分かってからは、院生と共にカー・リー（2020）<sup>30</sup>）を読み直し、事前学習をしてから NZ へ行くことにした。



Fig. 6 Professor Lee giving a lecture

ウェンディー先生の講義内では具体的なラーニング・ストーリーが紹介され、学部生にも分かりやすかったのではないかと感じる。特に印象に残っているのが、ある女の子が母親のためにスリッパを作ってあげたという話であった。お母さんがどんなスリッパだったら喜ぶかを考えながら園でスリッパを完成させ、それを母親にプレゼントした。ある日、母親から声をかけられた保育者は、そのまま家に招かれたという。家に行ってみると、プレゼントされたスリッパが大切に壁に飾られてあり、「これは私の宝物です」と保育者に伝えてくれたというものであった。ここには母親への「貢献」もあり、また家族の一員であるという「帰属感」という側面もあるだろう。園と家族がスリッパを通して繋がりを持っているところも興味深い。そもそもスリッパを作ったのは保育者が投げかけてなされたことではなく、その女の子が自分の意志で母親にプレゼントしたいという気持ちから起こったものであり、そこには行為主体性（agency）を十分に感じることができた。今回の研修を良い刺激として今後も筆者らの学びは続いていくことだろう。

## 謝辞

本稿執筆にあたりご講義いただいたウェンディー・リー先生をはじめ、見学をさせていただいた各施設の皆様に心より感謝申し上げます。

## &lt;注&gt;

- <sup>1</sup> ●複数回答者（混血等により、複数の民族を選択したものと思われる）が存在するため、各民族の合計は100%を超える。
- <sup>2</sup> ●基本的な知識、スキルを基盤として問題解決能力、創造力、コミュニケーション・チームワーク力などを含んだ人間の全体的な資質、能力。

## &lt;参考・引用文献&gt;

- 1) Stats NZ (NZ 政府), <http://www.stats.govt.nz> (2023 年 9 月 5 日閲覧)
- 2) 外務省, ニュージーランド基礎データ, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/nz/data.html> (2023 年 9 月 5 日閲覧)
- 3) 七木田敦, ジュディス・ダンカン: 子育て先進国ニュージーランドの保育－歴史と文化が紡ぐ家族支援と幼児教育, 福村出版 (2015)
- 4) 大橋節子, 中原朋生, 内田伸子, 上田敏丈: ニュージーランド乳幼児教育カリキュラムテ・ファアリキ (完全翻訳・解説) —子どもが輝く保育・教育のひみつを探る—, 建帛社 (2021)
- 5) 島津礼子: ニュージーランドの教育課程, 文部科学省国立教育政策研究所・JICA 地球ひろば共同プロジェクト グローバル化時代の国際教育のあり方国際比較調査 (2014)
- 6) 前掲 5)
- 7) 前掲 5)
- 8) NZ Playcentre Federation (NZ プレイセンター連盟), History, <https://www.playcentre.org.nz> (2023 年 8 月 15 日閲覧)
- 9) NZ Playcentre Federation (NZ プレイセンター連盟), About Playcentre・Frequently Asked Questions, <https://www.playcentre.org.nz> (2023 年 8 月 15 日閲覧)
- 10) 佐藤純子: プレイセンターにおける乳幼児期の親子参画の在り方に関する研究 SPACE プログラ
- ラムを実施することの意義と今後の方向性, 淑徳大学短期大学部研究紀要, 55, 65-79 (2016)
- 11) The NZ Ministry of Education (NZ 教育省), Annual ECE Census2022: Facts Sheets, <https://www.educationcounts.govt.nz/publications/ECE/annual-early-childhood-education-census/annual-ece-census-2022-fact-sheets> (2023 年 8 月 15 日閲覧)
- 12) 池本美香: プレイセンター50年の歩みと今後の可能性, 日本ニュージーランド学会誌, 6, 2-15 (1999)
- 13) 前掲 4)
- 14) 前掲 4)
- 15) 日本プレイセンター協会, 活動中のプレイセンター, <http://www.playcentre.jp/ittemiyo/pcsyosai.html> (2023 年 8 月 18 日閲覧)
- 16) 佐藤純子: 日本型プレイセンターに対するセンター代表者と参加家庭による活動評価, 淑徳短期大学研究紀要, 52, 95-116 (2013)
- 17) 内閣府, 子ども・子育て支援法に基づく基本方針の改正について, [https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/meeting/kodomo\\_kosodate/k\\_45/pdf/ref3.pdf](https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/meeting/kodomo_kosodate/k_45/pdf/ref3.pdf) (2023 年 8 月 20 日閲覧)
- 18) 前掲 12)
- 19) Campus Creche Trust HP より中里が作成, <https://www.campuscreche.co.nz/hillcrest/#anchor1> (2023 年 10 月 6 日閲覧)
- 20) The NZ Ministry of Education (NZ 教育省), NZ Legislation, Education (Early Childhood Services) Regulations 2008, Schedule 2 Adult-to-child ratios (minimum), <https://www.legislation.govt.nz/regulation/public/2008/0204/latest/DLM1412637.html> (2023 年 9 月 10 日閲覧)
- 21) 厚生労働省 (1947) 児童福祉法, 第 33 条より中里が作成
- 22) 前掲 20)
- 23) Small Fries HP より大野が作成, <https://www.smallfries.org.nz/mairangi-bay> (2023 年 8 月 1 日閲覧)
- 24) 前掲 23) より転載
- 25) positive guidance policy small fries Mairangi Bay 2023
- 26) OECD: 生徒の学習到達度調査 PISA, 文部科学省国立教育政策所 (2018) より山口が作成

- 27) 前掲4)
- 28) 大矢雅之：「障害者」から「障がい者」へ：「しょうがい」表記から見る，ノーマライゼーション社会へのアプローチ，法政大学公共政策研究科 公共政策志林，8，133-144（2020）
- 29) 池本美香：ニュージーランドのインクルーシブ教育とわが国への示唆，JRI レビュー，6，101, 73-91（2020）
- 30) M.カー，W.リー：学び手はいかにアイデンティティを構築していくか，ひとなる書房（2020）





## 共働き世帯の在宅ワーク環境について

— 戸建住宅における住まい方実態に関する研究 その2 —

Living Conditions for Dual-income Households to Work from Home:  
A Study on Living Conditions in Detached Houses, Part 2

古賀 蘭子\* 定行 まり子\*  
Mayuko KOGA Mariko SADAYUKI

**要 約** 本研究は、共働き世帯が暮らしやすい住環境の一案を提示することを目的に、アンケート調査および聞き取り調査を実施した。その結果を以下に記す。在宅ワークは2020年のコロナウイルス感染拡大に伴い開始した人が半数以上と最も多いものの、コロナ前からの実施者も一定数確認できた。妻のフルタイム勤務者は在宅ワーク頻度が高く、ダイニングテーブルで仕事をする合間の休憩時間や就業前後に家事や育児を効率的に行っている。効率的に仕事と家事を行う一方で、ワーク空間とリラックス空間の分離に対する要望が強く、空間的配慮が必要といえる。夫は在宅ワーク割合が高い場合は書斎等の個室利用、低い場合はダイニングテーブル利用が多い傾向であり、通信環境やデスク周辺等の環境整備に対する要望が高い。在宅ワーク場所は未使用の子ども室や大規模収納の転用、居室の一部のワークスペース化により確保されており、自由度のある計画が重要といえる。

**キーワード**：生活時間、家事、育児、気分転換、住環境整備

**Abstract** The purpose of this study was to propose living conditions that would be amenable to dual-income households. The results are as follows. Half of the people started working from home after the outbreak of COVID-19 in 2020. Wives working full-time worked from home more times per week and did housework efficiently by working at the dining table. They greatly wished to separate their workspace from their relaxation space, so spatial consideration are necessary. Husbands who often worked from home did so in private rooms while husbands who rarely worked from home did so at the dining table. Husbands ardently wanted an improved Internet connection and more comfortable desks and chairs. An unused children's room, large storage areas, and part of the living room were used to work from home. When planning a house, it needs to have a floor plan that can be changed at will without a fixed purpose.

**Key words** : Time for everyday activities, Housework, Childcare, A change of mode, Improved living conditions

### 1 はじめに

女性が結婚や出産を契機に仕事を辞める割合が減少し、就業率は上昇している。非正規雇用割合は25～34歳で2012年40.9%から2022年31.4%、35～44

歳で2012年53.8%から2022年48.4%と減少傾向にある。就業継続意識についても、「子供ができて、ずっと職業を続ける方が良い」が増加傾向にあり<sup>1)</sup>、正規雇用で働き続ける女性が今後も増加すると推察される。

働き方・意識の変化に反し、家事時間が女性に大きく偏り、男性の家事関連時間は微増に留まっている。特に諸外国に比べ、男性の有償労働時間が長い

---

\* 住居学科  
Department of Housing and Architecture

ため、家事関連時間が極端に短くなっている<sup>2)</sup>。

2020年から新型コロナウイルスにより在宅ワーク実施者が増加し、テレワーク導入企業は2022年51.7%と半数に上り、このうち9割は在宅ワークが採用されている<sup>3)</sup>。在宅ワーク実施により、男性女性共に通勤時間が減少し、男性は家事および家族との時間が増加している。一方、女性は家族との時間のみがやや増加するのみで、家事時間はほとんど変化が見られない<sup>2)</sup>。

在宅ワークは一定の企業において定着していくと予想され、住宅内で夫及び妻が働きやすく、そして生活しやすい空間の在り方を明らかにすることが重要となると推察される。

そこで、本研究は共働き世帯を対象に、在宅ワークの実態を明らかにすることで、共働き世帯が暮らしやすい住環境整備の一案を提示することを目的とする。特に、共同住宅より面積に余裕があり、自由設計が可能な注文戸建住宅を対象とすることで、様々な生活と働く空間の関係性を把握する。

## 2 調査方法

### 2-1. 調査概要

本研究では日本女子大学住居学科定行研究室と株式会社アキュラホーム<sup>4)</sup>との共同研究で行った「ライフステージによる住みこなし実態に関する研究」から得られた調査結果を元に分析を行う。調査は株式会社アキュラホームで注文住宅を建築した世帯主もしくはその配偶者に対しアンケート調査を2021年9月から11月に実施し、このうち、夫妻のいずれかが在宅ワークを実施している世帯を対象とし、夫および妻の就業形態別に在宅ワーク状況を把握する。さらに在宅ワーク実施世帯のうち、夫妻共にフルタイム勤務の世帯を対象に聞き取り調査を2022年11月から12月に実施し、在宅ワーク場所や生活時間等を明らかにした。詳細をTable 1に示す。

### 2-2. 対象者の概要

#### (1) 対象世帯の住宅概要

対象世帯の住宅概要をTable 2に示す。居住地は南関東が396件72%と大半を占め、東海、中国、北関東と続いた。住宅形式は専用住宅が490件89%にのぼる一方、事務所併用住宅11件、店舗併用住宅8件も確認できた。建物階数は2階建て488件88%と大半であるが、3階建て以上も40件7%と1割弱

である。建築年数は5年前及び10年前が約5割ずつである。

#### (2) アンケート回答者の概要

回答者の概要をTable 3に示す。回答者は男性が417名75%と3/4を占めている。年代は40代が287名52%と最も多く、50代および30代が20%ずつと続いている。家族人数は4人が249名45%と最も多く、3人134名24%、2人71名13%、5人58名10%と続いた。家族構成は夫婦+子が389名70%と大半を占め、夫婦のみが66名12%、夫婦+子+親が35名6%と続いた。子ども人数は2人257名46%と最も多く、1人148名27%、いないが81名15%である。

就業形態および勤務形態をTable 4に示す。就業形態は、夫の84%が会社員・公務員と大多数をしめ、妻は会社員・公務員およびパート・アルバイト33%、無職22%と三分した。勤務形態は夫の87%がフルタ

Table 1 An overview of the survey

アンケート調査	
対象	(株)アキュラホームで注文住宅を建築し、築5年目及び築10年目の世帯主又はその配偶者2525名を対象とし、アンケート調査票を配布。回答のあった1712名のうち、在宅ワークを実施している553名を研究の対象とした。
方法	対象者宅へ依頼書を持参し、許可の得られた場合は、WEBアンケートを実施。WEBアンケートが不可の場合は、紙面アンケートを配布し、郵送返却。
期間	2021年9月～11月
内容	属性(家族構成、就業状況、在宅ワーク状況、住宅形式等)、在宅ワーク開始時期、場所、頻度、時間数等
回収数	1712件(回答率67.8%)
聞き取り調査	
対象	アンケート調査時に聞き取り調査の協力承諾が得られ、夫妻共にフルタイム勤務で在宅ワークを実施している28世帯
方法	対象28世帯のうち、5世帯に打診し、許可の得られた2名に対し、ZOOMによるWEBインタビュー形式を実施。
期間	2022年11月～12月
内容	属性、在宅ワーク実態、居室の使い方、生活時間、家事の取り組み状況等

Table 2 A housing overview of respondents' households

居住地	n	%	住宅形式	n	%
北関東	18	3%	専用住宅	490	89%
南関東	396	72%	賃貸併用住宅	3	1%
東海	51	9%	事務所併用住宅	11	2%
中国	31	6%	店舗併用住宅	8	1%
不明	57	10%	不明	41	7%

階数	n	%	建築年	n	%
1階建て	25	5%	2016年	268	48%
2階建て	488	88%	2011年	274	50%
3階建て以上	40	7%	わからない	11	2%

Table 3 An overview of survey respondents

性別	n	%	年代	n	%
男	417	75%	20代	4	1%
女	135	24%	30代	111	20%
不明	1	0%	40代	287	52%
			50代	113	20%
			60代	31	6%
			70代	6	1%
			不明	1	0%
家族人数	n	%	家族構成	n	%
1人	6	1%	夫婦のみ	66	12%
2人	71	13%	夫婦+子	389	70%
3人	134	24%	夫婦+親	20	4%
4人	249	45%	夫婦+子+親	35	6%
5人	58	10%	単身	11	2%
6人	25	5%	単身+子	10	2%
7人以上	9	2%	単身+親	10	2%
不明	1	0%	その他	12	2%
子ども人数	n	%			
いない	81	15%			
1人	148	27%			
2人	257	46%			
3人	53	10%			
4人以上	9	2%			

イム勤務であり、妻はフルタイム勤務が29%、パート勤務21%、シフト勤務15%と、妻は多様な働き方であった。

夫の年代別に夫および妻の勤務形態を Fig.1 に示す。「夫フルタイム妻フルタイム等」には妻はフルタイム勤務に時短勤務を含めている。2,30代から50代は夫フルタイム妻フルタイム等が3割前後で最も多い。夫フルタイム妻パートは40代および50代で約15%であるが、2,30代は12%とやや少なく、反対に夫フルタイム妻未就業が24%と40代および50代より多い。60代は夫が定年に伴いフルタイム勤務から時短やパート勤務等に変更しているため、その他が78%と大半を占めている。

### 3 在宅ワークの実施状況

#### 3-1. 開始時期

夫および妻の就業形態別の在宅勤務開始時期を Fig.2 に示す。夫は「2020年のコロナウイルス感染拡大に伴い自宅でも仕事を始めた」が総じて多く、妻の就業形態がフルタイム等の場合は50%と半数、シフトやパート、未就業の場合は6割強と多い傾向である。「コロナウイルス感染拡大以前から」も2～3割を合計すると、調査を実施した2021年は8～9割が在宅勤務を実施している。妻もフルタイム等およびシフト勤務は「コロナウイルス感染拡大以前から」が約25%と夫と大きな差は見られないものの、

Table 4 Employment status of husbands and wives

就業形態	夫	妻	勤務形態	夫	妻
n	553	553	n	553	553
会社員・公務員	84%	33%	フルタイム勤務	87%	29%
パート・アルバイト	2%	33%	シフト勤務	3%	15%
自営業・自由業	10%	8%	時短勤務	1%	5%
内職	0%	1%	パート勤務	1%	21%
無職	1%	22%	その他	3%	7%
その他	3%	2%	配偶者はいない	2%	2%
不明	0%	1%	就業していない	2%	21%
			不明	0%	0%

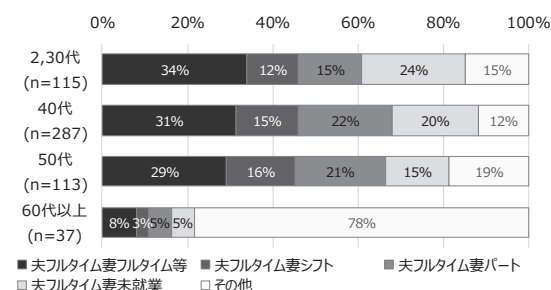


Fig.1 Working patterns of husbands and wives by age group

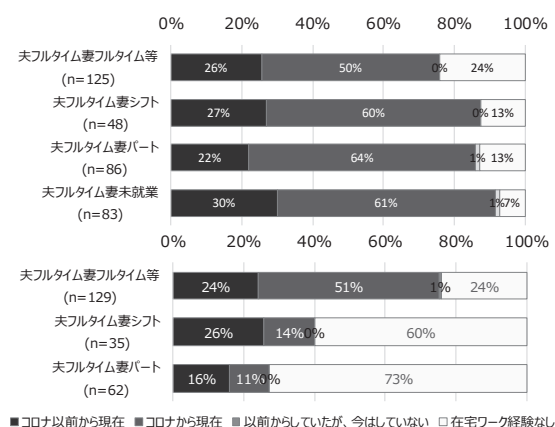


Fig.2 When to start working from home

「コロナウイルス感染拡大」がきっかけでの在宅ワーク開始はフルタイム等が51%、シフトおよびパートは10～15%と、勤務形態により大きな差が生じている。

#### 3-2. 頻度

夫および妻の就業形態別の在宅勤務頻度を Fig.3 に示す。夫で週1回以下は夫フルタイム妻パートが約5割と多く、夫フルタイム妻フルタイム等が約4割と続いている。週4回以上は夫フルタイム妻シフトおよび夫フルタイム妻未就業が約4割と多く、妻

の勤務形態との相関は見れなかった。

妻の頻度は夫フルタイム妻フルタイム等で週4回以上が約4割にのぼり、夫フルタイム妻シフトおよび夫フルタイム妻パートは週1回以下が5割前後と半数をしめた。

### 3-3. 在宅ワーク時間

夫および妻の就業形態別の在宅勤務時間を Fig.4 に示す。夫は妻の勤務形態にかかわらず7時間以上が5～6割とおおよそ半数となり、夫フルタイム妻シフトは3時間以下が37%と最も多い。妻は夫フルタイム妻フルタイム等の場合、7時間以上が51%にのぼるものの、夫フルタイム妻シフトおよび夫フルタイム妻パート勤務は3時間以下が約5割と、勤務形態により在宅ワーク時間に大きな差がみられる。

### 3-4. 在宅ワーク時間と頻度の関係

在宅ワークが高頻度かつ長時間の「夫フルタイム妻フルタイム等」の在宅頻度別の在宅ワーク時間の関係を Fig.5 に示す。夫は全ての頻度において、7時間以上が55～65%と、在宅勤務を行う日は終日就業が多いといえる。一方、妻は週4回以上の場合、7時間以上が72%であることにに対し、週1回以下は3時間以下が54%と、頻度と時間に相関関係がみられる。つまり妻で在宅頻度が少ない場合、在宅勤務時間も限定的されるといえる。

## 4 在宅ワーク環境の実態

### 4-1. 在宅ワーク場所

在宅ワーク場所の傾向を明らかにするために、在宅状況を在宅頻度および在宅ワーク時間から Table 5 に示すとおり分類した。在宅度別の在宅ワーク場所を Fig.6 に示す。夫について、ダイニングテーブルは在宅度:中および在宅度:低が約5割と高い一方で、個室（書斎、仕事専用）は在宅度:中高が44%、個室（寝室の一角、自室）は在宅度:高33%と、使用度が高い場合は個室利用が多いといえる。夫と比較して妻は、ダイニングテーブルは在宅度:低は60%と最も高いものの、在宅度:高も53%、在宅度:中50%、在宅度:中高45%と、在宅度による特徴が見られない。総じて、個室利用よりダイニングテーブル利用が高く、夫および妻により、在宅ワーク場所の傾向が異なるといえる。

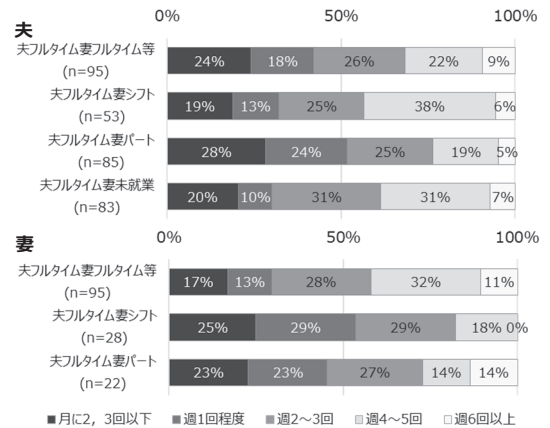


Fig.3 Number of times per week one works from home

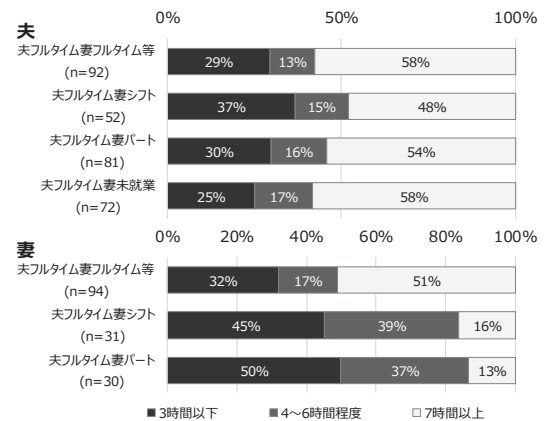


Fig.4 Hours worked from home per day

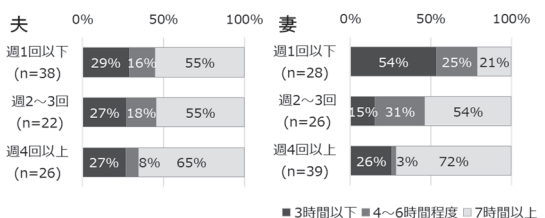


Fig.5 The relationship between the frequency of working from home and hours worked

Table 5 Classification of patterns of working from home

頻度 時間/日	週1回 以下	週2～ 3回	週4回 以上
	低	中	中高
3時間以下			
4～6時間程度			
7時間以上			



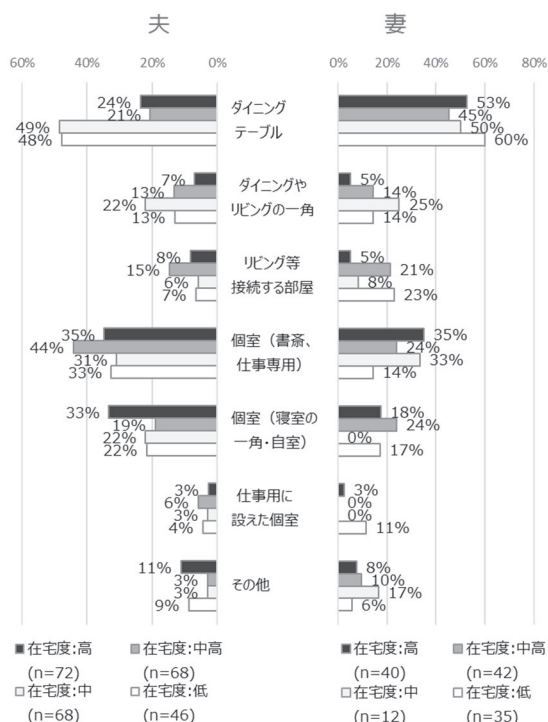


Fig.6 Places to work from home

## 4-2. 在宅ワーク場所の新規設定方法

コロナウイルス感染拡大に伴い、新規に在宅ワ

ークスペースを確保する必要性が生じた場合の、設定方法を Table 6 に示す。設計時にリビングにパソコンスペースや家事用スペースを計画し、急遽の在宅ワークに使用できている。同様に、寝室もスペースにプラスαの空間を持たせることで在宅ワークスペースが確保している。居室は用途を限定せず、フレキシブルに利用できる“ゆとり”をもたせることで、急な生活スタイルの変化に対応することが可能と考えられる。

一方、書斎や趣味室を設け、空間を完全に分離できる在宅ワークスペースをプラスして確保するケースも確認できた。一部屋余分に計画できない世帯でも、在宅スペース確保のための工夫が確認できた。事例として多いものは子ども部屋の転用である。子どもが小さいうちは、まだ個室を利用していないことから、将来のために用意している子ども部屋を在宅ワークスペースとしたり、反対に子どもの独立後、空いた子ども部屋を利用している。その他、ウォークインクローゼットの一部の書斎への転用や二世帯住宅の他世帯の居室を借用して在宅ワークスペース化するケースも確認できた。聞き取り調査の事例 A は夫が個室で在宅ワークを行っていたが、子どもの成長に伴い子ども部屋が必要になり、個室を子ども部屋とする代わりに未使用のガレージの一部を居室化し、在宅ワークスペースを確保しており、戸建住

Table 6 Examples of places from which to work from home

設計時に在宅ワークを配慮/在宅ワークスペースを計画		別の部屋を在宅ワークスペースにできた	
リビング	リビングを広くに設計し、デスクトップPCを操作するための専用スペースを設けてあったので、コロナ影響により在宅リモートワークを開始した後も特に支障や不満はありません。(男性,50代,夫婦+親,夫フルタイム妻パート)	子ども部屋	子供部屋を仕事部屋としている、高学年になると子供が利用するとおもうので、どこか別の仕事場所を確保するなり考えないといけない。(男性,40代,夫婦+子,夫フルタイム妻パート)
	リビングに備え付けの家事用テーブルがあり、リモートワーク時にデスクを購入しなくて済んだ。(コロナ前から行っていたことではあります)(女性,30代,夫婦+子,夫フルタイム妻フルタイム等)		子どもがひとり暮らしを始めて部屋がひとつ空いたため、仕事部屋に充てることができた。(男性,50代,夫婦のみ,夫フルタイム妻未就業)
寝室	寝室にデスクワークが出来る様、カウンターを設け回線も調べていたことが良かった。(女性,40代,夫婦+子+親,夫フルタイム妻パート)	子ども部屋	使っていない子供部屋を在宅勤務用の個室にしたことで仕事に集中できる。(女性,30代,夫婦+子,夫フルタイム妻フルタイム等)
	寝室の一角を在宅勤務用のスペースとできた。(男性,40代,夫婦+子,夫フルタイム妻パート)		あまり利用されていない子供部屋がリモートワークのスペースとして有効活用できた。(男性,40代,夫婦+子,夫フルタイム妻フルタイム等)
書斎	自室を広く作っていたこともあり、仕事スペースを十分に確保できた。(女性,40代,単身+親,その他)	収納	まだ子供部屋として仕様を替える前に、在宅勤務に対応出来る部屋が一室あった為、すぐに使用することが出来て良かったです。(男性,50代,その他,夫フルタイム妻パート)
	元々書斎を作っていたので、リモートワークもすんなりできた。(男性,30代,夫婦+子+親,夫フルタイム妻フルタイム等)		・ウォークインクローゼットの一部分を、本格的に私の書斎化した。(男性,40代,夫婦+子,夫フルタイム妻パート)
	書斎を作っていたので、リモートワークするのに困らなかった。(男性,40代,夫婦+子+親,夫フルタイム妻フルタイム等)	その他	二世帯住宅の親スペースを息子のリモートワークスペースにできた。(男性,60代,夫婦+子,その他)
	仕事部屋家事部屋があり、空間を分けられたことがよかった。(男性,30代,夫婦+子,夫フルタイム妻フルタイム等)		普段使っていない部屋が有りテレワーク出来て良かった。(男性,60代,単身,夫フルタイム妻パート)
	趣味部屋として小さな書斎の個室を設けたが、結果的にリモートワーク用の仕事部屋に転用できた。(男性,30代,夫婦+子,夫フルタイム妻未就業)		空いている部屋があったので、書斎を新たにつくった。(男性,50代,夫婦+子,夫フルタイム妻パート)

宅は様々な空間や居室での転用により在宅ワークスペースが確保しやすいと推察される。

戸建住宅は多用途に使用できる仕掛けを設定している居室や余分の個室確保、大きな収納の設置が容易であるといえる。そのため、様々なスタイルの在宅ワークスペースを確保しやすく、社会情勢の変化に適合しやすいフレキシブルさを持ち合わせているといえる。

#### 4.3. 夫および妻の在宅ワークおよび家事の実態

在宅ワーク時の家事と仕事の実態についての聞き取り調査の結果をFig.7に示す。事例Aは共に40代の夫婦、長男（高校生）、次男（小6）の4人家族である。夫婦はフルタイム勤務で、新型コロナウイルス感染拡大により在宅勤務を開始した。夫は週4～5回、妻は週2～3回、終日在宅ワークを実施している。夫の仕事が多忙で、妻は次男が小学校低学年まで専業主婦であったが、数年前から復帰し、現在はフルタイム勤務である。数年前まで妻が家事、夫が仕事という分担であったため、共働きとなった現在でも、家事はほとんどが妻が担当している。た

だし、在宅ワーク開始に伴い、通勤時間が減少し、子どもの勉強を見る育児時間が生まれている。また、昼食や夕食を妻と家族と共に摂ることができるようになり、家族時間が増加し、家族コミュニケーションがとりやすくなったようである。ガレージ付きの住宅を設計したものの、車は所有せず自転車置き場として利用していたため、ガレージの半分を書斎として改修し、夫が現在、在宅ワークスペースとして使用している。一方、妻は仕事の合間に家事や昼食の準備がしやすいという理由でダイニングテーブルで在宅ワークを行っている。

事例Bは共に40代の夫婦、長女（小2）、次女（保育園3歳）の4人家族である。2020年の新型コロナウイルス感染拡大直前は、妻が育休中、夫は毎日、通勤をしていたため、家事・育児は妻が担当していた。現在は夫は書斎にて在宅ワークを、妻は寝室の一角にある在宅ワークスペースで仕事を行っている。この寝室は家族全員の就寝の場であり、就寝スペースとワークスペースは壁で仕切られているものの、扉はなく、ワークスペースの光が就寝スペースに漏れ、子どもが目覚めてしまうため、妻は

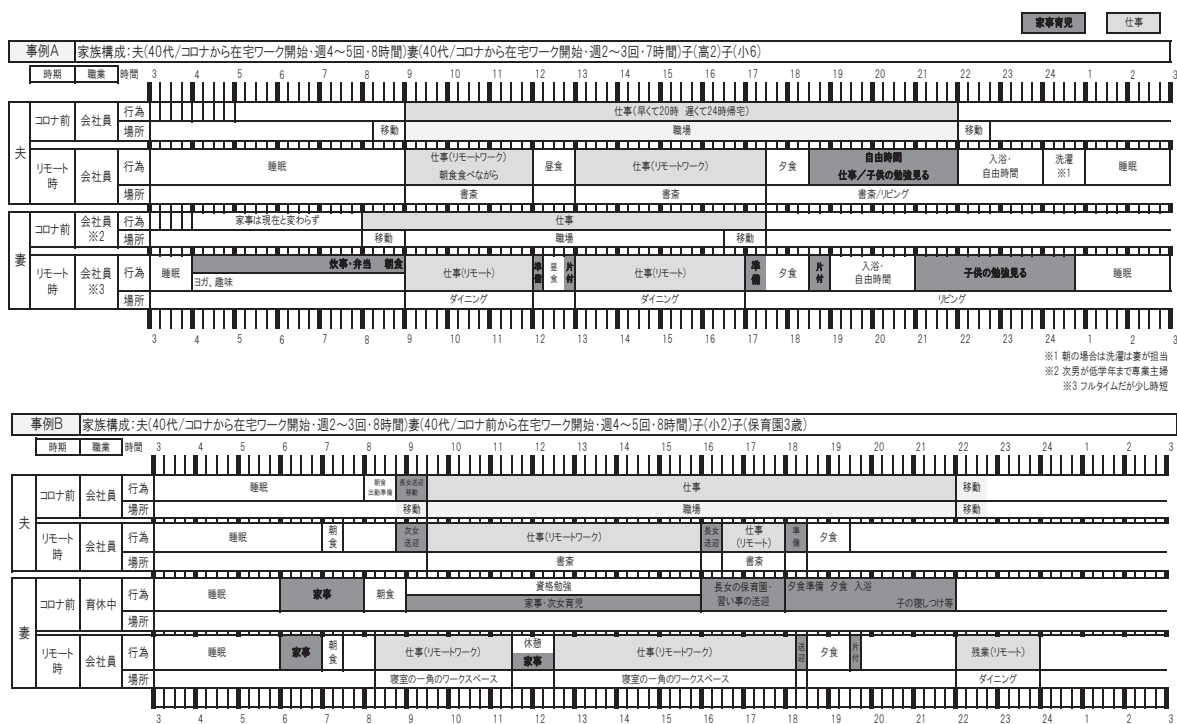


Fig.7 The reality of dual-income households working from home

夜の残業時にリビングへ移動している。リビングにはノートパソコンのみを持って移動し、大型モニターがないため、作業効率の低下が課題となっている。家事・育児については、新型コロナウイルス感染拡大前より夫が子どもの送迎を担当しており、現在も引き続き在宅ワークの日には子どもの習い事送迎および夕食準備を担当している。

いずれの事例も在宅ワークにより、夫の育児・家事担当は微増しているものの、育児・家事時間の大半は妻が担当しており、働き方そのものの改革が必要と考えられる。

#### 4.4. 在宅ワーク場所の環境整備実態

在宅度別の在宅ワーク場所の環境整備実態を Fig.8 に示す。夫は、在宅度:高及び中高は「集中するために1人だけの空間確保」が約5割と、妻の4割弱より高い傾向である。続いて、「LAN環境を整える」が約4割と、妻に比べ特に重視しているといえる。さらに「長時間座っても疲れない椅子の使用」「作業しやすい広い机を設置」は在宅度:中高であっても妻より夫のニーズが高く、作業周辺環境整備の希望が強いと考えられる。「生活音が聞こえないようドアや窓を閉める」は夫の在宅度:高及び中高で約3割あがり、音への配慮も重要といえる。事例Bは夫と妻の休憩時間が異なるため、昼食中に発生する音への配慮が必要である。夫妻はそれぞれ別の居室で在宅ワークを行うことから、リビングダイニングでの休憩中においても相手に音が伝わりづらく、リラックスして休憩することができている。

「温湿度・風通しの調整」は夫妻共に在宅度:中高及び高が約3割と、在宅度が高い場合、性別にかかわらず、在宅ワーク環境として重視する点であるといえる。

#### 4.5. 在宅ワーク時の気分転換等の実態

在宅度別の在宅ワーク時の気分転換や運動不足のためにしていることを Fig.9 に示す。妻の在宅度:高は「仕事空間とリラックス空間を分ける」が43%と夫よりも特に高い値となっている。また「掃除や断捨離等、身の回りを整頓する」が夫よりも高く、ダイニングテーブルの周辺の共用空間においても快適に仕事ができるよう工夫していると考えられる。

夫は「バルコニーや庭など、外部空間に出て、日

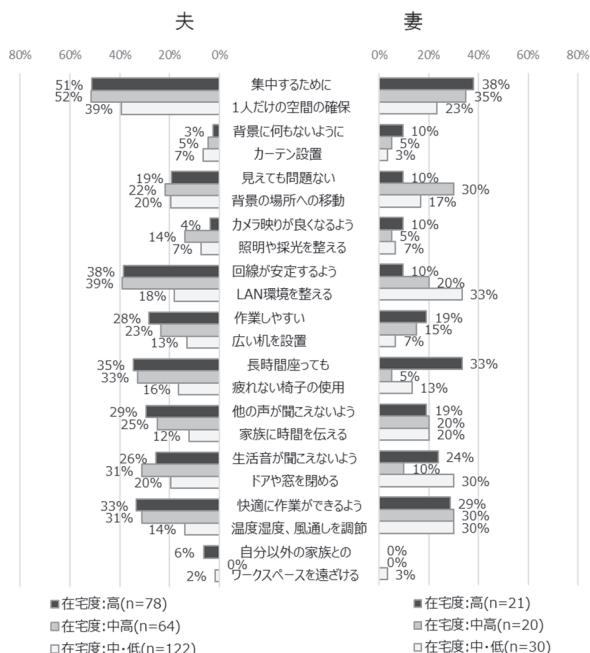


Fig.8 The current status of conditions in places where one works from home

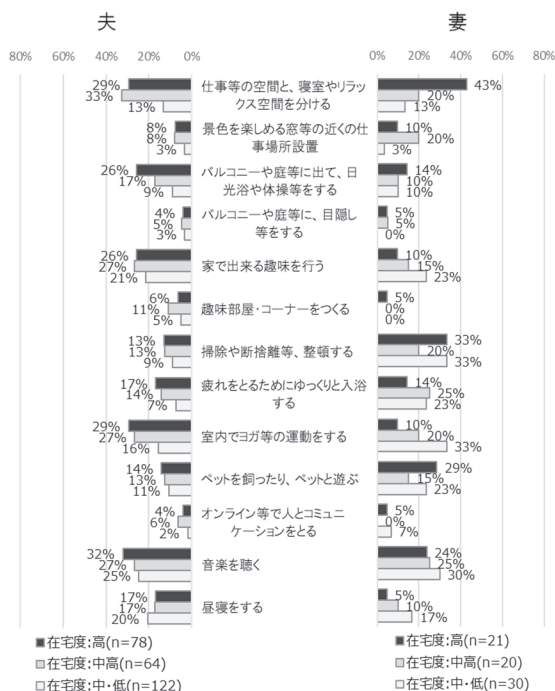


Fig.9 A change in one's mood while working from home

光浴や体操等をする」「室内で、ストレッチやヨガ等の運動をする」が在宅度:高及び中高で多く、夫は住宅内や敷地内に身体を動かす空間を必要としていると推察される。「音楽を聴く」は夫妻共に在宅度に関係なく2~3割が該当している。聞き取り調査において、事例Aは夫も妻も別々の居室で音楽をかけながら作業すると回答している。事例Aは1階の書斎で夫が、2階ダイニングで妻が仕事をしており、同時の在宅ワーク時は音が干渉しない別空間の確保が重要であるといえる。

事例A・Bの妻は共にヨガを気分転換に実施しており、事例Aはリビング階にある個室で、事例Bはリビングと、共用空間または、そこに近い空間の利用がみられた。また事例Bの妻は在宅ワークの椅子をバランスボールに変更し、日常的にストレッチをする等、運動不足解消に努めていた。更に、休憩時には気分転換のためにダイニングでテレビ視聴の他、洗濯物の取り込みや夕食作り、買い物等の家事を実施しており、休憩時間を有効活用し、仕事と家事の両立を図っていることが確認できた。

## 5 まとめ

本研究は、共働き世帯が暮らしやすい住環境整備の一案を提示することを目的に、戸建住宅に居住する在宅ワークを行う共働き世帯の仕事および家事の実態を把握した。

在宅ワークは2020年のコロナウイルス感染拡大に伴い開始した人が半数以上と最も多いものの、コロナ前からの実施者も2、3割と一定数確認できた。妻はフルタイム勤務者の在宅ワーク頻度が高く、在宅頻度が週4以上と高い場合、在宅時間は終日が多い傾向にあった。妻がフルタイム勤務で終日が在宅勤務である場合は、休憩時間や就業前後に育児や家事を効率的に行っている。夫も在宅勤務で育児や家事を分担する場合は、子どもにとって遅すぎない食事・就寝時間が可能になっていると推察される。

住宅内の在宅ワーク場所については、夫は在宅ワーク度により異なり、在宅度が高い場合は書斎等の個室利用、低い場合はダイニングテーブル利用が多い傾向であった。反対に妻は在宅度が高い場合で

もダイニングテーブル利用が多く、仕事の合間の家事実施と関連があると予想される。在宅ワーク場所は予備室の書斎化の他、未使用の子ども室や大規模収納の転用、居室の一部のワークスペース化により確保されていることから、居室の用途は限定せず、自由度のある計画が重要といえる。

夫で在宅ワーク度が高い場合は特に在宅ワーク環境整備に対する要望も多く、運動できる気分転換可能な空間確保も必要であるといえる。一方、妻は在宅ワーク環境よりも、在宅ワーク空間とリラクセス空間の分離を求めている。仕事時間の合間に家事も合理的に行いたいという要望もある場合は、家事空間との距離感への配慮も重要である。更に夫と妻が同時に在宅ワークを行う場合、オンライン会議時、休憩時やリラクセス時に生じる音の配慮も必要であり、空間分離や距離感の調整が望ましいといえる。

## 謝辞

本研究の一部は株式会社アキュラホーム（当時）と日本女子大学定行研究室による共同研究「ライフステージによる住みこなし実態に関する研究」によって得られた結果を再分析したものです。

本稿の調査においては、調査対象者の皆様に多大なご協力を賜りました。記して謝意を申し上げます。

## <注>

- 1 内閣府 男女共同参画局「男女共同参画白書 令和5年版」
- 2 総務省統計局「社会生活基本調査」平成18年、平成23年、平成28年、令和3年
- 3 総務省「令和4年通信利用動向調査の結果」令和5年5月29日
- 4 株式会社アキュラホームは2023年3月1日から商号を「株式会社AQ Group」へ変更している。完全自由設計の注文住宅の建設を主たる事業とするなか、2014年6月に住生活研究所を設立し、以来、様々な分野の専門家と共に住まいと暮らしの研究を行い、世代を超えて長く快適に暮らすことができる豊かな住環境の実現を目指している。



## ごっこ遊びの萌芽期を支える保育者の援助

— 2・3 歳児クラスの保育実践事例から —

How Early Childhood Teachers are Involved in Supporting  
the Budding Phase of Pretend Play by Children:  
Based on a Case Study of Childcare Practices in a Class of 2- and 3-year-olds

加 藤 直 子\*

Naoko KATO

大 野 康 子\*\*

Yasuko OHNO

中 里 啓 子\*\*\*

Hiroko NAKAZATO

永 島 さくら\*\*

Sakura NAGASHIMA

深 沢 佐恵香\*\*\*

Saeka FUKASAWA

請 川 滋 大\*\*\*\*

Shigehiro UKEGAWA

**要 約** 本稿では、2・3 歳児のごっこ遊びに焦点を当て、ごっこ遊びの萌芽期において重要な役割を果たす保育者の存在意義とその援助について明らかにすることを目的とする。2・3 歳児クラスのエピソードと保育者の援助について、意図的な関わり、子ども理解の視点から考察した。さらに、幼児の遊びについてピアジェの発達理論「同化」と「調節」によって説明した。幼児教育では、遊びが子どもの自由な発想のもとに行われる自発的なものであるという観点から、保育者の積極的な介入を嫌う傾向にある。しかし、2・3 歳児の遊びでは、保育者の一歩踏み込んだ援助も必要である。保育者は子どもの主体性を阻害することを過剰に恐れず、子どもの発達段階に応じた援助を行う、それによって子どもの遊びがより豊かに展開され、成長発達に繋がること、これこそが遊びを通した総合的な保育であると考ええる。

**キーワード**：ごっこ遊び、子ども理解、発達段階、保育者、保育者の援助

**Abstract** Early childhood (EC) teachers play an important role in the budding phase of pretend play. The purpose of this paper was to ascertain the significance of an EC teacher's presence and their assistance, with a focus on play by 2- and 3-year-olds. Episodes from a class of 2- and 3-year-olds and assistance by an EC teacher are discussed from the perspectives of intentional involvement and understanding children. Moreover, play by young children is explained by Piaget's developmental theories of "assimilation" and "accommodation." In EC education, there is a tendency to dislike active intervention by EC teachers because play is supposed to be spontaneous and based on the child's imagination. However, play by 2- to 3-year-olds requires the intervention by and assistance of EC teachers. The EC teacher should not be overly fearful of interfering with children's spontaneity but should provide assistance according to the child's stage of development, thereby enriching the child's play and leading to growth and development.

**Keywords** : Pretend play, Understanding children,

Developmental stage,

Early childhood (EC) teacher,

Support by an EC teacher

---

\* 立正大学

Rissho University

\*\* 家政学研究科児童学専攻

Graduate School of Home Economics,

Division of Child Studies

\*\*\* 山梨学院短期大学

Yamanashi Gakuin Junior College

\*\*\*\* 児童学科

Child Studies

## 1. 問題と目的 (加藤)

「遊びの始まり」、幼児期の遊びの分類や重要性、それぞれの遊びの定義について検討する前に、まず遊びがいつ、どのように始まるのかを意識したい。

ヒトは生まれ落ちた瞬間から周囲の環境に興味を示す。まずはその場の空気感に慣れ、徐々に自分を見つめる他者の視線、動き、声などを捉えられるようになり、その動きを目で追ったり、音がする方向に視線を向けたりするようになる。幼稚園教育要領には、遊び、環境、興味関心、好奇心という言葉が多く用いられているが、これはヒトの、この自身を取り巻く環境への興味こそが、遊びの原点であるからではないか。

ホイジンガ (J.Huizinga) は「遊びとは何なの

か、なぜ人は遊ぶのか」という問いを立て、そもそも人間とは「ホモ・ルーデンス＝遊ぶ人」であり、遊ぶことに人間の本質がある、遊びの中からあらゆる文化は生まれるという人間観を生み出した。さらに、「遊び」が人間の生活に意味を与えるものであるとし、人間は「楽しいから遊ぶ」というように、本能的に遊びを必要としていること、人生の営みにおける「遊び」の重要性を指摘している<sup>1)</sup>。

「遊び」の説明概念として、ホモ・ルーデンスという人間観が示された後、「遊び」については、表1に示すように発達心理学、社会学など様々な研究分野において検討されてきた。ここでは、ピアジェ (J.Piaget) の段階発達理論<sup>2)</sup>に着目する。

表1 古くからの「遊び」の種類

ピューラーの分類 (心理的機能面)	カイヨフの分類 (遊びの内容)	ピアジェの分類 (知的発達の見点)	バーデンの分類 (遊び方の観点)
①感覚遊び (機能遊び)	①競技遊び	①機能行使の遊び	①専念しない行動 (何もせずにぶらぶらしている)
②運動遊び (走る/投げる)	②偶然遊び (サイコロ遊び)	②シンボル遊び (ごっこ・想像・模倣遊び)	②傍観者遊び (他の遊びを見ているだけ)
③模倣遊び (想像/ごっこ遊び)	③模倣遊び	③ルール遊び	③ひとり遊び
④構成遊び (想像遊び)	④絃量遊び (渦巻き)		④平行遊び (他の子どものそばで、 同じような遊びを展開 するが互いに関わり合 わない)
⑤受容遊び (動植物・絵本)			⑤連合遊び (他の子どもと玩具の やりとりをして遊ぶ)
			⑥協同遊び(組織的遊 び:共通の目標に向け て仲間関係が組織さ れ役割を持って遊ぶ)

橋本創一・枘千晶 (2016) [https://jp.glico.com/boshi/futaba/no80/con01\\_03.html](https://jp.glico.com/boshi/futaba/no80/con01_03.html)

ピアジェが示した発達の4段階において、幼児期は前操作期に当たるが、この前操作期にある子どもは、感覚-運動期に獲得した「物の永続性」から発展し、目の前にないものを思い浮かべ、イメージすることができる「象徴機能」を獲得していく。この「象徴機能」が発達してくると、見立て遊びができるようになり「ごっこ遊び」などを楽しむようになる。この発達段階を踏まえ、ピアジェは遊びを知的発達の見点から「機能行使の遊び」「シンボル遊び」「ルール遊び」の3つに分類した。この分類に

よると、幼児には自身の体の動きを感じるだけで興奮し、その状態を楽しむ時期、物事をイメージする力を身に付け、モノにも意思があるかのようなアニミズム的世界観の中でごっこ遊びや模倣遊びを楽しむ時期といった段階を経て、徐々に他者の考えや他者との関係性を理解し、ルールのある遊び、協同的な活動を楽しむ時期に移行していくとされる。

ピアジェの認知発達理論については、その問題点への指摘や批判も多く、特に1950年代に台頭した情報処理理論では、ピアジェ理論の根幹である段階発達理論をも疑問視された。これらの批判について

中垣（2007）は、ピアジェ理論が認知発達の領域普遍性を唱えたものではなく「行為の一般的供応に由来し、将来的に論理数学的認識（時間・空間操作など下位理論的操作を含む）となるところの一般的知識を基準に発達段階を設定している」<sup>3)</sup>と解説している。

本稿で取り上げる子どものごっこ遊びの発達過程について、松原ら（2022）ではごっこ遊びの中での「模倣」を、目の前にないものを思い浮かべ再現するものであり、認知的な発達なしには行うことはできないと指摘する<sup>4)</sup>。このように、人間の発達過程と遊びの発達過程は切り離して考えることのできないものであり、幼児教育が遊びを通した総合的な指導、環境を通した教育であることを考えると、保育者は子どもの基本的な発達機序を踏まえ、遊びの中での経験が豊かなものになるように直接的、間接的に援助する必要がある。特に、目の前にないものを再現する「象徴機能」が発達する時期、ごっこ遊びが芽生え始める2歳から4歳頃の子どもに対しては、深沢ら（2023）の「遊びのプロセスへの保育者の援助」、「イメージの交通整理」のように保育者の具体的な援助が必要である<sup>5)</sup>。

松原らはごっこ遊び研究をレビューする中で、どの論においてもごっこ遊びの定義は明確ではないとしつつも「虚構世界において、複数の仲間との関わりの中でイメージを共有し、役割分担を行うものという認識はほぼ共通」<sup>6)</sup>と述べている。しかしながら、河崎は（2001）ごっこ遊びにおける子どもの基本的心理状態を「何かになる」こととしつつも、2、3歳前後の子どものごっこ遊びでは、ごっこの枠組みが成立した後であっても「役割」を担うには至らない「立場をとる」段階にあると指摘する<sup>7)</sup>。

こうした知見を踏まえ、本稿では松原らが明らかにしたこれまでのごっこ遊び研究における共通認識や、深沢らのごっこ遊びの定義に当てはまる前段階、河崎のいう役割を担うまでには至らない「立場をとる」段階にあるごっこ遊びに着目した。3つの事例から、ごっこ遊びの芽生えを支える保育者の「意図的な関わり」と「子ども理解と関わり」の2つの視点から考察し、ごっこ遊びの萌芽期において重要な役割を果たす保育者の存在意義とその援助について明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法（加藤）

本稿では、松原らで明らかになった「ごっこ遊び研究の傾向」<sup>8)</sup>、深沢らによって具体的に示された保育者の援助<sup>9)</sup>に続けて、ごっこ遊びの萌芽期、発達期と考えられる2・3歳児の遊び場面に再度着目した。幼児教育施設において、2・3歳児クラスの保育に携わった経験のある保育者の記録から「エピソード」を書き起こし、それとは別にそれぞれの「保育者の援助の意図」を記述した。この「エピソード」、「保育者の援助の意図」を事例①～③とし、第三者である2名が考察した。なお、エピソードに登場する子どもは仮名、保育者はアルファベット表記とし、個人が特定できないようにした。また、事例に登場する保育者a～cの所属、立場は以下の通りである。

保育者a:私立A保育所 非常勤保育士（フリー）  
保育者b:私立B保育所 非常勤保育士（フリー）  
保育者c:私立C幼稚園 3歳児クラス担任

## 3. 事例（永島、大野、深沢）

本稿では、深沢らに準拠しごっこ遊びを「①自発的に行っている②模倣する③何らかの役割を持つ④虚構・想像の世界⑤イメージの共有、という5つ要素をすべて含んだもの」<sup>10)</sup>と定義する。次の3事例はこの5つの要素すべてを含んではいないため、ごっこ遊びの萌芽期にあると位置づけた。以下、2・3歳児の興味からごっこ遊びが芽生える場面とその際の保育者の援助及び意図について、事例①～事例③として示す。

### 事例①「ジュース屋さんごっこ」（永島）

#### 【エピソード】〈2歳児クラス6月中旬〉

担任保育者が、子ども達が日常的に遊ぶ「井形ブロック」を出して場を設定すると、ユカリはそれを見つけてブロックをさまざまな形に組み合わせて遊び始めた。しばらくすると、ユカリが保育者aに「ジュース作って」と頼んできた。保育者aがブロックを組み合わせて立方体を作り、車軸のパーツをストローに見立てて渡すと、ユカリはストローを咥えて飲む素振りをする。保育者aとの「ユカリちゃん、美味しい?」「美味しいよー、冷たい!」といったやり取りの後、再び

ユカリが「先生、牛乳作って」と保育者 a に頼んできた。保育者 a が白いブロックを組み合わせ、先程と同じような形を作ってユカリに渡すと「りんごジュースも」と言う。保育者 a が「りんごジュースは何色が良いですか?」とユカリに尋ねると「んーあのねー赤ー」と答えたので、赤いブロックを組み合わせたりんごジュースを作ってユカリに渡すと「やったー!」と大喜びしていた。

ユカリがそれらを床に並べ始めたので、保育者 a が「ユカリちゃん、先生もりんごジュース飲みたいな」と伝えると「はい、どうぞー」と言いながらりんごジュースを渡してきた。ユカリと保育者 a のやり取りを見ていたケイコが近づいてきて、保育者 a に「ユカリちゃん何してるの?」と尋ねる。保育者 a がユカリに「ユカリちゃん、何してるの?」と声を掛けるがユカリは答えずに遊んでいる。<sup>2</sup>少し間をおき、保育者 a が再び「ユカリちゃん、何して遊んでるんだっけ?」と尋ねる<sup>3</sup>と「んー。うーんとね。んー、ジュースどうぞってしてるの」と答えたので、保育者 a が「ジュース屋さんしてるの?」と尋ねる<sup>4</sup>と「そう、ジュース屋さん。いらっしやいませーってしてる」と言い、ケイコや他の子ども達とジュースのやり取りを楽しみ始めた。

しばらくすると、ユカリがブロックの丸いパーツを並べ始めた。保育者 a が「ユカリちゃん、これ何?」と声を掛けると「これはね、ドーナツ」と答えた。ケイコはユカリの遊びを見ているが、自ら参加しようとする様子はない。そこで保育者 a はケイコと一緒に「すみません、ドーナツと牛乳ください」と注文する<sup>5</sup>と、ユカリは「はい、どうぞ。お家で牛乳と一緒に食べてね」と言いながらドーナツと牛乳に見立てたブロックを渡してくれた。それを機にケイコはお客さんとして遊びに加わり、「ユカリちゃん、ドーナツもう 1 個くださいー」と言い、ユカリとの遊びを楽しんでいた。

#### 【保育者 a の援助の意図】

2 歳児クラスはそれぞれが自分の好きな遊びを楽しむ姿が多く見られるため、遊びが展開せずに終わってしまうことが多い。ユカリもはじめは「井形ブロック」を自分なりに組み立てて遊んでいた。しかし、そこから遊びが展開せず飽き始めている様子が見られていたため、保育者 a はユカリと一緒にブ

ロックを組み立て始めた。ユカリから「先生、ジュースを作って」と頼まれた際、保育者 a はユカリに自分でジュースを作ることを提案することも考えたが、「保育者に作ってもらいたい」というユカリの気持ちを察し、あえて自身でジュースを作って渡した。はじめのジュースと牛乳は保育者 a が作ったが、3 度目のりんごジュースにはユカリのアイディアも取り入れたいと考えユカリがブロックで作ったジュースを床に並べ始めた姿を見た保育者 a は、ジュースを介して遊びが展開するのではないかと考え<sup>6</sup>、「先生もりんごジュース飲みたいな」とジュースのやり取りが始まるきっかけとなるような言葉がけ<sup>7</sup>を行なった。ケイコはユカリの遊びに興味をもったがどのように関わったら良いか分からない様子が見られたため、保育者はケイコと一緒にお客さん役になった<sup>8</sup>。それにより「ジュース屋さんごっこ」に売り手と買い手の構図が生まれ、保育者が介入せずとも子ども達同士でやり取りを楽しんでいた。

#### 事例②「おばけごっこ? M の思い」(大野)

##### 【エピソード】 <2 歳児クラス 1 月>

朝、最後に登園してきたマサは、保育者 b とコウがおばけの本を見ているところへやって来るなり「あー、これみたことあるー」と言い、自分の方へ絵本を引き寄せた。最初に見ていたコウは「いま、わたしがみてるの」と本を奪い返す。マサは「おれだって見たいし」と言い、いざこざが始まった。保育者 b が仲介に入りマサは一旦絵本から離れたが、まだ気持ちが残っているのか、しきりに絵本の方に視線を送っていた。<sup>9</sup>

保育者 b が遊びの広がりをねらい、プラスチックのホースを出してきた。<sup>10</sup>このホースは伸縮すると独特の音が鳴り子どもたちに人気である。マサはすぐさまホースを手に取り伸ばしたり縮めたりしていたが、そのうちホース同士を接続しようと試み始めた。<sup>11</sup>

ホースの片方を持ち、他方に入れ込むことが難しいようで「できない」とイライラしている。近頃の制作コーナーでは、他の子ども達がセロテープを使用しており、テープを引っ張る「ピーっ」という音が響いていた。マサがそれに気が付き制作コーナーに来ると「長いやつ(テープ)ほしい」とリクエストしてテープをもらい、ホース同



士をテープで貼りつけた。ホースを何本かつなくと今度は「紙に貼りたい」と話した。「マサくん、ホースをテープで貼ったの？」と保育者bが声をかけると「うん」と返すが、目線を合わせることなく作業に集中している。マサのホースに他児が手を伸ばそうとすると「だーめー、これはおれが！」と身を乗り出して制する。

「できたー」保育者bがその声を聞き「何ができたの？」と尋ねるとマサは「ろくろくくびー！」と応え、誇らしげに掲げた。保育者bが「ろくろく首？」と聞き返すとマサは「おばけの本のなかにあるでしょ、首がびょーんとながいんだよ」と身振りを加えて表現した。<sup>12</sup>「壁のところに貼って」というマサの要望に沿って掲示すると他児も気付き「これ、なあに？おばけ？わたしもつくりたい」と広がりを見せ始めた。そばにいたリコがその気配に気付き「おばけこわいー、いやー」と泣き出しそうな表情で保育者bに訴え始めた。<sup>13</sup>リコは「おばけ」という言葉に敏感で抵抗感があり、おばけの絵本も自ら手に取ることはなく、読み聞かせの際も見ないようにしている。そんなリコに他児がふざけて「おばけー」と大きな声を上げるとリコはどうとう泣き出してしまった。担任保育者がなだめても気持ちの切り替えが出来ずに泣き続け、クラス全体がそれぞれの遊びに入り込めない状況となった。広がり始めたように見えた「おばけ遊び」は収縮し、マサは再び一人でおばけの絵本を手に取り見始めた。<sup>14</sup>

#### 【保育者bの援助の意図】

マサは感受性豊かで、遊びを作り出すことが多く、クラスの子どもからも一目置かれる存在である。

朝、マサがおばけの絵本を見た後に始めた、ホース、セロテープを使用し、ろくろ首をイメージした作品を作るという個人の遊びは、保育者bがその作品を壁に貼ったことによって他児の目に留まり、子ども達の「自分も作ってみたい」という意欲へとつながった。これまで個々の遊びで完結することが多かった為、保育者bは遊びの広がりを期待した。<sup>15</sup>しかし、マサの作り上げた作品から「ともだちと一緒におばけを作る」というイメージを持った遊びが一旦は広がりかけたものの、リコの拒否行動によりクラス全体でのおばけ遊びへの発展には至らなかった。

#### 事例③「お寿司屋さんごっこ」(深沢)

##### 【エピソード】 <3歳児クラス1月上旬>

年が明けた3学期初日、家から寿司用のプラスチック大皿を持ってきたレオが「お寿司屋さんしよう」と他児に声をかけたことがきっかけでお寿司屋さんごっこが始まった。「いろんなお寿司を作りたい」という子どもの声から、担任保育者cはティッシュと折り紙を何色か用意し、テーブル2台と椅子を並べた。丸めたティッシュと色画用紙をテープで貼り付けお寿司を作り始める子や、お寿司を食べにくるお客さん役の子も出てきた。中でもお寿司屋さんとして上手に役になりきるハルは、他児から「店長さん」と認識されており「ハルくん注文きてますよー」と言われると、「へい、いらっしやい！何にします？」と注文を取り、お店を切り盛りしている。<sup>16</sup>お寿司はままとコーナーにも配達され、この日は最終的に12人ほどがお寿司屋さんに関わっていた。

翌日、朝からお寿司屋さんの続きが始まり、引き続きお寿司を作る子や、「茶碗蒸し作りたい」「おにぎりも！」と別のものを作り出す子、別のクラスにお客さんを呼びに行く子が出てくる。そんな中、前日に遊びの中心だったハルが「回転寿司にしたい」と保育者cに言いに来た。「回転寿司いいね！どんな感じだろう…」と保育者cがいうと、ハルは「くら寿司みたいにさ、寿司が回ってくるんだよ！」と答える。保育者cは「どうやって作ったらいかな…」と言いながら大きな段ボールを持ってきて、楕円に切りぬく。「こんな感じ？」聞くと「違うよ！もっと（レールの部分が）細い！」<sup>17</sup>とハルが言うので、今度は楕円の中をくり抜き、ドーナツ型にしたものを見せる。「どう？こうやって回すと回転寿司みたいじゃない？」と床にダンボールを置き、寿司を1つ乗せて回してみせる。ハル「えー違うよ、そうじゃない。くら寿司みたいなのがいい」<sup>18</sup>というので、別の素材を持ってくるも、ハルのイメージには合わない様子である。こうしたやり取りがしばらく続いたが、ハルは「もういいや！」と言って外に遊びに出てしまった。その後もお寿司屋さん自体は数人の子ども達で続いていたが、回転寿司を実現することはできなかった。

### 【保育者cの意図】

お寿司屋さんごっこは、新学期のきっかけの遊びとしてクラスの中に広がっていった。遊びの中心となっていたハルは、消防隊やお店屋さんなどの真似をして役になりきることが非常に上手で、この時もお寿司屋さんらしい雰囲気を作ってくれていた。遊びがより面白くなる良いアイデアを出すことも多いため、保育者はハルの言葉を出来るだけ拾って、実現していきたいと考えていた。「回転寿司にしたい」というハルの言葉を聞き、保育者cも“回転寿司が出来たらさらに面白くなり、広がっていきそう”という思いから積極的に関わったが、保育者c自身も具体的にイメージがないまま作り始めてしまった。また段ボールという3歳の子どもの手では切りづらい素材を使った<sup>19</sup>ことから、実際の作業はほとんど保育者cがやることになった。ハルの「違うよ、そうじゃない」という発言にもあるように、保育者cの作ったものが、ハルのイメージに合うかどうか判断するようなやりとりとなり、ハル本人もこうすればできるという具体的な考えはなかったように思う。実現の目途が立たず、段ボールを切る作業に時間がかかったこともあり、最終的にはハルの思いも途切れ、別の遊びに気持ちが移ってしまった。

## 4. 考察（中里，請川）

ここからは、2・3歳児の事例からごっこ遊びが芽生え、ごっこ遊びの5つ要素をすべて含む遊びへと発展していくプロセスについて、「保育者の意図的な関わり」、「子ども理解と保育者の関わり」の2つの視点から考察する。

### 4-1 保育者の意図的な関わり（中里）

事例①では、2歳児ユカリの「ジュース作って」という言葉から、ユカリと保育者との1対1の見立て遊びでのやり取りが始まる。明神（2005）は、1～2歳頃は延滞模倣によって、ふり遊びや見立て遊びが可能となり、3歳前後ではテーマとストーリーのある遊びに発達するとしている。また、それを基盤としてごっこ遊びの全盛期である3歳以降で言葉とイメージを他者と共有できるようになり、ごっこ遊びは、想像力に支えられた創造性を帯びてくると述べている<sup>11)</sup>。つまり、見立て遊びやふり遊びは、イメージを共有するごっこ遊びの芽生えである。こ

のことから事例①は、下線部1より延滞模倣の段階で保育者とやりとりを楽しんでいる状態と考えられる。後半では、ケイコの参加と保育者aの言語的援助がきっかけとなり、売り手買い手の構図が生まれていく。下線部2・3のようにケイコと保育者から「何してるの？」と聞かれたところから、ユカリは自分の言葉で応答し始める。この場面での保育者aの関わりは、ケイコの戸惑いを察した上で、ケイコと同じ立場で、ユカリの遊びに交わることを試みているようだ。保育者の援助は、ケイコの思いを汲んでのことだが、ユカリの世界へ入ろうとすることが、ユカリにとっては受け入れられない可能性もあると考えられる。しかし、保育者aが、ユカリの応答に言葉を補い、下線部4のような言語的援助をしたことがきっかけとなり、ユカリがイメージしていることと目の前で起きている状態、そして「ジュース屋さん」という言葉が結びつき、他児とのやり取りにも発展し始めたのではないかと考えられる。

さらに、他児とのイメージの共有の段階では、深沢らが「イメージの交通整理」<sup>12)</sup>が必要であるとしているように保育者aも、子どもそれぞれの思いを察知し、言葉を引き出しながら「イメージの交通整理」をしているようだ。言葉を引き出す際には、下線部2から3、そして4にかけて、問いかけ方をオープン・クエスチョンからクローズド・クエスチョンへと変容させていることがわかる。また、保育者aが下線部6の予測から、下線部5・8の関わりを通して、下線部7のようなイメージの言語化を促す言葉選びをしたことで遊びの広がりにつながったのではないかと考えられる。以上より、ごっこ遊びの芽生えの段階においては、保育者は子どもの遊びが広がることを期待し、他者とのやりとりやイメージを言葉で表現することを通して遊びを楽しめるよう、子どもの言葉を引き出す問いかけ方を工夫するという言語的援助が重要である。

事例②では、2歳児クラスにおけるマサの遊びのプロセスとリコの反応との葛藤、保育者の援助について考察していく。まず、下線部9のマサの視線を保育者bが見逃さないことが、マサの気持ちの繋がりが、遊びの方向性を予測することを可能にしていると考えられる。その後、下線部10で設定されたホースをマサは駆使して、ろくろ首を再現する（下線部11・12）。ここから、マサのおぼけの本への興味が続いているように捉えられると同時に、マサの

見立て遊びの広がりが見られる。今井（1992）が、「見立てる」ということは、象徴機能という自己の精神作用を働かせながら活動を広げ、自分の要求を実現していく手立てとして、自己世界を広げていくこと<sup>13)</sup>だと述べていることから、マサは、ホースを見たかった絵本の中のろくろ首に見立てることで、自分の要求を実現しているのだろう。さらに、ここまでのマサの遊びの過程を保育者bが追い、出来上がったろくろ首を掲示することで他児にも遊びが広がっていく入り口となっているようだ。しかし、下線部 13 のようなニコの心の揺れが、クラスに広がりかけたマサの遊びを1人で絵本を読む方へと向かわせることとなる（下線部 14）。1つの部屋の中で限られた人数の保育者が、どれだけ一人ひとりの気持ちに寄り添い遊びを広げていけるかという課題が見えてくる。

松延ら（2017）は、2 歳児の保育室の環境構成の変化と保育者の役割の変容について検討し、保育室の環境構成の変化が保育者の援助を変化させることに繋がっていると示している<sup>14)</sup>。事例②では、保育者間で連携を図り、興味が一致する者同士で過ごせるよう場所を区切ったり、気持ちが切り替えられるよう心が落ち着く場所を作ったり、それぞれの遊びが保障されるよう場所を変化させたりするということが、環境の再構成の方法として考えられる。そして、環境が変わることで保育者の援助も変化し、子どもの姿が変わり、下線部 15 で保育者bが期待するような遊びの広がりが見られたかもしれない。以上より、2 歳児における遊びの広がり期待される場面において、保育者による遊びの方向性を予測した上での援助と、保育者間の連携のもと、環境を再構成していくことが重要であると考えられる。

事例③では、3 歳児の「お寿司屋さん」としてのごっこ遊びが深まっていく段階での保育者の援助について考察する。レオの声かけから始まったお寿司屋さんごっこは、下線部 16 のように他児へと広がりを見せている。ハルと保育者cとのやり取りでは、回転寿司というイメージをハルと保育者cの2名で共有し合おうとする中で実現を目指し、下線部 17・18 のように見立て行為を深め具現化させるために試行錯誤していく。八木（1992）は、このような探究していく姿を、その物や本質に迫る行為であることに違いないとし、子どもにとっては混沌としていることの多い現実生活の中では実現できないこ

とだけに、人間となる過程においても重要な意味を持つ<sup>15)</sup>と述べている。つまり、ハルの回転寿司の見立て行為は実現されなかったものの、ハルが保育者cと共に試行錯誤し、探究することに意味があると言えるのではないだろうか。

事例③では、ハルのごっこ遊びは回転寿司が具現化されることで深まりを見せると思われたが、保育者cとのイメージの不一致により継続は叶わなかった。八木（1992）が「ごっこ遊びの中では、作るのは個々のイメージとしてではなく、集団で思考されていく中で、なしとげられていく」と指摘するように、ハルと保育者cだけでなく、他児の参加も促してみることで発想の転換がなされたかもしれない。また、保育者c、ハル、他児との間でのイメージを共有するために、イメージの可視化を提案することも保育者の援助の1つとして考えられる。また、素材の面では、下線部 19 で語られるように、子どもの発達に合わせた物を用意し、ハル自身が作ってみることで、納得する回転寿司が具現化されたかもしれない。そのためには、日々の生活の中で作って遊ぶという積み重ねが必要不可欠となりそうだ。さらに、深沢らが子どもが遊びの主導権を握り続けることを可能にする保育者の関わりが重要である<sup>16)</sup>としていたことから、作ることそのものを子どもの方へ手渡していくことも手立ての1つと言えるのではないか。以上より、ごっこ遊びが深まっていく段階において、子どもと保育者のイメージの不一致が生じた場合でも、保育者の援助として重要なことは、子どもとのやりとりを通して共に試行錯誤し、常に子ども自身が主体的に探究できるようにすることであると考えられる。

#### 4-2 子ども理解と保育者の関わり（請川）

事例①では、ユカリが保育者aに井形ブロックでジュースを作ってもらい、飲む素ぶりを楽しむ姿が冒頭に出てくるがこれは何を楽しんでいる遊びだろうか。八木（1992）はごっこ遊びには5つの「オモシロサ」（「役」、「物」、「行為」、「空間」、「人・かわり・組織」）があると述べる。先ほどの行為はジュースに見立てた「物」をつかうオモシロサと、飲むしぐさを真似る「行為」のオモシロサがそこにあると見て取れる。このジュース自体、井形ブロックを立方体に組み立て、そこへストローに見立てた車輪パーツを刺したものだ。きっとこれまでも同



じような使い方がなされていたため、ユカリや後に登場するケイコもその立方体を「ジュース」として認識しやすかったのだろう。

佐藤（2008）は、ヴィゴツキーの遊び論を活用した発達論をまとめているが、その第一として挙げたのは「モノへの行為的かわりから意味が生成されてくる」<sup>17)</sup> というものであった。モノを使って遊びの世界を広げていく中、当該児のみならず周りにいる子たちまでもがその行為の意味を見出していく。ユカリの例で言えば井形ブロックの立方体を持ち「美味しいよー」と発言することで、「私はいまジュースを飲んでいる」という意味をそこに生成している。ただこれだけであれば、ひとりの2歳児と保育者とのやり取りによる見立て遊びだが、保育者aは「先生もりんごジュース飲みたいな」とユカリに話しかけ、ジュースを床に並べているユカリを店員、ジュースを求める保育者自身を客という新たな構図をそこに持ち込んでいる。これは八木の言う「役」や「人・かわり・組織」のオモシロサの要素を持ち込んだことになる<sup>18)</sup>。この時、2人のやり取りに興味を持ったケイコが「何してるの？」とユカリに尋ねたがユカリは答えない。ユカリが「答えなかった」のは、うまく言葉で説明できなかったのか、それともユカリと保育者2人だけの遊びにケイコが関わろうとしていることを受け入れられなかったのか。のちに保育者aが「ジュース屋さん」という言葉（ラベル）を使って改めて尋ねたところ、ユカリが「ジュース屋さん」と答えているところを見ると、ジュースを売り買いしているというイメージはあったようだ。そう考えると、保育者aとユカリの遊びに他児が入ってくることを嫌ったのではないか。その後、他の子たちも一緒に遊ぶようになったということなので、保育者が「ジュース屋さん」というラベルを提示したことがユカリや周りの子にも共有され、遊びが広がっていったと考えることができる。子ども達は何らかの行為を楽しんでいるところに、誰かがその遊びにラベルを貼ることで遊びが可視化され、そこからごっこ遊びが広がっていくというケースは良く見られる。ただその遊びのラベルやイメージが周囲の子たちと違っていたら、それはすんなりと受け入れられず遊びがうまく展開していないということもある<sup>19)</sup>。

事例②も2歳児クラスのものである。おばけの本を見ていたコウの所へマサがやってきて、本の取り

合いになるのではないかと思われるやり取りが起こる。しかし、そこへ保育者bが入ることでいざごごにはならず、さらに保育者が提示したプラスチックホースがマサの興味を引き出し、おばけのろくろっ首を作る遊びへと展開していく。見立てでもごっこ遊びでもないやりとりから、保育者が素材を提示したことで作って見立てる遊びが生まれ、さらにはおばけづくりやおばけやしきごっこへと広がるような遊びの萌芽がそこに見られた。

これらの援助には事例①と異なるところがある。事例①では最初から子どもが物を作ることを求めており、それを見立てて遊ぶことからスタートしている。八木でいう「物」をつかうオモシロサ<sup>20)</sup>を求める姿が、子どもの方にすでに見られたという事例である。一方事例②は、最初はおばけの本を見ているという姿があっただけで、その様子から物を作る遊びへの発展は想像しにくい。しかし、マサとコウの間で本の取り合いが起こりそうだと考えた保育者bが、別な遊びへと目を向けてもらいたいとの願いからプラスチックホースを出してきたところから遊びの流れが変わる。保育者は「これでおばけ作ろうか」と声をかけたわけではないが、マサはすぐそのホースに飛びつき、ろくろ首からイメージされたおばけ作りに取り掛かっている。つまり、子どもの求めに対応しつつ遊びを可視化している事例①の援助と、求められてはいないが次の遊びへとつながると考えて行った事例②の援助の違いがそこにはある。子ども達の遊びを生み出すきっかけづくりと考えれば、事例②のような援助も必要になってくるだろう。ごっこ遊びを自発的なものであると定義したのが深沢ら<sup>21)</sup>であったが、どこまでを子ども達の自発的な遊びとするかは実はそう簡単なことではない。ごっこ遊びの今後の発展を期待して環境を用意したり、言葉をかけたりすることはとても重要な援助である。保育所保育指針解説（2017）では、保育士が「期待をもって見守る」という表現に留めているが、これは保育士の期待を過剰に押し付けてはいけないという意味を込めてそのような表記になっているのだろう<sup>22)</sup>。しかし、見守るだけでは子ども達のごっこ遊びはなかなか発展しない。保育の場では、子どもの思いと保育者の期待が重なってごっこ遊びなどの遊びがより発展していくものである。指針や指針解説書の記載はより戦略的なものになってよいのではないか。



デューイは子どもの「興味」を4つの点から述べている(上野, 2022)。その4つの興味を上野は, ①対話的なコミュニケーション, ②制作, ③探求, ④芸術的な表現とまとめている<sup>23)</sup>。子ども達の中にあるこれら4つの興味が十分に満たされていくことの表れとして, 保育中に見られる「自分たちが作ったもので遊ぶ」という姿がある。その遊びの充実が子ども達の興味を満たしていく。

事例③を見ると, 普段の遊びの中で作る活動を多く行い, 「自分たちが作ったもので遊ぶ」という経験を多く積み重ねている雰囲気伝わってくる。作る経験が豊かになると作る技能もあがるのだが, それ以上に自分たちが欲しいものは自分たちで作ろうという気持ちになることがより重要だ。例えば事例③の回転寿司にしても, 寿司を回す機械がないからあきらめるのではなく, 自分たちで作って遊ぼうという気持ちになっている。ただ, まだ3歳ということもあり, 回転寿司のレーンを自分たちで作るのは難しいと感じたようだ。担任保育者cにその思いを伝え, レーンを作ってもらおうとしたことが事例の中に見られる。保育者cはハルがどういうイメージなのかを探るため「どうやって作ったらいいいかな…」と尋ねながら彼のイメージに近いものを作ろうとする。しかしハルが想像しているようなものにはならず, 回転寿司の遊びが終わってしまったという事例であった。もしこれが5歳児であったら, 保育者は子どもに問いかけながらイメージを引き出し, 援助はしつつも子ども達自身が作る方向に導いていっただろう。しかし今回は3歳児なので, ある程度のところまで保育者が作ろうと考えたに違いない。もしかしたらその援助が, 先ほど佐藤(2008)の引用で示した「モノへの行為的かわりから意味が生成されてくる」ことまでをも奪ってしまったのかもしれない。デューイが示した子どもの4つの興味の1つが「制作」であることを考えても, 子どもが作ることを援助するところまでに留めた方が, その完成度は低くても, もうしばらく遊びが続いたのではないかと想像した。

## 5. 総合考察(加藤)

ここまで, 3つのエピソードについて, 子どもとのやり取りを通した保育者の援助, 子どもの遊びをより豊かなものへと発展させたいと考える保育者の存在意義について, 「保育者の意図的な関わり」と

「子ども理解と保育者の関わり」の2つの視点から考察してきた。

幼児期のごっこ遊びは, 2・3歳児の見立て遊びやふり遊びから始まり, 延滞模倣, 他児とのイメージの共有というように変化し, 4・5歳児のストーリーが共有されるごっこへと発展していく。ごっこ遊びの萌芽期には, 事例①のように保育者がモノのやり取りや言葉でのやり取りを通して子どもと向き合い, 子どもの興味関心を広げていくことが重要になってくる。また, 事例②のように, 子どもが絵本にこだわる姿から子どもの興味の方向性を理解し, 保育者がモノや道具を準備するといった環境構成をしたことで見立て遊びが始まることもある。このように, 保育者が子どもの思いを受け止め, 想像し, 環境を用意することにより, 子どもの遊びを下支えることも幼児教育においては必要な援助である。こうした保育者の援助により, 子どものごっこ遊びは, 明確な枠組みやプラン, そしてストーリーのあるごっこ遊びへと発展していくと考えられる。

子どものごっこ遊びの発達について, ピアジェ理論「同化と調節」での説明が興味深い。中垣は, ピアジェの「調節が同化を上まわるとき模倣になる」, 「同化が調節を上まわるとき遊びになる」の后者について, 「箸でつまむ」ことができるようになった子どもが, 食べ物以外のものを次々につまんだり, それを自慢するために他者の前でやってみせたりする行為を「遊びとしてのシェムの行使である」<sup>24)</sup>として解説している。

森口はピアジェ理論のもっとも重要な点を「適応」と「体制化」であるとし, 主体の適応過程は「同化」と「調節」, この二つの過程で構成されると述べている<sup>25)</sup>。さらに, 認知発達における「同化」について「有機体(子ども)が新しい情報を自分が既に持っている認識の枠組み(シェム)に合うように変化させ, 取り入れること」<sup>26)</sup>, 「調節」について「有機体が, 自分の既存の認識の構造を, 新しい経験に合わせて変化させていくこと」<sup>27)</sup>と解説している。事例②では保育者の環境構成により, 子どもがモノを自身のシェムに合うように変化させ, 遊びを創り出している。また, 事例①では, 保育者が子どもとのジュースのやり取りの中で, 「ジュース屋さんしてるの?」と子どもに問いかけたことから, 子どもの中で「ジュースをもらって飲む」という行為から「ジュース屋さん」という新たな認識を獲得

している。子どもの認知発達には、現実世界での実体験の中で「同化」と「調節」を繰り返し、次の段階へと進んでいくが、虚構世界でのごっこ遊びを通した経験においても、子どもの中の認識の枠組みを広げることができる。

一方で、事例③のように子どもの中でごっこ遊びのイメージが既にあり、それを実現させるために保育者に援助を求めるといった場面では、子どものやりたいことがはっきりしているだけに関わりが難しくなる。保育者は子どものイメージをつかむことができたとしても、どこまで準備すべきなのか、子どもに任せる部分をどう保障するのかという点で、自身の中に葛藤が生まれる。しかし、前述したように遊びの中で子どもの認識の枠組みを広げることができるとすれば、2・3歳児の遊びでは、保育者が子どもと情報をすり合わせ、子どものイメージを具現化する、といった一歩踏み込んだ援助も重要であろう。こうした保育者の援助により、子どものごっこ遊びが縦横へと広がりを見せるのではないか。

ごっこ遊びは、子どもの想像力や創造性を高めるだけでなく、社会性や言語能力をも高めると考えられている。幼児教育では、遊びが子どもの自由な発想のもとに行われる自発的なものであるという観点から、保育者の積極的な介入を嫌う傾向にある。しかし、2・3歳児の遊びでは「場」を制御する保育者<sup>28)</sup>がいなければ、子どものイメージの交通整理から街づくりのような縦横へと広がる遊びは生まれない。保育者は、保育の主体は子どもであるという思いにとらわれ過ぎず、子どもが主体的に環境に関わり、主体的に遊ぶために、遊びの環境、つまり「場」を制御することも必要であろう。

ごっこ遊びの萌芽期は、子ども同士で問題を解決する力を養う下準備の時期と重なる。こうした力を養うためには、子どもの興味に合わせた環境を用意し、見守ることが重要である。しかし保育者は、時には子どもの主体性を阻害することを過剰に恐れず、子どもの発達段階に応じて自身が信じる教育的挑戦をしてみることも必要だ。それによって子どもの遊びがより豊かに展開され、成長発達に繋がること、これこそが遊びを通した総合的な保育であると考えられる。

## 【引用】

- 1) ホイジンガ／高橋英夫訳：『ホモ・ルーデンス』、中央公論新社（1973）
- 2) J.ピアジェ 著、中垣啓訳：『ピアジェに学ぶ 認知発達の科学』、北大路書房（2007）
- 3) 同上 53
- 4) 松原乃理子・大滝茜・織壁佐和子・富田貴代・深沢佐恵香・森末一代・請川滋大：「ごっこ遊び」研究の傾向 ―保育実践を対象とした調査に着目して、日本女子大学紀要、69、1-12（2022）、2
- 5) 深沢佐恵香・大滝茜・織壁佐和子・加藤直子・中里啓子・請川滋大：ごっこ遊びの深まりを支える保育者の援助 ―2・3歳児クラスの事例から―、日本女子大学大学院紀要、29、163-172（2023）
- 6) 前掲 4) 6
- 7) 河崎道夫：2歳児のごっこ遊びにおける行為の変動と「立場」、心理科学第22巻第1号、18-29（2001）
- 8) 前掲 4)
- 9) 前掲 5)
- 10) 同上 165
- 11) 明神もと子：幼児のごっこ遊びの想像力について、北海道教育大学釧路校研究紀要、37、143-150（2005）
- 12) 前掲 5)
- 13) 今井和子：『なぜごっこ遊び？―子どもの自己世界のめばえとイメージの育ち―』、フレーベル館、53（1992）
- 14) 松延毅・中村知嗣・藤田清澄・本田由衣・石田淳也・松延摩也子・香曾我部琢：2歳児保育室の環境構成の変化と保育者の役割の変容(1)、宮城教育大学情報処理センター研究紀要、23、3-8（2017）
- 15) 八木絃一郎：『ごっこ遊びの探究 ―生活保育の想像を目指して―』、新読書社（1992）
- 16) 前掲 5)
- 17) 佐藤公治：『幼児教育 知の探究5 保育の中の発達の姿』、萌文書林（2008）49
- 18) 前掲 15)
- 19) 請川滋大：『子ども理解』、萌文書林（2020）62-63
- 20) 前掲 15)
- 21) 前掲 5)
- 22) 厚生労働省（編）：『保育所保育指針解説』、フ

- |                            |           |
|----------------------------|-----------|
| レーベル館 (2018) 146           | (2014) 29 |
| 23) 上野正道:『ジョン・デューイ』, 岩波書店  | 26) 同上    |
| (2022) 44-45               | 27) 同上 30 |
| 24) 前掲 2) 41               | 28) 前掲 7) |
| 25) 森口佑介『おさなごころを科学する』, 新曜社 |           |





## ごっこ遊びの深まりを支える保育者の援助Ⅱ

— ごっこ遊び事例を5つの視点から考える —

### How Early Childhood Teachers are Involved in Supporting the Development of Pretend Play by Children Ⅱ: Examining Examples of Pretend Play from Five Perspectives

深 沢 佐恵香\*

Saeka FUKASAWA

織 壁 佐和子\*\*

Sawako ORIKABE

加 藤 直 子\*\*\*

Naoko KATO

齊 藤 花 奈\*\*\*\*

Kana SAITO

松 原 乃理子\*\*\*\*\*

Noriko MATSUBARA

請 川 滋 大\*\*\*\*\*

Shigehiro UKEGAWA

**要 約** 本研究では、先行研究で網羅しきれなかったごっこ遊びの深まりを支える保育者の援助として重要な点を明らかにすることを目的とする。長期に渡って遊びが脈々と続く3歳児事例、協同遊びが可能となる5歳児事例に焦点を当て、5つの視点から分析を行った。結果、3歳児事例では①遊びの停滞やマンネリ化の兆しに気づき、適度な下支えとテコ入れを行う、②「立場をとる」段階にある3歳児がごっこの枠組みを意識できる直接的な援助、③視覚的にイメージを共有できる環境や機会の構成、が重要であることが分かった。5歳児では、①見守りの姿勢を基本とした一歩先を見越した助勢、②枠組みやプランを明確にし、役割をさらに本物らしくするための援助、③イメージ共有を通じた協同経験の保障、が重要であることが明らかとなった。発達段階を踏まえて子どもの姿を丁寧に捉え、遊びの「モノ」「人」「場所」の把握と見直しを行なっていくことが遊びの深まりを考える上で重要な保育者の関わりであることが示唆された。

**キーワード**：ごっこ遊び、保育者、援助、遊びの深まり

**Abstract** The purpose of this study was to ascertain important points that could not be fully covered in previous studies on how early childhood (EC) teachers are involved in supporting the development of pretend play by children. We focused on examples of 3-year-old children who played continuously over a long period of time and examples of 5-year-old children who were capable of cooperative play, and we analyzed those examples from five perspectives. Examples of play by 3-year-olds indicated the importance of 1) noticing signs of a stagnation or rut in play and providing appropriate assistance and support, 2) direct assistance for 3-year-olds who are at the stage of “taking a position” so that they can become aware of the framework of pretend play, and 3) configuring environments and opportunities that allow for the visual sharing of views. For 5-year-olds, what is important is 1) assistance that looks

one step ahead with a watchful attitude, 2) helping to clarify frameworks and plans and making roles more authentic, and 3) ensuring a cooperative experience through the sharing of views. When considering the development of play, an EC teacher needs to pay close attention to children’s behavior according to their stage of development and to understand and review the “things,” “people,” and “places” associated with play.

---

\* 山梨学院短期大学  
Yamanashi Gakuin Junior College  
\*\* 越谷保育専門学校  
Koshigaya childcare and education college  
\*\*\* 立正大学  
Rissho University  
\*\*\*\* 家政学研究科児童学専攻  
Graduate School of Home Economics  
\*\*\*\*\* 白梅学園短期大学  
Shiraume Gakuen College  
\*\*\*\*\* 児童学科  
Child Studies

**Key words** : Pretend play, Early childhood (EC) teacher, Support by an EC teacher, Development of play

## 1. 背景と目的 (深沢)

当論文は深沢ら(2023)の「ごっこ遊びの深まりを支える保育者の援助—2・3歳児クラスの事例から—」<sup>1)</sup>に続く研究である。幼稚園・保育所・認定こども園等の幼児教育施設における遊びの重要性については、数多くの研究で言及されている。中でもごっこ遊びについて河邊は、頭の中で何かを思い描いて行為を起こすことで成立する遊び(表象活動)で、このような目の前に存在しないものを想定する精神機能は人間独自の知的な行為であり、多くの経験が総合的に含まれると述べている。また、ごっこ遊びの中で子どもたちは人やモノや場に自ら関わり、「世界」を作り出していきながら、創造性、社会性、構成力、知的理解力、操作性等を高めていくとも述べている<sup>2)</sup>。幼稚園教育要領(以下、要領)に「遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されるようにすること」<sup>3)</sup>との記載があるように、ごっこ遊びにおける子どもの総合的な学びは幼児教育を考える上で非常に重要であろう。先に述べた深沢らの研究では、特にごっこ遊びの深まりと保育者の援助に焦点を当て、表象が可能となり遊びの基盤を構築する時期のごっこ遊びに注目し、分析を行った。遊びの深まりについては「一見、一つの遊びがすぐに収束し、全く別の遊びが始まったように見えても、それが子ども自身の心を動かされる体験であれば、その遊びは脈々とつながり、生活と行き来しながら深まっていくと考えることができる」と述べ、遊びの深まりを時間的な継続だけでなく「子ども自身が心を動かされる体験をし、その一つの体験がその後の体験につながりを持つことで、発達に即した主体的・対話的で深い学びが実現していくこと」と定義した<sup>4)</sup>。低年齢の子が、長期間ごっこ遊びの特定のテーマについて集中して取り組むというのは発達上難しいだろう。しかし、遊びが「脈々とつながり、生活と行き来しながら深まっていく」ことは、たとえ低年齢児クラスであっても見られる姿なのではないだろうか。深沢らの研究では数日間に渡る事例はあるものの、数か月に渡る長期の記録については取り上げていないため、行き来しながらも脈々とつながる事例については考える余地があると言える。

また深沢らにおける今後の課題として、4・5歳児のごっこ遊びについて考えていく必要性を挙げている。子ども同士での協同的な遊びが可能となる5歳児のごっこ遊びでは、低年齢児の事例とは異なる子どもの姿や遊びの展開が見られるだろう。子ども同士で遊びが成立するようになったからといって、保育者が関わる必要がなくなるわけではない。子どもの発達段階や実際の姿に即して、どのように保育者が援助するかは年齢に関わらず非常に重要である。

また、松原らの「ごっこ遊び研究の動向」に関する研究では、ごっこ遊びという語句を用いた論文の中でも定義づけや捉え方には幅があり、意味する範囲に違いがあることが示された<sup>5)</sup>。これを踏まえ深沢らは、論文内で用いるごっこ遊びという語句について定義を明確に示している<sup>6)</sup>。本研究においても引き続きごっこ遊びを取り上げることから、深沢らの定義に準拠し、①自発的に行っている②模倣する③何らかの役割を持つ④虚構・想像の世界⑤イメージの共有、という5つの要素をすべて含んだものをごっこ遊びとする。この5つは単にごっこ遊びを成り立たせる条件ではなく、ごっこ遊びがより面白くなる、子どもたちにとって充実した遊びとなるための重要な要素であると同時に、保育者の援助を多面的に考える上で重要な視点になると考える。

以上のことから本研究では、長期に渡って遊びが脈々と続く事例、協同遊びが可能となる時期の事例に焦点を当て、5つの視点からごっこ遊びの事例を分析することで、先行研究で網羅しきれなかったごっこ遊びの深まりを支える保育者の援助として重要な点について明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法 (深沢)

幼児教育施設のクラス担任経験がある保育者2名のごっこ遊び場面の記録を、第三者である3名がごっこ遊びの要素とした5つの視点から分析・考察した。ごっこ遊び場面の記録については子どもの動きや保育者の行動など実際の言動に即した記録部分を【Ep.】、その場面における保育者の思いや考察を“保育者の援助と意図”と分けて記述する。登場する子どもの氏名はすべて仮名表記とした。なお、事例提供者である保育者の属性は以下のとおりであ

る。

事例① 保育者 a：私立 A 幼稚園 3 歳児クラス担任

事例② 保育者 b：私立 B 幼稚園 5 歳児クラス担任

### 3. 事例

#### 3-1. 事例① (松原)

「お化けごっこの変容」＜3 歳児クラス 2 学期＞

【主な登場人物】イチ、フウ、ミツ、ヨシ

【周辺の他児】ゴウ、ヒロ、ナナ、ヤス、ココ

【Ep.①-1】9 月 22 日(木)「お面を作り友達をおどかす」

お化けのお面を被り、両手を胸の前に垂らして「ヒュー～」と言いながら、仲良しのフウやヨシをおどかそうとするイチ。それを見ていたミツが、イチと同じお化けのお面を作りたいがり、お化け型の紙にクレヨンで着色する。担任保育者 a がお面ベルトにミツのお化けを貼ると、ミツはそれを被りイチと同じようにフウやヨシに近づいていく。フウとヨシは楽しそうに「ワー！」とままごとコーナーの中へ逃げこむ<sup>1</sup>。特にルールを決めていないにもかかわらず、ミツはままごとの入り口に立つ衝立の内側には入らずに、ままごとコーナーの入り口から 2 人をおどかしている。

#### 保育者の援助と意図

お化け型の白色画用紙は入園時から製作棚に常置された教材の一つで、紙への着色や描画を通して親しんできた<sup>2</sup>。イチはクラスの中でもお化け愛が強く、1 学期から自発的にお化けになったり、お化けの紙を好んで選んだりする姿があった。ミツは自分が面白いと思ったことに取り組むことが多いため、イチの姿が魅力的に映ったのだと思われる。そしてそのミツの姿が面白かったことで、フウとヨシの気持ちにスイッチが入り、お化けになっておどかす―逃げるのやり取りを楽しんでいた。また、ミツのお化けに対するイメージが「家の中には入らずにおどかす」という行動に現れたように感じた。

【Ep.①-2】10 月 3 日(月)「他クラスのお化け屋敷へ行く」

隣のお化け屋敷に行くために、保育者 a がお金を作っていた。するとイチとゴウも作り出し、お金を入れるカバンを作る子も現れた。

#### 保育者の援助と意図

他児の後をついていく、他児の様子を見てまねるのが好きな子が多いクラスであり、以前から他学年・他クラスの遊びをきっかけにクラスの遊びが始まるが多かった。この日、他クラスでお化け屋敷をやっているという状況は、保育者 a にとって新しい遊びが始まるチャンスであったため、お化け屋敷へ行く準備をする姿が子どもたちの目にとまるように意識的に振舞った<sup>3</sup>。ただお化け屋敷へ行くだけでなく、客として必要な物を作るという経験もしてほしかったため、行く準備としてお金作り等を意図的に起こった。

【Ep.①-3】11 月 9 日(水)「お化けのおうちごっこ」

10 月後半から、怪獣のおうち、サメのおうちと何かになりきっておうちごっこ（ままごと）をしてきたフウ、イチ、ヨシ、ミツ、ヤス。今日は積木や衝立で壁を作り、絵本やままごと道具をその中へ持ち込み、お化けのお面をつけた。保育者もお化けになり、一緒に人を驚かすなどして楽しむ<sup>4</sup>が、子どもたちだけでは遊びが続かない。

#### 保育者の援助と意図

日によってなりきる対象が違い、怪獣やサメ等になりきっていた流れの中で、唐突にお化けになっておうちごっこを始める日がやってきた。この時期は、子どもたちだけで場作りができるようになってきたこともあり、いつも場作りまでは順調に進んでいた。しかし、なりきる対象のイメージはあっても、そこから遊びのストーリーを引っ張っていける子がおらず、場をグチャグチャに散らかしてはしゃぐ、ということになりがちでもあった。保育者 a が加わるとある程度はままごとも楽しめるが、盛り上がりには欠ける状況であった。

【Ep.①-4】11 月 10 日(木)「お化けのおうちごっこから、お化け屋敷へ」

翌日、保育者 a の提案で、昨日のメンバーと以前隣のクラスで楽しんだことのあるお化け屋敷を作った。長く並べたテーブルに黒い布をかぶせて、テーブルの下にはゴザを敷き、ハイハイでテーブルの下を進むという、隣のクラスのお化け屋敷を真似たお化け屋敷にした<sup>5</sup>。お化け役はテーブルの横から驚かすことにした。子どもたち

はどこから驚かすのかと自分の隠れる場所を決めたり、怖い声を練習するなどした<sup>6</sup>あと、お客さん役でお化け屋敷に入ってきたクラスの子たちを驚かした。はじめは客として参加した女兒らも、お化け役になって驚かし始めた。

#### 保育者の援助と意図

保育者aは、以前隣のクラスに楽しみに行ったお化け屋敷を手掛かりに、お化けのままごとからお化け屋敷へ移行するという見通しをもって翌日を迎えている。また、お化け屋敷を作るのではなく、お化けになること自体を楽しめるように、お化け屋敷のデザインはあえて工夫せずに、隣のクラスが作っていたものと同じにすることとした<sup>7</sup>。それによって説明や確認をしなくとも、お化け役の子はどこからどのように動けばよいのか、というイメージも共有することができた。ままごとからお化け屋敷に変えたことで、おどかす人というわかりやすい役割ができたため、子どもたちも保育者が必要以上に場を盛り上げずとも、各々に遊びを楽しむことができていた。

#### 【Ep.①-5】11月25日(金)「お化けの家を整える」

おうちごっこの目的を見失うと、家の中の物をグチャグチャにして楽しむ、という姿がしばしばあったが、どのような家だったら皆が来たいと思うかという保育者の問いかけをきっかけ<sup>8</sup>に、“汚いとお化けの家じゃない”とおうちごっこの中の物を整えて作る姿<sup>9</sup>が見られた。

#### 保育者の援助と意図

1学期は水や砂、泥、糊等での遊びを通して、グチャグチャやドロドロといった五感の経験を重視した遊びを存分に楽しんだ。それまでは場をグチャグチャにすることの面白さ、高揚感に共感してきたが、整えて遊ぶことの心地よさも感じられるようにという思いから、関わり方をシフトし、2学期後半はお化けの家の中も整理整頓するよう関わった。

#### 【Ep.①-6】12月12日(火)「お化け落としゲーム」

フウ、ヨシ、イチ、ヒロ、ナナを中心に、積木を並べた一本橋を渡って、橋の終わりに置かれたお化け(お化けの顔が貼られた空き箱)を蹴る、というゲームを作って遊んでいた。フウやヨシはお化けが蹴り落とされるたびにお化けを積木の上

に置き直し、ヒロやナナは楽しそうに蹴っている。皆がお化けを蹴るというルールを理解しているようで、言葉を交わすことなくお化けをセットする人、蹴る人、の役割が保たれている。

#### 保育者の援助と意図

12月は、子ども発信で「橋を渡ってお化けを落とす」というお化けを使ったゲームが始まった。フウ・ヨシ・イチの3人とヒロ・ナナの2名が一緒に遊ぶということも、2学期前半までは見られなかった光景で、人間関係の広がりも感じた。また、遊びの中心となりやすいフウは、感情的で発散型の遊びを好むため、保育者からするとルールのある遊びや落ち着いた遊びに誘うことに難しさを感じる子であったが、クラスの友達とお化けという共通イメージを通して遊んだからか、この日はフウにしては珍しくゲーム性のある遊びに集中していた。

#### 3-2. 事例② (織壁)

「サンタクロースごっこ」<5歳児クラス2学期>

【主な登場人物】ユウヤ、ハルト、カイ、ゴウキ、アミ

【Ep.②-1】11月18日(月)「ユウヤがトナカイの角を作って遊ぶ」

登園後、ユウヤは広告紙を棒状にし、お面ベルト、セロテープなどを使ってトナカイの角を作り、満足そうに被った。ステップを踏んでジャンプし、トナカイの真似をしながら室内を移動し、保育室を出て園舎内に駆け出した<sup>10</sup>。

#### 保育者の援助と意図

3年保育の2学期も終業間近となり、園生活で多くの経験を積み重ねてきた子どもたちは遊びや人との関わりもおおむね安定し、好きな遊びにのびのびと取り組む姿が見られた。11月半ばになり、クリスマスを楽しみにする子どもも増えていた。ユウヤは発想力が豊かでイメージしたことを自ら実現して遊ぶことに喜びを感じており、この時期トナカイに興味を持ち、身近な素材を使って角を仕上げて遊びを楽しんでいた。

【Ep.②-2】11月19日(火)「クリスマスのイメージが他児に広がる」

翌日、ユウヤは朝の身支度を済ませると前日に



作ったトナカイの角を被り、赤い折り紙を丸めて鼻に付け、ホールに出た。しばらくしてユウヤが保育室に戻ってくると、ハルトがその後ろを追いかけてきた。「ねえユウヤくん、どうやって作るの？教えて！」とハルトが尋ねると、ユウヤは材料の種類と場所だけ教え、再び保育室を出て行った。ハルトは材料を取り出して作り始めるが、ユウヤと同じように角を立たせることができなかった<sup>11</sup>。ハルトは製作機の近くにいたカイに尋ねたが、カイはハルトの質問の意味が分からなかった<sup>12</sup>。ハルトは苛立ちながらも、角と赤い鼻をつけてユウヤを探しに保育室を出た。

カイはハルトにトナカイの角の作り方を聞かれた直後、「プレゼントをいれる大きな袋、ある？」と保育者bに尋ねた。保育者bが大きい白いビニール袋を1枚用意すると、カイはその袋を眺め、「あ、同じのもう1個ちょうだい。サンタさんの洋服も作るから。」と言った。カイは保育者bが穴を開けた部分に首と両腕を通し、赤い折り紙を体に何枚も張り付けた。その様子を見た保育者bが、ベルトを作ってカイに見せると、カイはそれを腰に付けた<sup>13</sup>。さらに保育者bはトナカイになりきったユウヤとハルトが保育室に戻ってきたときに、組み立てた段ボールを近くに置いた<sup>14</sup>。すると、保育室にいたアミがこれを見つけて、「ソリにしたらいいじゃない！」と叫び、製作機から紐を持ち出した。ユウヤとハルトもアミの様子に気が付き、アミと3人で段ボールに紐を付けた。カイもビニール袋に空き箱を詰め込んだ。

ユウヤ、ハルト、カイ、アミはホールにソリを運び込んだ。トナカイ役のユウヤとハルトが紐の輪の中に入り、サンタ役のカイがソリに乗ってアミの「メリークリスマス！」の掛け声とともに紐を引っ張った。しかし接着部分がすぐに取れてしまったため、カイがガムテープを持ってきて幾重にも付けた<sup>15</sup>。何度も試みるうちに、数10cm程引っ張ることに成功した。

#### 保育者の援助と意図

ハルトは普段からユウヤに憧れており、ユウヤが楽しそうに遊ぶ姿に自分もやってみたいと思っている様だった。ユウヤと同じようにトナカイになりたいという興味を持ち、自ら近くにいたカイに聞き出

したり、広告紙を棒状にして立たせようと探ったりなどハルトなりに試行錯誤して角を完成させた。

保育者bはカイがハルトの声かけによってクリスマスのイメージを思いつき、遊び始めたことに気が付いた。既にユウヤとハルトがクリスマスのイメージで遊ぶのを見ていたので、カイが「サンタの服も作る」と言った時に、ユウヤ、ハルト、カイが同じ遊びの中でイメージを共有しながら役割をもつて関わりを深められるのではないかと考えた<sup>16</sup>。保育者がサンタクロースの服の首や腕を切り取り、ベルトを提案したのは、カイがサンタクロースになって遊ぶという目的を実現するためだけの援助ではなく、ユウヤとハルトの遊びの進度に追いつくための援助でもあった。ユウヤ、ハルト、カイそれぞれの身につけているものに「クリスマス」という共通点があることに気が付き、関わりが生まれることに保育者bは期待した。これに加えて保育者bは、3人が居合わせるタイミングを見計らって段ボールを持ち出した。この時あえて段ボールを1つにしたのは、1つの段ボールを介することによって各々のイメージが統合され、互いに共有できるだろうというのがねらいであったためである。アミの発言によって、段ボール箱は“ソリ”であることが共有され、ユウヤ、ハルト、カイにアミも加わり遊び始めることとなった。

#### 【Ep.②-3】11月20日(水)「ソリを園庭に出す」

ユウヤ、ハルト、カイ、アミは登園してすぐに衣装を身につけてソリをホールに持ち出し、「サンタクロースごっこ」を始めた。しばらくして戸外でソリを滑らせようと園庭に出たが、地面が土や砂利でできているため、サンタクロースを乗せたソリを滑らそうとしても全く動かなかった<sup>17</sup>。その様子を近くで見ていたゴウキが、「何やってんだ。」「そんなのサンタじゃないよ。」<sup>18</sup>と言った。さらに園庭に居合わせた3歳児数人がソリに興味を示して近寄ってきてトナカイが引く紐の中に入ったり、ソリに乗ろうとしたりして、ますます動かなくなった<sup>19</sup>。すると突然、ゴウキはソリの後ろに回り、後ろからソリを押し始めた。それでも動かないのでゴウキは紐を引っ張ったり、自ら紐の中に入って引っ張ろうしたり、トナカイ役の背中を直接押したりした。疲れた様子のゴウキはしばらく考えた後、紐を引っ張るトナカイ役

だった4人に1人、2人と降りるように声を掛けた。すると、徐々にソリが前進し始めた。これに気付いたゴウキが急いで後ろに回り込みソリを押すと、ソリが一気に動き出した。ソリが園庭の小山に差し掛かると、落ちた銀杏や小石、落ち葉の吹き溜まりに引っ掛り時折止まるが、バランスを崩さないまま小山を上り、滑り終えた。

#### 保育者の援助と意図

保育者bはゴウキについて、周囲や事象の変化によく気が付き興味を示すが、深く追求しようとしな  
い<sup>20</sup>ことが気になっていた。「何やってんだ」「そん  
なのサントじゃないよ。」と言ったゴウキの姿を見て、保育者bはトナカイやサントクロースに扮する虚構や想像の世界でなりきって遊ぶことに興味を示さないのも無理もないだろうと思い、見守った。しかし、ゴウキが「サントクロースごっこ」に自ら参加して夢中になって遊ぶ姿に変化したのを見て保育者bは、友達の力によって、自ら力を合わせて成し  
遂げる喜びを味わうことができた<sup>21</sup>ののではないかとこの遊びの様子を振り返った。

## 4. 考察

### 4-1. 自発的に行っている（深沢）

現行の要領では「自発的な活動としての遊び」<sup>7)</sup>と明記され、小川が遊びの定義として第一に「自発性」を挙げている<sup>8)</sup>ように、保育における遊びを語る上では、子どもが自発的に活動を行っているかが重要となる。しかし保育現場においては、保育者からの一方向的な指導の意味を含んだ活動と、子どもの自発的・主体的な活動の両方で“遊び”という言葉が用いられ、非常に曖昧な意味で使われていることが多い<sup>9)</sup>。研究対象である事例①②について子どもの自発性という視点で考えた時、どちらも保育者の提案や導入をきっかけに始まったものではなく、子どもがアイテムを自ら身につけ、イメージするものになりきることが遊びのきっかけとなっている。また、その様子を見た周囲の子ども、自ら興味をもち関わりながら活動が展開していることから、いずれの事例も子どもが自発的に行っている“遊び”と言えるだろう。

自発的な遊びを大切に、子どもの主体性を尊重することが重要視される中、河邊は「子どもの自由」といって放っておいたのでは子どもの主体性は育た

ない」と指摘し、適時的な援助がないと、遊びが停滞したままマンネリ化することもあると述べている<sup>10)</sup>。遊びが充実するために保育者の適時適切な援助が重要なことは明かであるが、ここで課題となるのは子どもの姿を前にしてどの段階で遊びが停滞している（あるいは停滞しそうである）と判断し、どのようにアプローチするかである。この判断のタイミングやアプローチ方法について事例を通して考えていきたい。

事例①【Ep.①-2】下線部3あるように、保育者aは他クラスのお化け屋敷に子どもたちの関心が向くよう意識的に関わっている。【Ep.①-1】でおどかす—逃げるのやりとりを楽しんでいる子どもの姿が見られた一方で、保育者aには繰り返す面白さからさらに一歩踏み込んだお化けの面白さに気付いてほしいという願いがあったのではないかと推察する。

【Ep.①-3】では、お化けごっこを引っ張っていく子が不在の中で、保育者aもお化けとなり遊びに参加している（下線部4）。また【Ep.①-4】ではお化け屋敷への移行を見通し、下線部5のように環境の再構成を行なっている。3歳児は「保育者を仲立ちとしながら、友達と同じ場で遊ぶ楽しさを味わう」「保育者が遊びの拠点として設定した場で遊ぶ」時期である<sup>11)</sup>。この場面では保育者aが積極的に遊びに参加し場を作っていく事で、遊びが保たれるよう下支えをしていると考えられる。【Ep.①-5】では、下線部8の保育者aの問いかけによって“お化けの家”のイメージの共有と場の整理をしている。この場面において、子どもたちが表面的に楽しんでいるのは「家の中の物をグチャグチャにする」ことだったのかもしれない。しかし保育者aは「おうちごっここの目的を見失う」ことで場をグチャグチャにしていると判断し、遊びに対する“テコ入れ”を行なっている。事例①に関しては、保育者a自身が遊びの中に入りながら、遊びの停滞やマンネリ化の兆しに気づき、適度な“下支え”と“テコ入れ”を行なったことで、お化けという共通のイメージを持ち、形を変えながら約3カ月という長期間遊びが続いたと考える。

一方、5歳児クラスの事例②の中で保育者が積極的に援助していたのは、【Ep.②-2】下線部13・14の場面のみである。【Ep.②-2】の下線部11・12・15、【Ep.②-3】の下線部17・19など子どもたちが何らかの課題に直面している場面において、保育者bは

言動を細やかに観察・記録しているものの、直接手を貸すことはしていない。5歳児は、友達と遊びのイメージを共有したり、課題や葛藤を乗り越えながら目標に向かって友達と協力したりできるようになってくる時期である<sup>12)</sup>。保育者bは、日々の子どもの姿から自身で乗り越えられる課題であると判断し、この場はあえて見守る姿勢をとったと考えられる。一方、積極的に援助を行った場面で保育者bは「他児の遊びの進捗に追いつくため」や「互いのイメージの統合と共有」のためという明確な意図とねらいを持って関わっている。子ども同士で遊びを進められる発達段階にあるとはいえ、その場の遊びの勢いや盛り上がりを子どものみで維持するのは難しい場合には、一歩先を見越した助勢が重要である。事例②で保育者bは、基本的に見守る姿勢を取りながら、一歩先を見越した適度な助勢をしたことにより、子ども同士でクリスマスのイメージが共有され、遊びの勢いを失うことなくサンタクロースがソリに乗って滑るという子どもたち共通の目的が実現されたと考える。

保育者が援助をやりすぎてしまうと、遊びが子どもの手から離れ、保育者主導の形になりかねない。事例①②は対象年齢など発達段階が異なるため、アプローチの方法や介入の度合いには違いがみられるものの、どちらの保育者も今子どもが楽しんでいることを捉え、子どもの思いを尊重している。その上で現在の課題あるいはこの先出てくるであろう課題を考え、どのような展開の可能性があるかを見通しながらその場に応じた関わりをしている。こうした保育者の細やかな気付きと見通しに基づいた援助が、子どもの自発的なごっこ遊びを充実させていると考える。

#### 4-2. 何らかの役割を持つ (加藤)

ごっこ遊びは、子ども自身がまずイメージを持ち、そのイメージをモノや空間に投影させながら膨らませ、相手と共有することにより成り立つと考えられる。また、その過程で子ども自身が何らかの役割を持つことも、ごっこ遊びの重要な要件である。

ただし、河崎はごっこ遊びにおける子どもの基本的心理状態を「何かになる」こと<sup>13)</sup>としつつも、2、3歳前後の子どものごっこ遊びでは、ごっこの枠組みが成立した後であっても「役割」を担うには至らない「立場をとる」段階<sup>14)</sup>にあると指摘する。さ

らに、2・3歳児がごっこの枠組みの中で「何かになる」ことを「役割」と解釈することについては疑問を呈している<sup>15)</sup>。

【Ep.①-1】では、入園当初から身近に用意されていたお化け型の白色画用紙でお面を作り、お化けのイメージを膨らませながら遊ぶ3歳児の姿がある。深沢らでは、2・3歳児のごっこ遊びにおける保育者の援助を検討する中で、2歳児から3歳児前半の子どもが楽しむごっこ遊びでは、保育者によるイメージの交通整理や、場の設定といった具体的な援助<sup>16)</sup>が必要であると結論付けている。【Ep.①-1】の中で、保育者aはイチがつけているお化けのお面に興味を持ったミツに対し、お面をつけられるようにしてやるという援助をしている。ミツは、ままごとコーナーの入り口からイチを真似てフウとヨシをおどかしているが、イチとミツはお面をつけたことにより、お化けの役割をしようとしているのだろうか。【Ep.①-3】では、イチ、ミツ、フウ、ヨシ、ヤスがお化けのお面をつけてままごとをしている。そこでは、保育者aも一緒になりお化けのお面をつけておどかすという遊びをしているが、子どもたちがお化けの役割を演じているとは言えない。

箕輪は、ガーベイがごっこ遊び成立の要件として述べた「プラン」「役割」「物（の見立て）」「状況設定」の概念から遊びを考察する中で、3歳児のままごと遊びでは意図的な道具の選択、明確な役割分担はされてはいないものの、他児の行いは意識している<sup>17)</sup>と述べている。この指摘のように、【Ep.①-1】ではミツはイチの行いを意識し、お化けのお面をつける＝おどかすというイメージで遊び始めている。また、【Ep.①-3】では保育者aもお化けのお面をつけ、一緒に驚かすという行動をすることで、子どもたちの遊びの交通整理をし、さらに【Ep.①-4】ではお化け屋敷を作る提案をするというように、具体的かつ遊びの広がりを狙い、ごっこの枠組みを意識させるといった直接的な援助をしている。つまり、3歳児のごっこ遊びでは、河崎や箕輪が指摘するように役割を持つという段階には至らず、子どもたちだけでごっこの枠組みを維持し、ストーリーをリードしていくことは難しいと考えることができる。

事例②では5歳児がこれまでの経験から道具を使い、クリスマスのイメージで製作したモノを使って遊ぶ姿がある。前出の箕輪は、5歳児のごっこ遊びでは子どもの行為が各プランにおけるイメージに基



づき、そのイメージに合う道具の選択をしていると指摘する<sup>18)</sup>。

【Ep.②-1】では、ユウヤがトナカイになるために、角を作り、それを付けてトナカイの役になって駆け出す。【Ep.②-2】では、さらにハルトも角と赤い鼻をつけている。保育者bは、ユウヤとハルトがトナカイの役割を持つために、そのイメージに合うモノを創り出せるよう、道具を提供するといった援助を行っている。さらに【Ep.②-2】の中で、保育者bはサンタ役のカイにプレゼントの袋、サンタの服を作るための素材を渡し、トナカイ役のユウヤとハルトが戻ってくるタイミングで、保育室に段ボールを置いておくといった、一歩踏み込んだ援助（環境の再構成）をしている。【Ep.②-3】では、園庭でソリを走らせ「サンタクロースごっこ」を始めたトナカイ役のユウヤ、ハルト、サンタ役のカイに危機が訪れる。土や砂利によって、サンタのカイを乗せたソリが立ち往生し、それを見ていたゴウキが「そんなサンタじゃないよ」と言いつつ手を貸したことで、またソリは滑り出す。このアクシデントで、ファンタジーの世界から一気に現実世界に引き戻された子どもたちの役割は崩壊するかに思えたが、ごっこの枠組み、プランに基づく役割は、そのまま継続されている。

秋田らは、幼児のごっこ遊びにおいて子どもたちは保育者が工夫した“場”や“モノ”に依拠して「役」を生成、成立させていくと指摘している<sup>19)</sup>。さらに「“場”や“モノ”に依拠する期間は、3歳児より4歳児の方が短い」<sup>20)</sup>と考察している。つまり年齢が上がるにつれ場やモノに依存せずとも、子どもたちの役割は、枠組みやプランの中で維持され、事例②のように現実とファンタジーが交錯するような場面においても、子どもたちは現実の中で役の中での問題を解決し、また役に帰って遊ぶことができるのであろう。また「サンタクロースごっこ」という子どもたちの中で共通理解が成立しやすいテーマであったことも、ストーリーが崩壊しにくく、子どもたちのクリスマスへの期待感が役になりきり、遊びを楽しむ気持ちを高める一因であると考えられる。

事例①の保育者は、3歳児に対して「立場をとる」ためにごっこの枠組みを意識させる直接的な援助をしており、事例②の保育者は、ごっこの枠組みやプランは既に共有されている5歳児に対し、道具を用

意したり、環境に仕掛けたりすることで、枠組みやプランを明確にし、子どもたちの役割をさらに本物らしくするための援助をしている。このように、子どもが何らかの役割を持ち、ごっこ遊びを成立させるためには、保育者の場の設定と環境構成、さらに年齢に応じた関わり方の強弱が重要だと言える。

#### 4-3. 模倣する、虚構・想像の世界、イメージの共有（齊藤）

深沢らはごっこ遊びの定義において、何かのふりをする「模倣」と、「虚構・想像の世界」の「イメージの共有」も必要な要素だとしている<sup>21)</sup>。本項では、事例①②を遊びの深度によって萌芽期、展開期、発展期の3期に分けて捉え、上記3つの要素について考察する。

まず萌芽期は、1・2人の子どもが何かを模倣する姿が見られた期間である。【Ep.①-1】でお化けになりきっているイチは、お化けに対し「人をおどかすもの」というイメージをもっており、その姿を模倣して楽しんでいるのだろう。またフウとヨシの楽しんでいるような様子から（下線部1）、2人もイチやミツの行動があくまでお化けのふりであり、おどかされるだけだと理解し、イメージの共有ができていと考えられる。【Ep.②-1】でユウヤが下線部10のような様子を見せたのは、自分のイメージに合った納得のいくトナカイの角ができたという喜びがあったためであろう。その喜びが、さらにトナカイの行動まで模倣するという次の意欲に繋がったのではないだろうか。対して、ハルトは【Ep.②-2】でユウヤを真似て角と赤鼻を作ろうとするが、納得のいくものにできなかったため、トナカイの行動の模倣に移らず、ユウヤを探しに行っている。遊びの深まりには、子ども自身が心を動かされる体験が、その後の体験に繋がりをもつことが必要だとされている<sup>22)</sup>。ごっこ遊びにおいて模倣のため衣装や道具を製作する場合、遊びが次に繋がり深まるには、子どもにとって納得のいくものができることが必要な要素の一つだと考えられる。

次に展開期とは、萌芽期の模倣からイメージが広がったり、複数人にごっこ遊びが共有されたりした期間である。展開期ではまず、【Ep.①-1】でミツが衝立の内側に入らなかったことが興味深い。イチの真似からお化けの模倣を始めたミツの中で、「お化けは家の中に入れないもの」という虚構・想像の世



界が広がったのだろう。下線部6では、保育者aの意図の通り（下線部7）、一人ひとりがお化け自体の想像を広げている様子がある。ただ、3歳ではままごと遊びの会話や食事の仕方でも固定化されたテーマとエピソードが使われ、「手慣れた」内容で遊びの「共有化」が行われることが多い<sup>23)</sup>。また、ごっこ遊びで使用する道具を投げて遊ぶことに終始する子どもがいるのは、子ども自身がイメージを豊かに持ちえないことが背景にあるとされている<sup>24)</sup>。

【Ep.①-5】において一度おうちごっこの目的が失われたのは、単なる生活の模倣ではなく、自分たちなりに「お化けのままごと」という虚構・想像の世界を広げる必要があったためではないだろうか。そこへ下線部8で保育者aが働きかけたことで、子どもたちがお化けの家のイメージを膨らませ、再現する方向に遊びが変化し、お化けごっこが継続したと考えられる。【Ep.②-2】では、保育者bは下線部16にあるように、サンタクロースを模倣したカイと、トナカイを模倣したユウヤやハルトとのイメージの共有を見通し、サンタクロースの模倣をイメージに近づけるための助勢を行っている（下線部13）。また下線部14で保育者bが環境の再構成を行ったことで、ソリに乗るというイメージが生まれ、虚構・想像の世界が広がっている。ごっこ遊びでイメージが共有され、虚構・想像の世界が広がるには、そういった年齢に応じた見通しをもった、保育者の適度な援助も有効になると分かる。

最後に発展期は、ごっこ遊びが他の遊びや経験に繋がった期間である。【Ep.①-6】では「お化けを蹴る」というルールのある遊びが成立している。初期のルール遊びは「狼がうさぎを追う」など役割の属性によって役割の表象が形成されるとするElkoninの考えを踏まえ、3歳児のおにごっこでは身振りによる「鬼」という役割の表象によって、追うという役割行動が支えられていると指摘されている<sup>25)</sup>。

【Ep.①-6】も同様に、それまでの「お化けは嫌がられるもの」というお化けの役割属性からくるイメージの共有がルールの共有・理解を助けたため、成立したのではないだろうか。また【Ep.②-3】では、ゴウキは下線部20のような側面があると保育者bに捉えられているが、下線部18の発言から、ゴウキなりのサンタクロースのイメージがあったのだと推察する。それを実現したいという思いが、ソリを押しごっこ遊びに関わるという行動を後押しし

たのではないだろうか。ゴウキは恐らくサンタクロースの模倣はせず、現実世界に立って関わっているが、「動くソリに乗る」というサンタクロースのイメージはユウヤたちとゴウキとで共有されていたため、後から参加したゴウキも「自ラ力を合わせて成し遂げる喜びを味わう」（下線部21）経験ができたのだろう。

事例全体をみると、事例①ではお化けの虚構・想像の世界を子どもたちの中で広げられる機会が保育者aによって繰り返し作られている（下線部2・3）。またお面を製作できる環境があり、それを身につけることで視覚的に何を模倣しているのか分かるようになっていく。ごっこ遊びにおいて同じ物を持つことは、仲間であることの表明になっており、他者と同じ動きをすることと比較して、永続的で視覚的アピールが強いという特徴がある<sup>26)</sup>。この点も3歳児クラスでこのお化けごっこが複数の子どもに共有され、継続した要因ではないだろうか。保育者が子どもの様子を適切に捉え、虚構・想像の世界が膨らみ、イメージ共有が促されるような環境や機会を構成することは、ごっこ遊びが継続し広がるための下支えになると考えられる。またお化けの怖さやリアリティを追求する方向性ではなく、一貫して「おどかさすもの」というイメージで進んでいたことは、子どもたちの中で混乱が起きず、イメージの共有がスムーズに行われた要因だと考える。事例②においても、サンタクロースの衣装やソリなどを製作し、イメージが視覚を通して共有されると共に、全体を通してサンタクロースは「箱入りの袋を持ち、赤い服とベルトを着て、ソリに乗っている」というイメージで一貫している。その共通の目指すイメージがあったからこそ、共にソリを製作し、動かそうと協同する姿がみられたのではないだろうか。

このように、ごっこ遊びにおいて製作する衣装や道具が子どもにとって納得のいくものになり「模倣」できること、ある程度一貫した「イメージの共有」ができていくこと、そしてそれらの必要性を理解し、意図的に環境の再構成や直接的な関わりを行う保育者の存在によって、ごっこ遊びが深まり「虚構・想像の世界」が広がるのだと考える。また、ごっこ遊びでの「イメージの共有」がルールのある遊びの成立や、協同の経験に繋がることも示唆された。

## 5. 総合考察 (請川)

ごっこ遊びが深まっていくことを考えた場合、そこには一定程度の遊びの継続が必要である。ただ、どのような状態を「遊びが深まった」と考えるのかは各人によって見解が異なるだろう。本稿においても事例①と事例②でその継続期間には違いがある。ただいづれにしろ、少なくとも数日以上は続いている遊びなので、日を跨いでいるという事だけは確かである。

そうになると、日を跨いでも次の日以降に遊びが再開されることが必要なわけであり、一晩寝てからまた園に来て昨日もしくはそれ以前の遊びを始めるということとなる。いったん止めた遊びを再び始めるきっかけは何なのだろうか。登園してから、昨日の遊びを想起するのにはいくつかの条件があるだろう。小川は遊びへの動機につながるものとして、「モノ」「人」「場所」をあげている<sup>27)</sup>。このうち、「人」は一緒に遊んでいたメンバーの事であり、今回の事例を見ても完全に同じではないものの、複数のメンバーが重なった状態で遊びを再開しているのが分かる。

では、「モノ」と「場所」はどうだろうか。まず「モノ」について考えてみると、今回の2つの事例から読み取れるのは、お化けやサンタクロースの遊びに使ったモノが保育室に保たれていたということである。それを見て昨日の(または以前やっていた)遊びを思い出し、「あの遊びの続きをやりたい」と想起するきっかけとなっているのだろう。園によっては毎回きれいに片づけをして、製作の途中であるモノを残しておくスペースがないところもある。そうすると、毎回最初から作り始めなければならないということが大きな課題だが、そもそも昨日までの遊びを想起する大きなきっかけを喪失しているということにもなる。昔ながらの保育所では、遊びの場と食事や午睡の場所が同じであるため毎回きれいに片づけないと場が確保できないという問題があるようだ。何とか工夫をして遊びが継続できるよう、さらには過去の遊びが想起できるように、子どもたちが作ったモノを彼らの目に見える場所に保管しておけるようにすることが重要である。別な工夫としては、遊びの様子や過程を写真などに収めてそれを掲示するという方法もある。これをドキュメンテーションの作成と掲示という形で実施する園も増

えてきた。以前、筆者らが書いたドキュメンテーションについての本<sup>28)</sup>の中で、あんず幼稚園(埼玉県入間市)の教員をしていた利根川彰博氏(現:こども教育宝仙大学)が書いた5歳児クラスの実践「色付きドロダンゴをつくろう」が、まさにドキュメンテーションを掲示する効果をよく表したものであった。5歳児がドロダンゴを作っていく過程で、いつも同じ色だとつまらないから色のついたドロダンゴにしたいという思いが出てくる。その思いがきっかけとなり、様々な工夫をしてドロダンゴに色をつけて行くという過程がドキュメンテーションの中に示されている。このドキュメンテーションは、担任である利根川氏がこの取り組み(チャレンジ)を周りの子に伝えるという意味を含めて書いたもので、ドロダンゴ作りに参加していないメンバーにも色付きドロダンゴへの取り組みが分かるようになっている。光るドロダンゴを見ると自分もやってみたいという子どもは増えるだろうし、さらなる挑戦をしてみたいという子どもも現れるであろう。まだ完成していない時点の取り組みをドキュメンテーションに示すことで、周囲の子たちがその挑戦を知ることができるようになるというのが写真を活かした記録の利点であろう。それが、これまで参加していなかった「人」がそこに加わるきっかけとなり、遊びに新たな刺激をもたらす端緒となる。このことも遊びの深まりに関与してくる。

遊びのマンネリ化ということが良く言われるが、同じ「人」が同じ「モノ」を作って同じ「場所」で遊んでいるだけではいつかマンネリ化に陥る。事例①でお化けを作って遊んでいる3歳児にお化け屋敷のイメージを持ち込んだのは保育者aであった。一方事例②では、サンタやトナカイを作っているところにソリというキーワードを提示したのはその遊びとは別な場所にいた同じクラスのアミである。このように遊びが深まるきっかけとして、保育者や遊びに入っていない別な子のアイディアが生かされることは往々にしてある。これを偶然に任せるのではなく、意図的な気づき(学び)の場とするために筆者(請川)はサークルタイムと呼ばれる集まりの場面にその可能性を感じている<sup>29)</sup>。サークルタイムを活用することで、遊びの中の興味や課題を、その遊びに携わっているメンバーだけでなく、クラスの子にも共有することが可能となる。そのことが、すぐに遊びの広がりや解決につながらなくても、遊

びそのものに興味をもち、その遊びに加わるメンバーが増えるきっかけとなるかもしれない。それがさらに新しいアイデアを生み出す契機となることもあろう。

保育者は遊びの「モノ」「人」「場所」を把握しつつ、必要に応じて遊びがさらに深まるための何らかの援助をしなくてはならないだろう。その1つがドキュメンテーションの作成及び掲示に見られた「情報の共有」であり、もう1つが遊びについて保育者と子どもたちが共に考え「対話」をするような場を意図的に持つこと（サークルタイム、集まり場面など）ではないかと考えている。

## 6. まとめ （深沢）

遊びの深まりと保育者の援助について、ごっこ遊びの事例を対象に5つの視点で分析してきた。今回研究対象とした2つの事例は、年齢や遊びの継続期間が異なり、保育者の関わり方の度合いにも違いが見られるものの、発達段階を踏まえて子どもの姿を丁寧に捉え、その場に応じた援助を行なっていることは共通している。また一言で援助といっても、遊びの中に入り直接的に関わる援助、環境の再構成を行う間接的な援助、子どもに新たな視点を提案する直接的または間接的な援助等、アプローチ方法の違いや援助の程度に強弱があることが明らかとなった。保育の現場においては、援助の使い分けを保育者個人の感覚や経験知に委ねる傾向にあるが、こうした援助の度合いや強弱、アプローチ方法やタイミング等を理論的に語れるようにしていくことが今後保育の質の向上を考えていく上で必要不可欠だと考える。

本研究ではごっこ遊びの定義のあいまいさについて冒頭で指摘した上で、5つの要素を視点としておき分析を行なった。しかし、「何らかの役割を持つ」という要素に関して、年齢によっては「役割」を担うに至らない段階にある場合があるということが示されたことから、示す定義の適切な表記の方法に関して議論、検討していく必要があるだろう。また、本研究では長期に渡って遊びが脈々と続く事例、協同遊びが可能となる時期の事例をそれぞれ1例ずつ取り上げたが、さらに様々な事例について検討していくことで、ごっこ遊びを支える保育者の援助として重要な共通項が明確に見えてくるだろう。

## 7. 引用・参考文献

- 1) 深沢佐恵香・大滝茜・織壁佐和子・加藤直子・中里啓子・請川滋大：ごっこ遊びの深まりを支える保育者の援助 —2・3 歳児クラスの事例から—, 日本女子大学, 大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科 第 29 号, p.163-172, (2023)
- 2) 河邊貴子・田代幸代：遊びが育つ保育 ～ごっこ遊びを通して考える, フレーベル館, p.12, (2020)
- 3) 文部科学省(編)：幼稚園教育要領, p.3, (2018)
- 4) 前掲 1) p.164
- 5) 松原乃理子・大滝茜・織壁佐和子・富田貴代・深沢佐恵香・森末一代・請川滋大：「ごっこ遊び」研究の傾向 —保育実践を対象とした調査に着目して, 日本女子大紀要 (家政), 69, p.1-12 (2022)
- 6) 前掲 1) p.165
- 7) 前掲 3) p.2-3
- 8) 小川博久：遊び保育論, 萌文書林, p.46, (2010)
- 9) 深沢佐恵香：私立幼稚園における教育方針・理念, 教育方法に関する調査 —山梨県内私立幼稚園 Web サイト・SNS の分析から—, 日本保育学会第 76 回大会, ポスター発表 P-C-3 (2023)
- 10) 河邊貴子：遊びを中心とした保育 —保育記録から読み解く「援助」と「展開」—, 萌文書林, p.22, (2020)
- 11) 前掲 2) p.76
- 12) 前掲 2) p.76
- 13) 河崎道夫：あそびのひみつ, ひとなる書房 (1994)
- 14) 河崎道夫：2 歳児のごっこ遊びにおける行為の変動と「立場」, 心理科学, 22, 1, p.18-29 (2001)
- 15) 同上
- 16) 前掲 1) p.163-172
- 17) 箕輪潤子：砂場におけるままごと遊びの発達の検討, 川村学園女子大学研究紀要, 21, 2, p.53-67 (2010)
- 18) 同上
- 19) 秋田喜代美, 増田時枝：ごっこコーナーにおけ

- る「役」の生成・成立の発達過程, 東京大学大学院教育研究科紀要, 41, p.349-364 (2001)
- 20) 同上
- 21) 前掲1) p.165
- 22) 前掲1) p.164
- 23) 佐藤公治:「幼児の対人関係ルールの獲得と社会的適応過程の縦断的研究(1) —共同遊びの成立と発達過程における社会的相互作用について」日本教育心理学会総会発表論文集 第36回総会発表論文集, p.52, (1994)
- 24) 八木紘一郎:『ごっこ遊びの研究 —生活保育の創造をめざして—』新読書社, p.85, (1992)
- 25) 田丸尚美:「幼児の遊びにおける役割関係の理解 —おにごっこ場面の発達の検討—」39-3, p.341-347, (1991)
- 26) 砂上史子:『「おんなじ」が生み出す子どもの世界 —幼児の同型的行動の機能—』東洋館出版社, p.121-122, (2021)
- 27) 小川博久:「保育援助論」, 萌文書林, (2000)
- 28) 請川滋大・高橋健介・相馬靖明(編著):「保育におけるドキュメンテーションの活用」, ななみ書房, (2016)
- 29) 請川滋大:「好きな遊びを中心とした保育を充実させるためのサークルタイム」, 日本女子大学紀要家政学部, 63, p.1-9, (2016)



# 大規模避難所施設を対象とした住民主体による運営モデルの構築

— 近隣コミュニティ住民の第2回ワークショップでの学習効果 —

An Operational Model of a Large-scale Shelter Independently Run by Local Residents:  
Effectiveness of Learning by Local Community Residents in the Second Workshop

古川 洋子\* 平田 京子\*\* 石川 孝重\*\*\*  
Yoko FURUKAWA Kyoko HIRATA Takashige ISHIKAWA

**要約** 避難所の自主運営体制の導入に向けたスキル育成プログラム「K市避難所大学」に基づき、K市コミュニティ協議会の地域住民を対象に第2回ワークショップを実施した。個人の学習前後の変化を計測するアンケート調査からは、地域の避難所への関心が高く、発災時の避難所生活や課題のイメージ、自主運営の意識を獲得したが、避難所開設や運営本部に関わる事前準備への関心が低いという課題が明らかになった。また、知識や自主運営の意識は一定の定着がみられたが、関心や生活イメージは前回以降低下し、維持しづらい結果となった。各チームの話し合いは雰囲気良く行われ、テーマの掘り下げ型とバリエーションが出る発散型となった。全体としては発散型となり、最終的に方法を決定する合意形成には至っていない。避難所生活のイメージの獲得や具体的計画を詰める場合には、訓練などの実践的な方法、さらなる条件設定をした上での話し合いによる効果が期待される。

**キーワード**：大規模避難所、地域コミュニティ、地域住民、ワークショップ、自主運営

**Abstract** A second workshop was held for local residents of the city of K Community Council based on a skills development program for a self-management system for evacuation shelters. A survey revealed a high level of interest in local shelters, an image of shelter life and its issues in the event of a disaster, and an awareness of self-management but a low level of interest in preparations related to the establishment of shelters and operational headquarters. In addition, a certain level of knowledge and awareness of self-management was instilled, but interest and images of life in a shelter were difficult to maintain since the last survey. Each team's discussion had a good atmosphere; discussions either delved into topics or diverged into varied topics. Overall, the discussions diverged and did not lead to a consensus. In the next stage, practical methods such as drills and further setting of conditions should be effective through discussion.

**Key words** : Large-scale shelter, Local communities, Local residents, Workshop, Independent management

## 1. はじめに

本研究では、これまで茨城県K市防災スポーツ施

設の避難所運営を対象としてきており<sup>1)</sup>、本施設隣接地域に市唯一のコミュニティ協議会（以降、コミ協）がある。市内には地域の避難所運営を担う実働組織はみられないが、地域活動が活発な当コミ協では、避難所自主運営への機運が出始めている。そこで自主運営体制の導入に向けて、住民を主対象に2回目となる「避難所大学－安心できる避難所を共助でつくる－」と題したワークショップ型学習を2022年10月16日に実施した。

\* 住居学科学術研究員  
Researcher Fellow, Department of Housing  
and Architecture  
\*\* 住居学科  
Department of Housing and Architecture  
\*\*\* 名誉教授  
Professor Emeritus

本報では、住民による避難所の自主運営を可能にするための知見を得ることをめざし、ワークショップ前後での参加者の意識変容、話し合いの到達点と発想、および第1回避難所大学<sup>1)</sup>との比較からワークショップへの参加経験による相違を把握する。

## 2. K市避難所大学（第2回）の概要

### 2.1 ワークショップへの参加者

コミ協関係の住民 23 名、コミ協の声かけで市職員や教員など 18 名計 41 名 (Table 1) が参加した。

Table 1 Number of participants and details

所属・役職など	人数 (人)	
コミ協関係者	役員	5
	運営委員	11
	部会員	7
	サポーター	0
市関係者	市職員	5
	市議会委員	2
	教職員	9
	コミセン職員	2
		23
		18
		41

### 2.2 ワークショップ全体の流れ

ワークショップでは 6 チーム各 6~7 人構成とし、各チームにファシリテータを 1 名配した。話し合いの時間は、意見を十分出せるよう各課題 30 分ずつとした (Fig. 1)。

話し合いの前提として、津波避難でコミュニティセンター（以降、コミセン）へ 100 人以上が避難してきた状態で、市や施設管理者に頼らず混乱する中、自分達で避難者の概数を把握し備蓄物資を配布するまでを想定した。課題①では避難所で発災後初動期に課題となる人数把握の方法、課題②では物資配布計画を定めるものとして、アイデアを出し合った。

課題②では、実物見学など可視化された情報をもとに発想した方が具体的な対処計画を立案できることから、備蓄倉庫での保管状況と数を実際に観察した上で、A,B チームは食糧（アルファ米 1,100 食、パン類 298 食、ビスケット類 366 食）、C,D は水（500ml が 1,320 本、1.5ℓ が 160 本）、E,F は毛布（不織布毛布 160 枚、毛布 17 枚）の配布計画について話し合った。

手順は、課題①②それぞれで、まず各自が課題、意見やアイデアなど思いつくもの全てを付箋に書き出した。各ファシリテータは付箋を模造紙上で分類して貼り (Fig. 2)、参加者各人が説明しつつチームで話し合い、気づいたことなどを共有した。最後に各ファシリテータが話し合いの概要を発表した。な

所要時間 (分)

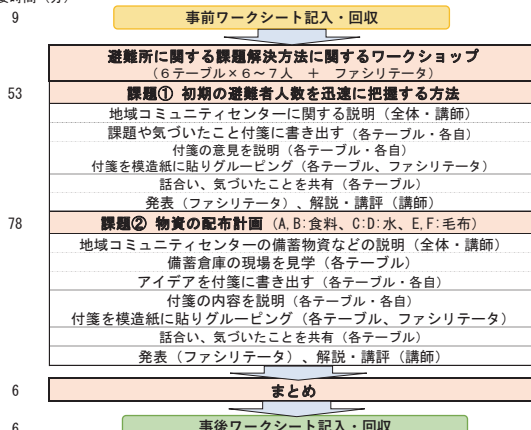


Fig. 1 Workshop flow

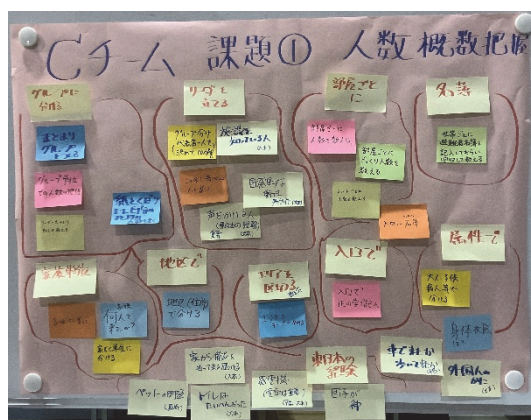


Fig. 2 Opinions on sticky notes and examples of grouping

お付箋は、1 項目 1 枚とし、参加者別の意見、ファシリテータの記録を区別できるように各人で色分けした。

### 2.3 アンケート調査の概要

教育効果測定等の目的で、受講者を対象にワークショップ前（以降、事前）と後（以降、事後）それぞれアンケート調査を行い、各 41 部を回収した（回収率 100%）(Table 2)。調査項目は、興味・関心、知識、当事者意識、避難所生活のイメージなどである。

Table 2 An overview of the survey

実施日	2022年10月16日
方法	自記式、直接配布・即時回収
対象者	K市避難所大学第2回の受講者 41名

なお、参加者各人の学習効果を把握するため、事前・事後で個人の紐づけができるようにした。

### 3. 第2回避難所大学における学習効果

#### 3.1 地震について考えた経験と被害に関する知識

参加者は、50代以下が54%、60代以上が43%で現役世代がやや多く、男性が68%と多くなっている（Fig. 3, 4）。

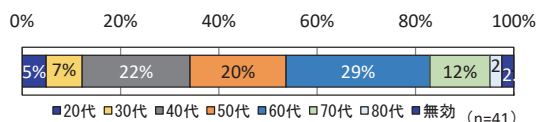


Fig. 3 Age

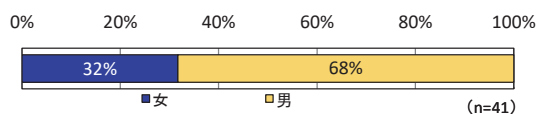


Fig. 4 Gender

講義前の先入観がない状態（事前）で、近い将来大きな地震被害に遭うかもしれないと98%が考えたことがある（どちらかというところ、あるの合計値）（Fig. 5）。一方で避難所生活については29%が考えたことがない（どちらかというところ、ないの合計値）と回答した（Fig. 6）。

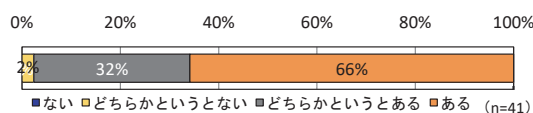


Fig. 5 Thoughts about major earthquake damage (Pre-survey)

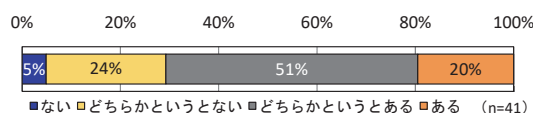


Fig. 6 Thoughts about life in a shelter

K市では最大震度6強、電力停止約1週間が想定されている<sup>2)</sup>。今後の地震被害についてたずねたところ、震度6強の正答が37%と最多であると同時に、楽観視する回答も多い（Fig. 7）。電力も同様に、1週間の正答54%に対して、短期の停電期間回答も42%と多くなっている（Fig. 8）。

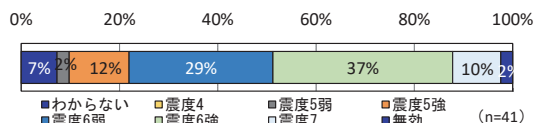


Fig. 7 Expected earthquake intensity in the region

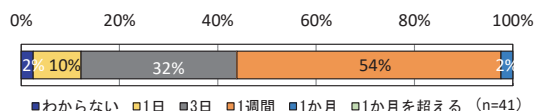


Fig. 8 Expected periods of power outage

#### 3.2 ワークショップ前後の学習効果

##### (1) 避難所への関心

地域の避難所への関心は事前でも79%と高く、関心の程度がさらに高まった（Fig. 9）。大地震に関連する関心のある事項をみると、水道・電力のライフライン被害、震度、津波、備蓄物資など被災後の避難や生活に直接関わる事項が上位を占め、共助の順位は低い（Fig. 10）。

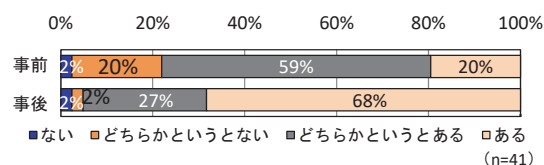


Fig. 9 Interest in community shelters

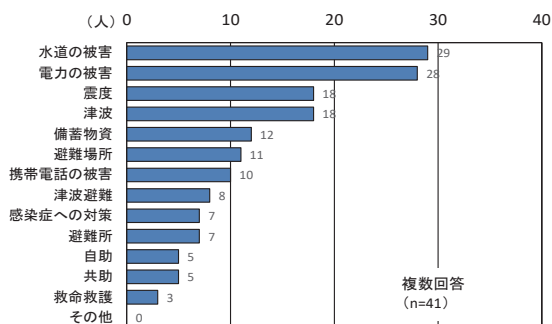


Fig. 10 Items of interest related to major earthquakes (Pre-survey)

##### (2) 避難所での生活と課題のイメージ獲得

避難所生活が具体的にどうなるかを事前にイメージできない回答者が54%だったが、事後には全ての回答者がイメージできるようになった（Fig. 11）。

避難所でどのような問題が起こるか、またその対処方法についても同様である。イメージできなかった

た回答者 32%, 64%の全てが、課題でとりあげた人数把握、物資配布を具体的にイメージできるようになった (Fig. 12, 13)。

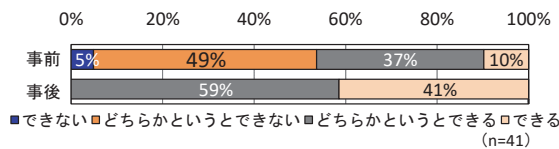


Fig. 11 Specific impressions of life in a shelter

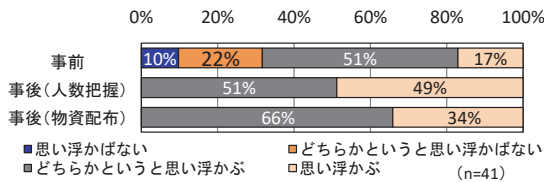


Fig. 12 Specific impressions of problems arising while living in a shelter

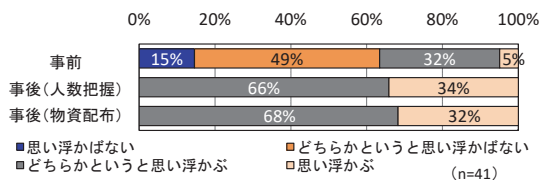


Fig. 13 Specific responses to problems arising while living in a shelter

### (3) 自主運営に関わる当事者意識

避難所の自主運営を円滑に進めるために求められる当事者意識について、避難所問題は自分にも直接関係する問題か (Fig. 14), 自分自身の主体的な運営参加 (Fig. 15), 避難所自主運営を運営者に委ねるか、住民皆が参加するかという意識 (Fig. 16) をたずねた。

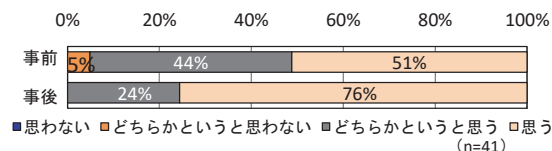


Fig. 14 Whether shelters are a personal concern

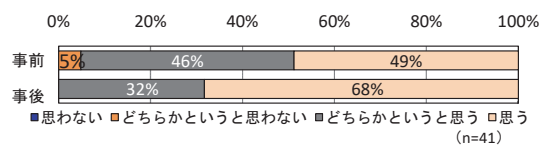


Fig. 15 Proactive participation in management

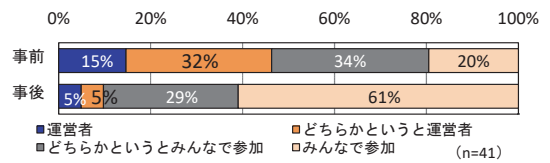


Fig. 16 Awareness of self-management of a shelter

自分にも直接関係するという意識、主体的な運営参加の意識は、事前から 95%, 95%と高く、事後には意識の程度がさらに高まった。運営にみんなが参加するという自主運営の意識は 54%から 90%へと高まった。

避難所をうまく運営するため、住民同士で考え事前に動き出す必要がある項目では、避難生活に関わる項目が上位を占め、ワークショップでとりあげた物資配布や避難者受け入れ (人数把握) の意識が高いが、避難所開設や運営への関心は低い (Fig. 17)。

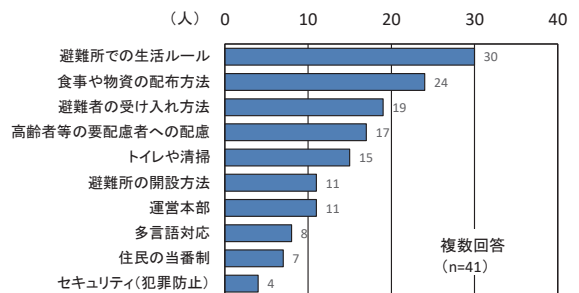


Fig. 17 Items for residents to prepare in advance (Post-survey)

## 4. ワークショップにおける話し合いの過程

A~F 各チームの話し合いの進行状況・様子について、ファシリテータに意見聴取を行い、Table 3 にまとめた。

また、話し合いの要点は各チームの発表内容に集約されていることから、グループワーク後のファシリテータによる課題①②の発表のポイントを Table 4 に整理し、項目分けした。活発に意見が出たかどうかの目安として付箋数を示す。また付箋の個人の意見と話し合いから出た意見とを区別するため、ファシリテータの記録は話し合いから出たと解釈して、太字斜体の文字で表した。



Table 3 Progress of each team's discussion

チーム	課題①人数把握	課題②物資配布
A	・話し合う雰囲気がよく、良い意見を出す人いた ・全員からの良い意見がまんべんなく出て、全員が対等に参加した	・話し合う雰囲気がよく、良い意見を出す人いた ・発展段階では、深さを出し切れず発展が難しかったため、ファシリテータが補足した
B	・アイデアを出し合う場面では、話し合いは活発で雰囲気がよかったが、議論は全員が対等ではなかった ・後の話し合いでは、チームリーダー役がいて色々なことに気づいた	・アイデアを出し合う場面ではチームリーダー役がいたが、よい案はなかなか出なかった ・後に話し合いが活発で雰囲気がよくなり、アイデアが発展した
C	・東日本大震災時にコミセンへ避難した経験者から多様な話が出ており、雰囲気はよく話し合いが活発で、全員が対等に参加した ・よいアイデアが多く出て、色々な気づきがあった	・まず課題や疑問を出してから解決策を話し合った ・話し合いが進展し、色々なことに気づいた
D	・話し合う雰囲気がよく、全員が対等に議論に参加した ・話し合いの中からよいアイデアが出て、色々なことに気づいた	・話し合いは活発で雰囲気がよかった ・特にアイデアを出す場面ではチームリーダー役があり、全員が対等に議論に参加し、話し合いへも発展して色々なことに気づいた
E	・話し合いの雰囲気がよく、全員が対等で活発に参加した ・アイデアが出やすい内容で、付箋と話し合いからもよい意見が多く出た ・議論が進み、人数把握の方法を掘り下げるところまで話し合った	・話が進展しづらく、アイデアを出し合う場面ではよい意見があまり出なかった ・後に話し合いが活発になり、アイデアが進展し、色々なことに気づいた
F	・全員が対等には参加できなかったが、チームリーダー役がいて雰囲気はよく、付箋と議論からも意見が出た ・話し合いでは、アイデアが進展した	・雰囲気よく、話し合いが活発になり全員が対等に参加できた ・話し合いの中からアイデアが進展し、色々なことに気づいた

Table 4 Points discussed by each team

チーム	課題①人数把握				課題②物資配布				
	人数把握の方法	グループ・班分け	グループリーダー	その他参加者の付箋の数	配布方法	リーダー・支援者	配慮事項他	周辺の住民、車中泊	その他参加者の付箋の数
A	リーダーごとに人数を報告番号札を事前に用意	地区ごとなど	グループリーダーを決める	10	1食ずつ時間を決めてリーダーに配布(公平)	グループリーダーに配布(効率、公平)	アレルギー対応、ハラル対応	避難者と周辺住民への対応	14
B	ある程度着いてからグループごとに人数把握	10人ぐらい、3家族ぐらい、単身者のグループ場所の入れ替え(要配慮者優先)	グループリーダー	21	食糧 1人1回1個の徹底名簿の活用し、グループリーダーに配布	グループリーダーに配布 手伝ってくれる人持ち寄り	アレルギー対応 温かい食事 まとめて作る	周りの住民にも配慮する	33
C	広い場所ではエリア、部屋ごと、入口でカウント 要配慮者(病人、外国人など)リーダーが人数把握	家族単位、地区単位	リーダーがグループを代表して把握 自発的な人、講座受講者が率先して声あげ	19	名簿と照合して避難者へ配布 事前に足りない時の優先順位のルール決め、明記 配り方も見える化	配る人、管理する人を見る化(安心、不公平感への対応、ベストの着用)	要配慮者などへの優先順位	井戸水、太陽光発電の活用 市との連携(補充、機量の把握) アリーナとの連携	22
D	ホールでは靴の数、部屋では片側へ寄ってもらい点呼 部屋ごと、エリアでリーダーが数える 名簿で要配慮者の把握(高齢者、乳幼児)		声をあげて有志のリーダーを募る(世帯主、防災士など) リーダーが数える	22	水 運ぶ方法(段ボールの活用、分け合う) 500mlボトルの器として活用 その日の分をカードと交換して配布			車中泊の人への配布	30
E	整列、体育館の線、ロープやコーンの区画を使って人数把握 名簿と名札の色分け(子どもがいる母親、高齢者など要配慮者を同時に把握) 名前と一緒に番号をつけ、物資配布の次のステップへ 名簿と入口で出入り管理、カメラの活用	グループに分ける		15	毛布 不織布は1人1枚(2枚目要相談) 普通の毛布は要配慮者など(家族で共有、高齢者、女性)使う空間、誰が使うかにより配布物を変える 和室・会議室は畳とマットがあるので、体育館の避難者へ下敷きを配布	ボランティアの協力を募る 避難者自身に持参、協力してもらう 小中学校の学生が配る(モラルを保つ)	普通の毛布は要配慮者へ配布	アリーナとの連携、搬送 事前に備蓄品の周知 避難者自身に持参、協力してもらう ベットシートの持参	27
F	広い場所では下駄箱の数 小グループで人数把握 事前に色分けカードを用意して、部屋割り、人数把握を同時にする(男女別、大人子どもなど)	地区、部屋、家族単位 事前に色分けカードを用意して、グループピング、部屋割り	担当者決め(予め、声掛け、避難所の様子がよくわかっていて、中学生、コミセンの人)	20	受付カードを使って2度配布を防ぐ 不織布は1人1枚平等に配布 普通の毛布は要配慮者へ配布	リーダーが予め方針を周知	不平等への対応(要配慮者配慮、不満への対応) 着いてから場所を確保	声掛けして自宅から持ってきてもらう 簡易場所を選びやすい場所へ	22

太字斜体: 模造紙にファシリテータが記録したものを示す

## 4.1 各チームの話し合いのタイプ

話し合いの雰囲気は、課題①人数把握の方法では全てのチーム、課題②物資配布計画ではA,B,D,Fで雰囲気が良かったとファシリテータが評しており、概ね全てのチームが良好な雰囲気であった。

話し合いのタイプは分かれ、特に課題①では、4チーム(A,C,D,E)で全員が対等に参加しており、その中でもC,Eは話し合いが活発だった。一方、B,Fは全員が対等ではなかったものの、リーダー役がいたという特徴がある。

課題①では、アイデアや意見を参加者全員で出し

合い(A,C,D,E)、多様な点に気づいた(B,C,D)。これに対し課題②では、当初付箋でアイデアを出し合う場面では、発想しづらい状況であった(B,E)。後に話し合いが活発になり(B,D,E,F)、話し合いやアイデアが進展した(B,C,D,E,F)と評している(Table 3)。これは、Table 4の話し合いのポイント項目が配布方法以外へ多数展開している点、話し合いから意見が出された点(太字斜体)にも表れている。他方でAは、話し合いの発展が難しく深堀できず、ファシリテータが補足した(Table 3)。

## 4.2 話し合いの共通ポイント

### (1) 人数把握の方法

人数把握に関する話し合いの要点は、主に3点（人数把握の方法、グループや班分け、グループリーダー）が共通する（Table 4）。特に「グループ単位での」人数把握が共通して出されたことから、合理的方法の提案に注力したことが分かる。これに加え、番号札や名簿を使う方法、要配慮者の人数把握にも言及された。Eは、さらに具体的な数え方（ロープの区画、名札の色分けなど）があがるなど、メインテーマである人数把握の方法を詳細に検討する掘り下げ型の過程がみられる。

一方A,B,C,D,Fは、グループ・班分けの単位や方法、グループリーダーの適任者とその募集など、人数把握から多様なバリエーションへと発散した。

### (2) 物資配布の方法

物資配布は5項目（配布方法、リーダー・支援者、配慮事項、周辺の住民・車中泊、その他）が共通して出されており、全チームが配布方法にとどまらず多様な項目へ広げていったことがわかる（Table 4）。

同じ物資チーム間では同じポイントに着目しており、食料配布では、グループリーダーへまとめて配布し、要配慮者や周辺住民への対応を想起したことが共通する。Bは持ち寄り、温かい食事などによる良好な雰囲気づくりにも言及した。水の配布では名簿との照合、カードとの交換などの配布ルールに着目し、在庫量・残量の把握や、Cは住民の協力・アーリーナとの連携へと発展した。毛布の配布は、数が不足する普通毛布は要配慮者を優先し、不足や不平等への対応が課題として挙げた。

全体を通して発散型思考となり、具体的に方法を決めるという合意形成には至っていない。

## 5. ワークショップへの参加経験による相違

ワークショップ型学習により自主運営の機運がどう高まるかをみるため、2021年12月12日に行った第1回避難所大学での調査結果<sup>1)</sup>との比較から、前回参加者と不参加者との相違、前回から今回への知識・意識定着を把握する。

### 5.1 第1・2回避難所大学でのアンケート調査概要

第2回受講者41名のうち、第1回も参加した15名（以降、前回参加者）と初めて参加した26名

（以降、前回不参加者）との参加経験による相違をみる（Table 5）。

Table 5 An overview of the survey (1<sup>st</sup> and 2<sup>nd</sup> workshop)

	第1回避難所大学	第2回避難所大学
実施日	2021年12月12日	2022年10月16日
対象者	受講者42名	受講者41名 (第1回も参加:第1回は不参加 =15:26)
方法	自記式、直接配布・即時回収	

第1・2回調査ともに、講座の前と後それぞれアンケート調査を行い、教育効果などを測定した。

### 5.2 前回参加者と前回不参加者の属性

参加者属性では、前回参加者と不参加者とは年代と男女比にちがいがみられた。前回参加者は60・70代が67%、女性が20%であるのに対し、前回不参加者は40・50代が58%、女性が38%であり、現役世代、女性の割合が前回参加者よりも高くなっている（Fig. 18, 19）。コミ協関係の住民、市の関係者の別でみると、前回参加者・不参加者ともに住民が67%、57%と多い（Fig. 20）。

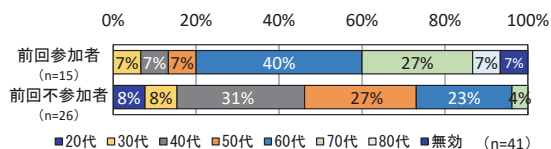


Fig. 18 Age

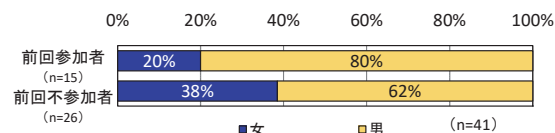


Fig. 19 Gender

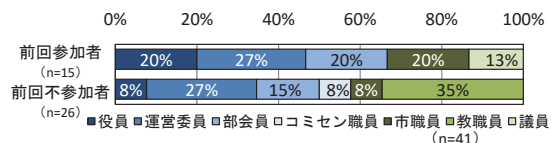


Fig. 20 Community councils and city affiliations

### 5.3 前回不参加者がのびた項目

#### (1) 地域の避難所への関心

避難所への関心は、事前には前回参加者の「ある」の回答が40%と高く、スタート時点で前回不参加者との差がみられた。前回不参加者の関心が「ある」

は 8%から 69%へ大きくのび前回参加者とはほぼ同割合となった (Fig. 21)。

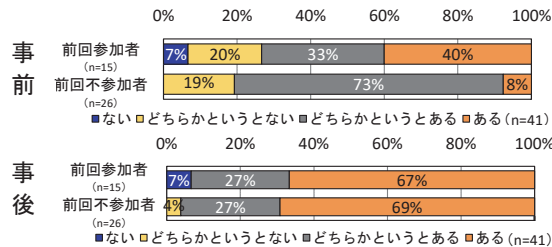


Fig. 21 Interest in community shelters (previous participants and non-participants)

## (2) 避難所生活のイメージ

避難所生活をイメージできたのは、事前には前回参加者の 60%，前回不参加者の 39%と 21%の差があった (Fig. 22)。事後にはどちらも全員がイメージできるようになった。

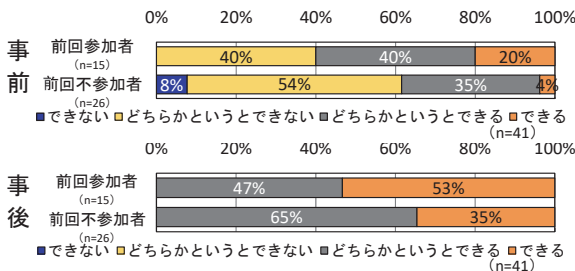


Fig. 22 Specific impressions of life in a shelter

## (3) 避難所運営の当事者意識

避難所の自主運営に関わる項目では、避難所運営課題の解決を運営者に任せるか、みんなで参加するかの意識について、事前には前回参加者の自主運営の意識が 74%，前回不参加者は 42%と大きな開きがあった。事後には、前回不参加者の意識が 89%へと高まった (Fig. 23)。

## 5.4 住民同士で事前に動き出す必要がある項目

避難所をうまく運営するために、住民同士で事前に動き出す必要がある項目では、前回参加者と不参加者との違いがみられる (Fig. 24)。第 2 回講座でとり上げた課題に関わる 3 項目 (避難所生活ルール、食事や物資の配布方法、避難者受け入れ) では、特に前回不参加者の関心が高い。

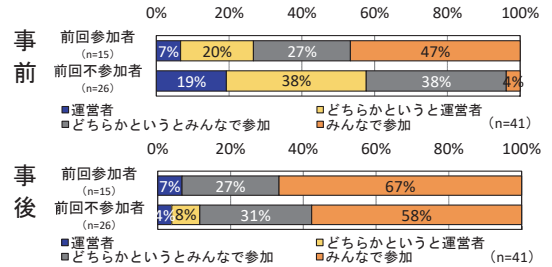


Fig. 23 Awareness of self-management of a shelter

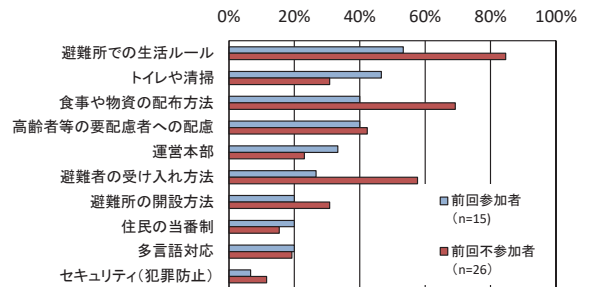


Fig. 24 Items for residents to prepare in advance

## 5.5 第 1 回から 2 回講座までの意識・知識の定着

避難所大学第 1 回から 2 回までの約 10 か月後の意識や知識の定着を把握するため、第 1 回受講者 42 名と、第 2 回受講者のうち第 1 回も受講した 15 名とを比較した。

### (1) 意識が定着した項目

地域で想定される最大震度は、第 1 回事後の震度 6 強の正答率 71%が、第 2 回的事前には 40%であり、半数あまりの参加者の意識が定着した。電力停止期間 1 週間の想定も、同程度の意識定着がみられた (Fig. 25, 26)。

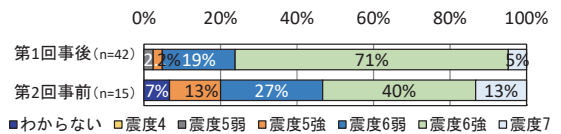


Fig. 25 Expected earthquake intensity in the region

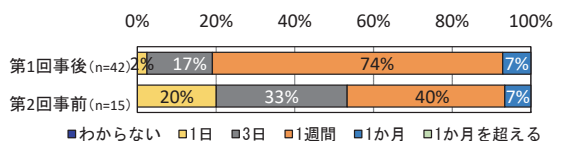


Fig. 26 Expected periods of power outage

避難所自主運営の意識は、第1回事後には74%、第2回事前には74%（どちらかというともみんなで参加、みんなで参加の和）であり、定着してきている（Fig. 27）。

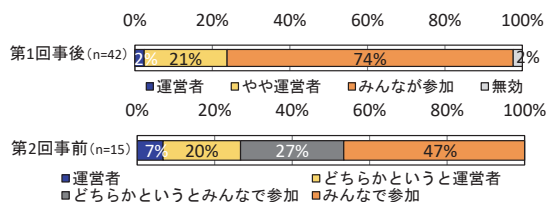


Fig. 27 Awareness of self-management of a shelter

## (2) 意識が定着しにくかった項目

避難所への関心は全体として高く、第1回の事後には97%に高まったが、第2回の事前には関心がない受講者が27%おり、意識定着はむずかしかった（Fig. 28）。避難所生活のイメージも、第1回の事後には全ての回答者が断片的にでもイメージできたが、第2回では40%がイメージできず、第1回事前と同程度の割合に戻っている（Fig. 29）。

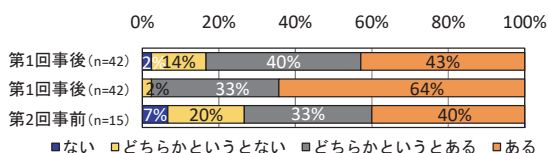


Fig. 28 Interest in community shelters

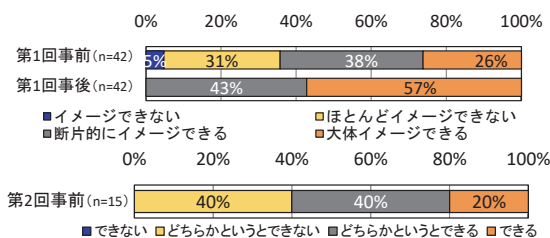


Fig. 29 Specific impressions of life in a shelter

## 5.6 チームでの話し合いに関する評価

チームでの話し合いに関する5項目（自分の意見を伝え・人の意見を聞く、よいアイデア、活発な議論、対等な参加、全体の満足）について、全ての項目で前回参加者の前向きな評価が高く満足度が高かった（Fig. 30～34）。

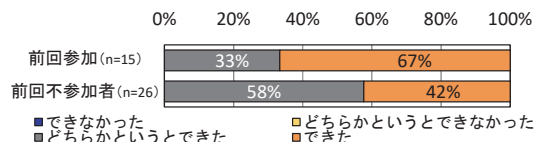


Fig. 30 Expressing opinions and listening to others

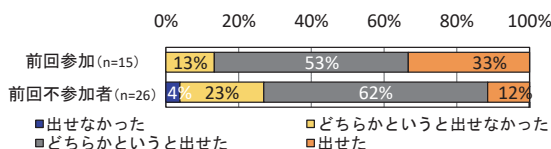


Fig. 31 Generating good opinions and ideas

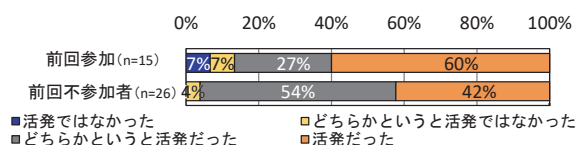


Fig. 32 Active opinions in the group

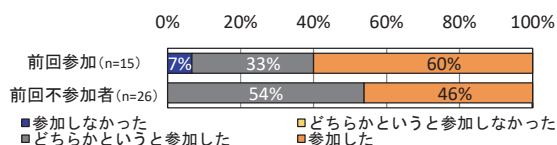


Fig. 33 Equal participation in team discussion

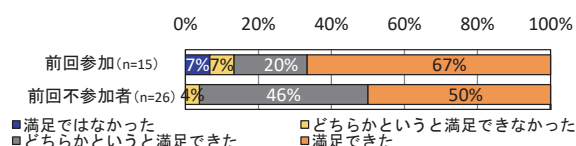


Fig. 34 Satisfaction with team discussion

## 6. おわりに

第2回避難所大学の受講者は、地域の避難所への関心が高く、本ワークショップを通して発災時における避難所生活や課題のイメージ、自主運営の意識を獲得したが、避難所開設や運営本部に関わる事前準備への関心は低いという現状が明らかになった。これは第1回避難所大学と概して同様の結果である。

第1回講座で獲得した学習効果の定着に関しては、知識や自主運営の意識は一定の定着がみられたものの、関心や生活イメージは前回以降、維持しづらい結果となり、次段階では実践的な訓練などへの展開が期待される。

チームでの話し合いは雰囲気良く行われ、掘り下げ



型と発散型となり、全体を通しては発散型となった。特にアイデアが出づらい課題の場合などに、多くの意見により様々なバリエーションが出る発散型となり、最終的に最善な方法を決定するという合意形成には至っていない。具体的計画を詰める場合には、さらなる条件設定をした上での話し合いが求められる。

## 謝辞

本ワークショップおよびアンケート調査実施にあたり、K市コミュニティ協議会住民の皆さまおよび市関係者の皆さまにご協力頂いた。本研究プロジェクトの共同研究者である清水建設技術研究所のみな様には、ファシリテータとして参加いただき、また考察にあたって貴重な意見を賜った。各位に感謝の

意を表する。

本研究の一部として2020年度住総研研究助成を受けた。

## 引用文献

- 1) 古川洋子, 平田京子, 石川孝重: 大規模避難所施設を対象とした住民主体による運営モデルの構築－近隣コミュニティ住民対象ワークショップでのグループによる課題解決過程－, 日本女子大学大学院家政学研究科・人間生活学研究科, 第29号, pp.127～135, 2023年3月.
- 2) 茨城県: 茨城県地震被害想定調査報告書(概要版), <https://www.pref.ibaraki.jp/bousaikiki/bousaikiki/bousai/higaisoutei/documents/gaiyou1.pdf>, 平成30年12月.



# 顔面三次元形状データを用いた顔面形状の類型化

## Shape Analysis and Shape of Face Using Three-dimensional Facial Shape Data

鯨 岡 詩 織\*

Shiori KUJIRAOKA

野 口 有理紗\*\*

Arisa NOGUCHI

武 本 歩 未\*

Ayumi TAKEMOTO

大 塚 美智子\*\*\*

Michiko OTSUKA

**要 約** 体型適合性の高い衣服設計を実現するために、三次元人体形状データを用いた体型分析、体型分類が行われているが、本研究では、家庭用マスクのフィット性の向上や顔面への高い密着性が必要となる酸素マスクや産業用マスクなどの商品開発において重要となる顔面の形状に着目し、類型化を試みた。女子大学生 93 名の顔面三次元形状データを用いて主成分分析し、得られた主成分得点を用いてクラスター分析を行った。その結果、顔面形状は、顔面の大小、縦横比、前額部・鼻部・オトガイ部の奥行にあたる凹凸の傾向などの特徴により、5つのクラスターに分類された。

**キーワード**：三次元人体形状データ、相同モデル、形状特徴、顔

**Abstract** Body shape analysis and body type classification using 3D human body shape data are being carried out in order to create clothing designs that are highly suitable to body types. We focused on the shape of the face, which is important in the development of products such as oxygen masks and industrial masks that require gender characteristics, and we attempted to categorize them. Principal component analysis was performed using three-dimensional facial shape data from 93 female university students, and cluster analysis was performed using the obtained principal component scores. As a result, facial shapes were classified into five clusters based on characteristics such as facial size, aspect ratio, and tendency to unevenness corresponding to the depth of the forehead, nose, and chin.

**Key words** : 3D human body shape data, Homologous model, Shape characteristics, Face

### 1. 緒言

新型コロナウイルス感染症の流行によりマスクの着用が必須となった期間は、令和2年の始めから令和5年3月13日に「マスクの着用は個人の判断が基本」となるまで、3年以上にも及んだ<sup>1)2)</sup>。その間に国内のマスク市場はマスクの形状や色などのバリエーションを拡大し、ファッション需要の期待に

も応えて成長した<sup>3)</sup>。マスク着用時の見え方への関心は高まったが、感染症流行下におけるマスクの着用を求める効果は、呼吸器症状による飛沫の拡散を予防することや、菌やウイルス、化学物質などの有害物質が呼吸器官を通して体内に侵入することを防ぐことである。布やウレタンよりもその効果が高いことが示されている伸縮性のない不織布素材のマスクを顔面形状にフィットさせて着用することが必要不可欠である<sup>2)4)</sup>。既に市場に流通するマスクは、顔とマスクの間にすき間を作らないよう、様々な設計の工夫もなされているが、消費者が自身の顔面形状を正しく理解し、適切なサイズや形状のマスクを選択することは容易ではない。また、鼻付近でマスクを顔面形状に隙間なくフィットさせ、それを維持

\* 被服学科

Department of Clothing

\*\* 被服学科卒業生

Department of Clothing Alumnus

\*\*\* 日本女子大学名誉教授

Japan Women's University Professor Emeritus

するために使用される「ノーズフィット」と呼ばれる金属の針金が採用されているものは、顔などへの障害に注意が必要であることが消費者に向けて情報提供されている<sup>5)</sup>。加えて、正しくマスクを着用しないと「マスク荒れ」と呼ばれる肌荒れを生じることもある。肌荒れは、顔の大きさに対してマスクのサイズが大きい場合に起こりやすくなる乾燥や、顔の大きさに対してマスクのサイズが大きい場合にも小さい場合にも起こりやすい摩擦が原因となることが多いとされている<sup>6)7)8)</sup>。そこで、本研究では顔面の立体形状に焦点を当て、家庭用マスクの設計や顔面の形状に沿った高い密着性が必要となる酸素マスクや産業用マスクなどへの製品開発にも応用することが出来る基礎的なデータの集積を目的とした。

被服構成学分野では、体型適合性の高い衣服設計を実現するために、三次元人体形状データを用いた体型分析、体型分類などが行われている<sup>9)</sup>。その研究手法に則り、三次元人体形状データから顔面形状のみに着目し、形状把握と類型化を試みた。

## 2. 方法

### 2-1. 資料

日本女子大学家政学部被服学科の学生 93 名 (2019 年) を対象に、固定式スキャナ (浜松ホトニクス (株) 製 ボディラインスキャナ) によって全身の三次元計測を行った。取得したスキャンデータから相同モデルを生成した。さらに、本研究では顔面の形状を分析対象とするため、相同モデルの後頭部、首、胴体、四肢を削除したデータを作成した。以降、このデータを「顔面三次元形状データ」とする。

### 2-2. 解析方法

#### 2-2-1. 主成分分析による顔面形状の特徴の抽出

顔面形状の特徴を抽出することを目的に、93 名の顔面三次元形状データの主成分分析を行った。

Fig.1 に示したように、顔面三次元形状データの座標の位置を合わせるため、鼻尖点が X 軸・Y 軸・Z 軸で 0 (原点) になるように移動させた。さらに、93 名のデータに対して、X 軸・Y 軸・Z 軸に回転をかけることにより個々の三次元形状データの顔の傾きや角度の差が最も少なくなるように調整した。位置調整後の三次元形状データを用いて、主成分分析を行った。

主成分分析の解釈の方法は、主成分得点  $\pm 3$  標準偏差 (SD) に位置する仮想形状とそれらの重合図を作成することにより、その形状差を視覚的に比較した。

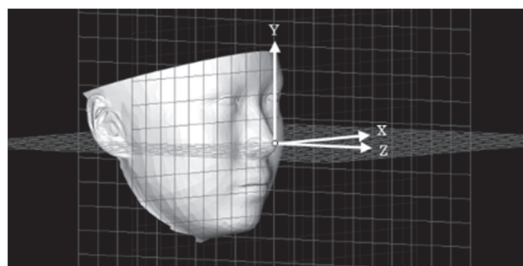


Fig.1 Position of coordinates

#### 2-2-2. 主成分得点を用いたクラスター分析による顔面形状の類型化

主成分分析によって得られた主成分得点を用いてクラスター分析を行い、顔面形状を類型化した。

93 名のデータを用いてクラスター分析を行い、5 つのクラスターに分類したところ、うち 2 つのクラスターは各 1 名のデータで構成されていた。そのため、この 2 名のデータは著しい特徴を有した形状であると捉え、これらを除外し、再度 91 名のデータでクラスター分析を行った。

##### (1) 主成分得点の平均値による分析

各クラスターの主成分得点の平均値を求め、値の大きい主成分による顔面形状の特徴を確認した。

##### (2) 三次元仮想形状による分析

主成分得点が 0 の形状を平均形状とし、各クラスターの主成分得点平均形状との形状差を視覚的に比較した。

##### (3) 顔面三次元形状データの計測値による分析

定量的な比較により、さらに詳細な特徴の分析を行うことを目的に、91 名の顔面三次元形状データの各部位の寸法を計測した。得られた計測値について全データの平均と各クラスターの平均を比較した。

計測のためのランドマーク及び計測部位は、Fig.2 にて示した通り、生命工学工業技術研究所の定義による点を基本とし<sup>10)</sup>、一部は先行研究<sup>11)12)</sup>を参考に本研究のために設定した。左右の耳珠点 (a 点) (a' 点)、鼻根が最もくぼんだ位置の点 (b 点)、鼻尖点 (c 点)、鼻下点 (d 点)、オトガイ上点 (e 点)、オトガイ点 (f 点) である。

計測項目は、Table 1 に示した顔面の縦幅や横幅、



凹凸を捉えるための直線距離や角度として 14 項目を設定した。

2-1, 2-2 における三次元形状データの処理は, HBM-Rugle ((株)メディックエンジニアリング)を使用した。

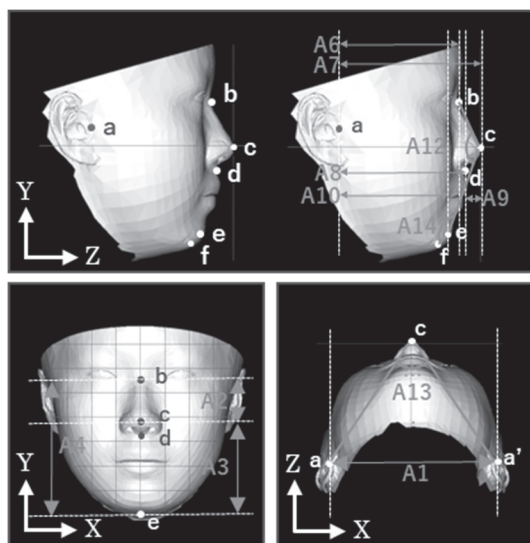


Fig.2 Landmarks and items measured

Table 1 Measurement data

A1	耳珠間幅
A2	鼻根が最もくぼんだ位置から鼻尖点のY軸への投影長
A3	鼻尖点からオトガイ点のY軸への投影長
A4	鼻根が最もくぼんだ位置からオトガイ点のY軸への投影長
A5	耳珠間幅 ÷ 鼻根が最もくぼんだ位置からオトガイ点のY軸への投影長
A6	鼻根が最もくぼんだ位置から耳珠点 (右) のZ軸への投影長
A7	鼻尖点から耳珠点 (右) のZ軸への投影長
A8	鼻下点から耳珠点 (右) のZ軸への投影長
A9	鼻尖点から鼻下点のZ軸への投影長
A10	オトガイ点から耳珠点 (右) のZ軸への投影長
A11	鼻根が最もくぼんだ位置から耳珠点 (右) のZ軸への投影長 ÷ オトガイ点から耳珠点へのZ軸への投影長
A12	鼻根が最もくぼんだ位置・鼻尖点・オトガイ点と成す鼻尖点における角度
A13	耳珠間・鼻尖点と成す鼻尖点における角度
A14	鼻尖点・オトガイ点・オトガイ点と成すオトガイ点における角度

### 3. 結果及び考察

#### 3-1. 主成分分析による顔面形状の特徴の抽出

主成分分析の結果, 第 15 主成分が抽出された。

Table 2 の通り, 第 1 主成分から第 10 主成分までに 76.678% の累積寄与率が認められたことから, 第 10 主成分までの解釈を行った。

Table 2 Eigenvalues and cumulative contribution rate

主成分	固有値	寄与率(%)	累積寄与率(%)
1	2908.1	23.523	23.523
2	1861.9	15.061	38.584
3	1323.2	10.703	49.286
4	770	6.228	55.514
5	675.27	5.462	60.976
6	521.18	4.216	65.192
7	417.01	3.373	68.565
8	379.54	3.07	71.635
9	337.92	2.733	74.368
10	285.49	2.309	76.678

Fig.3 に示した第 1 主成分から第 10 主成分までの各主成分の主成分得点  $\pm 3$  標準偏差 (SD) に位置する仮想形状 (以降、「 $\pm 3SD$  形状」とする) の正面と側面の画像および, 重合図の形状差を視覚的に比較した。

第 1 主成分の  $\pm 3SD$  形状を比較すると前額部とオトガイ部の出っ張り具合に違いがある。プラスの値が大きくなるほど前額部が垂直に近くなり, オトガイ部が突出していることがわかる。一方で, マイナスの値が大きくなるほど前額部が丸みを帯びており, オトガイ部が後退している。また, マイナスの値が大きくなるにつれて輪郭がシャープになっており, 下顎部も変化していることから, 総合的な顔面形状に関する因子であると解釈した。

第 2 主成分の  $\pm 3SD$  形状を比較すると全体的な顔面の大きさと鼻尖点からオトガイまでの口周りの突出に違いがある。プラスの値が大きくなるほど顔面全体の縦幅・横幅ともに大きくなり鼻尖点からオトガイまでの口周りが後退している。一方で, マイナスの値が大きくなるほど顔面全体の縦幅・横幅ともに小さくなり, 鼻尖点からオトガイまでの口周りが突出している。よって, 第 2 主成分は顔面の大きさと鼻尖点からオトガイまでの口周りの奥行に関する因子であると解釈した。

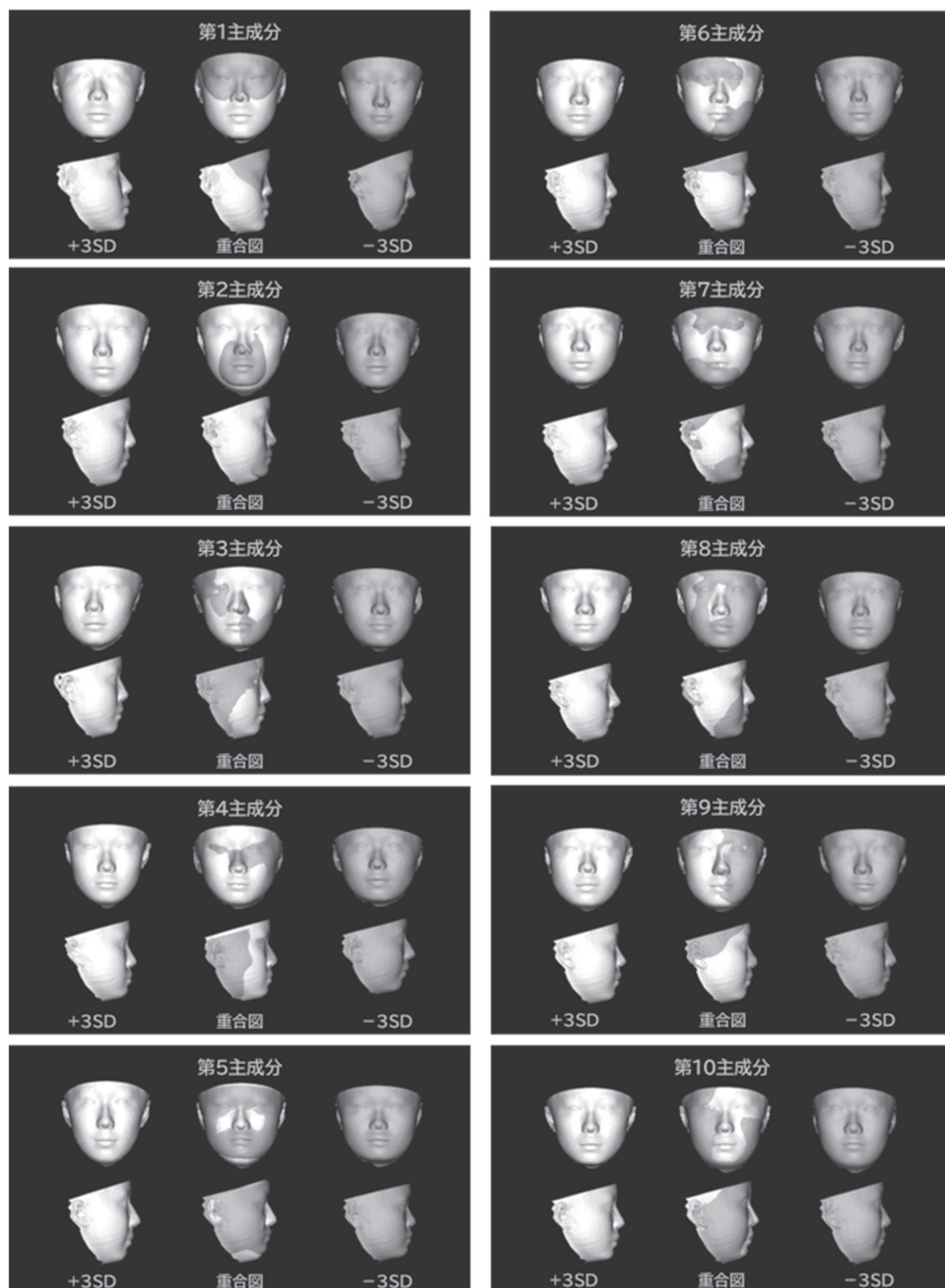


Fig.3 Virtual shape at positions  $\pm 3$  standard deviations of each principal component score

第3主成分の $\pm 3SD$ 形状を比較すると鼻尖点のずれと顔面の左右の歪みに違いがある。鼻尖点のずれは相同モデル化の際の点合わせの誤差から生じた主成分であるため、形状の違いとはいえないと考えられる。

第4主成分の $\pm 3SD$ 形状を比較すると顔面の縦幅と横幅の違いがある。プラスの値が大きくなるほど縦幅が長く、横幅が狭くなり細長くなっている。一方で、マイナスの値が大きくなるほど横幅が広く、縦幅が短くなり丸みを帯びていることがわかる。よって、第4主成分は縦横比に関する因子であると解釈した。

第5主成分の $\pm 3SD$ 形状を比較すると顔面の縦幅と横幅の違い、鼻の高さの違いがある。プラスの値が大きくなるほど顔面全体の縦幅が長く、横幅が狭くなり細長くなっている。一方で、マイナスの値が大きくなるほど横幅が広く、縦幅が短くなり丸みを帯びていることがわかる。また、プラスの値が大きくなるほど鼻が高くなり、マイナスの値が大きくなるほど鼻が低くなっていることがわかる。よって、第5主成分は顔面の縦横比と鼻の高さに関する因子であると解釈した。

第6主成分の $\pm 3SD$ 形状を比較すると左右の耳の高さに違いがある。プラスの値が大きくなるほど右耳の位置が低くなり左耳の位置が高くなる。反対に、マイナスの値が大きくなるほど右耳の位置が高くなり左耳の位置が低くなる。よって、第6主成分は耳の高さの左右差に関する因子であると解釈した。

第7主成分の $\pm 3SD$ 形状を比較すると、側面から見た顔面の凹凸の傾向に違いがある。プラスの値が大きくなるほど頬が丸みを帯び、鼻が高くなっている。一方で、マイナスの値が大きくなるほど顔面の凹凸が少なく縦に直線の印象が強い。よって、第7主成分は顔面の彫りの深さに関する因子であると解釈した。

第8主成分の $\pm 3SD$ 形状を比較すると、鼻の高さに違いがある。プラスの値が大きくなるほど鼻が高くなり、マイナスの値が大きくなるほど鼻が低くなっていることがわかる。よって、第8主成分は鼻の高さに関する因子であると解釈した。

第9主成分の $\pm 3SD$ 形状を比較すると鼻尖点のずれと顔面の歪みに違いがある。鼻尖点のずれは相同モデル化の際の点合わせの誤差から生じた主成分

であると考えられる。

第10主成分の $\pm 3SD$ 形状を比較すると、顔面全体の縦幅の大きさと輪郭に違いがある。プラスの値が大きくなるほど顔面全体の縦幅が短くなり、輪郭がシャープになっていることがわかる。一方で、マイナスの値が大きくなるほど顔面全体の縦幅が長くなり、輪郭は丸みを帯びていることがわかる。よって、第10主成分は顔面の縦幅と輪郭の丸みに関する因子であると解釈した。

以上の各主成分の特徴をまとめると下記の通りである。

第1主成分：前額部、オトガイ部と下顎部の優劣势

第2主成分：顔面の大きさと口周りの奥行

第3主成分：鼻尖点のずれと顔面の歪み

第4主成分：顔面の縦横比

第5主成分：顔面の縦横比と鼻の高さ

第6主成分：耳の高さの左右差

第7主成分：顔面の彫りの深さ

第8主成分：鼻の高さ

第9主成分：鼻尖点のずれと顔面の歪み

第10主成分：顔面の縦幅と輪郭の丸み

これらの結果より、第3, 6, 9主成分は、顔面形状の特徴以外の要素であることから、後述するクラスター分析の成分には使用しないこととした。すなわち、クラスター分析では主成分の特徴と寄与率により、第1, 2, 4, 5, 7, 8, 10主成分を使用した。

### 3-2. 主成分得点を用いたクラスター分析による顔面形状の類型化

クラスター分析の結果、5つのクラスターに分類された。クラスターの構成比率は、クラスター1から順に26%, 21%, 36%, 8%, 9%であった。

#### (1) 主成分得点の平均値による分析

Fig.4に示した通り、各クラスターにおける各主成分得点の平均値を求め、特に値が大きいまたは小さい主成分を確認した。

クラスター1は、第2主成分において最も値が大きい。第2主成分は顔面の大きさと口周りの奥行に関する因子であり、顔面全体が大きい口周りの奥行は後退しているグループである。

クラスター2は、第2主成分の値が最も小さい。第2主成分は顔面の大きさと口周りの奥行に関する因子であり、顔面全体が小さく、口周りは突出しているグループである。

クラスター3は、第1主成分の値が最も小さい。第1主成分は前額部、オトガイ部と下顎部の優勢率に関する因子であり、前額部が広く輪郭がシャープであることがわかる。よって、クラスター3は全額部の広い輪郭がシャープなグループである。

クラスター4は、第1主成分が著しく大きい。値第1主成分は前額部、オトガイ部と下顎部の優勢率に関する因子であり、前額部が狭くオトガイ部がやや突出し輪郭が丸いグループである。

クラスター5は、第1主成分と第4主成分の値が大きい。第1主成分は前額部とオトガイ部の優勢率に関する因子であり、前額部が狭くオトガイ部がやや突出し輪郭が丸いグループである。また、第4主成分は顔面の縦横比に関する因子であり、顔面の縦幅が長いグループである。

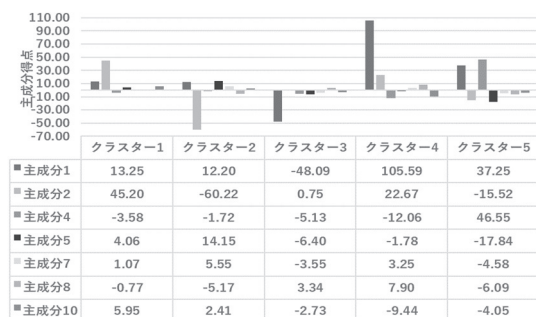


Fig.4 Mean of each principal component score in each cluster

## (2) 三次元仮想形状による分析

主成分得点の平均値による分析結果を踏まえ、Fig.5に示した各クラスターの平均形状と被験者全員の平均形状の重合図を用いてその形状差を視覚的に比較した。

クラスター1は、第2主成分による解釈の通り、平均形状と比較すると顔面全体がひと回り大きいこと、口周りが後退していること、輪郭が丸いことがわかる。よって、クラスター1は顔面が大きくやや丸顔形状と解釈した。

クラスター2は、第2主成分による解釈の通り、平均形状と比較すると顔面全体が小さくオトガイ部がやや突出していること、前額部が狭いこと、輪郭が丸いことがわかる。よって、クラスター2は顔面が小さく口周りとオトガイ部が突出した形状と解釈した。



Fig.5 Comparison of mean shape of each cluster and mean shape of all of subjects

クラスター3は、第1主成分による解釈の通り、平均形状と比較すると前額部が広いこと、耳眼面下部の縦幅が短くオトガイ部がやや後退してシャープなことがわかる。よって、クラスター3は前額部が突出し、輪郭がシャープな逆三角形状と解釈した。

クラスター4は、第1主成分の解釈の通り、平均形状と比較すると前額部が狭くオトガイ部が突出していること、顔面全体の横幅が広いことがわかる。よって、クラスター4は顔面の横幅が広く丸顔でオトガイ部が突出した形状と解釈した。

クラスター5は、第1主成分と第4主成分の解釈の通り、平均形状と比較すると前額部が狭くオトガイ部がやや突出し輪郭が丸いこと、耳顔面下部の縦幅が長いことがわかる。よって、クラスター5は顔面の縦幅が長く丸顔でオトガイ部が突出した形状と解釈した。

## (3) 顔面三次元形状データの計測値による分析

Table 3に、全データとクラスターごとの平均値、標準偏差を示す。Fig.6に全データの平均値、標準偏差を基準としたモリソンの関係偏差折線を求め、分析を行った。



### ・顔面の縦幅と横幅

顔を正面から捉えたとき、横幅にあたる耳珠間幅 [A1] において、クラスター5・クラスター4・クラスター1 に大の傾向、クラスター3 に小の傾向が示された。

縦幅にあたる鼻根が最もくぼんだ位置から鼻尖点の Y 軸への投影長 [A2] において、クラスター1 にやや大の傾向、クラスター2 にやや小の傾向が示された。

縦幅にあたる鼻尖点からオトガイ上点の Y 軸への投影長 [A3]、鼻根点が最もくぼんだ位置からオトガイ上点の Y 軸への投影長 [A4] において、クラスター4 に大の傾向、クラスター5・クラスター1 にやや大の傾向、クラスター3 に小の傾向、クラスター2 にやや小の傾向が示された。

横幅÷縦幅にあたる [A5] において、クラスター5 とクラスター2 に大の傾向、クラスター4 に小の傾向、クラスター1 とクラスター3 にやや小の傾向が示された。

以上の顔面の横幅と縦幅に関わる特徴をクラスターごとにまとめると、クラスター1 は、平均形状と比較して横幅も縦幅も大きく、横幅よりも縦幅がやや優勢である。

クラスター2 は、平均形状と比較して横幅も縦幅も標準的、縦幅よりも横幅が優勢であり、鼻根が最もくぼんだ位置から鼻先までの高さの距離が短い。

クラスター3 は、平均形状と比較して横幅も縦幅も小さく、横幅よりも縦幅がやや優勢である。

クラスター4 は、平均形状と比較して横幅も縦幅も大きく、横幅よりも縦幅が優勢である。

クラスター5 は、平均形状と比較して横幅も縦幅も大きく、縦幅よりも横幅が優勢である。

### ・顔面の凹凸

顔を側面から捉えたとき、横幅にあたる [A6]、[A7]、[A8]、[A10] において、クラスター1 に最も大の傾向が示された。鼻根が最もくぼんだ位置の横幅に当たる [A6] のみ、クラスター3 にも大の傾向が示された。

鼻尖点から鼻下点の Z 軸への投影長である [A9] においては、クラスター3 においてやや大の傾向、クラスター2 において小の傾向、クラスター4 にやや小の傾向が示された。

鼻根が最もくぼんだ位置との比較によってオトガイの突出具合を確認するために設定した [A11] において、クラスター3 に大の傾向、クラスター5 にやや小の傾向が示された。

鼻尖点の凸具合にあたる [A12] は、クラスター1 とクラスター2 とクラスター3 においてやや大の傾向、クラスター5 において小の傾向、クラスター4 においてやや小の傾向が示された。

また、顔を上方または下方から水平に捉えたときの鼻尖点の凸具合である [A13] は、クラスター5

Table 3 Statistics by cluster group

計測項目	全体平均形状 (n=91)		クラスター1 (n=24)		クラスター2 (n=19)		クラスター3 (n=33)		クラスター4 (n=7)		クラスター5 (n=8)	
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD
A1	148.2	6.2	149.9	5.0	148.3	7.1	145.2	5.4	151.1	5.6	152.5	6.2
A2	36.1	1.4	36.4	1.5	35.5	1.8	36.2	1.4	36.0	0.8	36.1	0.6
A3	69.4	3.8	70.6	2.3	69.4	3.5	67.4	3.3	72.9	6.5	71.3	3.3
A4	105.5	4.0	107.0	2.9	104.9	3.9	103.6	3.5	108.9	6.3	107.4	3.6
A5	140.5	5.8	140.1	5.7	141.5	6.6	140.2	5.9	139.0	5.5	142.0	4.1
A6	91.8	4.0	93.8	4.4	89.7	2.9	92.5	3.5	89.7	3.6	89.5	4.5
A7	108.9	3.2	110.6	3.5	107.7	2.8	108.4	2.9	108.6	1.8	108.9	4.1
A8	96.8	3.0	98.5	3.3	96.3	2.6	95.8	2.6	96.7	1.5	96.8	4.0
A9	12.1	1.3	12.1	1.2	11.4	1.5	12.5	1.3	11.9	0.9	12.1	0.4
A10	84.7	4.5	86.5	3.5	86.4	4.6	82.5	4.7	85.6	3.2	84.0	3.8
A11	108.5	6.1	108.3	4.6	104.2	5.3	112.3	5.7	104.7	6.2	106.5	4.7
A12	135.5	4.6	136.2	4.7	135.7	4.5	135.6	4.9	134.7	1.8	132.6	4.7
A13	68.0	2.5	67.5	2.2	68.5	2.9	67.3	2.4	69.0	1.8	69.9	2.7
A14	157.0	4.2	156.6	3.5	156.0	3.4	158.4	5.4	155.3	2.8	156.8	2.4

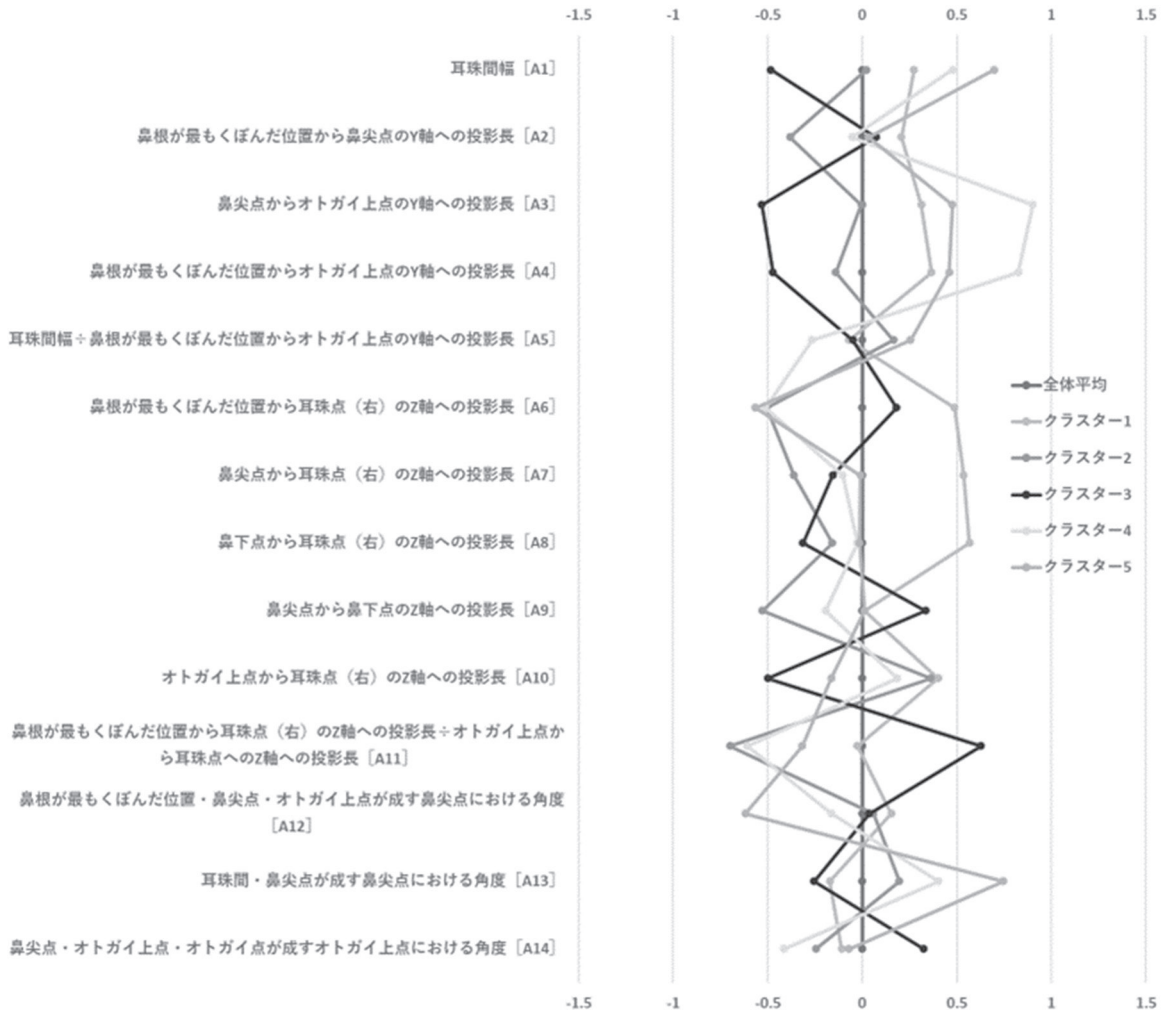


Fig.6 Line graph of relative deviation

において最も大の傾向、クラスター4 に次いでクラスター2 にやや大の傾向、クラスター3 に次いでクラスター1 にやや小の傾向が示された。

顔を側面から捉えたとき、オトガイの凸具合である [A14] はクラスター3 において大の傾向、クラスター4 において小の傾向、クラスター2 とクラスター1 とクラスター5 にやや小の傾向が示された。

以上の顔面の凹凸に関わる特徴をクラスターごとにまとめると、クラスター1 は、平均形状と比較して顔面全体が突出し、鼻の高さは平均的である。

クラスター2 は平均形状と比較して顔面全体が後退しているが、オトガイ部は突出し、鼻が低い。

クラスター3 は平均形状と比較して鼻根が最もくぼんだ位置が突出し、オトガイ部は後退し、鼻がやや高い。

クラスター4 は平均形状と比較して鼻根が最もくぼんだ位置が後退し、オトガイ部は突出し、鼻が低い。

クラスター5 は平均形状と比較して鼻根が最もくぼんだ位置が後退し、オトガイ部はやや突出し、鼻の高さは標準的である。

(1) (2) (3) の分析による結果をまとめ、顔面の形状の特徴について分類した結果は Table 4 の通りである。

Table 4 Classification of facial features

	構成比率 (合計100%)	顔面の縦幅・横幅				顔面の凹凸				輪郭
		顔面全体の大きさ	顔面の縦幅	顔面の横幅	縦幅と横幅	顔面全体の凹凸	前額部の凹凸	鼻部の凹凸	オトガイ部の凹凸	
クラスター1	26%	大の傾向	大の傾向	大の傾向	縦に大きい傾向	凸の傾向	凸の傾向	標準的	凸の傾向	丸い
クラスター2	21%	—	標準的	標準的	横に大きい傾向	凹の傾向	凹の傾向	凹の傾向	凸の傾向	丸い
クラスター3	36%	小の傾向	小の傾向	小の傾向	縦に大きい傾向	—	凸の傾向	凸の傾向	凹の傾向	シャープ
クラスター4	8%	—	大の傾向	大の傾向	縦に大きい傾向	—	凹の傾向	凹の傾向	凸の傾向	丸い
クラスター5	9%	—	大の傾向	大の傾向	横に大きい傾向	—	凹の傾向	標準的	凸の傾向	丸い

#### 4. 結言

本研究では顔面の立体形状に着目し、類型化することを目的に、顔面三次元形状データの主成分分析およびクラスター分析を行った。

主成分分析の結果、第1主成分から第10主成分までに76.678%の累積寄与率が認められたことからその解釈を行った。主成分分析によって得られた主成分得点によるクラスター分析の結果、5つに分類されたクラスターにおいて形状特徴が顕著に表れたのは、第1主成分「前額部、オトガイ部と下顎部の優勢率」、第2主成分「顔面の大きさと口周りの奥行」、第4主成分「顔面の縦横比」であった。

さらに詳細な形状の特徴を把握することを目的に行った関係偏差折線による分析では、全データの平均値と標準偏差を標準とし、5つのクラスターが、顔面の大小、縦横比、前額部・鼻部・オトガイ部の奥行にあたる凹凸の傾向により分類された。

以上のことから、クラスター1「顔面が大きくやや丸顔な形状」、クラスター2「顔面が小さく口周りとオトガイ部が突出した形状」、クラスター3「前額部が突出し、輪郭がシャープな逆三角形な形状」、クラスター4「顔面の横幅が広く丸顔でオトガイ部が突出した形状」、クラスター5「顔面の縦幅が長く丸顔でオトガイ部が突出した形状」と解釈した。

今後は、幅広い年齢や性別のデータの取得、分析を進めることにより、世代差や性別差による顔面の形状特徴の違いについても明らかにする必要がある。

#### 謝辞

研究に際し、ご協力いただいた被験者の皆様に深く感謝いたします。

#### 参考文献

- 1) 国立感染症研究所：東京都での新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行（2020年1～5月），<https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ka/corona-virus/2019-ncov/2502-idsc/iasr-in/9818-486d01.html#:~:text=%E3%81%AF%E3%81%98%E3%82%81%E3%81%AB,%E3%81%AA%E6%B5%81%E8%A1%8C%E3%81%A8%E3%81%AA%E3%81%A3%E3%81%9F%E3%80%82> [2023.10.8]
- 2) 厚生労働省：マスクの着用について，[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kansentaisaku\\_00001.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kansentaisaku_00001.html) [2023.10.8]
- 3) 日用品化粧品新聞：【マスク市場】ファッション性の価値、どう維持・拡大するか，<https://www.hpc-news.co.jp/media/market/a1040> [2023.10.8]
- 4) 内閣官房コロナ室：感染拡大防止に向けた取組，<https://corona.go.jp/proposal/> [2023.10.8]
- 5) 独立行政法人国民生活センター：マスクのノーズフィットによる顔などへの傷害にご注意，[https://www.kokusen.go.jp/news/data/n-20221221\\_4.html](https://www.kokusen.go.jp/news/data/n-20221221_4.html) [2023.10.8]
- 6) 朝日新聞 Re ライフ net：コロナ禍で迎えた冬の「マスク肌荒れ」に要注意!今からできるスキンケア，<https://www.asahi.com/relife/article/14028763> [2023.10.8]
- 7) 東京新聞 TOKYO Web：マスク肌荒れ 秋冬ケアは 洗顔工夫、潤い保つ，<https://www.tokyo-np.co.jp/article/55584> [2023.10.8]
- 8) 日本経済新聞：マスクで「肌荒れ」困った コロナ予防で増える炎症，<https://www.nikkei.com/article/DGXKZO61507490U0A710C2KNTP00/> [2023.10.8]
- 9) 武本歩未、大塚美智子：相同モデルを用いた体形分析方法に関する検討 一座標系の相違によ

- る統計解析へ影響一，日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科，28，211-216（2022）
- 10) 通商産業省工業技術院生命工学工業技術研究所（編集）：設計のための人体計測マニュアル，人間生活工学研究センター，（1994）
- 11) 角田千枝：顔面形状に適合するマスク制作の試み ―型紙制作方法の検討と教育実践―，相模女子大学紀要，84，1-9（2021）
- 12) 大西洋一，橋本昭夫：マスク接顔形状設計のための人頭モデリング手法，人間工学，43，特別号，184-185（2007）



# 相同モデルを用いた人体の形状変化の分析

— 肩関節外転に伴う人体の寸法、形状の変化 —

Analysis of Changes in Human Body Shape Using Homologous Models:  
Changes in the Dimensions and Shape of the Human Body Associated with Shoulder Abduction

武 本 歩 未\*

Ayumi TAKEMOTO

横 尾 優 美\*\*

Yumi YOKOO

横 井 孝 志\*

Takashi YOKOI

大 塚 美 智 子\*\*\*

Michiko OHTSUKA

**要 約** 衣服の動作適合性を適切に評価するためのバーチャルボディの生成を目指し、肩関節外転に伴う人体の三次元的な寸法や形状の変化を、相同モデルの手法を用いて定量的に捉えた。成人女性 23 名を対象に、肩関節外転 45° および 90° 姿勢で三次元計測を行った。このうち 7 名分のスキャンデータから両姿勢間で対応のあるテンプレートモデルを作成した。このテンプレートモデルを用いて、残り 16 名のスキャンデータから相同モデルを生成し、外転 45°、90° それぞれの姿勢における相同モデルの平均形状を生成した。両姿勢間の形状の違いを検討したところ、肩関節外転 45° から 90° への姿勢変更によって、背肩幅、胸幅、背幅周辺の寸法は小さくなり、左右の腋窩間の幅は大きくなった。また、体表面形状を構成する頂点うち、腕付根囲～肩甲骨や胸部周辺において位置の変化量が大きく、腕付根囲周辺の頂点は、人体の中心に向かって移動した。

**キーワード**：三次元人体形状データ、相同モデル、バーチャルボディ、動作適合性

**Abstract** In order to generate a virtual body for the evaluation of the motion conformity of clothing, we used a homologous model to quantitatively capture changes in shape associated with shoulder abduction. Three-dimensional measurements were performed on 23 adult women in postures of 45° and 90° shoulder abduction. A template model was created using the scan data from 7 subjects. This model was used to create a homologous model of the scan data from the remaining 16 subjects, and the average shape was generated for each posture. With a change in posture from 45° to 90° shoulder abduction, the dimensions around the back and shoulder width and chest and back width decreased, and the width between the left and right armpits increased. There was a substantial amount of change at the arm circumference at the shoulder, the shoulder blades, and the chest area, and the top of the arm circumference at the shoulder moved closer to the center of the body.

**Key words** : 3D human body shape data, Homologous model, Virtual body, Motion compatibility

## 1. はじめに

近年、アパレル用 3D-CAD システムの導入による

衣服設計が進み、CAD 上の仮想空間内で、衣服の体形適合性や動作適合性の評価が行われるようになってきた。体形適合性については、ISO においてもデジタルフィッティングに関する性能評価方法の制定が検討されているように<sup>1)</sup>、人体の形状を適切に再現したバーチャルボディや、標準姿勢において計測した三次元人体形状データをボディとして用いれば、仮想空間内でも実在の人体に衣服に着用させた状態と同様の評価が可能であろう<sup>2-3)</sup>。一方、

\* 被服学科

Department of Clothing

\*\* 人間生活学研究科 生活環境学専攻

Graduate School of Human Life Science,

Division of Living Environment

\*\*\* 日本女子大学名誉教授

Professor Emeritus of Japan Women's University

動作適合性については、バーチャルボディの姿勢を変更して適合性を評価する必要があるため、その評価は体形適合性の評価に比べて難しい。既存のバーチャルボディを用いて種々の姿勢を生成すると、ボディの表面形状はボディ内部の骨組みとの連動関係にもとづき変形する<sup>4)</sup> (これを3DCG分野では、スキニングウェイトと表現する)。この連動関係は、姿勢変更時のボディの表面形状の変化に大きく影響するが、姿勢変更に伴う人体表面の形状変化を精度よく再現できていない人体部位も見られ、そのような場合、衣服の動作適合性を適正に評価するためのボディとしては不十分である。したがって、仮想空間内で動作適合性を適正に評価するには、姿勢変更に伴う形状変化を精度よく再現できるバーチャルボディの設計が必要だと考えられる。

姿勢変更に伴う形状変化を精度よく再現するには、姿勢変更に伴う人体の寸法や形状の変化を定量的に捉えておく必要がある。これまで、姿勢変更による人体の寸法や形状の変化は、マルチン式計測器による寸法計測、モアレによる写真計測、石膏包帯による体表面展開、未延伸糸を縫い込んだ実験衣などの直接的計測や、人体形状の三次元計測によって捉えられてきた<sup>5-10)</sup>。これらは、現在の機能的な衣服の設計に役立てられてきたが、直接的計測からは、三次元的な形状データを取得することができない。しかも、計測方法の特性として計測に時間がかかるため、被験者の身体的、心理的負担が大きく、多数の被験者のデータを取得することも難しい。人体形状の三次元計測においても、種々の姿勢で計測した人体形状データから寸法や断面形状を取得するのみであり、姿勢変更に伴う三次元的な形状変化を定量的には捉えてはいない。

近年、様々な分野において、三次元形状データを標準化する「相同モデル」の技術が形状データの解析に活用されている。相同モデルの手法とは、標準ポリゴンモデル(テンプレートモデル)を、実測した表面データ(スキャンデータ)にフィットさせていく方法である<sup>11)</sup>。この方法により、分析対象の実測した三次元人体計測データを対応のある同一頂点数のデータに再構成できるため、このモデルによって三次元人体形状データの統計処理が可能になる。そして、我々は種々の姿勢における上半身形状の相同モデル化のため、テンプレートデータを作成するとともに、種々の姿勢で計測された人体形状

データの相同モデルを生成し、その精度を検討した<sup>12)</sup>。その結果、相同モデル化の技術は、種々の姿勢で計測された形状データへも適用可能であることが確認された。

そこで本研究では、衣服の動作適合性を適切に評価するためのバーチャルボディの生成を目指し、肩関節外転に伴う人体の三次元的な寸法や形状の変化を、相同モデルの手法を用いて定量的に捉えるとともに、その手法の妥当性についても検討した。

なお、本実験研究は「東京大学大学院総合文化研究科・教養学部」の承認を得たものである(課題番号777)。

## 2. 方法

### 2-1 被験者

18-25歳の健康な若年女性23名であった。このうちのランダムに抽出した7名(A群)を後述するテンプレートデータの作成に、残りの16名(B群)を相同モデルデータの作成のために使用した。

### 2-2 三次元人体形状の計測

被験者の三次元形状データを取得するため、固定式の三次元計測器(浜松ホトニクス株式会社)を使用し、三次元人体形状の計測を行った。計測姿勢は、肩関節外転角度が $45^{\circ}$ 、 $90^{\circ}$ となるように上腕を側方へ挙上し、足軸間距離を20cmとした立位姿勢であった(Fig. 1)。このとき、Fig. 2に示す位置にランドマークシールを貼付して計測した。また、計測時にヌードに近い形態を保持するため、被験者はブラジャー、ショーツ、計測用の帽子を着用した。

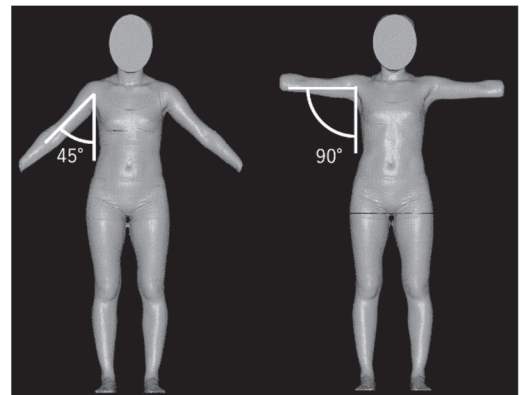


Fig. 1 Posture during measurement  
(Left: Abduction  $45^{\circ}$ , Right: Abduction  $90^{\circ}$ )

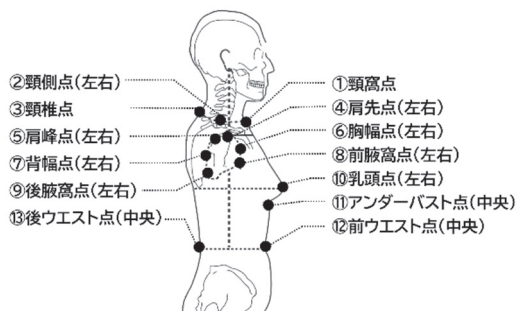


Fig. 2 Location of landmarks

## 2-3 分析方法

### 2-3-1 テンプレートモデルの作成

前述のとおり、実測した三次元人体計測データ（スキャンデータ）を相同モデル化するには、スキャンデータの計測姿勢に適合したテンプレートモデルが必要である。しかし、産業技術総合研究所が提供するテンプレート Dhaiba Model1 は、ISO20685 に準拠した三次元立位姿勢での計測データを対象としているため、本研究で扱う計測姿勢とは異なる。そのため、(株)メディックエンジニアリング協力のもと、A 群のスキャンデータから肩関節外転 45° および 90° 姿勢のテンプレートモデルを作成した。これらテンプレートモデルは、対応のある同一頂点数のデータで構成されているため、対応する頂点の xyz 座標値を用いれば相同モデルの各頂点間の距離を算出できる。

スキャンデータでは、三次元計測器の計測可能範囲外にある前腕部のデータが欠損している。そのため、テンプレートモデルの作成においても、上腕部より遠位側を除いた (Fig. 3)。このテンプレートデータを構成する頂点数は 12277 点であった。

### 2-3-2 相同モデルの作成

2-3-1 で作成した外転 45° と 90° 姿勢のテンプレートデータを用いて、B 群のスキャンデータの相同モデルを生成した。

前述したとおり、相同モデル化とは、テンプレートデータを、実測したスキャンデータにフィットさせていく方法である。このとき、テンプレートとスキャンデータとを対応づけるランドマークが必要である。本研究では、Fig. 2 で示したランドマーク 21 点に、臍点を加えた計 22 点のランドマークを用いた (Fig. 4)。肩関節外転による微細な肩部形状の変化を捉えるために、テンプレートデータのポリゴン



Fig. 3 Template data  
(Left: Abduction 45°, Right: Abduction 90°)

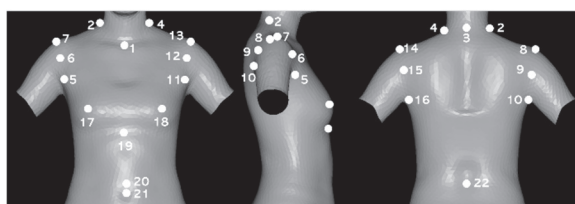


Fig. 4 Location of landmarks in template data

を細分割させながらスキャンデータにフィッティングした。これにより、相同モデルを構成する頂点数は 61342 点になった。

### 2-3-3 相同モデルの寸法計測

肩関節の外転による背面や肩部の人体寸法の変化を捉えるために、2-3-2 で生成した B 群の相同モデルの寸法を計測した。Table 1 は計測項目とその定義、Fig. 5 は計測箇所を示したものである。これらの計測には、Fig. 5 に示したランドマークを基準点として使用した。取得した寸法データの平均値、標準偏差を求め、計測姿勢間で対応のある t 検定を行った。これらの統計処理は、エクセル統計 ver.3.21 を使用した。

Table 1 Definitions of measured items

No.	項目	定義
1	胸幅点間距離	左右の胸幅点間の直線距離
2	背幅点間距離	左右の背幅点間の直線距離
3	前腋窩点間距離	左右の前腋窩点間の直線距離
4	後腋窩点間距離	左右の後腋窩点間の直線距離
5	頸椎点-右肩先点	頸椎点から右肩先点までの体表長(テープ長)
6	肩先点-前腋窩点	右肩先点から前腋窩点までの体表長(テープ長)
7	肩先点-後腋窩点	右肩先点から後腋窩点までの体表長(テープ長)
8	前後腋窩点間距離	右前後腋窩点間の直線距離

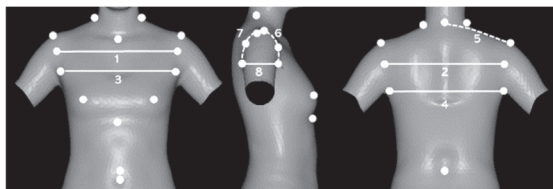


Fig. 5 Measurement sites

### 2-3-4 相同モデルの平均化

肩関節の外転による背面や肩部の形状変化の様子を捉えるために、外転  $45^\circ$ 、 $90^\circ$  それぞれの姿勢における相同モデルの平均形状を生成し、姿勢間の形状の違いを検討した。これらの手順は、以下に示すとおりである。

#### 2-3-4 (1) 相同モデルの平均化の概要

相同モデルにおいては、それを構成する全ての頂点がモデル間で対応づけられているため、対応する頂点の xyz 座標値を用いれば相同モデル間の距離を算出できる。そして、B 群の相同モデルを構成する頂点の xyz 座標値を変数として主成分分析を行い、情報を圧縮するとともに主成分軸を取得すれば、主成分得点を用いて相同モデルの散布図を描くことができる<sup>13)</sup>。この主成分分析法を用いることにより、任意の主成分得点をもつ仮想形状を合成することもできる。

本研究では、この方法によって取得した主成分軸の中心、すなわち主成分得点が 0 の形状を合成し、これを B 群の平均形状とすることとした。相同モデルの主成分分析には、Human Body Statistica (HBS) Ver.1.0 (産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センター) を使用した。

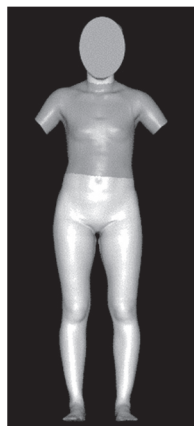
#### 2-3-4 (2) 上半身相同モデルの作成

HBS を用いた主成分分析法による形状データの分析では、入力できる変数に制限 (相同モデルの頂点数  $\leq 20000$ ) があるため、2-3-2 で生成した相同モデルから頭部、臍点以下を削除し、上半身相同モデルを生成した (Fig. 6)。これにより、上半身相同モデルを構成する頂点数は 15185 点となった。

2-3 における三次元形状データの処理は、HBM-Rugle ((株)メディックエンジニアリング) を使用した。

#### 2-3-4 (3) 相同モデルの位置調整

個々の上半身相同モデルの原点がそれぞれ同じ条件となるように、相同モデルの原点位置を調整した。この調整では、テンプレートデータに定義した頸椎

Fig. 6 Homologous model of the upper body  
(White: deleted area)

点、臍点、頸側点に対応する頂点番号から 3 点の座標を取得し、頸椎点の x 座標、臍点の y 座標、頸側点の z 座標が、0 (ゼロ) となるように原点を移動した。

#### 2-3-4 (4) 平均形状の比較

原点位置調整後の B 群の上半身相同モデルを使用して、肩関節外転  $45^\circ$  と  $90^\circ$  それぞれの姿勢における平均形状を生成した。肩関節の外転による形状変化を定量的に捉えるため、両平均形状を同一座標系に同時に再生し、平均形状を構成する各頂点間の距離を計測した。

## 3. 結果及び考察

### 3-1 肩関節外転姿勢における三次元形状データの特徴

Fig. 7 は、三次元人体計測で得られた被験者 1 名分の肩関節外転  $45^\circ$  と  $90^\circ$  の姿勢におけるスキャンデータを頭上から示したものである。外転  $45^\circ$  姿勢では、スキャンデータの欠損部位が少ないのに対して、外転  $90^\circ$  姿勢では、肩部、腕部の一部 (主に水平面と接する部分) でデータの欠損が生じている。これは、三次元計測時に水平に照射されたレーザー光が、この部分に適切に当たらなかったためである。同様な傾向は、いずれの被験者においても見られた。

一般に、標準的な計測姿勢 (上肢を外転  $20^\circ$  させ、足を開いた姿勢) 以外での形状計測において固定式スキャナを用いた場合、レーザー光が人体の一部に遮断され、計測したい部分に照射されない状況



がしばしば生じる。その結果、スキャンデータの欠損が多くなるため、精度よい相同モデルの生成が難しいことが分かった<sup>1,2)</sup>。しかし、本研究において生じた外転 90° 姿勢での肩部、腕部のデータの欠損は、頭頂部のデータの欠損と同様に、体表面が水平面と接する部位で生じたものである。これらの欠損は水平面である程度補完できると考えられるため、形状変化の分析や相同モデルの生成には大きな影響がないと判断し、これらの欠損部を含むデータも分析に使用した。

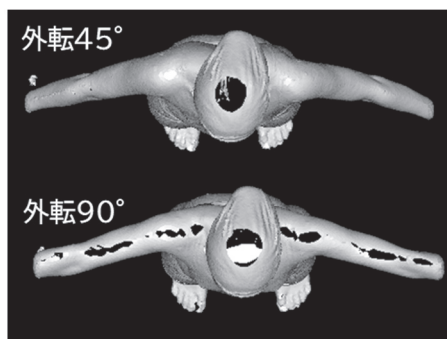
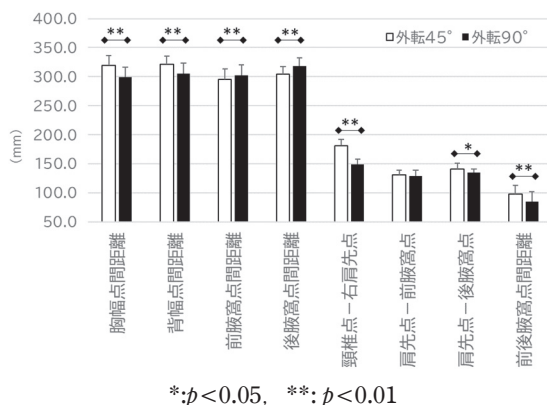


Fig. 7 Scan data for postures of 45° and 90° abduction

### 3-2 肩関節の外転による人体の寸法変化

B 群の個々の相同モデルのランドマーク位置をもとに、外転 45° と外転 90° 姿勢における肩部周辺の寸法 (Table 1) を算出した。Fig. 8 は、この平均値と標準偏差を算出し、外転 45° 姿勢と 90° 姿勢で比較したものである。対応のある t 検定の結果、外転 90° 姿勢では、外転 45° 姿勢と比べ、胸幅点間距離、背幅点間距離、頸椎点-右肩先点、肩先点-後腋窩点、前後腋窩点間距離が有意に小さく、前腋窩点間距離、後腋窩点間距離が有意に大きかった。

このことから、外転 45° から外転 90° に姿勢変更すると肩部や背幅、胸幅に関連する部位の体表面は収縮し、腋窩付近の体表面は伸展すると考えられる。このような肩関節の外転による体表面変化の傾向は、間壁ら<sup>5-7)</sup>、田村ら<sup>8)</sup>の研究結果とも一致した。



\*:  $p < 0.05$ , \*\*:  $p < 0.01$

Fig. 8 Averages and standard deviation of dimensions by posture

### 3-3 肩関節の外転による人体の形状変化

B 群の上半身相同モデルをもとに、外転 45° と 90° の姿勢それぞれにおける平均形状を求めた。さらに、両姿勢における平均形状上の対応する頂点間の空間距離を算出した。Fig. 9 は、この距離の大小を、外転 90° 姿勢の平均形状のテクスチャ上に 8 段階のグレースケールで示したものである。色の明度が高くなるほど、対応する頂点間の距離が大きいこと意味する。また、Fig. 10 は、両平均形状の各頂点間を線 (以降、点間線分と示す) で結び、変化の方向を可視化したものである。Fig. 9 および Fig. 10 に示す背面の点間線分の様子から、外転 45° から

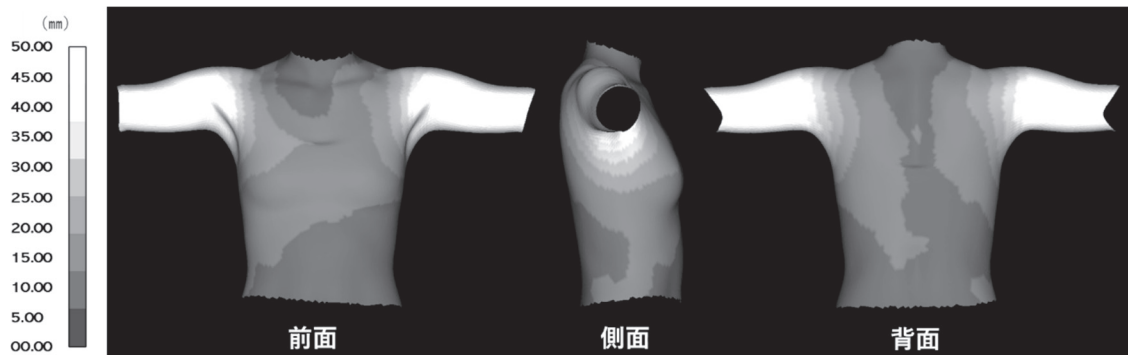


Fig. 9 Spatial distance between the vertices of the average shape in postures of 45° and 90° abduction

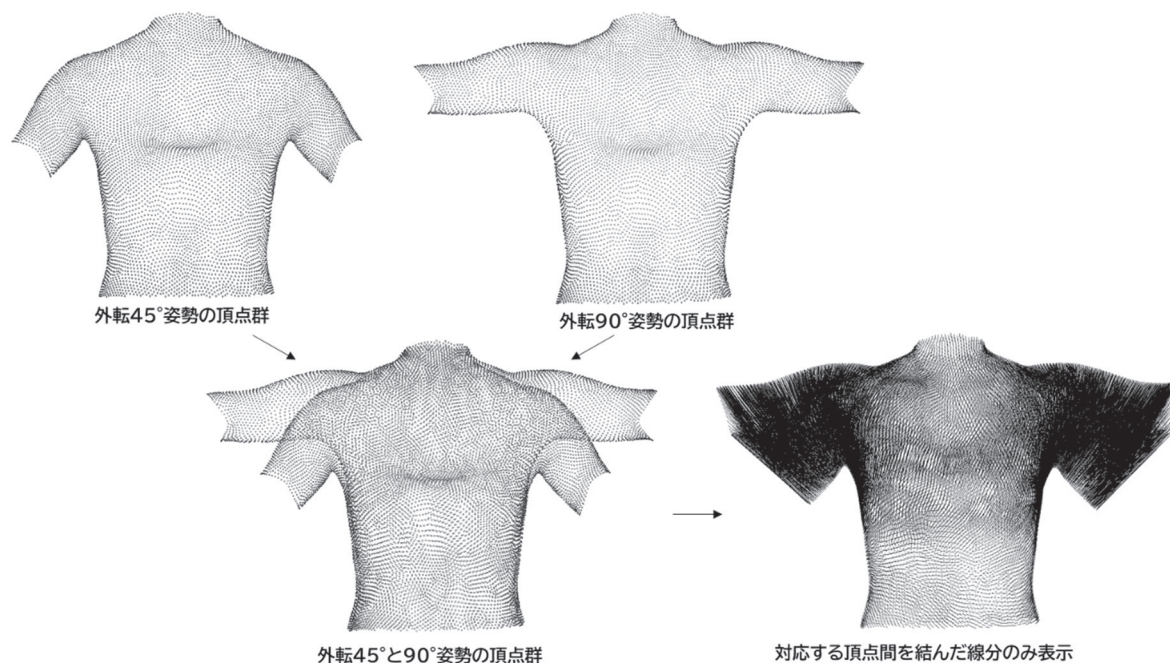


Fig. 10 Line segment connecting the vertices of the average shape in postures of 45° and 90° abduction

90°へ姿勢を変更すると、腕付根囲～肩甲骨や胸部周辺の変化量が大きく、さらに腕付根囲周辺の頂点は、人体の中心に向かって移動していることが分かる。このような傾向は、樋口ら<sup>9)</sup>の研究結果とも一致した。

3-2, 3-3の結果から、相同モデル技術を用いて、姿勢変更に伴う人体の寸法、形状変化に加え、変化の方向についても捉えることが可能と考えられる。

#### 4. 結言と今後の展望

本研究では、衣服の動作適合性を適切に評価するためのバーチャルボディの生成を目指し、相同モデル技術を用いて肩関節の外転に伴う人体の三次元的な寸法や形状変化を定量的に捉えるとともに、その手法の妥当性についても検討した。その結果、次の2点が明らかになった。

- (1) 肩関節の90°外転に伴い、背肩幅、胸幅、背幅周辺の寸法は小さくなり、左右の腋窩間の幅は大きくなった。
- (2) 肩関節外転45°から90°への姿勢変更では、腕付根囲～肩甲骨や胸部周辺の位置の変化量が大きく、さらに腕付根囲周辺は、人体の中心に向かって移動した。

このような姿勢変更に伴う人体の形状変化は、マルチン式計測器による寸法計測、石膏包帯による体表面展開法、モアレによる写真計測法などによって捉えられてきたものと一致するものであり、相同モデル技術を用いて、姿勢変更に伴う人体の形状変化を捉えることは可能と考えられる。このように三次元形状データを構成する頂点座標の変化を定量的に捉えることは、仮想空間内のボディのスキニングウェイトの設計にも有用であり、3DCG分野への応用も期待できる。

今後は、より多くの被験者の三次元形状データを用いて解析を行い、データの信頼性を高めることによって、衣服の運動機能性の評価に適したバーチャルボディの生成を目指す。

#### 参考文献

- 1) 知久幹夫：ISO/TC133 30年度報告，第39回アパレル工業技術セミナーレジュメ（2019）
- 2) 瀬尾 香：仮想空間内での衣服設計を目的としたバーチャルボディの比較検討—アパレル 3D-CAD を用いて—，繊維製品消費科学会，Vol.59, No.8, pp.629-635（2018）
- 3) 瀬尾 香：アパレル 3D-CAD を用いてスロー

- パーを作成する方法に関する研究, 安田学術研究論集 Vol.52, pp.129-136 (2023)
- 4) 持丸正明: デジタルニューマンによる人間中心設計支援, 情報処理, Vol.54, No.2 (2013)
  - 5) 間壁 治子, 百田 裕子: 上肢動作と衣服パターンとの関連について (第1報) 上肢動作による高径およびレリーフの変化を含めた寸法の変化と衣服パターンとの関係, 繊維製品消費科学 32 (1), 27-33, 1991
  - 6) 間壁 治子, 百田 裕子, 河合 伸子, 上肢帯部の動きと衣服パターンとの関連について, 繊維製品消費科学, Vol.29, No.8, pp.322-332 (1988)
  - 7) 間壁 治子: 未延伸糸を用いた衣服の動作による変形について, 人間工学, Vol.17, Vol.1, pp.33-44 (1981)
  - 8) 田村 照子, 林 珣, 渡辺 ミチ: 上肢運動に伴う胴上部体表面の変化-1-測定方法および体表面の形態・面積変化, 家政学雑誌, Vol.30, No.7, pp.631-637 (1979)
  - 9) 樋口 ゆき子, 山田 喜美江: モアレ法による背面形状の測定, 人間工学, Vol.18, No.1, pp.205-212 (1982)
  - 10) 渡邊 敬子: 上肢動作に伴う背部体表面の変化, 一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集, Vol.61, pp.40 (2009)
  - 11) 持丸 正明: 人体形状の変異と産業応用, バイオメカニズム学会誌, Vol.29, No.2 (2005)
  - 12) 横尾 優美, 武本 歩未, 横井 孝志, 大塚 美智子: 肩関節屈曲姿勢における上半身形状の相同モデル化, 日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科 Vol.29 (2023)
  - 13) 人口知能研究センター: AIST/HQL 人体寸法・形状データベース 2003-相同モデルの統計的分析, <https://www.airc.aist.go.jp/dhrt/fbodydb/analysis/index.html> (参照 2023-10-30)





## 創造的音楽活動に内在する対話の多層性

### The Multilayeredness of Dialogue Intrinsic to Creative Musical Activities

根津 知佳子\* 安藤 朗子\*\* 甲斐 聖子\*\*  
Chikako NEZU Akiko ANDO Seiko KAI

和田 直人\* 吉澤 一弥\*\*\*  
Naoto WADA Kazuya YOSHIZAWA

**要約** 本稿では、Williams Syndrome の家族支援を目的とした従前の音楽活動を改善し、新たに開発した活動について報告する。根津ら（2023）は、視覚空間認知に関する課題をもつ Williams Syndrome が抵抗なく参加できるように、スージー・リー作『なみ』を用いた「世界でひとつだけの音絵本づくり」を考案した。具体的には、Williams Syndrome の父親らがリーダーとなり、文字情報のない絵本の各ページに音をつけて録音し、一つの動画を製作するという活動である。製作過程での「対話の構造」に着目した結果、①他者との対話、②絵本との対話、③自己内対話（自分自身との対話）のうち、特に、③自己内対話が賦活されたことが明らかになった。その対話の中で、「過去の自分」や「こうありたい自分」への気づきが促進されたことから、根津ら（2020）が提示した「覚識の連続体（continuum of awareness）」のコンテンツとして有用であることが示唆された。

**キーワード**：創造的音楽活動、対話、ウィリアムズ症候群、家族支援、絵本

**Abstract** This paper reports on newly developed activities that improve upon previous musical activities intended to support families of young adults with Williams syndrome. Young adults with Williams syndrome have issues with visual-spatial cognition. In order to encourage their willing participation, Nezu et al. (2023) envisioned the “creation of an audio picture book that is the first of its kind in the world” using “Wave” by Suzy Lee. Specifically, the activity involves creating a single video, with fathers of young adults with Williams syndrome acting as the leader, recording with sound each page of a picture book without textual information. In terms of (1) dialogue with others, (2) dialogue with the picture book, and (3) internal dialogue, the third form of dialogue [(3) internal dialogue] was particularly activated as a result of focusing on the “structure of the dialogue” during the creation process. This dialogue promoted an awareness of one’s “past self” and “ideal self,” which suggests that it is useful content for the “continuum of awareness” as described by Nezu et al. (2020).

**Key words** : Creative musical activity, Dialogue, Williams syndrome, Family support, Picture book

---

\* 人間生活学研究科人間発達学専攻  
Graduate School of Human Life Science  
Division of Human Development

\*\* 家政学研究科児童学専攻  
Graduate School of Human Science and Design Division  
of Child Studies

\*\*\* 日本女子大学名誉教授  
Professor Emeritus of Japan Women’s University

### 1. はじめに

筆者らは、小児科領域の難治疾患であるウィリアムズ症候群（Williams Syndrome、以下ウィリアムズと表記する）の患児の家族や医療関係者の依頼を受け、2001年度より22年度にわたって音楽キャン

ブを開催している。2歳から32歳の40名（のべ241名）の患児・者と、のべ450名の家族が参加してきたこの音楽キャンプ（ハッピーウィリムン）は、米国とアイルランドにおける家族支援団体の活動視察を基盤としつつ、日本の文化や家族のニーズを反映させながら発展させてきたものである。活動初期に幼児だった参加者も社会参加する世代となり内容の改善が必要となってきたことから、新たな支援方法を検討するために、17歳から28歳の7名の被験者に対して投影法心理学検査（①ベンダー・ゲシュタルト検査②ロールシャッハ・テスト③風景構成法）を実施し、臨床心理学と構成学による解釈を行った<sup>1</sup>。その結果、ウィリアムズの特性和とされている社交性や表出言語に関する従前の言説とは異なる結果を見出すことができた。

さらに、表出に関して緊張感や不安感、まれに敵意が見られ抑制気味である点、対人面において不安と萎縮が見られる点を踏まえ、心身のリラクゼーションや感情の表出を保障するようなパフォーマンスを軸とした新たな支援モデル（覚識の連続体）を提示した<sup>2</sup>。精神医学と芸術療法（音楽療法）の理論に依拠したこの支援モデルに則って、「図と地の分化」に焦点を当てた活動コンテンツを開発し、前報告（2023）では、次の4点について報告した<sup>3</sup>

- ① 覚識の連続体の理論的妥当性（吉澤）
- ② 覚識の連続体を軸とした音楽活動（根津）
- ③ 絵本やアニメーション等の文化財を活用した活動（和田・甲斐）
- ④ 家族支援のための基礎資料としてのきょうだいにに関する文献研究（安藤）

本稿では、視空間認知における「図と地の分化」に課題を持つウィリアムズにとって心理的な抵抗がない「②と③を融合させた活動（世界でひとつだけの音絵本づくり）」の開発と実践過程を報告する。それに先立ち、解釈のツールについて概観する。

## 2. 対話の構造

織壁・根津（2023）は、近年、「主体的・対話的で深い学び」が重視されていることを受け<sup>4</sup>、「授業における対話」のモデル（根津2018, 2022）<sup>5</sup>を保育実践と創造的音楽活動で活用することを試みた<sup>6</sup>。その際、「対話的な学び」が単なるコミュニケーションや会話レベルに留まらず非言語的表現をも含

みいれることを重視し<sup>7</sup>、「保育における対話」として改訂した<sup>8</sup>。

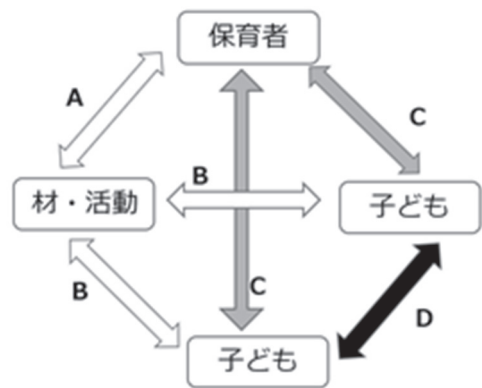


Fig.1 Dialogue in childcare practices

第1の対話 材・活動との対話（A & B）

第2の対話 他者との対話（C & D）

Fig.1に示すA～Dの「対話」とは、保育実践の時間や空間における身体的自己と環境（他者、材・活動）との「関わり」を意味している。各々の「関わり」の質は異なるものの、保育者同士が簡便な解釈のツールとして共有できることを企図して「関わり」を「対話」としている。

解釈の例として、2021年にウィリアムズを対象として実施した『おとえほん』を活用した活動のエピソードを記す。以下のエピソードは、青い丸群と赤い丸群があたかも会話をしているかのように描かれたページについて楽器（オタマトーン）で「自分の気持ち」を即興表現した際の記録である<sup>9</sup>。楽器による非言語的なやりとりと言語によるやりとりの「食い違い」と「不思議な共感」が記録されている。

### 【エピソード】<sup>10</sup>

リーダー（学生）がK（30代前半男性）さんに楽器で何を表現してたか尋ねると、Aさんは「仕事がつらいことを表現した」と応える。その後、Bさん（20代前半女性）に同じ質問をすると、「『そうだね。つらいね』と応えました」と言った。自分の中だけで考えたことをオタマトーンの音のみで表現する活動であるため会話が成立する可能性は低い。それにもかかわらず、2人の間で「つらい」「そうだね」

という共感の会話が成立してしまっていることに対して、他の参加者やスタッフの全員から思わず笑いがこぼれた。

一見、絵本に描かれた青丸群と赤丸群との会話が展開されているかのようにあるが、第2の対話である絵本との関わりは表面的であり、第1の対話である両者の会話も深まらないまま共感が成り立っていることを照射している。

絵本の情報（文字・記号）を介して文化内容や知識を得る関係を「認識論的關係」とした場合に、仲間づくりなどの「存在論的關係」を重視するあまり、学びが成立しない状況に陥る場合がある。このような対話の構築の順序性・接続性に関して森脇（2018）は、「認識論的關係」が「存在論的關係」を基盤として成立することを重視している<sup>11</sup>。この『おとえほん』のエピソードは、後者に重心が偏っている例といえる。

一方、心理学的支援として絵本の読み聞かせを行った結果、発話が絵本の内容に関するものへ変化したという田中（2020）の報告は、他者との関係性の構築によって材・活動を共有する態度が変容することを示唆している。換言するならば、関係性の構築が心理的側面だけではなく認知的側面に対する心理的援助として有用であることになる<sup>12</sup>。この両者のバランスをとるためには、ウィリアムズの特性や生活年齢に配慮した材・活動の選択が求められることになる。

ところで、河合（2001）は、「絵本の中には音も歌もある」とし、文字として描かれていない絵本の「音」や「歌」や「音楽」に「耳をすます」ことは「心をすます」ことであると述べている<sup>13</sup>。このことは、絵本から音・音楽を想起する活動には、知覚・認知するレベル（意識レベル）が活性化されるだけではなく、過去の記憶を喚起し（前意識レベル）、本人が自覚していない領域（無意識レベル）を賦活する可能性が内在することを示唆している。

しかし、前述したように当該エピソードにおいて、「材・活動」との関わり（第1の対話＝A&B）が深まらないまま、他者との関係や交流（第2の対話＝C&D）に浸潤されている。その原因として、『おとえほん』によって、オノマトペによる声やリズムの変化を楽しむことはできるものの「耳をすます」「心をすます」というレベルに達することが難しい

点を指摘することができる。つまり、成人期のウィリアムズに適した材・活動ではなかったことになる。

この点について、織壁・根津（2023）が幼児とウィリアムズの成人家族を対象とした活動において、同じ材（『かけるかける』）に対して異なる思考プロセスを経ることを明らかにした報告に触れる。

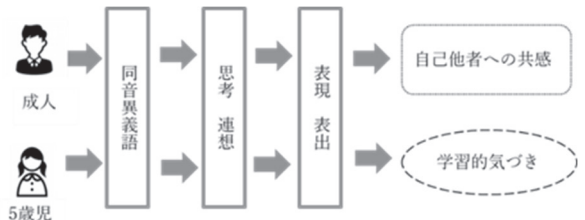


Fig.2 Different views of homonyms according to adults and 5-year-olds

5歳児と成人のウィリアムズを対象とした同音異義遊びを比較した際に、5歳児の表現・表出が主として「学習的気づき」であるのに対し、ウィリアムズは、「自己他者への共感」が主であった結果について織壁は、以下のように述べている（下線は根津による）<sup>14</sup>。

5歳児は他者から刺激を受け、共有することが学びを助長させ、大人の場合は発信者の背景や心情などを想像した上で他者が発信者全体を感じようとし、感情を寄せて共感し、共有するなどの二次的な効果が人と人との間に生まれた。

（中略）“かける”の表現の違いから、他者と自分との違いに気が付いたり、自分を誇りに思えたことで自信をもち、自己肯定感を高める機会となつたに違いない。これまで以上に他者に関心をもち、その人がもつ背景や心情を想像することで、他者への理解を深める活動となった。

本稿では、「自己や他者へ気づき」を引き出すことのできる「創造的音楽活動のデジタル化」という手法と実践（根津）を報告（安藤・根津）する。そして、文化財の検討（甲斐・和田）と全体考察（吉澤・根津）を通して、創造的音楽活動における対話の特性を明らかにし、支援モデル（覚識の連続体）としての可能性を考察する。

### 3. 活動の概要

本稿では、2023年8月4日（金）から8月7日（月）の期間内に実施した「児童文化財（絵本）」に音をつけるという創造的音楽活動のデジタル化の過程における対話を検討する<sup>15</sup>。解釈のツールとして、織壁・根津（2023）による保育における対話の構造を改変した「家族支援における対話の構造」を用いる。

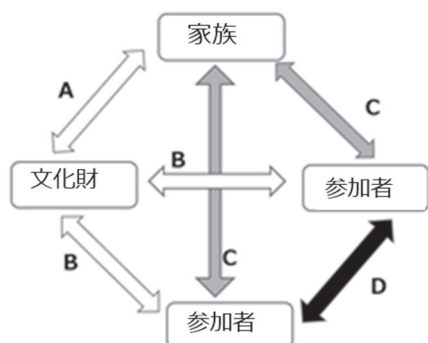


Fig.3 Dialogue in family care practices

#### 3-1. 絵本の選択

筆者らは、2021年度に、仕掛け絵本のDie Cut技法を用いた『エイトラさんのへんしんどうぶつえん<sup>16</sup>』『おとえほん』、2022年度には『砂の城<sup>17</sup>』『蜃気楼2022<sup>18</sup>』などの文化財（絵本やアニメーション）を介した活動を開発してきた。いずれも、ウィリアムズの視覚空間認知の課題である「図と地の分化」に焦点を当てた活動である。

その他にも2021年度の『あの童話どうなったっけ』において、既存の童話を自由に展開させイメージの世界を膨らませる活動を行った。また、あいまいな情報を捉えるための感性を育む教材として、『ちぎり絵しりとり』『ことばとぞうけいの時間＝オノマトペ』なども開発してきた<sup>19</sup>。

本稿では、前述した『おとえほん』実践を改善し、文字のない絵本として幼児から成人までを対象とすることのできるスージー・リー作『なみ』を選出した<sup>20</sup>。

最も大きな理由は、2019年度以来4年ぶりに対面で実施した音楽キャンプの開催地が海辺であったことが挙げられる。前述のように22年度にわたって開催している音楽キャンプと「海」は、密接に関

わっていることから、参加者にとって第1の対話が自然に促されると考えた。

何よりも、「寄せてはかえす波」の音は、参加者が滞在している宿舎で聞くことができる環境音であるだけではなく、過去の思い出ともつながる音である。ページが変わっても、ストーリーが変わっても「寄せてはかえす波」の運動は変わることがなく、安心できるものである。「1/f ゆらぎ」の間接的体験に身を委ねることによって自由な発想が生まれるのではないかと考えた。

#### 3-2. デジタル化

筆者らの従前の音楽活動は、即興性や創造性を重視している点に特徴がある。これまで表現活動の一部をVTRの記録に残してきたものの、その過程すべてを残すことは困難であった。しかし、コロナ禍では、むしろプログラムをデジタル化することによって鑑賞の機会が拡大する可能性を見出すことができたことから<sup>21</sup>、活動の過程をデジタル化することを新たな試みとした。

具体的には、『なみ』の各ページをパワーポイントに貼りつけ、各ページに音を録音するという手法である。既成の楽器は使用せずに、声や身体、生活の中で使うモノ、音楽キャンプで製作した風鈴とサウンドスケープ（音風景）を録音した音のみの使用を認めた。

各ページの音づくりは即興性が強いが、何度も修正でき、各自が表現を確認できる点で有効である。また、方法がわかれば余暇活動に活用できるという利点もある。何よりも作品として残すことにより、いつでも鑑賞することができる。このことは、社会参加をしているウィリアムズにとって大きな意味をもつことである。

#### 3-3. コトづくりからモノづくりへ

根津・松本（2023）は、これまで音楽キャンプで創出してきた「モノづくり」の過程をSmall, C.（1998）の“musicking”に依拠して「コトづくり」として捉えなおした<sup>22</sup>。その結果、実践者（根津）が提示した設計者（松本）への条件である①～⑦のすべてを“ミュージッキング”として位置づけることができるようになった。

① 参加者全員が直接木材に関わる体験を重視する。



- ② 電動工具は使用しないで、各自が木材を切る時のテンポ、音色などを感じあえる場を創る。
- ③ 参加者には最後まで何ができるかをわからないようにする。
- ④ 場（セッション）においては、演出も含めて実践者も設計者も対等に加わる。
- ⑤ 全員で一つのものをつくるプロセスを重視する。
- ⑥ 生活での活用を考えるきっかけを提供する。
- ⑦ 音楽が再生される瞬間の期待・緊張感を共有する。

以上から、本稿における創造的音楽活動のデジタル化は、「モノづくり」から「コトづくり」への転換と相補的な位置関係にある「コトづくり（創造的音楽活動）」から「モノづくり（絵本のデジタル化）」と位置付けることができる。

### 3-4. グループ構成

ウィリアムズを3グループに分け、父親を各グループのリーダーとしてキャンプの2日目から3日目にかけて製作活動を行った。ここでは、弟をもつ2名（男性A、B）と兄をもつ女性（C）からなるグループについて報告する。

## 4. 家族支援としての立場から（安藤）

今回の絵本の活動は、父親が自分の子ども以外の子どもも含めたグループのリーダーとなって活動を進めたが、それは初めての試みであった。筆者は、ウィリアムズのA（男性）、B（男性）、C（女性）とAの父親の4人グループの活動に加わったので、そのグループ活動について考察する。

Aの父親は、穏やかな態度で、ウィリアムズたちがどうしたいのかを聞き出していた。3人とも初めのうちは、何をすればよいのかわからず、困っている様子がみられた。

最初にAが「無料魚とり in Japan」という言葉を発すると、父親は、すぐにそれをテーマとして話を展開していこうと決めて皆に呼びかけた。その呼びかけで皆は、「魚をとりにいくこと」をテーマにして、絵本のストーリーや場面ごとに音を付けていくという目的を共有することができ、創造活動に入ることができたようであった。

その後も父親は、ウィリアムズたちの自発的な発

言を促しながらも、A、B、Cたちそれぞれが得意なことをよくわかっており、それらを発揮できるようにリードしていったことがうかがわれた。作品が完成したときには、ウィリアムズたちは自分たちの作ったストーリー（「無料魚とり」が「無料貝殻とり」に変更された）に満足し、達成感を味わっている様であった。そして、父親もとても楽しそうにエンドロールの装飾に何度も修正を施し、完成を喜ぶ姿がみられた。また、その時父親から、以前は活動中に仕事のことを考えたりもしていたが、定年を過ぎて働き方が変わったからか、今回は自分自身が活動に集中して参加できたというような話が語られた。

以上のような活動を観察し、父親がリーダーとして、自分の家族だけでなく他のウィリアムズにも関わる経験は、父親にとっては、第三者的な参加ではなく、自分自身の活動として向き合う体験になったのではないかと考えられる。これまでの、ウィリアムズの保護者として自分の子どもの活動を見守る、支援するといった立場であったものが、自分以外の子どもが加わり、活動の推進役を担うことで、活動自体によりコミットする経験となったのではないかと考えられた。父親が活動のリーダー役を務めることは、父親は精神的に負荷をかけられることになるかもしれないが、そのことは決してマイナス要因とはならず、これまで経験していなかったような活動への集中や満足感に繋がったということが注目される。

また、子ども側にとってもこの活動の利点が見い出された。B、Cにとっては、自分の父親以外の父親から、自分自身の長所を引き出してもらい、皆にほめられる体験につながった。それらの体験によって、自分の能力に気づいたり、自信をもったりすることができたのではないかと考えられる。Aにとっても、自分の父親のリードによって自分が提案したテーマで絵本のストーリーが展開していき、見事に完成したことにより大きな満足感を得ることができたようであった。

以上のように、家族支援の視点からみると、父親をリーダーとして、自分の子ども以外の子どもも含めたグループ編成で活動を行うことは、ウィリアムズ自身にとっても父親にとってもそれぞれに有意義な活動であったのではないかと考察された。

そして、このような有意義な活動が実現できた要件として、以下の3点をあげておきたい。

1 点目は、父親が自分以外の子どもの特性をよく

理解していること、2点目は、一人ひとりの個性や自発的な発想を尊重し、自由な雰囲気の中で創造活動が行われたこと、3点目は、父親の個人的な問題ともいえるが、父親が精神的に余裕をもって活動に参加することができたことである。

1点目は、父親が音楽キャンプに長年参加し続けてきているということが大きく関連している。この父親を含め、音楽キャンプに参加している親たちは、自分の子どもと同様に他の子どもたちに対しても愛称等で親しく呼びかけ、よく関わっている。また、参加者全員一緒に多くの活動を経験してきたことから、子どもたちの特性をよく理解することができると推察された。

2点目は、ウィリアムズの音楽キャンプで主催者側が大事にしてきたことである。すなわち、父親が、主催側の考え方や活動プログラムの趣旨をよく理解しているからこそ行うことができたと考える。

3点目は、親の活動への参加態度には心身の状態が関連していること、さらには心身の状態に、年齢段階による心理社会的な特徴が影響することについて指摘するものである。たとえば、父親の職業上の責任や地位等は、年齢と共に変化し、それが心身の状態に影響し、キャンプの活動への取り組みにも影響を与える可能性があるのではないかと考える。この父親の場合は、職業上の責務から解放されたことによって、活動によりコミットすることができたことが父親の語りからうかがえた。

## 5. 素材としての『なみ』の可能性 (甲斐・和田)

### 5-1. 『なみ』から引き出された創造性

絵本『なみ』は特別横に広い判型によって、開くと山並みから砂浜そして海へとつながる水平線のラインがひと続きに見え解放感のある景色が広がる。この絵本は本文部にいわゆる文字情報がなく、文字なし絵本の態をなしており、読者が様々な物語を紡ぎ楽しむことができる絵本である。

簡潔にストーリーを紹介すると、母とともに海に遊びに来た女の子の夏の日を表したものである。

海に向かって勢いよく走りだした女の子は、「なみ」に興味を持つも恐れもあり、用心深く眺めたり対抗してみたりとはじめは一定の距離感を保っているが、12場で大波を浴びた後、砂浜にたくさんの貝殻を見つける。寄せてはかえす「なみ」との追いかっこを楽しむうちにふたつの世界はひとつにな

る。本文の先、後ろ見返しには、表見返しにはなかった貝殻が描かれ、裏表紙はスカートの裾を袋わりにたくし上げ、貝殻をいっぱい抱えた女の子が、満足気な表情で立つ。女の子は、波との交流を通して、特別な夏の日を過ごしたのである。

一年に一度の音楽キャンプは、参加者としても楽しい再会の時、交流の場である。海辺が近く潮のにおいに囲まれたキャンプ地において、本絵本を使ったウィリアムズは、浜辺での出来事というテーマはもちろんのこと、参加者たちと共に絵本を鑑賞し、じっくり絵本に向き合う時間となった。他者がどのようにストーリーを解釈し、どんなことを感じるのか、また最終的にどんな作品に仕上がるのか一連の活動を同じ空間で共有することで、相互にたくさんの気づきをもたらすことが期待できる。目から入る情報からそれぞれが独自の物語を創造し、それを音にして、立体化していくそのプロセスもまた、絵本を味わう活動として創造的であるといえる。

参加者たちが作った作品からは、「効果音」「ナレーション」「セリフ」「背景音」と様々な種類の音がみられた。これは、アニメーションにおける音の構成要素をほとんど網羅している。

またそれが、キャンパーたちの環境や体験を有効に活用したものであることが作品のオリジナリティにさらに寄与している。海辺ならではの波の音の採集や、賑やかなカモメたちの声色も、実際のカモメの鳴き声を参考に工夫がみられた。女の子に帰りを促す母の声も温かく安心感のある声だった。セリフをいうタイミングや声色の調整なども、参加者たちが構成を話し合い出来上がったものである。

このことは、参加者たちのアイディアとして自然と創出されたものであるが、絵本の中に繰り広げられる物語世界と、自分たちの居る海辺のキャンプ地での数日を重ね、それぞれ体験した事物を、音作りにそのまま反映していることがうかがえる。

以上のことから、絵本『なみ』の音作りの活動は、今回キャンプ地が海辺であったことも後押しし参加者たちの創造性を引き出す適切な素材であったと言える。(甲斐)

## 5-2. 『なみ』から引き出された創造性

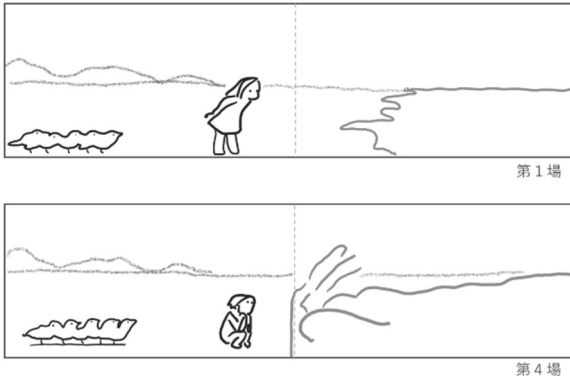


Fig. 4 Layout of visual information on facing pages

絵本の短辺を閉じた横開きの判型によって、横長の見開きに水平線を作り出している。水平線が見開きの中央を分断しており、遠方に山が描かれているが地上の空間には、女の子と鳥しか描かれておらず、遠近情報の取得を苦手とするウィリアムズには画面情報が少ない読み取りやすい内容になっている。遠近手がかり情報をそれほど必要としない絵本であるため、今回の活動の題材には適した絵本といえる。見開きの一面を子どもの世界、もう一面を波の世界に設定しているので、山、鳥、女の子、海の波といったカタログ的な表現の組み合わせは、空間をカタログ的な描き方で表現するウィリアムズの感覚に合致しているともいえる。

ところで、共感覚 (synesthesia) とは、「文字に色が見える」「ある色を見ると音を感じる」など、1つの感覚刺激から、複数の知覚が無意識に引き起こされる知覚現象として一般的に知られている。今回の活動は、絵本の絵を「視覚」で認識し、そこから音という「聴覚」という新たな感覚へ結びつけるという感覚運動特性がある。この知覚現象を拡大解釈して用いるならば、絵本という視覚的情報から音という聴覚情報へ置き換えた今回の即興活動は、ある意味において「共感覚と関連した絵本づくり」の可能性を検討できるのではないだろうか。(和田)

## 6. 考察 (吉澤・根津)

### 6-1. 対話と「覚識の連続体」との関連

ここでは、別のグループのDさんの記録に基づき<sup>23</sup>、対話について、気づきのプロセスを整理し、「覚識の連続体」との関連を検討する。

### 【お母さんの声が表現できないD】

昨日の録音を基に、各スライドに声を入れていった。女の子の役はEが、波の役をDが担当した。お母さんが女の子を迎えに来るページでは、Eは、お母さんが「さあ、帰ろう」と言っており、女の子は「まだ、帰りたくないよ～」と言っていると言ったので、Dがお母さん役をすることになった。この場面を録音したが、それを見ていたEの父親が、「やり直し」と言い、「お母さんの声が怖いよ。もっとやさしく、やさしいお母さんだよ」と言った。Dは、再度「帰ろう」と言ったが、声色が平坦で硬く、命令する口調であった。私(記録者)は、「帰ろうと言いつ切るんじゃないくて、帰ろうよって誘う感じたよ」などと言ったが、Dの声は変わらなかった。それを見ていた根津先生も「Dさんも小さい女の子に話すときはやさしく話すでしょ」などとアドバイスをした。「お母さんの表情を見て。口が上がってるよ。笑ってるよ」と言われても、Dはじっとお母さんの表情を見て、目に涙を浮かべながら考え込み、急に鉛筆をもち、時々なにかを書こうとするように鉛筆を動かしながら考え込んでいた。

Dは、絵本『なみ』を使って自分の声や表現を他者と共有することで、自己内対話を促進したプロセスを経験した。最初は、お母さん役を演じることになったが、お母さんの声が怖くてやさしくなかったことに気づいた。周りの人たちからアドバイスをもらっても、声色が変わらなかった。そこで、お母さんの表情を見て、目に涙を浮かべた。鉛筆で何かを書こうとした。自分の心の中にあるネガティブな感情や思考を表現しようとしたのではないだろうか。

### 【力を抜いていくD】

それを見た根津先生は、Dの肩をもみ、「リラックス～」と言った。Dは、少し表情がやわらぎ、周りもDを応援する雰囲気になった。そして、もう一度、「帰ろう」とお母さんの台詞を言うと、少しかたさがとれた。Eさんの父親も「よくなってきた」と評価した。そして、Dの声を再度録音した。

Dは、肩もみによってリラックスし、周りもDを応援するという場の雰囲気の変換後、もう一度お母さんの声を録音すると、声に変化ができ、少しやさしくなったことについてEの父親からの評価を受けることができた。次に、女の子と手をつないで帰る場面では、その声はやわらかくてやさしかったことから、Dは、「母親」のように女の子に話することができるという新たな役割や関係を見出すことができたのではないだろうか。そして、「母親」と女の子との間にある愛情や絆を感じたと推測することができる。この表現によってDは、これまでに体験したことのない自己認識や自己理解を深め、自分の潜在力や個性を発見できたのではないかと考える。

#### 【やさしく、やわらかい母親としてのD】

その次のページでは、女の子とお母さんが手をつないで帰っていくページであった。ここでも、Eが女の子の台詞を考えて言った。私（記録者）は、Dに「お母さんは何て言ってるかな」と問いかけた。Dが困っていたので、根津先生は、「『どんなことして遊んだの?』とか聞くでしょ? Dさんがキャンプとかに行っただけのお迎えにお母さんが来てくれたときとか、お母さんはDさんになんていう?」と聞くと、Dは固い声でそっけなく「何したの?」と答えた。根津先生は、「そしたらお母さんは女の子になんていう?」と聞くと、Dは「貝殻ひろってきたの?」と言った。根津先生は、「それじゃあ、答え言っちゃってるじゃん」と突っ込んだ。Dは、「何してたの?」と言い直した。そして、その声を録音した。Dの「何してたの?」の声はやわらかくてやさしいものだった。

このようにDは、第2の対話（他者との対話）と絵本「なみ」という第1の対話（素材との対話）を通じて、また周囲の人との対話とかかわりを通じて、第3の対話である自己内対話が賦活された。

3-1で述べたように、絵本『なみ』は、波の規則性と揺らぎ、そして音の繰り返しの運動性を持っている。この素材は、Perls, F.S. (1971) や Boxill, E.H.が言及する「意識の連続体 (Continuum of awareness)」の感覚運動につながるものである。Dの例からも、感覚運動や身体のリラックスが自己

内対話に必要な要素であることがわかる。感覚運動は、自分の心身の状態や感情や思考に気づき、それらを表現し、変化させることができる能力であり、自分と他者との関係やコミュニケーションにも影響することがわかる。

#### 6-2. 対話の発達水準

Dの対話で展開された水準を Fichtner, B.の理論から眺める<sup>24</sup>。

フィヒトナーは、間主観性あるいは対話に関して、三つの基本的な形態を発達的な順序で提案している。第一の形態は調整である。これは、人々が共通の対象に向かって行動するが、それぞれの行動は外的に関連しているだけで、内的には分離している状態である。人々は自分の個人的な目的に応じて行動し、相互作用を内省することはない。第二の形態は協業である。これは、人々が共通の目標や問題に対して意識的に協力して行動する状態である。人々は自分とパートナーの行為と結果を調整し、必要に応じて影響を与え合う。人々は自分の声や表現を他者に伝えることができるという喜びや誇り、自分の感情や思考を変化させることができるという希望や勇気を感じる。最後の形態は内省的コミュニケーションである。これは、人々が自分の生きた知識を話したりシンボルを使ったりするプロセスで発達させる状態である。内省的コミュニケーションは、集団的な熟考や集団的主観性として具体化する。ここでは、相互作用システムが全体として内省と自己統制の焦点となっていく。

これを踏まえると、Dは、二番目の協業水準と考えられる。つまり、今後の可能性として三番目の内省的コミュニケーションを想定できるといえるのではないか。

#### 6-3. 素材との対話におけるストーリー性について

今回は「世界でひとつだけの音絵本づくり」ということで、音作りに強調点があるものの、用いた絵本に文字が無いことから、多様なストーリーの展開や解釈が可能な素材でもある。このストーリーを作る点を考察したい。

絵を見て自由に物語を作るという投影法原理は精神医学の診断法のひとつ主題統覚検査 (TAT: Thematic Apperception Test) にも採用されている。これは、今回のようにグループで楽しく取り組む場



合には、想像力と創造性がとりわけ強く刺激される。Aの父親がリーダーとなったグループの作品を例にとると、当初提案された「魚取り」のイメージに沿って物語がスタートし、別のグループの代表の父親の愛称である「Japan」から効果音「ジャバーン」が連想され『なみ』の基調音を生み出した。また、女の子役のDを「素敵な声優として誕生」させることに新たな役割を見出し、絵本の最後は、未来志向の「うみ」で閉じる作品を完成させることができた。他者との相互的対話の中でついに「貝殻取り」のテーマが発見・共有され、物語は見事に収斂したと捉えることもできよう。こうした素材との対話プロセスは、集団と個人の違いはあるにせよ、エスキモーの彫刻家がトナカイの骨を根気強く彫り、ついに「あ、アザラシになった！」と叫んだ逸話を髣髴させる。本稿の文脈では自己内対話による創造に対応すると言えるのではないだろうか。

#### 6-4. 「世界でひとつだけのおと絵本づくり」の可能性

以上、各専門分野からの有益な指摘や分析を受け、素材やツールの選択、創出の理念に関する視点、そして活動の距離感についても考慮することで、「世界で唯一無二の音絵本作り」の可能性を拡張されたと考えられる。

##### 6-4-1. 素材の分析

甲斐が挙げた素材の特徴と分析を踏まえて考察する。絵本『なみ』は、特別に横に広い判型を採用している。山並みから砂浜、そして海へとつながる水平線のラインが一連の流れとなっている。本文中に文字情報は存在せず、波と女の子の境界が本の中央にあるノドに一致している。波がノドを越えて女の子に迫ったり、女の子が波に飛び込んだりする場面では、ノドが消えて一体化する効果がある。これは、素材自体が境界横断的な拡張を引き出すアフォードンスを内在しているといえるのではないか。

参加者たちは、各自の物語解釈に加えて、「効果音」「ナレーション」「セリフ」「背景音」といったアニメーションにおける音の構成要素をほぼ網羅した作品作りを行っている。その自由度と想像力は、高いレベルでの活動へのコミットメントを示唆する。次の文章内容から、参加者たちが感覚運動要素を発揮して、生活に密着した体験に意味づけしながら対話により自己洞察を深めるプロセスが確認できる。

「海辺ならではの波の音の採集や、賑やかなカモメたちの声色も工夫されており、実際のカモメの鳴き声を参考にしている。女の子に帰りを促す母親の声も温かく、安心感がある。セリフを言うタイミングや声色の調整などもキャンパーたちが話し合って決めたものであり、その結果として出来上がった作品である。」

和田は、遠近情報の取得を苦手とし、空間をカタログ的な描き方で表現するウィリアムズにとって、『なみ』の本は認知的にも感覚的にも取り組みやすい素材である点を構成学の観点から指摘した。また、絵本の絵を「視覚」で認識し、そこから音という「聴覚」という新たな感覚へ結びつけるという感覚運動特性を見出した。これは、ツールを選択や創出においてequityの観点をさらに推し進める分析と言える。

##### 6-4-2. 活動における距離感について

安藤は、有意義な活動が実現できた要件として、父親が自分以外の子どもの特性をよく理解していること、一人ひとりの個性や自発的な発想を尊重し、自由な雰囲気の中で創造活動が行われたこと、父親が精神的に余裕をもって活動に参加することができたことを挙げた。こうした理解の深まりは、今回スタッフがキャンパーの活動グループに加わったこと、つまり参与しての観察というかわり構造の利点が生かされたと考えられる。スタッフと参加者との距離感の問題をあらためて提起しているといえるのではないか。

#### 7. おわりに（根津・吉澤）

本稿は、2023年8月の音楽キャンプの中のひとつの活動である「世界でひとつだけの音絵本」に焦点化した研究である。絵本『うみ』を介して「耳をすます」「心をすます」体験（コト）が作品（モノ）となっていく過程を通して、主体であるウィリアムズが自分や他者、材と関わりながら促進した自己内対話を分析した。そして「覚識の連続体」のコンテンツとしての有用性と可能性を導き出した。

22年間にわたる音楽キャンプを貫く音楽の本質について、本稿の2. 対話の構造の「エピソード」でも言及した河合（2001）の思想の原点を紹介して本稿を閉じたい。河合は、『絵本の力』の中で『ヴァイオリン<sup>25</sup>』を取り上げ、次のように述べて

いる<sup>26</sup>。

「このおじいさんはもう来ません。来ませんけど、もっと確実なことがある。それは音が残っているということです。音楽は残っている。これはすべてのテーマに共通でした。やぎが死んでも音は残っている。ヴァイオリンがこわれても、ボディがこわれても残るものという、私なんかすぐ連想するのは、魂ということです。体がなくなってもまだ残っている。そういう意味で音と歌というのは、心をすましていたら聞こえてくる魂のひびきとっていいのではないかと思います。」

ユング派の心理学者である河合は、自らフルートの演奏も行い、音楽が人間の心にどのような影響を与えるか、どのような意味を持つかを追求した。そして音楽を「魂のひびき」と呼び、深層心理との深い関りを論じたのである。

本研究は、日本女子大学人を対象とした実験研究に関する倫理審査委員会において承認を得ている(539号)。

## 引用文献

- 1) 吉澤一弥・根津知佳子・和田直人(2020):「ウィリアムズ症候群の視空間認知特性の研究—主として投影法心理検査を用いた解析—」,『日本女子大学総合研究所紀要』23号, pp.143-168
- 2) 根津知佳子・吉澤一弥・和田直人・角藤比呂志(2021):「ウィリアムズ症候群の視空間認知とパフォーマンス」,『日本芸術療法学会誌』,第51(2), pp.44-53
- 3) 根津知佳子・和田直人・安藤朗子・甲斐聖子・吉澤一弥(2023):「ウィリアムズ症候群における「図と地」の多角的検討」,『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』,第29巻, pp.261-269
- 4) 文部科学省(2017):『幼稚園教育要領』フレール館 および文部科学省(2018):『幼稚園教育要領解説 [https://www.mext.go.jp/content/1384661\\_3\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) (2023年10月25日最終アクセス)
- 5) 根津知佳子(2018):「事例シナリオの評価方法」,『PBL 事例シナリオ教育で教師を育てる教育的事象の深い理解をめざした対話的教育方法』,第5章 p.48, 三恵社
- 根津知佳子(2022):「PBL 対話的事例シナリオ教育カリキュラムの評価のあり方」,『対話的事例シナリオを核とした教員養成カリキュラムの創造と評価方法の開発研究』2019年度～2021年度科学研究費補助金基盤(C)報告書(山田康彦代表), 三恵社
- 6) 織壁佐和子・根津知佳子(2023):「ライフステージを展望した材の活用と実践」,『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』,第29号, pp.67-75
- 7) 無藤隆編(2017):『平成29年告示幼稚園教育要領まるわかりガイド』,チャイルド本社, p.37
- 8) 織壁・根津(2023), p.69 Fig.2
- 9) 吉澤一弥・根津知佳子・和田直人:「ウィリアムズ症候群のための“支援プログラム”の開発～投影法心理検査を基盤として～」,『日本女子大学総合研究所紀要』,25号, pp.91-118(2022)
- 10) 前掲論文, p.103
- 11) 森脇健夫(2018):「事例シナリオを用いたPBL教育」,『PBL 事例シナリオ教育で教師を育てる 教育的事象の深い理解をめざした対話的教育方法』, pp.23-40, 三恵社
- 12) 田中元基(2011):「認知症高齢者と絵本を読むことの臨床発達心理学的研究」,『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』,18, pp.97-114
- 13) 河合隼雄・松居直・柳田邦男(2001):『絵本の力』,岩波書店, pp.15-43,
- 14) 織壁・根津(2023) pp.72-73
- 15) 第22回ハッピーウィリムンの記録集, 2023年8月31日発行
- 16) ロイス・エイトラ作(1997) 偕成社
- 17) The sand castle <https://www.youtube.com/watch?v=hzyqmoPu2H4> 最終閲覧2022年10月23日
- 18) 和田直人作(2022)
- 19) 日本女子大学総合研究所 研究課題76(2022) 資料集Ⅲ
- 20) スージー・リー作(2009):『なみ』, 講談社,

ISBN : 978-4-06-283035-5

- 21) 根津知佳子 (2021) : 「コロナ禍における” 集団的即興”」, 『活動理論研究』, 第 6 号, pp.13-25
- 22) 根津知佳子・松本金矢 (2023) : 「“モノづくり” と “コトづくり” の融合 一 家族支援におけるミュージッキングー」, 『日本女子大学 紀要 家政学部』, 第 70 号, pp.9-18
- 23) 音楽キャンプのスタッフ目白大学児童教育学科助手川見夕貴氏のフィールドノートによる。
- 24) Fichtner, B. (1984). Co-ordination, co-operation and communication in the formation of theoretical concepts in instruction. In M. Hedegaard, P. Hakkarainen & Y. Engeström (Eds.), Learning and teaching on a scientific basis. Aarhus: Aarhus Universitet, Psykologisk institut (pp. 207–228).
- 25) ロバート・T・アレン文, ジョージ・パスティック写真, 藤原義久／藤原千鶴子訳 (1981), 評論社, ISBN978-4-566-00242-5
- 26) 河合ら (2001) pp.42-43





## ショーン・タンの物語絵本における「欠如の表現」に関する考察

### A Study on the “Expression of a Deficiency” in Shaun Tan’s Story Picture Books

今 田 由 香\*

Yuka IMADA

**要 約** 本研究では、何かが欠けていることを読者に印象付ける表現と、物語絵本が通常備えている要素を欠いた表現に注目した。それらを「欠如の表現」と名づけ、ショーン・タンが制作した6作の物語絵本における様相を確認した結果、①名前がなく、②具体性を欠いた姿のキャラクターが活躍しており、③物語は、欠乏から始まり、その解消までを語る傾向があることが明らかになった。このような表現傾向を、絵本に隣接する諸芸術の研究成果と作家の発言をもとに考察したところ、ショーン・タンの物語絵本における「欠如の表現」は、多様な読者が登場者に自己を投影したり、想像力を働かせたりして、自分なりに物語世界を楽しむことを誘う役割を担っている可能性が示された。

**キーワード**：物語絵本、ショーン・タン、欠如の表現

**Abstract** This study focused on ‘expressions of a deficiency’ in picture books, specifically those that leave an impression on the reader that lacking something and absent the elements that story picture books usually have. I analyzed six picture books produced by Shaun Tan. Results revealed that (1) many characters do not have a name and (2) they are depicted with simplified appearances. And (3) the stories tend to describe the elimination of the deficiency. I examined these finding based on previous studies and the author’s remarks. Result suggested that “expression of a deficiency” is useful to encouraging the reader’s empathy and it invites readers to enrich their imagination and enjoy the story in their own way.

**Key words** : Story picture books, Shaun Tan, Expression of a deficiency

#### 1. はじめに

アメリカの絵本研究者、バーバラ・ベイダー (Barbara Bader, 1927-2021) が『アメリカの絵本』 (*American picture books from Noah’s ark to the beast within*, 1976) で、絵本とは「テキストとイラストレーションを用いて、全体がデザインされたもの」と述べたように、<sup>1</sup> 絵本は、文字と絵を使って、意図をもって全体が構成された書物である。つまり、作品を深く理解するためには、描かれていないものや絵の余白、語られていないことや伝えられてい

ない情報にも関心を向ける必要がある。

このような絵本の特性を意識して作品を制作している作家に、オーストラリアを拠点として活動するショーン・タン (Shaun Tan, 1974-) がいる。タンは言葉と絵を用いた書物で、どのように物語が語れるのか、常に探究を続けてきた。<sup>2</sup>

タンの作品には、読者の感性や思考を刺激する設定や展開、光景があるが、それらの多くは、必要な何かが欠けていたり、何かを喪失していたりすることと関わりがあるように思う。例えば、タンの自作絵本第1作目のタイトルは、『ロスト・シング』 (*The Lost Thing*, 2000) であり、持ち主不明の不思議な生き物の居場所を探す物語であったし、彼の代表作『アライバル』 (*The Arrival*, 2006) は、移民を

\* 児童学科  
Department of Child Studies

主役にした長編のサイレントブック、つまり、文字がない絵本であった。

このような気づきをもとに、本研究では、本来はあるはずの何かが欠けていることを読者に印象付ける表現と、物語絵本の多くが備えている要素が欠けている表現に注目する。それらを「欠如の表現」と名づけ、ショーン・タンが制作した6作の物語絵本において、「欠如の表現」がいかに用いられているのか、その様相を確かめる。その上で、「欠如の表現」を物語絵本に取り入れることで何ができるのか、つまり「欠如の表現」がもたらす意味や担うことができる役割について、絵本に隣接する諸芸術の研究成果とショーン・タン自身の発言も参考にしながら考えていく。

### ＜研究の対象と方法＞

今回、研究対象に選んだのは、ショーン・タンが自作し、日本でも公刊された6作の物語絵本である。主に下記の日本語版を使用し、必要に応じて英語版を用いることにする。<sup>3</sup>

1. 『ロスト・シング』 (*The Lost Thing*, 2000)  
岸本佐知子訳, 河出書房新社, 2012.
2. 『レッド ツリー』 (*The Red Tree*, 2001)  
早見優訳, 今人舎, 2011.
3. 『アライバル』 (*The Arrival*, 2006)  
河出書房新社, 2011.
4. 『エリック』 (*Eric*, 2010)  
岸本佐知子訳, 河出書房新社, 2012.
5. 『夏のルール』 (*Rules of Summer*, 2013)  
岸本佐知子訳, 河出書房新社, 2014.
6. 『セミ』 (*Cicada*, 2018)  
岸本佐知子訳, 河出書房新社, 2019.

研究の進め方としては、まず、6作の物語絵本を再読し、キャラクターの設定と描き方、ストーリーの構成と語り方に着目し、「欠如の表現」のありさまを確認する。その結果を踏まえて、物語絵本における「欠如の表現」が読者に何をもたらす可能性があるのかを、諸芸術の先行研究の成果と、ショーン・タンの発言を踏まえて論じていく。

### 2. 6作の物語絵本の概要

ではここから、原書の出版時期が早い順に、6冊

の絵本の概要を述べていく。第1作目の『ロスト・シング』からは始める。

#### 2-1. 『ロスト・シング』

『ロスト・シング』は、ショーン・タンが文と絵の両方を手がけた自作絵本のうち、最初に出版された作品である。2000年にオーストラリアで出版されたが、日本語版の出版は代表作となった『アライバル』の刊行後、2012年であった。

主役は、瓶の蓋、いわゆる「王冠」の蒐集を趣味とする青年で、彼が海辺で出会った正体も所有者も不明な生き物、「ロスト・シング」と過ごしたある夏の日の出来事が回想されている。つまり本作は2つの物語時間を内包する「枠物語」になっている。

青年の名前は、本文では明かされない。語り手である彼は名乗らないし、家族や友人と会話する場面もあるが名前を呼ばれることはない。しかし、注意深い読者は作家が絵本のカバーの袖部分で仄めかしていることを見つけ、名前に関する手がかりを見つめるだろう。裏表紙には絵葉書が掲載されており、内容から、それは青年が友人ピートに宛てたもので、青年の名前は「ショーン」だとわかる。「ショーン」は作家と同じ名前だ。

青年も含めて、この絵本に登場する人物の造形は奇妙である。人間たちは不自然に額が長く、デフォルメされた風貌をしている。

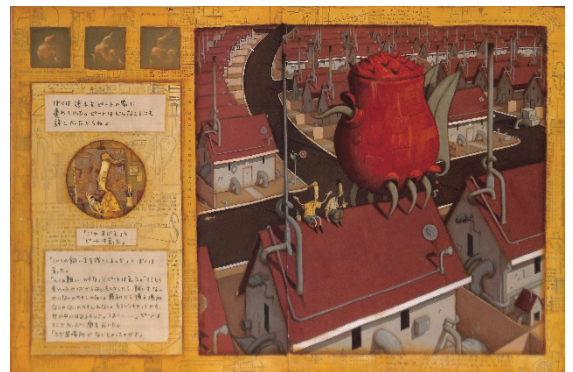


図1 『ロスト・シング』 pp.10-11

本作の準主役「ロスト・シング」も名前がわからない。その正体すら、青年が友人を巻き込んでまで調べても判明しない。描かれた外観は、大きく赤く、巨大なやかん、あるいはストーブのようにも見えるが、タコのようにしなやかに曲がる脚も生えており、

自分で動くことができる。顔は描かれておらず、人間の言葉も話さないが、青年とコミュニケーションをとることはできている。

海辺に取り残された、ひとりぼっちのこの不思議な生き物と遊び、置き去りにすることができなくなった青年が、「ロスト・シング」の居場所を見つけようと奔走した時間が語られている。

## 2-2. 『レッド ツリー』



図2 『レッド ツリー』 扉

『ロスト・シング』の翌年に出版された『レッド ツリー』の主役も若い人であった。孤独や絶望、恐怖に苛まれるオレンジ色の髪をもつ少女が登場した。

絵本の扉には、草原で白い丸椅子の上に立ち、目を伏せ、メガフォンを持つ少女の姿がある。大きなメガフォンから多くの言葉が、誰にも届かずにこぼれ落ちていく様子が可視化されている。

『レッド ツリー』の物語も少女の一人語りで行進する。彼女は名乗らず、他者と交流する様子もないため、最後まで名前はわからない。

彼女は家にも街を歩いても「すべてが真っ黒」と語る。そしてページを捲るごとに、彼女の不安感を象徴するような、空想的で、威圧的な光景が現れる。「まわりは冷たい機械のよう」と語っており、俯く少女に手を差し伸べる人間はいない。

少女の姿は頼りない。平面的で、身体もまるで紙人形のように薄く、細い。目鼻も簡略化されて、個性の気薄な記号的な顔で描かれている。

一方で、彼女を取り巻く世界は紙面の大部分を占めるほど大きく、かつ細部まで入念に描かれており、美しく迫力がある。

先ほど、不安を抱える少女は誰とも交流しないと

述べたが、実はどの場面においても彼女を見守る存在はいる。それこそが、タイトルに示された「レッド ツリー」の一部である赤い木の葉で、最後に最も身近な場所、自室にその存在を発見した少女は、初めて微笑みを見せる。

## 2-3. 『アライバル』

ショーン・タンの名を世界に知らしめた『アライバル』は、全6章で構成された長編の物語絵本である。革製の古いアルバムを模したような装幀で作られており、128 ページと紙数も多く、重厚さを実感できるデザインになっている。

この作品の最大の特徴は、長編の物語が文字なしで語られている点にある。本作は「サイレントブック」である。

主役は表紙にも登場する男性で、彼は大きな存在に支配され、自由を奪われた町に妻と娘を残し、新しい場所を求めて国を出て行く。トランク一つを携えて海を渡り、厳しい審査を経て入国し、言葉も文化もわからないなかで部屋を借り仕事を見つけ、人々と交流しながら生活の基盤を整えて、やがて家族を呼び寄せる。そこまでのドラマが言語を使わずに、連続する絵を中心に語られている。



図3 『アライバル』表紙

正確に言えば、文字らしいものが登場する場面はあるが、それは作家がローマ字とアラビア数字を組み合わせて作ったオリジナルの言語で、<sup>4</sup> 誰も判読できない。文字がないことで読者は、言語も文化もわからない土地で暮らすことになった人々が感じたであろう不安を自らも体感しながら、ある移民の人生を読んでいくことになる。



なお、本作にも主役に寄り添う存在がいる。男性が新しい国で借りたアパートメントに住み着いていた大きな口と長い尾をもつ不思議な動物である。

#### 2-4. 『エリック』

不思議な存在と人間との関わりは、4作目の『エリック』にも引き継がれていく。『エリック』の初出は、2008年に発表されたオムニバスの物語絵本『遠い町から来た話』(Tales from outer suburbia, 2008)であり、そこから独立して1冊の絵本として新たに出版された。<sup>5</sup>

この物語もまた、過去の出来事に焦点が当てられている。「何年前か」に自宅にホームステイした、交換留学生「エリック」との日々が回想されている。なお、『ロスト・シング』や『レッド ツリー』とは異なり、語り手の姿は作中には描かれていない。

「エリック」は、「交換留学生」として登場するが、正体は不明である。「エリック」という名前もニックネームで、「発音が難しいので誰も発音できなかった」と説明されており、本名は最後まで明かされない。また、どこかの国からの留学生であるかなども語られることがない。

謎の多いエリックであるが、その姿は、「ロスト・シング」と同じように親しみがありながらも個性的な風貌で描かれている。身体はコーヒークップに入れるぐらいに小さく、葉っぱのような頭部をしていて、身体は薄く、色は黒で手足は細い。(図4)



図4 『エリック』 pp.6-7

本作でタンは、ルーツや文化が異なる人々が過ごした時間がもたらしたものを描いている。家族はエリックを歓迎し、もてなそうとし、毎週末に色々なところに出かけるのだが、エリックの興味とは微妙にずれている。

エリックの行動は家族には予想外のもので、特別

に準備したゲストルームでなくパントリーのカップの中で眠ったり、床に落ちていたボタンに興味を抱いたりするのである。そしてある朝早くに、葉っぱに乗って手を振って、「ごきげんよう」と立ち去る。こういった行動に家族は戸惑いを覚えるが、ある日、エリックが残っていたメッセージを見つけ、ホームステイの時間がエリックにとって居心地の悪いものではなかったらしいと知ることになる。

#### 2-5. 『夏のルール』

『夏のルール』には、二人の少年が登場する。彼らは名乗らないし、お互いを名前で呼び合うこともない。

本作は、6冊の中でもとりわけ謎が多く、多義的な作品である。「去年の夏、ぼくが学んだこと。」と始まり、見開きの左ページに、ルールのような奇妙な一文が示され、右ページには、そのルールを破った場合に生じるかもしれない光景が、空想的で魅惑的な描写で描かれる。

二人はどのような関係なのか。また、なぜこのような奇妙で恐ろしい状況に巻き込まれているのかについては、説明されない。

二人の男の子の顔の造形も記号的である。輪郭線に、点のような黒目と小さな鼻が付けられただけであるが、表情が表現されている場面はある。一方、彼らを取り巻く世界は濃密に描き込まれており、人物表現と背景との描き方には大きな違いがある。

#### 2-6. 『セミ』

自作の物語絵本の6冊目となる本作でタンは、人間ではなく、昆虫の「セミ」を主役に据えた。

しかし、物語の舞台はオフィスで、セミは灰色のスーツを着てネクタイをしめ、人間社会で働いている。物語は、セミの視点で語られる。(図5)

セミは17年間、高層ビルにある会社で、欠勤もミスもなく、データ入力の仕事をしたが、人間たちに差別され、待遇は悪く、家を借りる余裕がないため、会社の壁の隙間で暮らしていた。つまり、人間界で暮らすセミには、あらゆる権利も安らげる場所もなかった。

人間たちに労働力を搾取し続けられたセミは、やがて定年を迎える。しかし、労いの言葉一つももらえずに、仕事も住む場所も失ってしまう。私物を片付けてオフィスを出ていったセミが、長い階段を



登って、ビルの屋上に立つ場面には緊迫感があり、読者である人間の私たちは重い気持ちになる。

しかしその後、セミは人間界を見捨てるのである。脱皮して、羽を広げて空に飛び立ち、仲間と共に森へ帰っていく。サラリーマン姿の殻を破り、真っ赤な蟬となって空に飛び立つ後半の5つの見開きには文字がなく、読者はセミの変身を驚きをもって見つめるほかない。

以上が、6作の物語絵本の概要である。



図5 『セミ』表紙

### 3. 「欠如の表現」の分析

次に、6冊の絵本における「欠如の表現」の傾向を確認していく。

#### 3-1. <キャラクター>

まず、注目したいのは、全作において主要なキャラクターの名前と造形に情報の「欠如」が認められた点である。表1にまとめた通り、名前が判明しているのは、『ロスト・シング』の語り手の青年「ショーン」と『エリック』における交換留学生「エリック」だけである。しかし、先にも述べたように、『ロスト・シング』に登場する青年の名前は本文で明かされない。また、その名前も作家と同じ

で、作家が特別に考えたものではない。

「エリック」も愛称である。語り手は、「彼の名前はむずかしくて、だれもちゃんと発音できなかった」と説明しており、本名はわからないままである。

そのほかの主役および準役というべきキャラクターたちは、名前が与えられていないか、「セミ」のように生物学的な名称で呼ばれ続け、キャラクターとしての名が与えられていない作品もある。

また、キャラクターの造形にも共通点が見つかった。「ロスト・シング」(図1)や「セミ」(図5)など、人間以外のものは細部まで描きこまれる傾向があるが、人間は具体的な描写のない、個性が欠けた記号的な姿で描かれている。



図6 『夏のルール』表紙

例外は『アライバル』に登場する人間たち(図7)である。主役の男性は、作家自身がモデルとなって、扮装して写真を撮影し、それをもとに描いたことが明らかになっている。他の人物も作家の家族や身近な人、あるいは古い写真などを資料として、実在した人物の姿をもとに写實的に描かれている。

なお、タンは自分をモデルにして描いた意図を、自分は人種的に入り混じった顔をしており、いい意味で、特徴が曖昧だからと説明している。<sup>6</sup>

Table 1 Characters and Stories

	日本版タイトル	語り	物語の時間	主要な登場者①	①の名前	主要な登場者②	②の名前	物語の始まりに欠如しているもの	文字のない見開きページ
1	ロスト・シング	一人称	過去	青年	(ショーン)	不思議な生物	不明	登場者②:名前,居場所や持ち主,顔,正体	あり
2	レッドツリー	一人称	過去	少女	不明	赤い木の葉	不明	登場者①:名前,希望,居場所や仲間	なし
3	アライバル	—	—	男性(移民)	不明	不思議な生物	不明	登場者①:名前,安心して暮らせる場所	あり
4	エリック	一人称	過去	不明	不明	不思議な生物	(エリック)	登場者①:姿や名前/登場者②:本名,出身地等の情報	あり
5	夏のルール	一人称	過去	少年	不明	少年	不明	登場者①②:名前	あり
6	セミ	一人称	過去	セミ	不明	人間	不明	登場者①:居場所,尊厳,権利	あり



図7 『アライバル』 pp.6-7

### 3-2. <ストーリー>

次に、ストーリーの語り方、時制、プロットに注目した結果について述べる。

サイレントブックである『アライバル』以外の5作品は、一人称で、かつ過去の出来事として物語が語られていた。

また、プロットに注目してみると、居場所や心の拠り所など、物語の始まりに何かが欠乏している状態が示され、作品の中で、欠乏が解消されて終わるという展開が、『ロスト・シング』『レッド ツリー』『アライバル』『セミ』の4作品に見られる。

『エリック』は、違う国からやってきた留学生がホームステイしていた日々が受け入れ先の家族の視点で語られている。つまり、語られているのは一時的な所属場所における物語で、そもそも「エリック」がどの国からの留学生なのかといったこと、つまりエリックの母国や帰属先は具体的には示されない。

また、表現に注目してみると、『レッドツリー』以外の作品には全て、文字を使わない絵だけの見開きページが存在する。『夏のルール』や『セミ』の後半では、文字がない見開きページが連続することで物語の緊張感が高まっており、また、先述したように『アライバル』では、既存の文字を全く使わずに物語が語られている。

さらにタンは、『夏のルール』のように、文字数が少なく、ストーリーの文脈がはっきりとせず、展開に謎が多い作品も制作している。

6作の物語絵本を分析した結果、登場者たちの多くは名前が与えられていないこと、また人間は写実性を欠き、記号的に表現されることが多いことがわかった。また、名前が与えられる時にも、写実的な描写をする際にも、特別に考案されたものではなく、

作家自身の名前や姿が用いられており、キャラクターの属性や個性が限定される情報を使わずに作品を構成しようという作家の意図が見て取れた。

また、物語はキャラクターたちが所属先や心の拠り所がない状況から始まり、その解消を語る傾向があることも確認できた。

そのほかにも、「欠如の表現」はさまざまな形でショーン・タンの絵本に取り入れられている。その1つは文字なしで語るという表現である。絵だけで表現された見開きページは6冊中5冊にあり、そのうち1冊は文字を使わずに、長編の物語が語られていた。さらに、文脈が曖昧な作品(『夏のルール』)も存在する。

以上のように、ショーン・タンの物語絵本にはキャラクターの描写や設定、物語の展開において「欠如の表現」が取り入れられている。

## 4. 「欠如の表現」の意味について

では、「欠如の表現」は読者に何をもたらし可能性はあるのか。絵本に隣接する領域の諸芸術の研究成果を参考にしながら考察する。

### 4-1. 記号的な人物表現について

はじめに、キャラクターたちが記号的に描かれていることについて考えていきたい。ここでは、タン自身が『アライバル』制作時に参考にしたと発言している、スコット・マクラウド著『マンガ学』を頼りに考察する。<sup>6</sup>

アメリカの漫画家であり、研究者でもあるスコット・マクラウド (Scott McCloud, 1960-) は、1993年にマンガの理論書『マンガ学』(*Understanding Comics: The Invisible Art*)を発表し、注目を集めた。今回参照するのは、その第2章「マンガの記号論」である。この章でマクラウドは、絵の抽象化、単純化の度合いが、読者に何をもたらしかについて論じている。

対象をデフォルメして描き、細部を省略するとき、描かれたものが一般化され、多くの人が当てはまるようになる。このことによって、読者は自分なりのイメージをキャラクターに投影して見ることができるようになるのだとマクラウドは述べている。

キャラクターの記号的表現を活用した作例としてあげられているのは、ベルギーの漫画家、エルジェ (Hergé, 1907-1983) による「タンタン (Tintin)」

シリーズである。このシリーズには、記号的なキャラクターと、細部まで綿密に描かれた背景を組み合わせた場面が頻出する。タンタンは髪型や服装には個性があるが、顔や身体つきには特徴が薄いので、読者はタンタンという「容れ物」に自己を投影しながら、感覚的な刺激に満ちた本の世界を冒険することができるのだとマクラウドは説明している。<sup>7</sup>

ショーン・タンの物語絵本においても、細部を省略し、デフォルメされたキャラクターが密度の濃い背景とともにいる情景が描かれたページが散見される。本ページに『レッドツリー』（図8）と『夏のルール』（図9）から1見開きずつ転載した。どちらも紙面の大部分を描きこまれた重々しい背景が占めており、主役たちは細部を省略した個性の希薄な姿で描かれていることが確認できるであろう。マクラウドの言説によれば、このような描写は、読者を物語世界に引き込みやすくする可能性がある。描きこまれた写実的な背景に記号的な人物像を配置した表現によって、絵本を読む人たちは物語の世界に入り込み、キャラクターの感じた恐怖や不安をより身近に感じることができる。

#### 4-2. 名前のないキャラクター

次に、タンの物語絵本のキャラクターたちが、名前を与えられていないことの意味を考察する。このことについて考えるには、伝承文学の研究成果が参考になると思われる。はじめに取り上げるのは、スイスの民間伝承文学の研究者、マックス・リュティ（Max Lüthi, 1909-1991）の理論である。

リュティは、ヨーロッパ諸民族の昔話を調査し、それらの形態に文芸学的な共通点、いくつかの法則があることを明らかにした研究者で、日本では、グリムのメルヒェンを研究していた小澤俊夫（1930-

によってその理論が紹介されてきた。ここでは、リュティの見つけた昔話の語りの様式的特徴のひとつ「平面性」に注目する。

リュティは『ヨーロッパの昔話—その形式と本質』（*DAS EUROPÄISCHE VOLKSMÄRCHEN*, 1947, 1968）等の著作において、「昔話に登場する人間や動物には肉体的、精神的深さが無い」と説明し、これを「平面性」と名付けた。<sup>8</sup> 昔話に登場するキャラクターたちは、末の娘とか王などと呼ばれ、個別に名前を与えられない場合も多い。また、物語の展開に必要ななければ、彼らの背景はほとんど語られない。

このことは、「ロスト・シング」にも当てはまる。作品の中で、「ロスト・シング」は、現在置かれた状況から「ロスト・シング」と呼ばれているだけであり、真実の名前はわからないし、なぜそこに置き去りにされていたかなどの背景は語られない。

昔話は物語展開に必要な最小限の描写しかしない。そのため聞き手たちは自らの知識や想像力を駆使して、各々の像を頭に描きながら物語を楽しむことができる。だからこそ世代を超えて語り継がれる。

ショーン・タンの物語絵本における、名前や個性が欠如した平面的なキャラクターたちの活躍もまた、多様な読者が主体的に物語を楽しむための技法と見ることができそうである。

#### 4-3. 「欠如」から始まる物語

伝承文学の研究には、「欠如の表現」について考える上で、参考になる理論が他にもある。

ロシアに伝わる昔話の構造を分析したウラジーミル・プロップ（Vladimir Propp, 1895-1970）は、1928年に発表した『昔話の形態学』（*Morphology of the Folktale*）において、ロシアの民話はその始まり

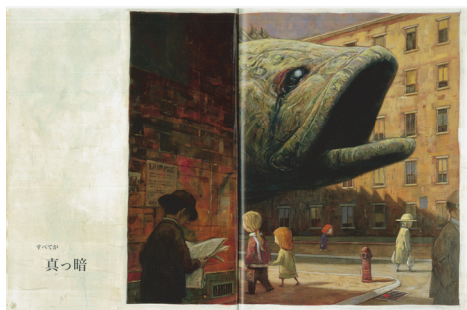


図8 『レッド ツリー』 pp.8-9



図9 『夏のルール』 pp.8-9



に「不在」や「欠如」が生じる展開が多いと指摘した。

プロップに続いて、北米インディアン民話の研究したアラン・ダンダス (Alan Dundes, 1934-2005) もまた、『民話の構造』(*The Morphology of North American Indian Folktales*, 1964)において、多くの北米インディアン民話は、不均衡から均衡への移行を語るものであると述べている。

「不均衡」とは、何かが過剰であったり、欠乏したりしている状態で、それらが回避されたり、充足されたりすることで終わりを迎えるという構成が、北米インディアンの民話の基本構造であるとダンダスは指摘している。

ショーン・タンの物語は彼の創作である。だが、欠如から始まり、その解消に向けてストーリーが展開していく。つまり、ダンダスやプロップが研究した、長く伝承されてきた民話と似た物語構造が用いられている。

#### 4-3. 「欠如」が読者にもたらすもの

ではなぜ、私たちは欠如から充足へ向かうストーリーや「欠如」を内包した表現に惹かれるのだろうか。ヴォルフガング・イーザー (Wolfgang Iser, 1926-2007) やウンベルト・エーコ (Umberto Eco, 1932-2016) が展開した受容理論を手がかりに、考えてみたい。

イーザーは、『行為としての読書』(*Der Akt des Lesens*, 1976)の中で、読書過程におけるテキストと読者の相互作用によって、つまり、文学テキストは読まれることによってはじめて、実在性をもつのだと指摘した。そして、テキスト内の「空所」は、それを埋めたいという読者の気持ちを掻き立て、読者がテキストを文学作品へ至らしめる行為のきっかけになると論じている。<sup>9</sup>

ショーン・タンの物語絵本における詳細な情報や背景や文脈の「欠如」は、イーザーが述べるところの「空所」に該当するのではないか。つまり、読者がその作品を自分の側に引き付けて読むことができ、それぞれの想像力を用いて足りない情報を補填し、作品を完成させていく、そのような主体的な読書を誘う仕掛けとして、「欠如の表現」が機能している可能性がある。

#### 5. 作家の意識

ここまで、作品分析によって、ショーン・タンの物語絵本における「欠如の表現」の傾向を捉え、またその意味について、絵本に隣接する諸芸術の先行研究に学びながら論じてきた。

では、作家自身はどのような意図や意識のもと、作品を作ってきたのだろうか。

先ほど、『夏のルール』は、文脈や絵と言葉の関連性を簡単に見出すことが難しい、謎が多い作品だと述べたが、ショーン・タンは、2011年に来日した際の講演で、この絵本につながる習作などを例にあげながら次のような発言をしている。

「言葉と絵は互いに非常にうまく作用しあっていますが、謎を残して、全体としての意味は予測不可能で推測できないことがおわかりになるでしょう。「完結していない」ともいえます。

大事なのは、読者が自分自身の想像力を用いるように促されている点です。」<sup>10</sup>

タンは、読者と対話する機会をこれまでも多く持ってきたし、作品やその制作過程についても講演やインタビュー、自身の公式サイト上で何度も語ってきたが、そのたびに、自分が想定したことが作品の全てでも完成された姿でもないと言ひ、読者の自由な解釈を尊重し、期待する姿勢を示している。

『エリック』について語った次のような発言からも、タンが読者の想像の余地を作品に残そうと注意を払っていることがうかがえる。

「燃えた木の葉のように見える小さな学生は本質的に謎のままです。彼が誰なのか、どこからきたのか、どこに滞在していたのかさえわかりません。彼のホストファミリーは絵に登場しません。こういった説明のできない点がもっとも重要で、それは作者にさえ説明できないものです。この謎はいつまでも答えのないままです。そして読者一人ひとりがめいめいのやり方で、自分自身の実体験と想像力をもって向き合わなければなりません。これが読書のすばらしい点です。読書は、現実と夢との間にある、非常に個人的な思考の過程なのです。」<sup>11</sup>

『アライバル』は、オーストラリアにおける史実



と移民2世であるタンと彼の家族の歴史とも関連する物語であったことから、人物像は、記号的な描写ではなく写実的な描写に途中で変更された。タンが主役のモデルを自分がつとめることにし、その選択について、自分は人種的に入り混じった顔をしており、いい意味で、特徴が曖昧だからと説明したことは先に紹介したが、その発言に続けて彼は次のように語っていた。

「新たな移民は、特にここオーストラリアでは、ネガティブな政治論争によって、どこか特徴を失い、個性を顧みられない人々として、メディアに登場させられます。私は、この同じ匿名性がポジティブに使われ、移住者のくらしの細部に焦点を絞ることで、偏見ではなく共感が生まれ、また、読者が個人的、また一般的な視点からまっすぐに物事を見られるようにすることで、不慣れな国にやってくる名もなき人の気持ちを汲み取ることができると考えます。」<sup>12</sup>

名前であれ、容貌であれ、キャラクターを具体的に表現するとき、読者が想像できることは少なくなり、誰についての物語であるかが限定されていく。タンは、第1作目の『ロスト・シング』からそのことに気づいていたのかもしれない。だからこそ、青年に「作家の名前」という以外に意味を持たない自分の名前を貸したのではないか。そうすることで先入観なく、読者が物語を自分なりに経験できると考えたのではないだろうか。

2017年9月に、筆者はショーン・タンのアトリエを訪問して、彼にインタビューする機会を得た。その際にもタンは、「読み手の方にいろんな解釈をしてもらうスペースを与える、それがとても大事だと思う」と話していた。<sup>13</sup>

読者が想像力を広げて、創造的に物語を楽しむことを期待する姿勢のもと選択された表現が、あえて完璧には語らない「欠如の表現」であり、また、長く親しまれる伝承文学の物語構造と類似した「欠如」から始まる物語であったのではないだろうか。

## 6. 結論

本研究では、本来はあるはずの何かが欠けていることを読者に印象付ける表現と、物語絵本の多くが備えている要素を欠いた表現を「欠如の表現」と名づけ、ショーン・タンが制作した6作の物語絵本の

分析を通じて、その様相を明らかにしようと試みた。その上で、「欠如の表現」が絵本で物語を語る上で、どのような役割を果たしているのかについて考察した。

第1作目のタイトル『ロスト・シング』が示すように、絵本作家としてのスタートから、ショーン・タンは「欠如」を読者に意識させる表現や欠如の状態や不在性をはらむ絵本を作ってきた。

作品を精読した結果、名前や個性、帰属先や居場所がないキャラクターを作品に登場させたり、絵本においては重要な表現要素である「文字」を使わない絵本を发表或ししたりと、ショーン・タンは、絵本を構成する複数の側面において、読者に、必要な物事が欠けていること、つまり「欠如」している様を見せてきたことが明らかになった。それは読者を物語世界に招き、読者が自らの知識や想像力を用いて主体的に作品を楽しむための技法の一つであり、また作家もそのことを期待して制作を行なっていることが示された。

## 7. 今後の課題

ショーン・タンの物語絵本には、文字を使用しない、絵のみで表現された場面が登場する。山本美希が言葉を使わない物語表現の研究として、タンの物語絵本についても具体的な考察を行なっているが、参考にしながら、「欠如の表現」として文字を使わずに物語ることによって何が生まれるのかについて、今後研究を進めていきたい。

### <注>

1. Barbara Bader, *American picturebooks from Noah's ark to the beast within*, viking, 1976. の序文を参照
2. 例えば iBby「ブックバード 日本版」No.8, 株式会社マイティブック, 2012.に掲載された「ショーン・タン自らが語る 偶然のグラフィックノベリスト」というインタビューでは、「特に芸術家として日々疑問に思うことがあります。それは、文章でつづる物語（ナラティブ）と視覚的アートワークを、いかにして「独特な」方法で効果的に組み合わせるかということです。」と発言している。(pp.5-6)
3. タンは複数のエピソードを1冊にしたオムニバスの作品も発表しているが、それらについては、今後研究を進めていく。今回は主要な登場者が最初から最後まで登場する物語絵本のみを

考察の対象とした。

4. ショーン・タン『見知らぬ国のスケッチ —アライバルの世界』河出書房新社, 2014, p.31 参照
5. *Tales from outer suburbia* には、絵と言葉で語られた 15 のエピソードが収録されている。「エリック」は 2 番目に登場するエピソードである。日本語版は『遠い町から来た話』というタイトルで河出書房新社から 2011 年に出版されている。
6. ちひろ美術館監修, 原島恵執筆『ショーン・タンの世界 どこでもないどこかへ』求龍堂, 2019, p.173.
7. スコット・マクラウド『マンガ学』, 岡田斗司夫訳, 美術出版社, 1998. pp.32-67.
8. マックス・リュティ『ヨーロッパの昔話—その形式と本質』小澤俊夫訳, 岩崎美術社, 1969, p.20
9. ヴォルフガング・イーザー『行為としての読書美的作用の理論』轡田収訳, 岩波書店, 1982, p.291.
10. ショーン・タン「オーストラリアの絵本の魅力 ショーン・タン自作を語る ことばを超えて」財団法人大阪国際児童文学館, 2011, pp.5-6.
11. 前掲「オーストラリアの絵本の魅力 ショーン・タン自作を語る ことばを超えて」, p.3.
12. iBby「ブックバード 日本版」No.8, 株式会社マイティブック, 2012, p.9.
13. 2017 年 9 月にオーストラリア, メルボルン市のアトリエでインタビューに応じていただいた。

#### <使用テキスト>

- ・ショーン・タン『ロスト・シング』岸本佐知子訳, 河出書房新社, 2012.
- ・ショーン・タン『レッド ツリー』早見優訳, 今人舎, 2011. (2004 年度版もあるが, 2011 年度版を使用した。)
- ・ショーン・タン『アライバル』河出書房新社, 2011.
- ・ショーン・タン『エリック』岸本佐知子訳, 河出書房新社, 2012.
- ・ショーン・タン『夏のルール』岸本佐知子訳, 河出書房新社, 2014.

- ・ショーン・タン『セミ』岸本佐知子訳, 河出書房新社, 2019.
- ・Shaun Tan, *The Lost Thing*, Lothian, 2000.
- ・Shaun Tan, *The Red Tree*, Lothian, 2001.
- ・Shaun Tan, *Rules of Summer*, A. Levine Books, 2013.
- ・Shaun Tan, *Cicada*, Lothian, 2018.

なお、絵本の画像は、河出書房新社と今人舎に許可を得て掲載している。

#### <引用・参考文献>

- ・Barbara Bader, *American picturebooks from Noah's ark to the beast within*, viking, 1976.
- ・ちひろ美術館監修, 原島恵執筆『ショーン・タンの世界 どこでもないどこかへ』求龍堂, 2019.
- ・ウンベルト・エーコ『開かれた作品』篠原資明和田忠彦訳, 青土社, 2002. (原書 1967)
- ・iBby「ブックバード 日本版」No.8, 株式会社マイティブック, 2012.
- ・iBby, Bookbird, Vol.49, No.4 October, 2011.
- ・ヴォルフガング・イーザー『行為としての読書美的作用の理論』轡田収訳, 岩波書店, 2005. (原書 1976)
- ・財団法人大阪国際児童文学館「オーストラリアの絵本の魅力 ショーン・タン自作を語る ことばを超えて」財団法人大阪国際児童文学館, 2011.
- ・スコット・マクラウド『マンガ学』, 岡田斗司夫訳, 美術出版社, 1998. (原書 1993)
- ・ウラジーミル・プロップ『昔話の形態学』, 北岡誠司/福田 美智代訳, 水声社, 1987. (原書 1969, 初出 1928)
- ・マックス・リュティ『ヨーロッパの昔話 —その形式と本質』小澤俊夫訳, 岩崎美術社, 1969. (原書 1947)
- ・ショーン・タン『見知らぬ国のスケッチ —アライバルの世界』小林美幸訳, 河出書房新社, 2014.
- ・アラン・ダンダス『民話の構造 アメリカ・インディアン民話の形態論』池上嘉彦他訳, 大修館書店, 1980. (原書 1964)
- ・ショーン・タン公式 web サイト (<https://www.shauntan.net>) 2023 年 10 月 31 日最終アクセス

# 児童養護施設における「食」の現状と課題

— 現役職員へのインタビュー調査から —

Status of and Challenges with Meals at Children's Homes:  
Based on Interviews with Current Employees

古 山 さくら  
Sakura FURUYAMA

**要 約** 本研究の目的は、現在、児童養護施設では「食」そのものや「食」の場面がどのように提供され、また、職員が児童養護施設における食をどのように捉えているのかのについて明らかにすることである。東京都内に所在する X 児童養護施設の現役職員 3 名を対象に半構造化インタビューを実施した。その結果、施設職員は児童養護施設における「食」を職員と入所する子ども達の関係性構築や職員から子ども達へ安心安全の提供、子ども達の社会性構築といった、施設に入所する子どもたちにとって重要な役割を担うものであると捉えていることが明らかになった。さらに、施設職員は児童養護施設における「食」に様々な意味を見出し、入所する子ども達にとって「食」の手厚い取り組みは重要であると実感していながらも、ユニット職員の技術差や施設職員の意識差、配膳方法による影響といった課題があることも明らかになった。

**キーワード**：児童養護施設, 食, 関係性の構築, 安心安全の提供, 社会性の構築

**Abstract** The purpose of this study was to ascertain how food and meals are currently provided in children's homes and how staff perceive food in children's homes. Semi-structured interviews were conducted with three current employees of X home for children located in Tokyo. Results indicated that staff are using food at children's homes to build relationships with the children, provide safety and security to the children, and foster their social skills. Results revealed that the staff feel that food has an important role to play. Staff identify various meanings of the word "food" at children's homes and feel that generous efforts to provide "food" are important to the children in the facility. However, results also revealed that there are differences in the skills of unit staff and there are issues such as ways in which meals are served.

**Key words** : Children's homes, Food, Building relationships, Providing safety and security, Fostering social skills

## I. 背景と目的

児童養護施設とは、様々な事情により保護者がいない、または虐待など適切な養育を受けることができない子ども達の家庭に代わる生活の場である。2021 年 10 月 1 日現在、全国の児童養護施設は 610

か所あり、約 23,000 人の児童が入所し生活を営んでいる<sup>3)</sup>。また、厚生労働省<sup>4)</sup>によると「被虐待経験の有無及び虐待の種類」では児童養護施設は 65.2%で半数以上の入所児童が虐待を受けていることが分かっている。このような背景から子ども達にとっては保護者の養育を受けられないことに加え、通常経験するような食生活を経験したことがない、または家庭の中で親が食事を作る姿を見たことがないといった子どもも少なくないと推察される。

\* 家政学研究科児童学専攻  
Graduate School of Home Economics,  
Division of Child Studies

例えば、隈元ら<sup>1)</sup>は児童養護施設に入所する子ども達の多くは適切な養育を受けられなかったことから自己肯定感が低く、栄養学など食に対する知識があっても実行できない状況にあると指摘している。料理教室が児童養護施設入所児童の食知識、スキル、自己効力感に与える影響に関する研究では、施設退所後の自立支援を目的とした料理教室が施設に入所する子ども達にどのような影響があるのかを明らかにしている。料理教室に参加した子ども達は、料理工程を繰り返すことで食に関する知識やスキルを身につけることができ、さらに、調理中大学生と交流し励まされながら自分自身の納得できる出来栄を経験したり、他の参加者がうまくできる様子を目にしたりすることで参加児童の自己効力感が向上したことが明らかになった。これらのことから、児童養護施設における「食」の役割は非常に大きいと考えられる。食の場が安全で安心できる場であると伝えらるとともに、家庭での食体験に代わる環境づくりや取り組みを充実させ、子ども達の食生活基盤を固めることが必要であると言えるだろう。

また、和田上<sup>2)</sup>による児童養護施設における「食」に関する研究では大舎制施設や小舎制施設など様々な形態の児童養護施設における食の提供方法が整理されている。施設の形態や入所する児童の特徴に合わせ、朝夕時間を決め一緒に食事をとるようにしていたり、対照的に食事の時間を一定時間内に区切り、時間内であれば子ども達が自由に食事をとれるようにしたりするなど施設独自の取り組みが明らかにされている。その中で児童養護施設における食の位置づけとして、養育が各家庭によって異なるように、施設においても食の提供などのケアの内容が異なることは当然であるが、入所している子ども達の状況を踏まえた上で、食の場面において何をどのように提供すべきなのかについては整理するべきであると指摘している。

以上のように、これまでの先行研究では、いくつかの児童養護施設での食の取り組みについて比較しまとめている文献や、施設入所児童の食知識や食意識などのデータをまとめた文献が見られた。しかし、児童養護施設職員を対象とした施設における食の取り組みに関するインタビュー調査を行った文献は見られず、施設職員が実際の現場でどのような子ども達に対しどのような食の取り組みをしているのか、また、職員が児童養護施設における食をどのように

捉えているのかについては明らかにされていない。入所児童の実態を把握することも重要であるが、そもそも食を提供し、ともに生活している施設職員が食に対してどのような認識をもっているのか、という点を考察することもまた、重要であるだろう。これらのことから、本研究では現職の児童養護施設職員へのインタビュー調査をもとに、現在、実際の児童養護施設では食そのものや食の場面がどのように提供され、また、職員が児童養護施設における食をどのように捉えているのかについて明らかにすることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 調査協力者と調査方法

本研究で用いるデータは、東京都内に所在するX児童養護施設の職員3名（自立支援担当職員A氏、ファミリーソーシャルワーカーB氏、ケースワーカーC氏）を対象に2022年8月に行った半構造化インタビュー調査で得られたものである。

インタビューはX児童養護施設内の相談室において3名同時に行い、約50分間施設での食の取り組みについて聞き取りを行った。質問内容は5項目（①X児童養護施設の概要、②X児童養護施設に入所する児童の入所理由、③X児童養護施設の食事などの生活スタイルについて、④児童養護施設における食の重要性について、⑤X児童養護施設職員の食育意識について）を中心とし、状況に応じて調査者が回答に対して疑問に思った点や関連した事情について詳しく質問しながら、柔軟に聞き取りを行った。

### 2. X児童養護施設の概要

X児童養護施設は2022年8月現在、本園に6名定員の小学生以上のユニットが8ユニットと小学生以下のユニットが1ユニットの計約55名が入所している。また、職員は本園以外も含め約100名在籍しており、そのうち直接子ども達に関わる職員は約60名である。今回の調査協力者であるA氏とB氏は以前子ども達と直接関わり生活支援等を行っていたが、現在は主に家族支援や自立支援に携わっているため直接子ども達に関わっていない。しかし、A氏B氏共に現場経験が長く今までに様々な子ども達と関わり支援を行っている。C氏は現在も直接子ども達と関わり、主に生活支援等を行っている。

X児童養護施設では本園の他にもグループホーム



が6棟、ファミリーホームが2棟あり、本園以外でも子ども達が日々生活している。

### 3. 分析方法

録音データを逐語録化し、まとまりのあるカテゴリに分類し、逐語録何度も読み返して語りの意味を分析した。

### 4. 倫理的配慮

研究協力に関する同意は、調査者がインタビュー開始前に研究の概要や調査の拒否、中止の自由があること、収集したデータは研究目的のみで使用されること、調査協力者および施設入所児童等、個人を特定できるような情報は公開されないことなどを口頭及び文書を用いて説明したうえで、調査協力者の自由意志のもと同意書に署名を得た。さらにX児童養護施設の施設長にも調査内容について上記の説明を行い、承諾を得た。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 入所児童の特徴

インタビュー調査で得たデータを整理した結果、X児童養護施設に入所する子ども達の最も多い入所理由は虐待であり、その中でもネグレクトが最も多い理由であった。施設職員のB氏によるとネグレクトは身体的虐待等に比べ、子どもに対して保護者からの愛情が注がれず、支援が最も難しい状況であるという。さらに、X児童養護施設では発達障害と診断される子どもが多く、約10年前には1ユニットに1人いる程度であった発達障害の子どもが現在では1ユニットの3分の2近くが発達障害と診断され、医療機関に通っている。そのため、施設職員のA氏によると食事面だけではなく生活面や勉強面など様々な場面で個別対応が求められているという。また、食の面での入所児童の特徴として偏食が挙げられた。施設に入所するまでの養育環境が劣悪であったことから食事をまともに与えられず、食に対する興味や関心が低い傾向があるという。

### 2. X施設における食事の提供方法

X施設での食事の提供方法は主に給食である。専属栄養士が考えた献立を施設内の調理室で調理員が調理し、ユニットごとに担当職員が配膳する。ユニットでの配膳の際には熱を加えたり、盛り付けた

りする最終調理をユニットの職員が行い子ども達に提供している。ただし、X施設では朝ごはんの提供方法に特徴が見られた。朝食は毎朝、前日に配られる材料をもとにユニットの職員が調理して提供している。例えば、献立がハムエッグであった場合、ユニットには卵とハムが配られ、それらをユニットごとに職員が調理して提供している。X施設ではユニットごとに配られた材料をすべて使用することを条件に調理の際、自由にアレンジしても良いことになっている。例えば、ハムエッグ用の卵を目玉焼きにしたりゆで卵にしたり子ども達の好みに合わせてアレンジすることができるのだという。

### 3. 児童養護施設における「食」の意味付け

#### (1) 関係性構築の「食」

児童養護施設における食の意味づけとして語られた一つ目は、職員と子ども達の関係性を構築する役割の「食」である。A氏とC氏は職員と子ども達の関係性構築の「食」について次のように語った。

**【C氏】** 児童養護施設の食は本当に大事です。逆に多少の関わりがうまくいってなくても食事で何とでも取り返せちゃうんです。子どもの心をつかむじゃないけど、関係性を築くうえではものすごく大切なきっかけになります。

児童養護施設における食の役割は非常に大きく、特に子ども達と施設職員の関係性を構築する上で大切なきっかけになっているという。続けてA氏は、児童養護施設における食がきっかけとなり子どもの心をつかむことができた入所児童と施設職員の関係性について次のように語った。

**【A氏】** 高校生のお弁当を作るのをすごく力を入れているんです。毎日毎日必ず作っているんですけど、作ったからってすぐ変わるわけではないです。毎日同じことをするから心に積み重なっていくというか。例えば明日の卵焼き甘いのがいいのか、だしが良いのか聞くじゃないですか。高校生くらいになると会話とかほとんどないので、食事の会話がなくなると日常的に喋ることが無くなります。でも弁当を介してやり取りして「美味しかったよ」とか、「ありがとう」とか弁当の話しかなかったんですけど、それが関係性のきっかけになるので、食はものすごく大事。

A氏は毎日の弁当作りを通して、卵焼きの味付けなど何気ない会話しかなくても弁当を作ることで気持ちが伝わり、関係性を構築するためのきっかけになると実感していたことが分かった。職員が朝早くから弁当を作っていると、その様子を子ども達も目にするこことや作っている音や匂いを感じることができらう。さらに弁当はユニットで食べる食事と違い、自分一人のために作ってくれているため、無意識に自分のことを思ってくれていると愛情を感じることができらうのだと考えた。

弁当だけに限らず、「食」は職員から子ども達へ毎日続く、愛情を伝える手段の一つとなっているように感じられた。会話は無くても食が職員と子ども達をつなぐことで信頼関係などの関係性が構築されていくのではないらうか。特にネグレクトを受け、愛情を受けられなかつた子ども達にとって、食を通して愛情を注いでいくということは非常に大切なことであると言えるらう。

## (2) 安心安全を提供する「食」

二つ目の意味づけは、安心安全を提供する役割の「食」である。X施設での食事の際に子ども達に安心安全を提供する上で意識していることとして次のような語りがあつた。

【C氏】食事って基本的に楽しくて気持ちが安らいで安全だなんて感じらうと思らうですよ。でも虐待を受けてきたお子さんの中には食事すらまともに与えてもらえなかつた子がいるらう。なのでみんなで食事を囲むことが楽しいと知らない、というか、そもそもみんなで食事を囲むこと自体知らない子もいます。そういった子たちにはおいしいものを提供し続ける、温かいものは温かく、冷たいものは冷たくじゃないですけど、そういった関わりを大事にして食事って楽しいと感じてもらうように意識してます。

被虐待経験のあり食に対してマイナスなイメージがある子ども達に対して、おいしい食を提供することで食事自体が楽しいと感じてもらうように取り組んでいることが分かつた。特に、みんなと食卓を囲むことを知らず食事自体に楽しみを感じた経験が少ない子どもに対しては特別な取り組みをするのではなく、まず食事自体が「おいしい」と感じらるる食事を提供し続けることを意識していると感じられた。給食による食事提供をしているX施設だが、ユ

ニット職員が温かいものは温かいまま提供する、冷たいものは冷たいまま提供するという、食事において基本的なことを意識していることで子どもが安心安全を感じらるる食が提供できているのらう。

## (3) 社会性構築のための「食」

三つ目の意味づけは、子ども達の社会性構築のための「食」である。施設にて集団で過ごし、施設退所後には自立し社会を生きていく子ども達に対して、「食」には社会性を構築することもできらうとA氏は語つた。

【A氏】しつけ的なものに偏るとせっかくの食事が楽しくなくなつちゃうので、段階は必要なんですけど、まあ最初からすごく高いものを望むようなことはあんまりしない方が多いらう。なので、嫌いなものを食べらるるようになることも大事だけれど、もっと大事なことは嫌いなものを上手に残せるようになってほしいですね。例えば「こんなもの食えないよ」じゃなくて「食べられません」って、食べられないっていうことを言うとか。調理する側も工夫するらうですよ。食べらるるように工夫したり。お互いがそういうふうやっていくことが理想かなと思つているらうです。小さく切つてあげてとか、好きなものと一緒に混ぜてあげて「食べられたね」とか、そのやり取りすごく大事かなと思つます。

A氏は食事の場を子ども達の社会性構築の場であるとも捉え、子ども達の状態に合わせて取り組みを行っていることが分かつた。A氏は子ども達に対して「出された食事は残さず食べる」とうことよりも、「食べられないのであれば言葉にして伝えること」を重視していると語りの中から感じられた。子ども達の「食べられない」という声に職員が応えることで「食べられない」ということは責められないと子ども達が認識でき、「食えないよ」と相手を傷つけるような言葉を言うのではなく「食べられません」と丁寧に自分の気持ちを言葉にする大切さを学ぶことができるらう。

さらに、食事を提供する側と食事を提供される側がお互い気持ちよく食事ができるように、子ども達自身が自分の気持ちを職員に伝え、職員はその気持ちを受け止め工夫をしていることが明らかになつた。そして、職員は食べることができたなど、子ども達の「できた行為」を認めることで子ども達の成功体

験となり、さらに自分の気持ちの伝える大切さを学ぶことができるのだろう。

#### 4. 実践していく上での課題

児童養護施設における「食」には様々な意味があり、施設職員は子ども達のために試行錯誤し日々、食を提供していることが分かった。では、食を提供したり、取り組みを実践したりする中での課題にはいったいどのようなことがあるのか。

##### (1) ユニット職員の技術差

一つ目の課題は、ユニット職員の調理技術の差である。職員の調理技術の差について B 氏と A 氏は次のように語った。

**【B 氏】調理慣れしてる人は自分でアレンジしてどんどんやっちゃうけど、なかなか不得手な人はやっぱりとりあえずこう決められたものでまずやってみたいな。**

先述のように、X 児童養護施設では朝食においてはユニットごとに許容度のある食事を提供することができ、子ども達の好みに合わせた工夫などを行うことで関係性構築などに繋げることができる。しかし、調理が得意な職員に比べ調理が苦手な職員は決められたメニューを作ることで精一杯になってしまい、職員間で差できてしまうという。さらに A 氏は続けてこう語った。

**【A 氏】ユニット間での格差も当然あるんですよ。差がやっぱり。料理が得意な職員がいれば、日常的においしいものが身近にあったりする。でもそうでない人たちは食事結構レベルが下がってしまう、プラス、調理に対して負担が大きいので日常生活も雑になったりするんですね。その辺はすごく悪循環になってくる。美味しいものを作れないから文句も出てくる、みたいなの。職員間も格差があったりします。**

ユニット職員は調理だけが仕事ではなく、日常で行う洗濯や掃除などの家事、子ども達の宿題サポートなども仕事である。しかし、調理が苦手な職員は食の負担が大きくなり、その他の家事がおろそかになってしまい、おろそかになってしまった分、子ども達から不満が出て信頼関係などにも影響してきてしまうといった悪循環な課題があるのだという。このように、ユニット職員の技術差から生まれる悪循

環にどのように対応していくのが今後の課題であると語りの中から推察した。

##### (2) 施設職員の意識差

二つ目の課題は、施設職員の食に対する意識の差である。X 施設では約 60 人の施設職員の食に対する意識の差について A 氏と C 氏は次のように語った。

**【A 氏】職員の個人差がやっぱりあったりするし、力量もその、技術の問題もそうですけど、基本的な考え方のずれがあって「普通こうだよな。」って言う話が「基本」のずれがあるから一律した食育ができないっていうのがあるのでそこはこうなかなか浸透していかない。**

食に関する取り組みなどは、職員の統一した意識が求められる。しかし、食に対する意識や「普通」とする基準が職員一人ひとり異なるため、それらの意見を統一させ、食育として確立して取り組みを行うことは非常に困難であるという。特に X 施設では子ども達に直接関わる職員は約 60 名近くいるため、さらに困難であると推察される。

続けて施設職員の意識差に関して、C 氏と B 氏が若い世代の職員について次のように語った。

**【C 氏】10 年前くらいまではなんだかんだできる職員が多くて、大変なんですけど子どものためにもなりますし頑張ろうって言ってたんです。でも今は…ほんとと特に若い時には厳しく言ってたんですよ、「食は大事だから」って。それでついてきてくれる人がいたんですけど今はそれを言うと成り立たないレベル。前になんかいろいろ食事のことをどうしていいかって話で最後 15 人くらいいた中でちょっと質問してみたんですね。「実際食の事って嫌いですか？」って。少し突っ込んだ、大事に思ってるか思っていないかみたいなの。そしたらやっぱりマイナスな意見ですね、ほとんど 9 割くらい。だから時代的にもやらない人も増えて言っているのかなっていう。**

若い世代の食の取り組みに対する意識は 10 年前と比較して低く、否定的な意見があることが分かった。C 氏は食の取り組みに対する意識の低さは時代的な背景があるのではないかと指摘した。時代的な背景として B 氏が次のように語った。



【B氏】トータルで職員の意識は低いと思います。今は、若い職員が増えてきてるっていうのがうち（X施設）の特徴なので、まあそれは時代なのかな。当たり前コンビニがあって「作る」って家庭でも昔とは違う教育を受けている中で、本当に難しい。ただ、子どもにとって大事なのはわかっている。でもなかなか難しい。

B氏は職員の意識の差の時代的な背景について言及した。最近では当たり前のようにコンビニエンスストアがあることや、スーパーマーケットのお総菜なども非常に充実していることから、家で食事を作らなくても困らない生活が送れるようになっているという。便利な反面、今まで家で調理をしてこなかったり、家で大人が調理をする場面をあまり見てこなかったりした職員が食事を作る側になった際に、調理の難しさや職員同士の意識の差に直面してしまい、子ども達にとって大切であると分かっているにもかかわらず、結果的には食の取り組みに対してマイナスな意見が出てしまうのだという。

職員の食に対する意識の差をどのように統一させるかということや、意識の差があったとしても全員が取り組めるような取り組みを検討することが課題であると語りの中から推察した。

### （3）給食式配膳の課題

三つ目の課題は、施設の食事が給食式で配膳されていることである。給食式で配膳されることの課題についてA氏は次のように語った。

【A氏】こう給食スタイルでやっているとなかなかこう担当職員と子どもの関係のない人たちが作るの、やっぱり関係してないというか、関係が薄い人が立てる献立を食べてもなかなか食を通じた愛情であったり、気持ちを伝えるってすごく難しい。逆に生活が常に密着している関係性の中で作る、その人たちが作る料理だと食事を通していろんなことが伝えやすいんですよね。グループホームは、すごく、こう、食が密着した生活をしていると思うんですよね。全員が子どもと「今日の夜何食べたい」とか、そういう話から始まるんですね。そうすると、「生姜焼き食べたい」って言うのと「じゃあ生姜焼きにしようね」っていうところからやり取りが始まるので。

X施設では朝食は各ユニットで職員が調理をするが、それ以外の食事については専属の栄養士が献立

を考え、専属の調理員が調理して提供している。すると、食事を提供するまでの過程などが無くなってしまったため、食事の提供は職員が行ったとしても愛情や気持ちなど食を通じたコミュニケーションは難しくなるといえる。さらにA氏は続けてこう語った。

【A氏】グループホームなんかの常に食が生活に密着しているところなんかはやっぱり子ども達は食事を楽しみにしたりだとか、食事についての話題が日常生活にあたりとかがあるので、生活に食が密着している環境ってすごく大事なことで、すごく感じている。目の前で作っている人で食べるものが仮にちょっとあんまりおいしくなくても、まあ「おいしい」とは言わないにしても「まずいから食えねえ」とは言わないですよね。だから作っている人が目の前に居たらそこまでのこう、なんていうかな、文句を言う子はあんまり見たことは無いですね。でも、誰が作ってるものかわからないものを提供してそれがあんまりおいしいものではなかったら平気で文句言っちゃうんですね。「そういうこと言うのはダメだよ」って言うても、やっぱり作っている人が見えないとまあそういう風になってしまうのは、仕方がないというか当然かなとは思っています。

多くの子ども達が入所する大舎制施設とは違い、少人数で生活するグループホームでは食と生活の密着度に差があり、誰がどのように作るのかという環境が子どもたちの食への意識に変化をもたらす可能性があるという点が語られた。誰がどのようにして作ったかが見えない給食式配膳方法は、子ども達に愛情や気持ち伝わりにくいということが課題であるという。このように、「作っている人が目の前に」いることや「作っている人が見える」ということを重視しているということが語りの中から感じられた。

## IV. 総合考察

### 1. 児童養護施設における「食」の意味づけと課題

本研究では、現職の児童養護施設職員へのインタビュー調査をもとに児童養護施設では食そのものや食の場面がどのように提供され、また、職員が児童養護施設における食をどのように捉えているのかについて考察をおこなった。本節ではその結果の概要について改めて整理していく。

X施設では、給食による食事提供を中心としつつ、



朝食においては決められた食材を基にユニットごとに職員が作るという特徴が見られた。これは、施設に入所する子ども達に日常的に大人が食事を作る姿を見せたり、食を通したコミュニケーションを促したりしているのだと考えられる。児童養護施設職員へのインタビュー調査の結果から分析を行うと、このような施設独自の取り組みが行われる背景には、施設職員が児童養護施設における「食」に様々な意味を見出し、職員それぞれが意識をもって日々子ども達と関わっていることが明らかになった。

意味づけの一つ目は、関係性構築の「食」である。児童養護施設における食の役割は非常に大きく、施設職員と子ども達の関係性を構築する上で大切なきっかけになっていた。職員が毎日子ども達に向けて食事を作っていることが子ども達に愛情を伝える手段の一つになっており、食事を与えられなかった等の被虐待経験がある子ども達にとって児童養護施設における食というのは、大人から愛情を受けられる大切な場になっているのだろう。

さらに、被虐待経験のある子ども達に関係する意味づけの二つ目は、安心安全を提供する「食」である。先述したように被虐待経験のある子どもの中にはまともに食事を与えられなかった子どももいる。そのため食事の場も虐待の場となっており、食事の場が楽しいものだと知らないと推察される。そのような子ども達に対してX施設では給食による食事提供をしているが、最終調理を担当する職員は温かいものは温かく、冷たいものは冷たく提供するという食事において基本的な事を意識し、子ども達に食事の場は安心で安全であると感じてもらえるような取り組みを行っていた。このように温かいものは温かく、冷たいものは冷たくといった美味しいものを提供し続けるということは一般的にごく当たり前のことだろう。しかし、児童養護施設では当たり前のことを特に意識して行うことで当たり前を知らない子ども達が安心だと感じることでできたり、一つ目の意味づけと同じように子ども達と職員の関係性を構築したりすることにつながるのだと考えられる。

三つ目の意味づけは、社会性構築のための「食」である。和田上<sup>2)</sup>によると、児童養護施設における食の場面を単に栄養を得る場としてだけではなく、社会性構築の場などとして捉え、その点からの指摘も行われるなど多面的に評価もされていると報告し

ている。X施設でも同様に「食」の場を子ども達の社会性構築の場と捉え、取り組みを行っており、嫌いな食べ物が出てきた際には「こんなもの食えないよ」と言うのではなく「食べられません」と言葉にして言うことができるよう取り組んでいることが明らかとなった。この取り組みから社会性が構築され、子ども達は食事の場面だけではなくその他の場面においても子ども達は相手の気持ちを汲み取り、丁寧に言葉を選ぶことができるようになるのだと考えられる。

以上のように、食の場面における取り組みが明らかとなり、どれも食の場面だけにとどまらず職員との関係性や社会性の構築など子ども達の生活全体に通ずる取り組みであるといえる。そのため、児童養護施設における「食」というのは単に栄養を得るためだけの場ではなく、入所する子ども達の生活全体につながる重要な基盤であると考察できる。

一方、本研究では児童養護施設における「食」の取り組みには課題点があることも明らかになった。

一つ目の課題はユニット職員の技術差である。調理が苦手な職員にとって調理は負担が大きいため、調理以外の作業がおろそかになり子ども達との関係性にも影響が出て悪循環になってしまうという。一方で調理が得意な職員は子ども達の好みに合わせた食事や美味しい食事の提供ができることから、子ども達との関係性もスムーズにできる。このことから職員の調理の技術差というのは食の場面のみに影響が出るのではなく、食の場面以外にも影響が出てしまうといえる。これらの問題にそれぞれの施設では、調理が苦手な職員や負担に感じる職員に対して対策をする必要がある。

二つ目の課題は施設職員の食に対する意識の差である。施設職員一人ひとり今までの養育環境が異なり、それぞれの家庭での食に対する意識や教育も当然異なる。そのため職員が異なる意識をもったまま、施設における一律した食への取り組みは非常に困難であるという。さらに、職員の中でも特に若い世代の職員の食に対する意識が低い傾向にあるということが今回のインタビューの中で語られていた。これは、若い世代の職員が幼少期に大人が料理を作る姿を見てこなかったり、自分自身が料理を作ってこなかったりしたなどの社会的環境が関係しているといえる。このことから、今までの養育環境や食に関する経験が異なる大人が同じ意識をもって独立して

「食育」を実施していくことは非常に困難であるといえる。そのため、職員の食に対する差や経験の差をどのように統一させるのか、また、差があったとしても取り組める一律した食育について検討していくことが必要である。

三つ目の課題は食事が給食で提供されていることである。食事を給食で提供しているため、普段子ども達と関わる人が少ない人が食事を作ることになる。すると、愛情や気持ちなど食を通じたコミュニケーションは難しくなるという。対照的にグループホームなどの生活と食が密着している場であれば食事が提供されるだけではなく、提供されるまでの過程も見ることができ、食を通じたコミュニケーションがしやすくなるという。このことから、児童養護施設では食は誰がどのように作り提供しているのかということが子ども達の食への意識や職員とのコミュニケーションなど、生活に関係してくるといえる。これらの問題に対して、作っている人が見えない食事提供による職員の関わり方の工夫が必要である。

## 2. 本研究に残された課題

本研究では施設職員を対象に行ったインタビューから、施設職員は児童養護施設における「食」に様々な意味を見出し、児童養護施設に入所する子ども達にとって「食」の手厚い取り組みは重要であると実感していることが分かった。さらに、実感していながらも様々な問題点によって思うように取り組みができていない現状も合わせて明らかになった。今後はそれぞれの施設に合った食の取り組みについて検討していくことが必要とされる。また、本研究では若い職員の取り組みへの課題も語られた。今後は子ども達との直接的な関わりが少ない職員だけでなく、幅広く子どもに関わっている職員にも聞き取りをしていくことや年齢や職員歴を分けて調査をす

ることで、職員の意識差や課題について明らかにするとも必要とされる。

さらに、本研究では一つのユニット制の児童養護施設を対象とした児童養護施設における食そのものや食の場面がどのように提供され、また、施設職員が児童養護施設における食をどのように捉えているのかのについて明らかにすることにとどまった。そのため今後は、小舎制施設やグループホームなどの様々な形態の施設を対象としたさらなる研究を行うことで、施設形態が食に与える影響についても検討することが必要だと考える。

## 謝辞

本研究にご協力くださいましたX児童養護施設の職員の皆様に深く感謝申し上げます。

## 参考

- 1) 隈元晴子・岩田絢那：料理教室が児童養護施設入所児童の食知識、スキル、自己効力感に与える影響に関する研究、藤女子大学人間生活学部紀要、57, 61-69. (2020)
- 2) 和田上貴昭：児童養護施設における食に関する研究、社会事業研究年報、41, 305-316. (2005)
- 3) こども家庭庁：「施設入所児童の推移」（閲覧日 2023.10.10）  
[https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic\\_page/field\\_ref\\_resources/2067db91-4b40-455d-b11d-1bcdceb2e37d/e47bcd55/20230516\\_councils\\_shin\\_gikai\\_shakai\\_katei\\_Mag6djKb\\_08.pdf](https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/2067db91-4b40-455d-b11d-1bcdceb2e37d/e47bcd55/20230516_councils_shin_gikai_shakai_katei_Mag6djKb_08.pdf)
- 4) 厚生労働省子ども家庭局厚生労働省社会援護局障害保健福祉部：児童養護施設入所児童等調査の概要（閲覧日 2022.11.27）  
<https://www.mhlw.go.jp/content/11923000/001077520.pdf>

## 幼児の Grit（やり抜く力）と食生活との関連

### The Relationship between Grit and Dietary Habits among Preschoolers

中 岡 加奈絵\*

Kanae NAKAOKA

**要 約** 幼児期は、非認知能力や食を営む力の「基礎」を培うのに重要な時期である。本研究では、保育所に通う3～5歳児42名を対象として自記式質問紙調査を実施し、非認知能力のひとつであるGrit（やり抜く力）と食生活との関連について検討を行った。その結果、嫌い／苦手な食べ物や食べたことのない食べ物に向き合う姿勢が良好な幼児、料理を味わっている幼児において、Grit得点が高値となることが示された。Grit得点が高い幼児の家庭では、「家族全員が同じメニューを食べている」、「いろいろな食品や料理を食べさせている」、「子どもが嫌い／苦手な物も食事に出している」、「料理は1人分ずつ盛り付けている」といった特徴が見受けられた。これらの結果は、Gritの獲得を目指した食育実践に役立つ基礎資料になることが期待される。今後は、本研究結果を踏まえた“食を営む力の「基礎」”と“Grit”の相互育成が可能になる食育プログラムの作成と検証が望まれる。

**キーワード**：Grit, 食習慣, 幼児

**Abstract** Early childhood is an important period for fostering non-cognitive abilities and developing the “foundation” for the ability to manage one’s diet. Forty-two 3- to 5-year-olds attending a nursery school were surveyed using a self-administered questionnaire to examine the relationship between grit (the ability to persevere, and a non-cognitive ability) and dietary habits. Grit scores were higher in toddlers who had a positive attitude towards foods they disliked or had never eaten and in toddlers who tasted food. The families of toddlers with high grit scores were characterized by “all family members eating the same meal,” “serving a variety of foods and dishes,” “serving food that the child dislikes,” and “serving one meal at a time.” These results are should provide useful basic data on nutrition education practices aimed at acquiring grit. In the future, a nutrition education program that enables mutual development of the “foundation” for the ability to manage one’s diet and grit should be devised based on the results of this study and verified.

**Key words**：Grit, Dietary habits, Preschoolers

### 1. 緒言

先の読めない VUCA<sup>注1</sup> と呼ばれる不確実な時代を生き抜く子どもたちにおいて、非認知能力を育成することは重要である。非認知能力は、学力に代表される認知能力とは対照的に用いられ、問題解決力、

協調性、主体性、コミュニケーション力、自己管理能力、探求心、規範意識、実行力といった、測定できない個人の特性による能力全般を指し<sup>1)</sup>、特に幼児期（満4～5歳）に顕著な発達が見られることが知られている<sup>2)</sup>。幼児教育に関連する指針・要綱には、2018年から施行されている保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領があるが、いずれにおいても共通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい『10の姿』」が示されて

\* 十文字学園女子大学 人間生活学部 食物栄養学科  
Department of Food and Nutrition, Faculty of Human Life,  
Jumonji University

おり、非認知能力の育成に関わる内容が盛り込まれている<sup>3)-5)</sup>。非認知能力の中でも近年、注目を集めている Grit (やり抜く力) は、長期的な目標達成に貢献する特性レベルの粘り強さと情熱を示しているが、遺伝のみで規定されるのではなく、様々な経験を積む中で強化することが可能であるとされている<sup>6)</sup>。Grit 尺度の下位尺度には根気 (根気強い努力) と一貫性 (興味・関心の一貫性) がある。

先行研究によると、社会的地位の高い者ほど Grit の下位尺度である一貫性得点が高値であったこと<sup>7)</sup>、Grit が高い成人ほど収入が多く目的をもって貯蓄をしていること<sup>8)</sup> が示されている。元々 Grit の高い学生はその後の Grade Point Average (GPA) が高いこと<sup>9)</sup> や、教育レベルが高い人は Grit が高いこと<sup>10)</sup> も報告されている。小児を対象とした先行研究では、スポーツ活動を実施している児童では Grit の下位尺度の根気得点が高いことが示されている<sup>11)</sup> が、食生活と Grit との関連についての検討はほとんどなされていない。

幼児期は、非認知能力のみならず、食を営む力の基礎も含めた生活習慣の基盤を身につけるうえで重要な時期である。Grit と食生活との関連が明らかになれば、Grit の獲得を目指した食育の実践や、Grit の視点を含めた食習慣の改善が可能になる。そこで本研究では、非認知能力の発達が顕著である幼児期後半の児童を対象とし、Grit と食生活との関連について検討を行った。

## 2. 方法

### (1) 対象

埼玉県 N 市内の S 保育園に在籍する幼児 48 名 (3~5 歳児、各 16 名) を調査対象とし、保護者に対して質問紙調査を実施した。調査対象者のうち、回答済みの質問紙の提出がなく同意が得られなかった 6 名を除いた 42 名を解析対象とした。回収率は 87.5%、有効回答率は 100.0%であった。

### (2) 質問紙調査

先行研究<sup>12)-20)</sup>を参考に作成した自記式質問紙を用いて 2021 年 9 月中旬に実施した。

Grit の測定には、日本語版 Short Grit (Grit-S) 尺度<sup>21)</sup>を子ども向けに一部改変したものを用いた<sup>12)13)</sup>。8 つの質問項目に対し、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 4 件法で尋ね、

各々最も望ましい回答が 4 点、最も望ましくない回答が 1 点となるよう得点化した。

家庭における食事の様子として、まず「お子さんが嫌い／苦手な食品はどのくらいありますか」と尋ね、「ない」、「ほとんどない」、「少しある」、「ややある」、「かなりある」の中からあてはまるものを選択してもらった。その後、「お子さんの家庭における食事の様子として、それぞれあてはまるもの 1 つに○をつけてください」という文章を提示し、「嫌い／苦手な食べ物が出てても食べる」、「食べたことがない食べ物が出てても食べる」、「1 つ 1 つの料理を味わって食べている」、「自分で食べると決めた量の食事は全部食べる」、「よくかんで食べている」、「食事にかかわる人に感謝して食べている」、「食事をすることを楽しんでいる」、「食材の名前や料理を知りたがる」、「家での食事について感想を言う」の各項目に対し、「とてもあてはまる」、「まあまああてはまる」、「あまりあてはまらない」、「ほとんどあてはまらない」の中からあてはまるものを選択してもらった。解析では、いくつかの項目において「あてはまる (とてもあてはまる・まあまああてはまる)」と「あてはまらない (あまりあてはまらない・ほとんどあてはまらない)」に 2 分した。

子どもの食事で困っていることについては、「現在のお子さんの食事で困っていることとして、あてはまるもの全てに○をつけてください」という設問の選択肢として「食べることに興味がでない」、「小食」、「食べすぎる」、「偏食する」、「むら食い」、「早食い、よくかまない」、「食べ物を口の中にためる」、「食べ物を口から出す」、「遊び食べする」、「食べるのに時間がかかる」、「食事よりも甘い飲み物やお菓子を欲しがると」提示し、該当するものをすべて選択してもらった。特にない場合には、「特にない」という選択肢ひとつに○をつけてもらった。

家庭における食習慣については、「朝食は主食・主菜・副菜を組み合わせている」、「夕食は主食・主菜・副菜を組み合わせている」、「決まった時刻に食事をさせている」、「間食は、時間を決めずに与えている」、家族全員が同じメニューを食べている」、「いろいろな食品や料理を食べさせている」、「子どもが嫌い／苦手な物も食事に出している」、「料理は 1 人分ずつ盛り付けている」の各項目に対し、「よくあてはまる」、「まああてはまる」、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」の中からあては



まるものを選択してもらった。解析では、「あてはまる（よくあてはまる・まああてはまる）」と「あてはまらない（あまりあてはまらない・全くあてはまらない）」に2分した。

家庭における食環境については、「朝食は子どもと一緒に大人も食事をしている」、「夕食は子どもと一緒に大人も食事をしている」、「食事の時、子どもと楽しく会話をしている」、「食事の時間は、テレビを消している」、「よく噛んで食べるように言っている」、「日常的に食べ物や栄養の話をしている」、「園での食事（給食や間食）のことをよく話す」の各項目に対し、「よくあてはまる」、「まああてはまる」、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」の中からあてはまるものを選択してもらった。解析では、「あてはまる（よくあてはまる・まああてはまる）」と「あてはまらない（あまりあてはまらない・全くあてはまらない）」に2分した。

食事作りの手伝いについては、「野菜や果物の栽培・収穫」、「買い物」、「簡単な調理」、「配膳」、「下膳」、「食器洗い」、「食器拭き」の中から、幼児が家庭で実践しているものすべてに○をつけてもらった。「簡単な調理」を選択した場合は、その内容として、「食材の計量」、「食材の洗浄」、「包丁を使用しない食材の下処理（皮むき、すじ取りなど）」、「包丁を使用して食材を切ること」、「加熱しない調理操作（すりおろす、裏ごすなど）」、「火を使った加熱操作（ゆでる、焼くなど）」、「電子レンジ加熱」、「調味」、「盛り付け」の中から幼児が実践しているものすべてに○をつけてもらった。

### (3) 解析方法

統計解析には統計ソフト IBM SPSS Statistics 26（日本アイ・ビー・エム株式会社）を使用し、有意水準は両側検定で5%とした。質的データの解析には、カイ二乗検定を用いた。Grit 得点の解析には、正規性の確認を行ったうえで Kruskal Wallis 検定あるいは Mann-Whitney の U 検定を採用した。なお、未回答は欠損値として扱い、解析ごとに除外した。

### (4) 倫理的配慮

本研究は、調査対象となる園児の保護者に対して、園長を通じて事前に文書を配布した際に研究目的と内容の説明を行い、研究参加の同意を得た上で行った。保護者からの記入済みの質問紙の提出をもって、

研究への参加の同意が得られたこととした。質問紙調査は無記名式で行い、個人が特定できないよう ID 番号で管理した。

なお、本研究は十文字学園女子大学の倫理審査委員会において、審査を受け承認を得て実施したものである（倫理審査委員会承認番号：2021-012）。

## 3. 結果

本研究の調査対象は、3 歳児が 12 名（28.6%）、4 歳児が 14 名（33.3%）、5 歳児が 16 名（38.1%）であった。Grit 得点の中央値±標準偏差は  $20 \pm 4$  点、最小値は 12 点、最大値は 28 点であった。下位尺度の根気得点の中央値±標準偏差は  $11 \pm 2.4$  点、最小値は 8 点、最大値は 16 点、一貫性得点の中央値±標準偏差は  $10 \pm 1.8$  点、最小値は 4 点、最大値は 13 点であった。年齢と性別によって、Grit 得点に有意な差は認められなかったため、以降の結果は年齢や性別ごとに分けず、まとめて解析して示した。

### (1) 家庭における食事の様子と Grit 得点との関連

家庭における食事の様子別の Grit 得点について、Fig. 1～3 と Table 1 に示した。

「嫌い／苦手な食べ物が出てでも食べる」の設問に対し、「とてもあてはまる」と回答した幼児の Grit

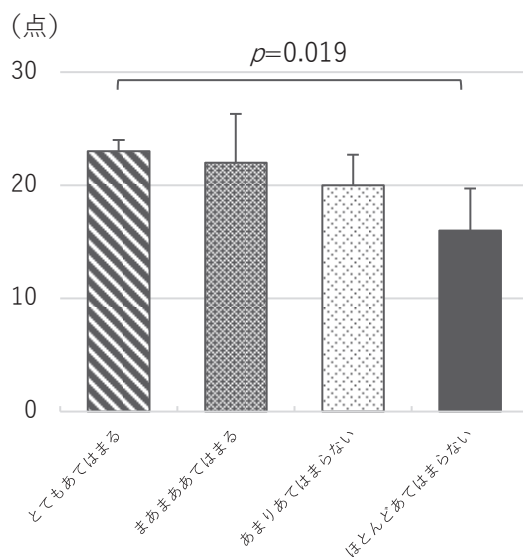


Fig. 1 Relation between grit scores and attitudes towards disliked foods

得点の中央値は23点,「まあまああてはまる」では22点,「あまりあてはまらない」では20点,「ほとんどあてはまらない」では16点であり,有意な差が認められた( $p<0.05$ ) (Fig. 1)。下位尺度の根气得点についても有意な差が認められ( $p<0.05$ ),「とてもあてはまる」と回答した幼児の根气得点の中央値は14点,「まあまああてはまる」では11.5点,「あまりあてはまらない」では10点,「ほとんどあてはまらない」では9点であった。下位尺度の一貫性得点については有意な差は認められず( $p=0.068$ ),「とてもあてはまる」と回答した幼児の根气得点の中央値は9点,「まあまああてはまる」では10.5点,「あまりあてはまらない」では10点,「ほとんどあてはまらない」では7.5点であった。なお,嫌い/苦手な食品の有無については,Grit得点の高低による有意差は認められなかった。

「食べたことがない食べ物が出て食べる」の設問に対し,「とてもあてはまる」と回答した幼児のGrit得点の中央値は22点,「まあまああてはまる」では22.5点,「あまりあてはまらない」では19点,「ほとんどあてはまらない」では17点であり,有意な差が認められた( $p<0.01$ ) (Fig. 2)。下位尺度の根气得点についても有意な差が認められ( $p<0.01$ ),「とてもあてはまる」と回答した幼児の根气得点の中央値は12.5点,「まあまああてはまる」では12.5点,「あまりあてはまらない」では10点,「ほとんどあてはまらない」では9点であった。下位尺度の一貫性得点については有意な差は認められず( $p=0.050$ ),「とてもあてはまる」と回答した幼児の根气得点の中央値は10.5点,「まあまああてはまる」では10点,「あまりあてはまらない」では9.5点,「ほとんどあてはまらない」では8点であった。

「1つ1つの料理を味わって食べている」の設問に対し,「とてもあてはまる」と回答した幼児のGrit得点の中央値は24点,「まあまああてはまる」では20.5点,「あまりあてはまらない」では18点,「ほとんどあてはまらない」では15点であり,有意な差が認められた( $p<0.05$ ) (Fig. 3)。下位尺度の根气得点についても有意な差が認められ( $p<0.05$ ),「とてもあてはまる」と回答した幼児の根气得点の中央値は14点,「まあまああてはまる」では11点,「あまりあてはまらない」では10点,

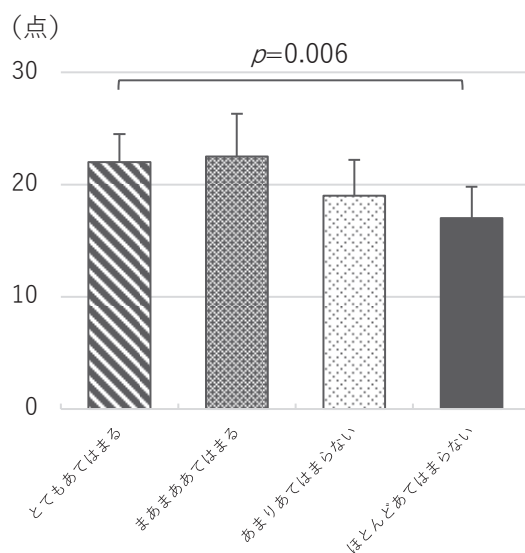


Fig. 2 Relationship between grit scores and attitudes towards foods that have never been eaten before

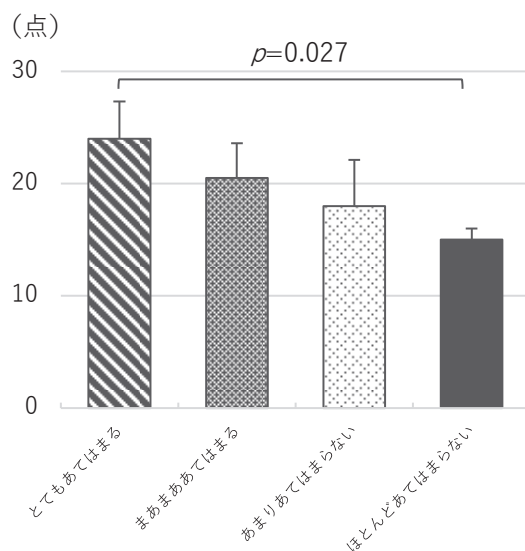


Fig. 3 Relationship between grit scores and tasting food

「ほとんどあてはまらない」では8点であった。下位尺度の一貫性得点については有意な差は認められず( $p=0.167$ ),「とてもあてはまる」と回答した幼児の根气得点の中央値は11点,「まあまああてはまる」では9.5点,「あまりあてはまらない」では9点,「ほとんどあてはまらない」では7点であった。

**Table 1** に示した通り、「食事にかかわる人に感謝して食べている」幼児ほど、Grit 得点が高いことが示された ( $p<0.05$ )。有意差は認められなかったが、「自分で食べると決めた量の食事は全部食べる」、「よくかんで食べている」、「食事をすることを楽しんでいる」、「食材の名前や料理を知りたがる」、「家での食事について感想を言う」幼児ほど、Grit 得点が高い値となった。

## (2) 食事での困りごとと Grit 得点との関連

子どもの食事で困っていることがあると回答した保護者の幼児の Grit 得点、下位尺度の根気得点、一貫性得点の中央値はそれぞれ 19 点、10 点、9 点であった。一方、子どもの食事で困っていないと回答した保護者の幼児の Grit 得点、下位尺度の根気得点、一貫性得点の中央値はそれぞれ 25 点、15 点、10.5 点であり、Grit 得点と根気得点において有意な差が認められた (いずれも  $p<0.05$ )。「小食」に該当する幼児の Grit 得点、下位尺度の根気得点、一貫性得点の中央値はそれぞれ 21 点、11 点、10 点、該当しない幼児ではそれぞれ 19 点、10 点、9 点であり、一貫性得点において有意な差が認められた ( $p<0.05$ )。「食べすぎる」に該当する幼児の Grit 得点、下位尺度の根気得点、一貫性得点の中央値はそれぞれ 22 点、12.5 点、9.5 点、該当しない幼児ではそれぞれ 19 点、10 点、9 点であり、Grit 得点では傾向 ( $p=0.064$ )、根気得点では有意な差が認められた ( $p<0.05$ )。その他の項目では有意な差は認められなかった。有意な差は認められなかったが、「偏食する」に該当する幼児の Grit 得点、下位尺度の根気得点、一貫性得点の中央値はそれぞれ 17.5 点、9.5 点、8 点、該当しない幼児ではそれぞれ 20 点、10 点、10 点であった。「早食い、よくかまない」に該当する幼児の Grit 得点、下位尺度の根気得点、一貫性得点の中央値はそれぞれ 12 点、8 点、4 点、該当しない幼児ではそれぞれ 19.5 点、10 点、9.5 点であった。

## (3) 家庭における食習慣と Grit 得点との関連

家庭における食習慣別の Grit 得点について、**Table 2** に示した。「家族全員が同じメニューを食べている」、「いろいろな食品や料理を食べさせている」、「子どもが嫌い／苦手な物も食事に出している」、「料理は 1 人分ずつ盛り付けている」家庭の幼

**Table 1** Grit scores by meals at home

			$p$ 値 <sup>†</sup>
自分で食べると決めた量の食事は全部食べる			
あてはまる	(n=26)	21.3 ± 3.9	0.100
あてはまらない	(n=15)	19.2 ± 2.9	
よくかんで食べている			
あてはまる	(n=35)	20.7 ± 3.7	0.159
あてはまらない	(n=7)	17.8 ± 4.0	
食事にかかわる人に感謝して食べている			
あてはまる	(n=21)	21.6 ± 4.2	0.030
あてはまらない	(n=21)	19.1 ± 3.1	
食事をすることを楽しんでいる			
あてはまる	(n=36)	20.6 ± 3.9	0.159
あてはまらない	(n=6)	18.5 ± 3.4	
食材の名前や料理を知りたがる			
あてはまる	(n=31)	20.5 ± 3.9	0.495
あてはまらない	(n=11)	19.7 ± 3.8	
家での食事について感想を言う			
あてはまる	(n=36)	20.5 ± 3.8	0.370
あてはまらない	(n=6)	19.2 ± 4.1	

† Mann-Whitney の  $U$  検定

**Table 2** Grit scores by dietary habits at home

			p値†
朝食は主食・主菜・副菜を組み合わせている			
あてはまる	(n=9)	22.3 ± 4.7	0.173
あてはまらない	(n=32)	19.8 ± 3.5	
夕食は主食・主菜・副菜を組み合わせている			
あてはまる	(n=39)	20.5 ± 3.9	0.140
あてはまらない	(n=3)	17.3 ± 1.5	
決まった時刻に食事をさせている			
あてはまる	(n=38)	20.4 ± 3.6	0.639
あてはまらない	(n=4)	19.0 ± 6.2	
間食は、時間を決めずに与えている			
あてはまる	(n=18)	19.1 ± 3.2	0.063
あてはまらない	(n=24)	21.2 ± 4.1	
家族全員が同じメニューを食べている			
あてはまる	(n=38)	20.7 ± 3.9	0.041
あてはまらない	(n=4)	17.0 ± 1.8	
いろいろな食品や料理を食べさせている			
あてはまる	(n=35)	21.1 ± 3.8	0.001
あてはまらない	(n=7)	16.6 ± 0.8	
子どもが嫌い／苦手なものも食事に出している			
あてはまる	(n=33)	21.0 ± 4.0	0.017
あてはまらない	(n=9)	17.8 ± 2.1	
料理は1人分ずつ盛り付けている			
あてはまる	(n=33)	21.0 ± 3.7	0.033
あてはまらない	(n=9)	17.5 ± 3.2	

† Mann-Whitney の  $U$  検定

児ほど、Grit 得点が高いことが示された（それぞれ  $p<0.05$ ,  $p<0.01$ ,  $p<0.05$ ,  $p<0.05$ ）。有意差は認められなかったが、「朝食は主食・主菜・副菜を組み合わせている」、「夕食は主食・主菜・副菜を組み合わせている」、「決まった時刻に食事をさせている」、「間食は、時間を決めて与えている」家庭の幼児ほど、Grit 得点が高い値となった。

#### (4) 家庭における食環境と Grit 得点との関連

家庭における食環境別の Grit 得点について、Table 3 に示した。「日常的に食べ物や栄養の話をしている」、「園での食事（給食や間食）のことをよく話す」幼児ほど、Grit 得点が高いことが示された（いずれも  $p<0.05$ ）。有意差は認められなかったが、「朝食は子どもと一緒に大人も食事をしている」、「夕食は子どもと一緒に大人も食事をしている」、「食事の時、子どもと楽しく会話をしている」、「食事の時間は、テレビを消している」、「よく噛んで食べるように言っている」家庭の幼児ほど、Grit 得点が高い値となった。

#### (5) 食事作りの手伝いと Grit 得点との関連

「簡単な調理」を手伝っている幼児の Grit 得点の中央値は 20 点、手伝っていない幼児では 18.5 点であった。簡単な調理の具体的な内容として、「食材の洗浄」を手伝っている幼児の Grit 得点、下位尺度の根気得点、一貫性得点の中央値はそれぞれ 22 点、12 点、10 点、手伝っていない幼児ではそれぞれ 19 点、10 点、9 点であり、根気得点において有意な差が認められた（ $p<0.05$ ）。その他、食事作りの手伝いの有無と Grit 得点との間に有意な差は認められなかった。

## 4. 考察

本研究では、幼児期後半の子どもの Grit と食生活との関連について、検討を行った。その結果、嫌い／苦手な食べ物や食べたことのない食べ物も食べる、料理を味わっている、食事にかかわる人に感謝して食べているなど、食事に対して前向きに、根気強く向き合っている幼児において、Grit 得点が高値となることが示された。また、食事の困りごとがない幼児では、Grit 得点が高値になることが示された。Grit 得点が高い幼児の家庭では、「家族全員が同じメニューを食べている」、「いろいろな食品や料理を

Table 3 Grit scores by dining conditions at home

			p値†
朝食は子どもと一緒に大人も食事をしている			
あてはまる	(n=29)	20.5 ± 4.0	0.508
あてはまらない	(n=12)	19.7 ± 3.6	
夕食は子どもと一緒に大人も食事をしている			
あてはまる	(n=41)	20.4 ± 3.8	0.103
あてはまらない	(n=1)	15.0 ± 0.0	
食事の時、子どもと楽しく会話をしている			
あてはまる	(n=38)	20.5 ± 3.9	0.249
あてはまらない	(n=4)	18.3 ± 2.4	
食事の時間は、テレビを消している			
あてはまる	(n=19)	21.1 ± 4.8	0.255
あてはまらない	(n=23)	19.6 ± 2.9	
よく噛んで食べるように言っている			
あてはまる	(n=32)	20.7 ± 3.9	0.232
あてはまらない	(n=10)	19.2 ± 3.7	
日常的に食べ物や栄養の話をしている			
あてはまる	(n=23)	21.6 ± 4.3	0.019
あてはまらない	(n=19)	18.8 ± 2.7	
園での食事（給食や間食）のことをよく話す			
あてはまる	(n=31)	21.0 ± 3.8	0.022
あてはまらない	(n=11)	18.4 ± 3.4	

† Mann-Whitney の  $U$  検定

食べさせている」、「子どもが嫌い／苦手な物も食事に出している」、「料理は 1 人分ずつ盛り付けている」といった特徴があり、日常的に“食”に関わる話を保護者に行っていることが示された。Grit は、さまざまな経験を通じて変化しうる特性であるが<sup>9)</sup>、本研究結果より、“食”を通して経験できる自分自身や他者との関わりによって Grit が向上する可能性が考えられた。また、幼児期において Grit が幼児の食生活のあり方に関係することが示唆され、Grit の視点も含めた食育推進が重要であると考えられた。

Grit が高い幼児の食事の様子について検討した結果、「嫌い／苦手な食べ物が出てでも食べる」、「食べたことがない食べ物が出てでも食べる」、「1 つ 1 つの料理を味わって食べている」、「食事にかかわる人に感謝して食べている」幼児ほど、Grit 得点が高いことが示された。下位尺度については、一貫性得点では関連は認められず、根気得点のみで関連が認められることが示された。これらの結果より、幼児期の食事に対して根気強く向き合う姿勢が Grit の獲得を促す可能性、あるいは、Grit が高い幼児では食事に対して根気強く向き合うことができ、



それが結果的に望ましい食行動を実践することにつながる可能性が推察された。

先行研究において、Grit が学業や仕事の達成を促進すること<sup>9)22)23)</sup>が示されている。そこで、Grit が望ましい食行動の習慣化の達成にも関係しているという仮説を立て、本研究では Grit と幼児の食事の困りごとの有無との関連について検討した。その結果、保護者が子どもの食事で困っていることが「ない」と回答した場合、幼児の Grit 得点が有意に高くなること、下位尺度では根気得点が有意に高くなることが示された。Grit は根気（根気強い努力）と一貫性（興味・関心の一貫性）の 2 つの側面を有することから、Grit は課題に対する内発的動機づけと関連があると推察される。実際、Grit の構成要素が内発的動機づけと正の関連性を示す一方で、外発的動機づけとは負の関連性を示すことが報告されている<sup>24)</sup>。このことから、Grit が低い場合、「食」に向き合う動機づけができていない状況であるにもかかわらず、食事に向き合い続けなければならないため、食事の困りごとが生じてしまう、あるいは解決しないということが起こりうるのではないかと考えられた。しかし、本研究では食事の困りごとと Grit 得点の因果関係については明らかになっていないため、今後、縦断的な調査を行い検証する必要がある。Grit 得点の高さが食事の困りごとの有無に影響を及ぼしていることが明らかになれば、「食」を介さずに、日常生活や遊びの場面等で物事に粘り強く取り組む経験を通して Grit を高めることが食事の困りごとを予防あるいは解決するのに効果的であるということになり、新たな視点で食育を実践することが可能になる。食事の困りごとの有無が Grit 得点に影響を及ぼしているということが明らかになれば、幼児の保護者や保育者は、幼児が「食」に対して前向き、長期的かつ習慣的に向き合うことができるような環境設定や声掛けをすることが Grit を向上させるのに効果的であるということになり、幼児期における食育の新たなエビデンスを示すことにつながる。

Grit が高い幼児は、食事に対して根気強く向き合うことができ、偏食、早食い、よくかまないといった困りごとを回避できると仮定していたが、本研究においてはこれらの食行動を行っている幼児で Grit 得点が有意に低値となるという結果は得られなかった。有意差は認められなかったが、偏食、早食い、よくかまないに該当していない幼児で Grit 得点の中

央値が高値を示していたため、今後、調査対象を拡大して再度検討することを課題としたい。「小食」や「食べすぎる」という食事の困りごとについては、該当する幼児ほど Grit の構成要素である一貫性得点、根気得点がそれぞれ有意に高値になるという結果が得られた。食に対する過度な根気強さは、食に対する執着を高め、食べすぎを引き起こすと推察されるため、根気得点が高く食べすぎてしまう幼児に関しては、「食」以外に目を向けさせるような働きかけが必要であると考えられた。

Grit 得点が高い幼児の家庭における食習慣・食環境の特徴として、家族全員同じメニューを提供している（個食を避ける）、バリエーションに富んだ食品や料理を食べさせるようにしている、子どもが嫌い／苦手な物であっても食卓に出し続けている、料理は大皿に盛りつけてから個々に好きなものを好きなだけ取り分けるのではなく 1 人分ずつ盛り付けたものを食卓に並べているということが示された。このことから、たくさんの種類の食べ物に向き合うことが必須となる状況を作り出すことが幼児の Grit を高めるうえで効果的であると推察された。また、食べ物や栄養の話、保育園での食事（給食や間食）の話をするのが Grit 得点の高さと関係していることから、Grit の獲得という観点からも、発達過程に合わせて日常的に身近な食について話すことが重要であると推察された。

調理をする際は、主体性、実行力、判断力、自己管理能力などの多くの非認知能力が必要になり、幼児が保護者と一緒に作業することは幼児の協調性やコミュニケーション力の向上に貢献すると考えられる。また、調理は五感を活用する活動であり、料理が完成すると達成感が得られ、自己肯定感が高められることから、非認知能力育成と食育は親和性が高く、Grit と調理経験は関連があるという仮説を設定し、解析を行った。その結果、本研究においては、「簡単な調理」を手伝っている幼児では手伝っていない幼児よりも Grit 得点の中央値は高値であったが、有意な差は認められなかった。本研究における調理経験の評価は、家庭での簡単な調理の手伝いの有無のみに着目して行っており、調理の頻度、全調理工程の中での幼児の寄与度については考慮していないことから、これらが結果に影響している可能性が考えられた。幼児が手伝っている調理工程を尋ねたところ、「食材の洗浄」を手伝っている幼児では根気

得点が有意に高値を示した。野菜を洗浄する際は、土を落とすのに野菜の凸凹に合わせて粘り強く対応する必要がある。よって、「食材の洗浄」と根気得点の高さと関連が認められたのではないかと推察された。

本研究には、以下に述べる限界がある。まず、本研究は1つの保育所で得られた結果であり、一般化するには対象者数が少なかったという点である。本研究ではGrit得点に年齢による差は認められなかったが、一般的に非認知能力は年齢が高くなるにつれて高くなるという特徴がある<sup>25)</sup>。また、発達過程によって、食事の状況や食事作りの手伝いとして実行できる内容は異なることから、今後は調査対象を拡大し、幼児の年齢や生まれ月を考慮した上でより詳細な検討を行う必要があろう。また、本研究で使用了Grit尺度は小学生向けに改変されたものであり、どの程度幼児のGritを評価できているかが不明であるという点である。幼児のGritを測定する指標としての妥当性については、別途、確認する必要がある。最後に、本研究は横断研究であり、得られた結果の因果関係は明らかではないという点である。幼児期の望ましい食生活によってGritを育成することができる、Gritを獲得することが食事での困りごとの解消につながるということが明らかにできれば、新たな視点での食育の実践方法として提案すること可能になるため、今後は縦断研究も視野に入れた検討を行いたい。

以上のような限界を有するものの、本研究では、幼児のGritと食生活との関連について示すことができた。本研究結果は、幼児を対象とした食育のあり方に一つの知見を示していると考えられる。幼児期は、非認知能力を育成する上で重要な時期であり、食育は食を営む力の「基礎」を培うことを目標として実践し、生涯にわたる健康づくりの基盤になる食習慣を身につけさせることが大切である。今後さらに詳細な検討を行ったうえで、「食を営む力の「基礎」」と「Grit」の相互育成が可能になる食育プログラムの作成と検証が望まれる。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力賜りましたS保育園の先生方ならびに3～5歳児の保護者の皆様に心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 日本生涯学習総合研究所：「非認知能力」の概念に関する考察. <https://www.shogai-soken.or.jp/research/non-cog2018.pdf> [2023.10.21]
- 2) 文部科学省：中央教育審議会初等中等教育分科会資料. [https://www.mext.go.jp/content/20210901-mxt\\_youji-000017746\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210901-mxt_youji-000017746_2.pdf) [2023.10.21]
- 3) 厚生労働省：保育所保育指針. [https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1) [2023.10.21]
- 4) 内閣府：幼保連携型認定こども園教育・保育要領. <https://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/kokujibun.pdf> [2023.10.21]
- 5) 文部科学省：幼稚園教育要領. [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/04/24/1384661\\_3\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/04/24/1384661_3_2.pdf) [2023.10.21]
- 6) Duckworth A.L., et al.: *J Pers Soc Psychol*, 92, 1087-1101 (2007)
- 7) 井川純一他：パーソナリティ研究, 27, 210-220 (2019)
- 8) 末廣徹他：行動経済学, 13, 5-7 (2020)
- 9) Duckworth A.L., et al.: *Journal of Personality Assessment*, 91, 166-174 (2009)
- 10) Duckworth A.L., et al.: *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 1087-1101 (2007)
- 11) 山北満哉他：日本健康教育学会誌, 26, 353-362 (2018)
- 12) 藤原寿幸他：早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 27, 83-92 (2019)
- 13) 藤原寿幸：教育デザイン研究, 13, 135-139 (2022)
- 14) 灰藤友理子他：日本家政学会誌, 72, 187-196 (2021)
- 15) 吉井瑛美他：日本健康教育学会誌, 26, 221-230 (2018)
- 16) 厚生労働省：平成27年乳幼児栄養調査調査票(2～6歳用). <https://www.mhlw.go.jp/toukei/chousahyo/00160824-02.pdf> [2023.10.21]
- 17) 木田春代他：民族衛生, 81, 3-14 (2015)
- 18) 山口静枝他：栄養学雑誌, 54, 87-96 (1996)
- 19) 掃部美咲他：栄養学雑誌, 76, 65-76 (2018)
- 20) 神谷麗奈他：日本食育学会誌, 9, 321-331 (2015)

- 21) 西川一二他：パーソナリティ研究, 24, 167-169 (2015)
- 22) Christopher A, et al.: Metacognition and Learning, 10, 293-311 (2015)
- 23) Nishikawa K, et al.: Personality and Individual Differences, 191, 111557 (2022)
- 24) Karlen Y, et al.: Learning and Individual Differences, 74, 101757 (2019)
- 25) 西坂小百合他：共立女子大学家政学部紀要, 63, 135-142 (2017)
- <注>
- <sup>1</sup> Volatility（変動性）, Uncertainty（不確実性）, Complexity（複雑性）, Ambiguity（曖昧性）の4つの単語の頭文字を並べた造語





◆◆日本女子大大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科編集規定および執筆要項◆◆

**【編集規定】**

1. 本紀要は日本女子大学大学院家政学研究科・人間生活学研究科の紀要として大学院生および大学院修了者の研究の進展を促し、成果を公刊することによって、研究水準の向上をはかり、あわせて出身者の教職や研究職等への就職活動を支援することと、学部紀要とは別に大学院担当教員の研究成果を公表する場を拡大することによって、研究科の教員の研究活動のより一層の活発化と水準の向上をはかることにあります。
2. 執筆者の資格は下記の通りです。
  - \*1 大学院専任教員（共著の場合は、他の大学の教員も認めることがある。）
  - \*2 大学院在籍者
  - \*3 当該研究科の修士課程または博士課程を修了した者
  - \*4 当該研究科の博士課程1年以上で退学した者
  - \*5 その他、編集委員会が特に執筆を認めた者

\*ただし、筆頭著者は\*1～\*4に限る
3. 原稿は未公開のものに限ります。
4. 原稿は所定の執筆要項に準拠して作成し、家政学研究科・人間生活学研究科紀要編集委員会宛に提出して下さい。掲載の有無については家政学研究科・人間生活学研究科紀要編集委員会一任とします。  
なお、大学院在籍者、修士課程修了者および博士課程退学者は、投稿に際して学内の指導教員の承認が必要です。指導教員が投稿論文の共著者であるないに拘わらず所定の書式に承認を受けて下さい。  
投稿者が指導教員の承認を得ることができない場合には紀要編集委員会で査定し、査読のうえ掲載の可否を決定いたします。
5. 原稿の提出期日は10月末日とし、刊行は年1回3月です。
6. 原稿の抜き刷り印刷において図表、写真版などのうち、特に多額の費用を要するもの（例えばカラー写真などアート紙印刷を必要とするもの）の差額は執筆者の負担とします。
7. 校正は原則として2校までとし、著者が行う。
8. 抜き刷りはモノクロ印刷の場合は30部を無償とし、それ以上希望する場合は超過部数に対して有償となります。
9. 本紀要に掲載した論文のデータファイルは、原則として返却しません。
10. 本紀要に掲載された論文を無断で複製あるいは転載することを禁じます。
11. データ・抜き刷り印刷の形式、体裁等については、紀要編集委員会一任とします。また、原稿修正を依頼することもあり得ます。
12. 引用文献の資料の掲載がある論文については、著作権保護のため出典先あるいは出版社に承諾の確認をお願いいたします。
13. 本紀要に掲載された論文等（書誌情報、画像情報、本文）の著作権（著作財産権、copy-right）は執筆者に属しますが、執筆者は本学リポジトリへ電子化し公共の利用に供すること、および複製権、公衆送信権について許諾するものとします。

## 【執筆要項】

原稿の長さは、刷り上がり 10 頁（400 字詰原稿用紙で約 40 枚）までとする。

原稿執筆にあたっては、下記の事項を厳守すること。

### 1. 原稿提出形式

原稿(本文)の執筆は、パソコンを使用する。

プリントアウトとともに、使用 OS（Windows または Macintosh など）とソフト（Word など）、ファイル名を明記し、電子媒体に保存して提出する。

### 2. 数字

数字は、全角、半角の区別を明確にする。

数字は、原則として算用数字を用いる。

### 3. 英文

英文については、原則として半角文字を使用する。

但し、記号に当たる文字は必ず半角とする。

### 4. 記号

本文中の約物（、。：「」など）は、全角文字とする。

### 5. 外字

外字は、マークし、識別可能な状態にする。

### 6. 題目・所属・姓名

論文には、和文の題目、所属および姓名と、それぞれの英訳を記載する。

### 7. 抄録・キーワード

論文には、和文抄録（400 字以内）と英文抄録（150 語以内）を附記する。

それぞれの末尾に 5 語以内のキーワードをつけること。

### 8. 引用文献

引用文献は、論文の最後に引用順に一括して表記する。

文中の該当事項の終わりに、右肩に片かっこ‘)’をつけて小さく記載する。

（例）～であるとされている<sup>1)</sup>。

### 9. 文献記述の形式

\* 雑誌の場合には、著作名、雑誌名（欧文についてはイタリック）、巻数、頁、年号。

（例）神山恵三他：フレグランスジャーナル、77、26（1986）

（例）沖田富美子：台所における収納空間の標準化、日本女子大紀要（家政）、37、67-75（1989）

\* 単行本の場合には、著者名、書名（欧文についてはイタリック）、発行所、頁、発行年。

（例）近藤四郎：足の話、岩波書店、東京、12（1979）

（例）Colvin,H,M. : *A biographical dictionary of English architects, 1660-1840*, London : John Murray, 182（1954）

### 10. 注

注は、論文内容の補足説明にあてる。

### 11. 図表

図表は、Excel や PowerPoint などで作成し、本文とは別ファイルに保存する。

図表には、英文にてタイトルを付ける。

仕上がりサイズは、横 7cm または 14cm の二種類とする。

図と写真（画像）の解像度は、300dpi 以上とする。

仕上がりサイズを考慮して作成する。特に表やグラフのラインは細い線を使用しないこと。プリントアウトしたものの裏面に天地と氏名を記入し、抜き刷りでカラー印刷を希望する場合はその旨表記する。

## 編集後記

『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科』は、1995 年より大学院生および大学院修了者の研究の進展を促し、成果を公刊することによって、研究水準の向上をはかり、あわせて出身者の教職や研究職等への就職活動を支援することと、学部紀要とは別に大学院担当教員の研究成果を公表する場を拡大することによって、研究科の教員の研究活動のより一層の活発化と水準の向上をはかることを目的に出版してきました。

今年度『紀要（第 30 号）』より、電子版のみの発行になりました。公開は本学図書館リポジトリとなります。ご高覧賜りますと幸いです。

※ 日本女子大学学術情報リポジトリ：<https://lib.jwu.ac.jp/lib/ir.html>

家政学研究科・人間生活学研究科紀要編集委員会

本号掲載論文受理日 2023 年 10 月 31 日

## 日本女子大学大学院紀要 家政学研究科 第 30 号 人間生活学研究科

編集委員 横井孝志、和田正人、新藤一敏、  
葉袋奈美子、内村理奈、秋元健治  
発行 2024 年 3 月 20 日  
発行所 日本女子大学  
〒112-8681 東京都文京区目白台 2 丁目 8 番 1 号  
電話 03-3943-3131（代表）  
印刷所 有限会社 太平印刷  
〒171-0051 東京都豊島区長崎 6-22-10  
電話 03-3957-3911

（無断転載を禁ずる）

ISSN 2759-2022

# **JOURNAL**

of

The Graduate School

Human Sciences and Design

Human Life Science

**30**

**2024**

Japan Women's University